機動戦士ガンダムUC0138　F91 VS F97

暇犬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
機動戦士ガンダムＵＣ０１３８　Ｆ９１　ＶＳ　Ｆ９７

【Ｎコード】
Ｎ３５５９Ｑ

【作者名】
暇犬

【あらすじ】
Ｕ．Ｃ．０１３８年　ジオン共和国自治権放棄の後４０年、緩慢な平和の時代を謳歌する地球圏。クロスボーンの反乱及び木星戦役を経て尚、地球圏の絶対的覇者の地位を揺るがすことのない連邦政府内で様々な策謀が暗躍する。
混迷する宇宙で、再び激突する２つのフォーミュラ・シリーズとその戦いの行方は？　Ａｒｃａｄｉａにて二重投稿中（２０１０年３月より）

序

――アナハイムエレクトロニクス・アンマン工場――

リニア式エレベーターの低い稼働音が単調なハーモニーを響かせる。さほど不快ではないその音に身をまかせながらも、男――ゴルド・ガーラントは落ち着かなかった。直に４０に届くであろう彼の髪には白髪が交じり始め、戦場で様々な感情を飲み込んできた顔には、年齢相応のしわが刻まれている。その体躯は鋼のごとく鍛え上げられ、十分な厚みとしなやかさを兼ね備えていた。その半生を多くの戦場で過ごしてきた彼だったが、普段と勝手が違う状況に少々戸惑っていた――もちろんそのような心情を隣にいる人物に微塵も感じさせることなどなかったが……。

エレベーターは決して乗り心地が悪いわけではない。ただ難を言えば……あまりにも大きすぎた。その使用目的が主として貨物搬入用であるそれは、二人の人間を運ぶにはあまりに無駄がありすぎる。『大は小を兼ねる』という言葉の悪例であるといえよう。

がらんとした空間が自分の背中に広がるというのはあまり気持ちの良いものではない。本来なら壁際にでも背を向けて時をやり過ごしたいところであったが、残念ながら、もうひとつの要素が彼のその行動を阻んでいた。

もうひとつの要素――それはゴルドの隣りに控える美貌の女性のことだった。

整った美貌に、絹のような金髪と白磁のように滑らかな肌、優美な肢体が描く美しいラインは男の視線を自然と引き寄せる。

上質なスーツを優雅に着こなし、大きく開いた襟元から、ふくよかな谷間をのぞかせる。例え、視線をそらしても、彼女が身にまとった甘い香りが男の意識を彼女に向けさせる。

ネーナ・サリンジャー――最新鋭の天候システムを導入したリゾートコロニーでの休暇の日々に若干の退屈を感じ始めていたゴルドの前に突然現れ、そう名乗った彼女は旧知からの紹介状を指し示した。

蠱惑的な微笑みを絶やさぬその表情にはどこか作為的なものを感じさせる。自身の魅力を正確に把握し、武器としてそのすべてを存分に使い、ためらいなく目的を果たす――その艶やかな姿の内側に秘める本質は狩人である――戦場で鍛え上げられたゴルドの勘はそう警戒させた。

『お仕事を依頼したいのですが――』彼女が自身のバックにアナハイム・エレクトロニクスが存在する事を告白し、アナハイムへのシャトル便のチケットを提示したのは3度目の交渉の席上だった。

地下に向かっていくエレベーターが僅かずつ減速を始める。減速と共にじわじわとかかってくる荷重を敏感に感じ取りながら、彼はやがて開くであろう目の前の巨大な扉の先にある未来に思いを馳せていた。

警告音が静寂を叩き割り、次いで、けばけばしい色彩の警告灯が点滅し、聞きなれた機械音声による警告アナウンスが始まると同時に、鈍い作動音を辺りに響かせながら、眼前の巨大な扉がゆっくりと左右に開いていく。二人が十分に通れるだけのスペースが開くと、警告灯の支持を無視して、彼女はスタスタと歩き始める。その美しい足の運びとリズミカルに弾む臀部を視界に収めながら、ゴルドは数歩遅れて彼女のあとをついて行く。

エレベーターを降りたその先にはさらに広大な空間が広がっている。空調は整えられているもののやはりひんやりと肌寒い。広大な

空間――おそらく戦艦ドッグと思われる――その場所の中央には一隻の巨大な艦が鎮座していた。

外観は使い込まれた様子であり、所々に損傷もあるかのように見受けられる。しかし、それに近づくにつれ、それらが巧妙な偽装であることが分かった。

何よりも問題なのはその艦の形状であった。――アレキサンドリア級重巡洋艦――かつて地球圏を混乱に陥れた軍隊が専有したこの艦は、その経歴ゆえに今や造艦されることはない。かろうじて当時使われていたものが改修されるか、あるいはその発展型が輸送艦として運用されるぐらいであろう。

「見せたかったというのはこれか？」

ゴルドの問いにネーナは小さく微笑みを浮かべるとついてくるように彼を促す。どうやらこれはまだ前座らしい。本命は別にあるようだ。二人は無言で艦内へと踏み入っていく。

U．C．０１３０年代以降、ＭＳの小型高性能化の立役者となったＭＣＡ構造の技術は艦船にも応用されはじめた。電装機器が構造材に埋め込まれた結果、艦内部の空間の容積を広げ、『狭い、暗い、汚い』と言われ、多くの女性兵士に不評だった艦船の問題点が一気に解決した。省略された電装機器の代わりに、装甲が強化され、一部ではビームシールドが装備されるなどの近代化改修が行われた航宙艦の防御力は格段に上がった。もちろん、実戦時における速やかな兵員の移動にもつながり、艦船の戦闘力はより強化されたといってよい。U．C．０１３０年代以降に配備された艦の人気が高い最大の理由である。

実戦に耐えうるだけの十分な武装が施され、高性能かつ多様化した索敵システムと通信システムを搭載し、最小限度の人員での運用を可能とするために極限までオートメーション化された艦内システ

ム――そのような技術を用いられて改修されたこの艦がただのレストア品ではないことに気付いたゴルドは眉をしかめる。外観こそ旧式艦そのものだが、その潜在能力は、いかなる連邦軍の配備艦艇もかなわないであろう程のものを有している。進宙後、その製造コストに見合うだけの役割を求められるとしたら、一体どのような任務を与えられるのだろうか？

思わず考え込んでしまいそうになったゴルドの様子を気にするこ ともなく、通路を先導していたネーナはやがて、一つの大型ハッチへとゴルドを案内した。

大人数名が一度に通り抜けられる大きさのハッチの向こう側には、広大なＭＳデッキが広がっていた。デッキ内の一部に照明が灯され、そこに浮かび上がった３機の機体を見たゴルドは驚きを隠せなかった。特徴的なＸ字に広がる大型可動式スラスター――ちょっとしたＭＳマニアならだれもが知る幻の名機の姿がそこにあった。

「馬鹿な……。なぜこんなものがここに……」

ゴルドの驚く様子を満足げに眺めながらネーナは告げた。

「もうご存知でしょうけれど……、《Ｆ９７》――地球圏で最高の性能を誇るＭＳよ」

「どういうことだ？」

ゴルドは彼女に問いかける。《Ｆ９７》――その機体が幻の名機と呼ばれるに至る事情は複雑である。海軍戦略研究所――通称サナリィによって開発されたこのシリーズは、木星戦役とよばれる戦線に投入され、大いに活躍することとなった。しかし、戦線が地球圏に拡大し、サナリィの海賊行為加担の疑惑がメディアに取りざたされ、事実の隠蔽を図った当時の上層部により闇へと葬られてしまった。その後も非合法行為に加担したり、連邦政府の不正を暴いたりと様々な噂が飛び交っていたが、公的には事実上存在しないはずの

ものとなっていた。
　云われはともかく、サナリィの技術の粋を結集して建造されたこの機体がほぼ完全な形でアナハイムの地下に眠る――その事実にゴルドは戸惑いを覚えた。

　近時のアナハイムの評判はあまり良いものではない。莫大な規模の生産施設とそのノウハウをもつＭＳメーカーとしてのアナハイム・エレクトロニクスは、依然として連邦軍に機体を納入する企業としては他者と一線を画している。Ｕ．Ｃ．０１００年代以降、小規模な地域紛争しか起こらない地球圏において、日進月歩の勢いで革新する新技術をふんだんに盛り込むＭＳ開発にかけるコストは馬鹿にならないものがある。地球圏最大規模の経済力をもつアナハイム・グループとしては、そのようなものにコストをかけるよりも他の様々な産業にその資力を投じる方が有益であると考え、ＭＳ開発には消極的であった。
　そのような企業の態様に不満を抱えた才能ある技術者たちは、アナハイムに見切りをつけ小規模ながらも開発に精力的なメーカーに籍を移し、ＭＳ開発に携わる。しかし、いかんせん生産能力に劣る新鋭企業の軍用ＭＳ開発は必ずと言っていいほどコストの壁にぶち当たる。それを見計らってアナハイム・グループがそのノウハウを買い叩く訳である。
　このような業態がまかり通る地球圏でのＭＳ産業はかつてのように恐竜的進化を促されることはなく、産業としては停滞気味だった。アナハイムのやり方に不満を持つ者たちによる連邦政府への陳情は、残念ながらグループの財力と政治力の前に軽く握りつぶされてしまう。地球圏の経済の発展の一翼を担う一方で、巨大な資力を背景に他の産業をも蹂躙していくアナハイム・グループは様々な悪影響を及ぼしていた。

時折《独占禁止法》を持ち出したメディアによる反アナハイム運動など所詮、アナハイム・グループによって操作されたただのガス抜きでしかない。ゆりかごから墓場まで、地球圏で暮らす者が決して関わらないではいられない地球圏最大規模の王国の実態だった。

そのような時代背景の中でサナリィという企業は巧みに現在（いま）を生き残っているものの一つであった。フォーミュラ・シリーズと呼ばれる優秀な性能の機体群により、彼らは同業他社にその抜きんでた存在感を示していた。

そんなサナリィの極秘事項とも呼べるこの《Ｆ９７》が目の前に存在する――その事実に至るまでの様々なプロセスがゴルドには想像できなかった。

ゴルドの戸惑う姿を楽しむように眺めていたネーナはやがて事情を語り始めた。

「この機体の曰くはご存知でしょう？　その世界では有名だものね。確かクロス……、おっと、これはあなたには禁句だったわね」

「ああ」

彼女の言葉に条件反射で反応したゴルドの強い視線にネーナは微笑みで返した。さすがにゴルドの経歴は調査済みらしい。

「このシリーズを連邦に売り込めなかったサナリィはかなりの痛手を被ったそうよ。それでも、まだそれは挽回可能な範囲だった」

巨額の開発費の回収に失敗してもまだ挽回可能――ＭＳ産業の規模の巨大さに改めて脅威を感じる。

「名誉挽回とばかりにサナリィの技術陣は後継機の開発に躍起になったそうよ。噂では新技術を用いた次世代機だったと言われているわ」

アナハイムに比べればはるかに小規模であるがサナリィ技術陣の優秀性を知らぬものはいない。一体どんな機体だったのか？　ゴル

ドは様々な想像を巡らした。
「でも、彼らはその開発に失敗した。噂では試作機がすでにロールアウトして、性能評価段階に入っていたと言われているわ。けれどトラブルでデータごとすべてを失ってしまったらしい」
思わずゴルドは疑惑の目をネーナに向ける。地球圏の裏側で生きてきた者にとってアナハイムの狡猾な遣り口を知らぬ者などいない。ゴルド自身その片棒を担いできた自覚はあった。ＳＦＰ――シルエット・フォーミュラ・プランと呼ばれる政治力を行使したアナハイムの不正など序の口でしかない。この業界ではむしろまっとうな手段と言えるかもしれない。決して世の表に出ることはないであろう巨大王国の様々な陰を知るゴルドは、サナリィのデータ喪失の原因としてアナハイムの関与を疑った。
そんなゴルドの様子に気付いたネーナは苦笑しながら続ける。
「アナハイムはまったく関与していないわ。未確認だけど、この件には木星がからんでいたと言われてるわ」
木星――数年前に地球圏を大混乱させた木星帝国と呼ばれる組織の事である。同じ地球から生まれたはずの彼らのメンタリティはすでに地球圏に住む人々とのそれとは異なり、当時は宇宙人との戦争などとネットや三流タブロイド紙を湧かせたものだった。尤も彼らの使節団を疑いもせずに好意的に迎えた一流メディアへの揶揄をこめた物であったが……。そんな彼らの存在は、時折思い出したかのように取り上げられている。確か一年前にも、帝国の残党がソーラーシステムによって地球を狙っているなどという荒唐無稽なデマがネットを飛び交っていたことをゴルドは思い出した。
「そういう訳で二度の巨額の開発費の回収に失敗したサナリィの経営は破綻寸前の危機的状態に陥ったわ。そんな彼らにアナハイムが救いの手を差し伸べた」
ネーナが悪戯っぽく微笑む。事実がそんな美談と程遠い事は想像に難くない。
「ともあれ、アナハイムは巨額の資金と引き換えに開発、運用デー

タその他もろもろの一切をサナリィから譲り受けた。お陰でサナリィは破綻の危機からは免れたそうよ。優秀な技術スタッフの離反と引き換えに……」

開発の過程で生まれる様々な新技術――それは多くの技術スタッフの努力の結晶である。時には家族や人生を失いながら、彼らは目標に向かい邁進する。そんなものを容易く売り渡されてしまえば彼らの怒りを招くのはある意味当然であろう。尤も経営陣の苦労も並大抵の事ではない。一機の機体を開発するために必要な数百以上の特許権――新技術も加えたそれらが生み出す莫大な金額は無視できないものがある。堅気の世界を泳ぐのも大変なものだなとゴルドは溜息をついた。

「サナリィの最新技術を手に入れたアナハイム（うち）のスタッフは狂喜したわ。脅迫まがいの交渉で上層部に予算を捻出させて機体の製造にとりかかり、その結果が今目の前にあるという訳よ」

佇立する3機の機体を見上げながらネーナは説明を終えた。ライトに映える美しい横顔の陰影が強調され、どこか冷たい印象をゴルドに与える。彼女の視線を追い、ゴルドは機体に目を移した。黒を基調としたロービジ塗装にダークイエローのポイント、特徴的な背部スラスター、野心的かつ挑発的な意匠。中でも3機のうちの中央に佇立する機体は両側の2機とは一線を画していた。強化された可変スラスター、そして胸部に克明に描かれる白色の髑髏の意匠――単独ではいささか稚拙な印象を与えるものの、機体自体には実によく映えている。おそらく何らかのカムフラージュを意図したのだろう。

「あれは？」

ゴルドの質問にネーナは僅かに微笑んで再び語り始める。

「うちのスタッフが手に入れた《Ｆ９７》のデータには木星圏仕様と地球圏仕様の2種類が存在したそうよ。上層部は地球圏仕様の開発を命令したのだけど、技術スタッフはそのうちの一機をプロトタイプと呼ばれる木星圏仕様に変更した。技術者魂って奴かしら」

地球圏にくらべて過酷な木星圏において使用される機体ははるかに高コストになるはずである。ただでさえ、表に出すことのできない機体の開発を行っているのに、さらなる高みを目指す技術者たちの暴走……おそらく様々な軋轢が存在したに違いない。そんな事柄を思い浮かべているのだろう。再び苦笑しながら彼女は語り続けた。

「機体スペックはとんでもないモンスターマシンになってしまった。お陰で性能を生かしきる乗り手を見つけるのに苦労してね……。兵器としては正直とんでもない欠陥品だわ」

「道具など使い方次第だろう……」

ゴルドは一歩踏み出すと中央の機体を見上げ、詳細を観察し始めた。機体を観察する彼の眼はすでにパイロットのそれであった。端然と佇立する機体の隙間から垣間見える無機質なメカニックが感じさせる不気味なまでの潜在能力――ゴルドは敏感にその匂いを嗅ぎ取っていた。おそらくこの乗り手を選ぶモンスターマシンのパイロットとして自分は選ばれたのだろう。ネーナの意図を察した彼は自身の愛機になるかもしれない機体をさらに観察する。

「たしか、コア・ブロックシステムがあったはずだが？」

試作機には欠かせないパイロットとデータの回収に有益なシステムがこれらの3機から排除されていることにゴルドは気付いた。

「御覧の通り、排除してるわ。実戦時における機体効率としては正直あまり優れたものではないというのがうちのスタッフの意見よ。システムの排除によって機体強度およびエネルギー変換効率は数パーセントのアップ……。通常の脱出システムと全天周モニターを組み込んだコックピットシステムを採用してあるわ」

ネーナの言葉にゴルドの動作が一瞬止まった。機体の観察をやめ、彼女を振り返る。口元に僅かに微笑をたたえながら彼女は彼をまっすぐ見つめている。

「お前ら、一体何を企んでるんだ？」

「どういうことかしら？」

言葉とは裏腹に彼女の微笑は崩れない。まるでゴルドの価値を測

るかのように彼の次の言葉を待っている。
「お前らが必要なのはこいつの性能評価試験データじゃないのか？　優先されるべきは実戦時の機体効率よりもデータの回収のはずだ」
　試作機の事故など当然に想定されるべきものである。高額の開発費と引き換えに得られるはずのデータを失ってしまえば、プロジェクトは致命的であるはずだ。だが彼女にそんな言葉をかけながらも、ゴルドはすでにある可能性に気付き始めていた。小規模な紛争とはいえ、幾多の実戦経験をもつ彼がここに呼ばれ、この機体を任される――その結果起きる可能性。彼女が彼に求める事柄にゴルドは心当たりがあった。
　ゴルドの様子を微笑みを浮かべて観察していたネーナはやがて静かに口を開いた。
「お察しのとおりよ。機体そのものの開発データはすでに私達は手に入れている。ただ実際にそれを運用するノウハウを私達はもっていない」
　データは所詮データでしかない。そして、実戦の運用ノウハウは実戦でしか得られない。そして実戦という環境から発見される思いがけぬ長所や欠点が次の開発へと繋がっていく。この機体を使って実戦を行えと彼女が言っていることをゴルドは理解した。
「あんた達が満足するような都合のいい戦場が、そんなに容易く見つかると思えないがな？」
　木星戦役の反動のせいか、ここ数年地球圏は表面的であれ安定している。新型ＭＳを実戦運用するに十分といえる環境は正直期待できない。しかし、ネーナはいともたやすくそれを否定したのだった。
「見つからなければ、自分たちで作ればいいのではなくて？」
　とんでもない言葉をさらりと述べる。この世界ではある意味当然と言えば当然だが、彼女の言葉はその若さにはあまりに不釣り合いだった。己の言葉の意味の重さに彼女は気付いているだろうか？
　そんな思いがゴルドの頭をよぎった。しかし、湧き上がる自身の疑問をすぐに押しのけ彼は本題から外れなかった。

「いったい何をする気だ？」
「正確には状況を利用させてもらうことになるのかしら……」
ゴルドの疑問にもったいぶることもなく、ネーナはすんなりと事情を説明し始めた。
「今連邦軍ではある一つのプロジェクトが進行しているわ。そして、サナリィがそのプロジェクトに使用される機体を提供することとなった。プロジェクトが成功すれば、莫大な金額が連邦政府からサナリィに流れ、次なるプロジェクトへと移行する。正直それはアナハイムとしては喜ばしい事ではないということは分かるでしょう？」
「瀕死の奴らに資金を提供したのはお前たちじゃなかったのか？」
「ええ、でもそれを元手に彼らが得ることになるものは無視できるものではない。金額そのものはアナハイムにとって大したことではないわ。それ以上に彼らが得る様々な実績や信用が問題なのよ。彼らの優秀性を疑う者はいない。だからこそ彼らには生かさず殺さずの状態であってもらわなければならない」
「なるほど、そういうことか……。つまりお前達はこの艦と機体を使ってその計画を叩き潰すことを目論んでいるわけだ。ついでに《Ｆ９７》の運用ノウハウの回収も行おうという寸法か」
「ええ、お察しのとおりよ」
ゴルドが十分な解答を引き出したことで、ネーナは満足げな微笑みを浮かべている。
出る杭を打つのではなく、出る前におまけつきで叩き潰すつもりらしい。毎度のこととはいえ、堅気の世界のえげつなさにゴルドはあきれ果てていた。
「さて、ゴルド・ガーラント様、いかがでしょう？　私どもの依頼受けては頂けないでしょうか？」
ゴルドに正対した彼女の身にまとう空気が変わった。相変わらずふわりとした微笑みは絶やさぬものの、その視線はまっすぐにゴルドを射抜いている。その顔は女性のものではなく、ビジネスの世界に生きるもののそれだった。

機体を見上げていたゴルドは即座に返答せず、彼女を置いて、甲板に向かって歩き出した。

二組のＭＳ射出システムが設置されたアレキサンドリア級重巡洋艦の甲板は、暗闇に覆われていた。艦内から漏れ出る明かりがゴルドの影を大きく引き伸ばす。それなりの広さを誇るＭＳハンガーが太刀打ちできないほどの巨大な戦艦ドックの中に、ゴルドの靴音が孤独に響き、果てしなく暗い空間の中へと吸い込まれていく。時折僅かに人の気配を感じさせるものの、ドック内にはおおむね静寂が漂っている。ゴルドをここに連れてくるために意図的に人払いがなされているのだろう。彼女からの依頼は、様々な繊細な事柄に触れているという事を容易く予想させた。

広大な甲板の上を遠慮なく靴音を響かせて歩き回りながら、ゴルドは考えていた。それは実に面白い依頼内容だった。これまで受けた中でもあらゆる面で最大規模の仕事となるであろう。何よりもゴルド好みのキナ臭さがそこかしこから臭ってくる。そして、おそらく彼女はまだすべてを話し終えてはいないだろう。彼に披露した事柄はほんの一部に過ぎないであろうことは簡単に予測しえた。しかもそれすらも組織の様々な機密に触れるほどに繊細な内容である。事と次第によってはすぐに消されてしまいかねない。そのスリリングな状況に背筋がぞくぞくとする。

しかし、一方でこの依頼を手放しで受け入れることのできない不安要素がゴルドにはあった。その事に思い当たったゴルドの心に迷いが生じる。彼にとって死はそれほど恐ろしいものではない。引き受けた依頼に対して十分な働きが出来ない可能性の方が問題だった。尤も流れ弾一つで運命の左右される死と隣り合わせの戦場ではその

ような問題は些細なことであるが……。
　迷うゴルドの心を急かすかのように軽やかなヒールの音がゴルドの背後から近づいてくる。
「ところで俺に断る権利はあるのか？」
　交渉の先手を取られることを嫌ったゴルドは、背後で優雅に微笑みながら解答を待つネーナに尋ねる。
「ええ……、少なくともわが社の敷地から無事に出るくらいは……」
　微笑みを絶やさずネーナはゴルドに答えた。期待通りの物騒な返答にゴルドは思わず苦笑する。そんなゴルドにネーナは言葉を続ける。
「仕事に見合うだけの十分な報酬はご用意しております。他にも酒、女、その他もしもお望みのものがあればアナハイム（私ども）が総力をあげて提供いたします」
「あんたを希望してもか？」
「勿論です」
　顔色も変えずにネーナは切り返す。
「冗談がうまいな。人一人が欲しがるものなどあんた達にかかればどうということはないだろうに……。　持ち上げられた俺が『ＮＯ』という返事をしないとでも思っているのか」
　巨大企業体であるアナハイム・グループの前では一介の傭兵の力など蟷螂の斧以下である。いや無いに等しいと言ってもいいだろう。それでも彼の持つ反骨精神が思わずむくむくと頭をもたげる。何よりも自分よりも年下のこの美貌の女の余裕が鼻についた。巨大企業の力を笠に着ている……自身の心に湧いた世界の陰で生きてきたものの何気ない妬みにゴルドは思わず嫌悪した。己の本心を悟られまいと一切の表情を消したゴルドの問いにネーナは返答する。
「ええ、私はあなたがこの依頼を受けるであろう事を確信しております」
「ほう、ずいぶんと自信たっぷりじゃないか。何か根拠はあるのか？」

「はい」
「聞かせてもらおうか……」
ゴルドの挑発的な言葉にネーナは静かに微笑を浮かべなると、まっすぐにゴルドの目を見ながら告げる。
「あなたが最もお望みのものを提供することが出来るのは、私共しかありえないからです」
「俺の望み……何だ？」
挑むようなゴルドの問いをネーナは静かな微笑みで受け止めるとその言葉を告げた。
「強敵の存在する戦場と困難なミッション、そして全力を尽くした末に訪れる死に場所です」
その言葉にゴルドの呼吸が一瞬止まった。一拍をおいてゴルドはゆっくりと彼女に返答する。
「なるほど、すべて調査済みという訳か」
「はい」
「かまわないのか？」
「すべて承知の上で依頼しているのです」
完敗だった。『ゆりかごから墓場まで』――地球圏で暮らすものにとって一生涯関わらずに済む事はない言われるアナハイム・グループの情報力というものは伊達ではないらしい。ゴルドの事情、そして、ゴルドの性格もすべて把握済みだったという訳だ。
「では詳細については場所を変えることにいたしましょう」
来た道をたどって一組の男女の姿がハッチの向こうへと消えていく。その姿をひっそりと見送るのは3機の巨大なＭＳだけだった。

――Ｕ．Ｃ．０１３８、月の片隅でのこの一事は、地球圏でひっそりと進行する陰謀の小さな幕開けに過ぎなかった。

（２０１０／０３／０６　Ａｒｃａｄｉａにて初稿）
（２０１１／０１／２３　本サイトにて初稿）

序（後書き）

はじめまして、暇犬と申します。

現在、他サイト（Ａｒｃａｄｉａ）様にて公開させて頂いております拙作『機動戦士ガンダムＵＣ０１３８　Ｆ９１　ＶＳ　Ｆ９７』書式を弱冠変更して投稿させていただきます。

オリジナル分の強い作品ではありますが、Ｕ．Ｃ．ガンダムの好きな方もそうでない方も楽しんでいただける物語を目指しております。

こちらのシステムに慣れ次第、折を見て順次投稿していき、最終的に他サイト様と同時投稿になることと思います。

新参者でありますが、お引き立ての程、よろしくお願いいたします。

01

無限に広がる虚空。どこまでも広がるその深遠の闇の中に星々が儚く煌いている。手を伸ばしても決して届かないその煌きは人の一生などよりもはるかに長い時の中を輝き続ける。

バイザーの片隅にはうっすらと青い地球が映っていた。白色から群青色へ――美しい大気のグラデーションに包まれた水の惑星は漆黒の闇の中で圧倒的な生命力と存在感を放っている。正対すれば引きずり込まれてしまう――そんな錯覚を持たせる青い星を視界の片隅に追いやって再び虚空に身を任せる。

身体を支えるのは命綱のみ。その不安定さが逆に、一切の無の中に唯一存在する己のはかなさを際立たせる。ヘルメットの中に木霊する己の呼吸の音だけが、規則正しく命の脈動を感じさせる。

初めて本物の宇宙を見たのはいつのことだっただろう。『宇宙は蒼青い』――そんな感想を述べた幼い彼のことを周囲は嘲笑った。

「それはCGの画像だよ」

少しばかり、現実に詳しい大人たちが得意げに己の常識を押し付ける。そんな彼らに反発を感じながらも、自身の感覚が周囲の者たちのそれと違っていることに気づいてからはそれを口にすることをやめた。時折触れることのできる宇宙の蒼青に身を任せていたい――心のどこかでいつもそんな願望がくすぶっていた。

彼がMSパイロットになったのはそんな理由からだった。虚空に身を任せるという目的ならば他にも選択肢は存在したはずだ。コロ

ニー公社、ジャンク屋、シャトルパイロット――様々な選択肢がある中でそれを選んだのは、少年にありがちな強者への尊敬故であろうか。あるいは平和というどこか作り物めいた退屈な日常から逸脱した世界に憧れていたのかもしれない。自身の命を対価に手に入れることのできる本物の世界――若気の至りと言われればそれまでかもしれないが――ともかく少しだけ大人になった彼はＭＳパイロット、どちらかといえば優秀な部類に属するであろうと自負できるくらいの現在（いま）を手に入れていた。

暗い漆黒の闇の中に星々が煌いている。高性能のパイロットスーツに包まれた身体を闇の中に投げ出して、彼はただひたすらに漠然と宙空を漂っていた。生命維持のためにテクノロジーの粋を極めつくしたスーツの向こうには、生を全く受けつけようとしない空間が無限に広がっている。果てしなく広がる虚無の中で彼はただ静かに己の命の脈動を感じていた。

「カーク・レイナード中尉！」

突然、静寂を破り、刺々しく彼の名を呼ぶ声がヘルメットの中に響く。当然応答は……しない。

「カーク・レイナード中尉殿！」

再び声が響く。先ほどよりもさらにゆっくりと丁寧に……。当然応答は……しない。

暫くの沈黙ののちに無線の声は独り言をつぶやき始める。

「どうやらこちらにはいらっしゃらないようですね。――ああ、そういえばワイヤーケーブルが流しっぱなしになっているようだわ。全く整理整頓がなっていないわね……。回収は面倒だから切断しておきましょう」

（ヤバい……あの女、マジでやりかねん）

こほんとワザとらしく咳払いをするとカークは渋々と応答する。
「……ああ、シャーリーン・ブルーノ少尉殿」
同じチームになって以来いつも『シャーリー』と呼んでいる彼女の名を丁寧に呼び出す。
「あら、レイナード中尉殿、そちらにいらっしゃったのですか」
（船窓から見えてるだろうが、このアマ！）
だが、彼は一応大人である。鋭く尖った本音を押し隠し、年齢相応の態度で、可愛げのない同僚に接することにした。
「いやあ、無線の調子が悪いようで、こちらの応答が聞こえなかったようですね」
年齢も階級も下の彼女に丁寧に応対する。残念ながら状況は不利だ。今カークの命はシャーリーの手の中にある。
「そうだったのですか、お返事がありませんでしたので、てっきり宇宙（そら）に流されてしまったのかと思い、命綱を絶ち斬ってしまうところでした」
（待て、返事がなかったら、それ自体が問題だろうが……）
心底残念そうな声で応答するシャーリーにカークは心の中で突っ込んだ。圧倒的に不利な立場にある今の彼は、不用意な返答を行わないように細心の注意を払わなければならない。
「ところで中尉殿、時間という概念をご存知でしょうか」
「さあ、初耳だな」
「……。そうでしたか。世間ではそれは、それは、大切なものでありまして、時としてそれを大切にしなかったばかりに職を失ったり、命を失うこともあるといわれております」
「……」
「小官の勘違いでなければ、そろそろブリーフィングの時間が迫ってきているはずなのですが……。肝心の中尉殿はいまだに宇宙を漂流していらっしゃる……。このような場合、いかがすればよろしいでしょうか？」
「さ、さあな……」

丁寧な言葉遣いとは裏腹に少しずつ彼女のとげは鋭くなっていく。
「小官としても一度や二度ならば笑って許せるのですが、こうも度々ですといかがしたものでしょう？」
「……」
「ご存知ですか、中尉殿？　ストレスは美容にも健康にも悪いと……。ストレスの元凶は早めに抹殺し、八つ裂きにし、焼却すべきであるとどこかの評論家もおっしゃられていましたよ……ねえ？」
「俺の知っている話では、適度なストレスは人間を成長させる……だったような気がするが」
「小官が言っているのは過剰なストレスの場合です。レイナード中尉殿」
「そうか、それは大変失礼した」
丁寧な会話の中に見え隠れする物騒な攻防。軽い牽制ののちに繰り出されるであろう大砲（メガランチャー）の一撃にカークは万全の備えを試みる。
「さて、今、小官の手元にはこの過剰なストレスの元凶を絶ち、快適な部隊勤務を取り戻すために必要不可欠なスイッチがあります。小官としてはこれをどうしても押したくて仕方がないのですが……」
「押すとどうなるんだ？」
「はい……ストレスの元凶は宇宙のゴミと化し、永遠に漂流することとなります」
心持ちうきうきとした声で無線の声が響いている。どうやら、カークの命は瀬戸際に立たされているらしい。
「許可できねえな」
「それは命令でしょうか？」
「そうだ」
「なるほど、中尉殿は部下の健康管理など、どうとでもよいと仰られるのですね」
「いや、そうは言わんぞ。貴官にもしものことがあれば俺の査定にも響く」
カークの言葉にシャーリーは一瞬沈黙する。

「そうですか……。同じチームで常に背中を守る位置にいる部下など『査定に響くから』程度の価値しかない、と中尉殿は仰られるわけですね」

これまでよりもさらに声のトーンを落としてゆっくりと、いや、むしろ棒読みに近い形でシャーリーの声がヘルメットの中に木霊する。どうやら手を誤ったらしい。急いでフォローを入れようとしたカークの言葉をさえぎり、本性をさらけだした核融合炉（ジェネレーター）が暴走を始めた。

「だったら、とっとと戻ってきなさいよ、このドアホ。いつまでもガキみたいにちんけな屁理屈こねてんじゃないわよ！　まったく、あんたは……」

暴走するシャーリーに軍隊の常識など通用しない。次々に浴びせられる容赦のない言葉の弾丸（ガトリング）に溜息を一つついたカークは、無線のスイッチを切ると身体を反転させる。命綱が絡まらないように四肢をうまく使いエアーを軽く噴射させて、方向を調節する。反転したカークの視界に巨大な戦艦が飛び込んでくる。

ラー・カイラム改級戦艦　《エナド》――連邦軍の誇る主力航宙戦艦がその威風堂々たる姿態を星の海原に泳がせている。人の世界の矮小さに想いを馳せながら、カークはもう一度エアーを噴射させるとゆっくりとその巨躯へと近づいて行った。

エアロックのハッチを開くとそこにはシャーリーが仁王立ちで浮かんでいる。艶のある黒髪のショートカット、襟足は少し長めで、その整った顔立ちを十分にひきたてている。誰もが足をとめて振りかえってしまう美貌ではあるが、そのこめかみにくっきりと青筋が立っているのはカークの気のせいの……はずだ。

「よう、ご苦労さん！」

気軽に声をかけたカークは何事もなかったかのように彼女の傍を

滑りぬけようとする。
「待ちなさい！」
均整のとれたプロポーションからは想像しがたい握力で彼女はカークの肩をしっかりと掴んでいる。さすがはＭＳパイロットというところだろうか。
「どうした？　何か問題でも起きたか？」
慣性に身を任せながら心配そうな表情を演出して彼女の顔を覗き込む。シャーリーの怒りがさらにヒートアップすることは……言うまでもない。しかし、まだまだそれがリミットに届いてはいない事をカークは冷静に計算していた。
「『何か問題でも？』じゃないでしょ！　もうじきブリーフィングが始まるってのにふらふらと宇宙（そら）を泳いでいるってのはどういうことよ！　全くあんたは毎度毎度同じことをくりかえして……。『じかんまえこうどう』なんて言葉、いまどきエレメンタリーの子供だって知ってるでしょうが！　連帯責任でペナルティを喰らうこっちの身にもなりなさい！」
整った美貌を真っ赤に染めて、堰を切ったようにまくし立てる。
『美しいものには力がある』などとは誰かの言葉であるが、全くその通りだな、などと思いながらも、カークは事態の収拾を図ることにした。
「そうか、そいつは迷惑をかけてすまなかったな」
もちろん詫びる気持など毛ほどにもない。口から出まかせである。そんなカークの内心を知るシャーリーの頬がひきつり始めるのは言うまでもない。彼女に構わずカークは言葉を続ける。
「だが、俺にも已むを得ぬ事情というものはある」
「そう、じゃあ、部下のストレスメーターを毎度のごとく跳ね上げる已むを得ない事情というやつに、納得のいく説明というのをしてもらおうじゃないの」
口さえ開かなければ特級品の美貌なのだが残念ながら、中身がそれに比するとは限らないのが世の常である。自身を睨みつける彼女

の視線を軽くスルーしながらカークはドレッシングルームへと移動する。

「貴官も知っているだろうが、現在の世界情勢は表面的には一見安定しているように見えるものの、実は様々な不安要素を抱え込んでいる。政治、宗教、民族、経済、資源……あらゆる点において紛争の種は尽きない。そこで俺も一人の責任ある軍人として、様々な困難を回避し、平和に貢献出来る策はないのだろうかと宇宙(そら)をたゆたいながら考えていたのだよ」

「で……？」

シャーリーの視線は冷たい。強く握られた片方の拳は震えている

「気が済んだ……？」

視線以上に彼女の言葉は冷たい。

「ご高説はごもっともだけれど、それが私達の現状とどう関係があるのか納得のいく説明をしてほしいわね」

シャーリーの感情のこもらない声での問いに、この場をやり過ごそうと口を開こうとしたカークだったが、彼女が放つ禍々しいまでの殺気に気圧され、思わず口を閉じる。

「世界の行く末を案じて下さるというのは人として立派なご行為なのでしょうけれど……、御自身が抱えた目先の責任について、そのご明晰な頭脳はどのような解答を出して下さるのかしら？」

「いや、待て。軍人たるもの、目先の事だけでなく大局的な見地に立ってだな……」

「……」

互いの視線がぶつかる。もしも周囲に人がいたら我先に逃げ出していくであろう空気が、整頓された部屋の中で渦巻いている。カークの次の一手は決まっていた。

「悪かった……」

カークは勢いよく頭を下げる。過ちを犯せばやはり素直に詫びる事が身近な人間関係を円滑に進めるための第一歩だろう。しかし、事態はさらに意外な展開へと突入する。勢いよく頭を下げたカーク

の身体は、反動でくるくると無重量状態の空間を回転し始めた。
「あ、あんたは……」
目の前で起きる唐突な展開にシャーリーは絶句する。明らかにカークが意図的にやっている事は分かっているのだが、宇宙に初めて出てきたアースノイドのようにじたばたともがいている間抜けな彼の姿に感情が混乱している。そのようなシャーリーの様子をＭＳパイロットの脅威の動体視力で確認したカークは、身体を逆にふって回転を止め、すかさず畳みかける。
「さすがはブルーノ少尉。小官の至らなさを快く許して下さるとは実に広い心をお持ちだ。……うん、こうして人と人は分かりあえるものなのか……」
どこかで聞いたようなフレーズを持ち出して、平和主義万歳、と勝手に話に結末をつけようとしているカークに、シャーリーはすでに頭を抱えている。
「もう、いいわ……。さっさと準備して……。あんたと話してるとこっちが変になりそうだわ……」
どうやら危機は過ぎ去ったらしい。げっそりとした表情のシャーリーの様子から、自身の身の安全を確認したカークは涼しげな顔でとどめの提案をする。
「ところで少尉、シャワーを浴びて行きたいのだが、かまわないだろうか？」
「死にたいの……あんた？」
振り返ったシャーリーの目が完全に座っている。さすがにこのあたりが限界であることに気付いたカークは、ブリーフィングルームへと大人しく向かうことにしたのだった。

「よう、お二人さん、また同伴出勤かい」
低重力ブロックに位置するブリーフィングルームに入室した途端に、パープル小隊リーダー――テッド・ジャクソン大尉がそんな言葉を二人に投げかける。ドレッドヘアがトレードマークのラテン系の陽気なこの男は、誰にでも気さくに話しかけ、あっという間にその場の空気を明るくする。
「違います！」
敬礼しながらも、シャーリーが生真面目に返答する。傍にいたカークの首をガッシリと抱え込むとジャクソンは小声でカークに問いかけた。
『おい、シャーリーのやつ、やけに機嫌が悪いな』
『きっと調子の悪い日なんですよ』
二人の小声の会話を耳ざとく聞きつけたのかシャーリーはこちらを睨みつけている。
『あまり、怒らせるんじゃねえよ。性格はともかく、あれだけの美貌にお目にかかれるのはめったにねえんだからよ。美人は笑顔でいてこそ本当の価値があるんだぜ』
『はあ……』
いささか蔑視的な発言ではあるが、隊内でのシャーリーに対する認識はどうやら一致しているらしい。
「カーク、また泳いでたのか」
ジャクソンの隣りに立っていたブルー小隊リーダー、ジル・サカキ大尉が呆れたように声をかける。同じ小隊であり、カークとシャーリーの直属の上官であるサカキは大方の事情を察しているようだ。
「集合時間には間に合いましたよ」
それがシャーリーのおかげであることをきれいに忘れて、カークは胸を張って答えた。そんなカークのわき腹に軽く肘鉄を一発放りこんだシャーリーは、悶絶するふりをしてふざけるカークを放って、自分の席へと向かう。
「ずいぶんとのんびりとしたご登場だねえ。お気楽上官殿にご奉仕

でもしてたのかい」
　最前列の右端に座るレッド小隊・フロントアタックのセレン・ナッシュ少尉の辛辣な揶揄とリーダーのエナ・クリスティン大尉の冷たい追い笑いを無視してシャーリーは、セレンの斜め後ろにある己の座席に着席する。
（やれやれ、又か……）
　一度は激しいキャット・ファイトを繰り広げた事もある両者の関係は決定的に悪かった。放っておけばいつ火種が爆発するか分からない。
「はいはい、ちょっとこちら、通して下さいな」
　シャーリーを睨みつけるセレンの視線をさえぎるようにゆっくりと流れていったカークは、期待通りのお気楽上官ぶりをしっかりと発揮しながら、そのまま自身の座席へと向かう。途中、一瞬だけ、シャーリーと視線が合ったが、先程の肘鉄の返礼とばかりに軽く舌を出して挑発しておく。
　左隣に座るいけ好かない空気を放つ男には目もくれず、座席にふわりと腰掛け、足を軽く絡ませて勢いを止める。低重力状態で座席に着くという行為にはわずかばかりコツが必要であるが、宇宙育ちの彼らには自然な仕草だった。

　カークが座席に着くと同時にブリーフィングルームのドアが僅かなエアの漏れる音と共に開き、一人の男が現れた。《エナド》モビルスーツ隊隊長、アレン・コーナー少佐である。
　小柄ではあるが、厚みのある体躯はしっかりと連邦軍佐官の制服を着こなし、いかつく角ばった顔には年齢に相応の深いしわが刻みこまれている。一見、頑固一徹職人然とした技術者上がりのように見えるが、歴としたパイロット上がりだった。すでに現役からは退いているが、その経験を生かし、カーク達《エナド》ＭＳ隊の責任者として多忙な日々を送っていた。
「楽にしろ！」

コーナーを敬礼で迎える部隊員たちに答礼すると、僅かに嗄れた声で彼らに着座することを許可する。

「残念なことだが、今日は全員そろっているようだな」

彼の正面に座るカークの顔を見つめながら、コーナーはおもむろに告げる。室内に失笑が湧く。

「ご期待に添えなくてすみませんね……」

「まったくだ。貴様に課すペナルティーについて艦長とあれこれ思案していたのだが、無駄になってしまった」

カークに対するコーナーの答えに室内が爆笑する。カークの遅刻癖は艦内では有名であり、ブリッジクルー達までもが賭けの対象としているらしい。しかもいつの間にか生真面目な艦長までもがそれに加担している事を知り、カークは不貞腐れる。

「毎度、毎度、連帯責任でペナルティを食わされちゃ、たまったもんじゃないわ」

カークの後ろに座るシャーリーがうんざりした調子でぼやいている。

「確かにな。減俸にまで付き合わされては、たまったもんじゃない」

さらにその後ろではサカキがシャーリーに呼応するかのように調子を合わせている。半年後に第一子が生まれる予定の男の妙に所帯じみた愚痴は奇妙な重さを感じさせる。これは新手のプレッシャーのかけ方なのだろうか？　中央最前列に座るカークは、チームメート達からの微妙なプレッシャーに頭を抱え、そんなブルーチームのやり取りを、他のメンバー達が爆笑しながら眺めている。『他人の不幸は蜜の味』――いつの時代も変わらぬ人の世の真理である。

「さて、レクリエーションはここまでだ」

それまでのどこか柔らかな空気を一掃するかのようなコーナーの言葉に、室内の空気が一気に引き締まった。

「貴様らもうすうす感づいているだろうが……、いよいよ我が隊結成後初の実戦である。作戦名は《オペレーション・キル・バンガード》――文字通りの“海賊狩り”だ」

部隊員たちはみなコーナーを注視している。彼らの視線をかわすようにディスプレーの傍らにその位置を移したコーナーが手元のパネルを操作する。室内のライトが消され、壁一面に広がるディスプレイが青白く輝き始めると同時に、やがて、複数の立体映像が浮かび上がる。

「作戦目標はサイド２宙域に位置する廃棄資源衛星《アステル》。この場所にたむろする海賊共の排除もしくは掃討、及び、資源衛星の制圧が今回の目的だ」

立体映像として浮かび上がっていた、いささか歪な形の衛星の全容が拡大投影され、次いで再びそれが縮小されると、宙域全体を示す航路図及び戦域図が浮かび上がった。室内の誰もが浮かび上がる映像に見入り、コーナーの言葉を真剣に聞き入っていた。

「本隊が艦砲射撃により衛星表側を攻撃。その間に２隊に分かれた貴様らは、別々の方面から目標裏側の港湾施設に接近。指定ポイントで合流の後、出撃してくるＭＳ隊を粉砕し、港湾部に圧力をかけ敵を封じ込めつつ本隊の到着を待つ事になる」

宙域図に二本のラインが現れ衛星近くの一点で交わっている。

「Ａ小隊――パープルチームは先行して隕石に偽装したベース・ジャバーにより目標に接近。次いでＢ小隊――ブルー、及びレッドチームは偽装した民間輸送船に機体を格納して目標に接近、ポイントαにて合流し、速やかに次の行動に移れ」

二本のラインの光点が明るく点滅を始める。

「運用機体は通常通り《Ｆ９１》、フロントアタックおよびリーダー機はヴェスバー装備のノーマル仕様、バックアップはバスター仕様。ロングレンジビームランチャーのとり扱いには十分に注意しろ！　訓練通りにやれば問題はないはずだ」

ここ２カ月の間、さんざんに振り回して慣れ親しんだ愛機の姿が画面上に投影される。

ノーマル仕様と呼ばれる《Ｆ９１》最大の特徴であるヴェスバー

は可変速ビームライフルとも呼ばれ、状況に応じた様々な場面に適合する威力のビームを打つ事が可能である。すでに地球圏でのＭＳの標準武装となりつつあるビームシールドをものともしないその威力は、ここ十年以上《Ｆ９１》の性能が他を寄せ付けないものであり続ける事に一役買っている。尤もその威力に反比例するかのような命中精度の低さと照準のブレは、様々な改善策が取られたものの、根本的な解決にはなりえず、ヴェスバーが一般的な標準兵装として定着しない一つの要因となっていた。

バスター仕様と呼ばれる装備はこのヴェスバーの改善策の一つが発展したもので、右背部に設置されたロングレンジビームランチャーの威力はヴェスバーの最大威力を軽く凌駕し命中精度も高い。《Ｆ９０》計画において得られた様々な開発データを基にさらに熟成されたシステムは、すでに制式採用されてもおかしくはないレベルに達している。

尤も左右のマニュピレーターでしっかりと保持して、発砲時には全身のスラスターを使って反動を押さえ込まなければならず、小型モビルスーツサイズに匹敵するその全長は、取り回しの悪さにつながり、ＡＭＢＡＣ機能の役割をも果たすヴェスバー装備の機体に比べて運動性の低下が著しい。左背部に設置された近距離戦用の４連ビームガトリングガンは、あくまでも接近してきた敵への牽制に用いられ、僚機の確実な援護の元にあって初めて、その強大な攻撃力が実戦の場において生かされることとなる。

《Ｆ９１》を使用しての初の実戦ということもあり、カークの心は躍った。

（２０１０／０３／１３　Ａｒｃａｄｉａにて初稿）

（２０１１／０１／２６　本サイトにて初稿）

02

「貴様らの仕事は主として敵ＭＳ隊の排除だ。敵戦力の概要はＭＳ４０機、及び自働砲台多数。詳細は資料のとおりだ、後で各自チェックしておけ」

「９対４０……ですか？」

レッドチームのバックアップ、ロン・フェイカー准尉が素っ頓狂な声をあげる。数字の上ではあまりにも常識はずれな戦闘である。

「なんだ、ビビったのか？　フェイカー？」

「い、いえ、そんな事は……」

唯でさえチキンハートというあだ名で有名な彼は今作戦が初陣となる為、おそらく緊張しているはずだ。

「よかったねえ、筆おろしの相手はよりどりみどりじゃないか」

同じチームのセレンのヤジにフェイカーは真っ赤になって抗議の声をあげる。

「――それで、敵部隊の詳細は分かってるんでしょうか？」

初の実戦において、慎重なコーナーが無謀な作戦を立てるとは考えにくい。何か裏があるんだろうとばかりのサカキ大尉の問いに、コーナーはそのいかつい顔に似合わない笑みを軽く浮かべると再び新たな資料を提示する。サカキの注文通りの内容だった。

「海賊共は鹵獲ＭＳを主体としている。バタラ系からデナン系、一部にはジェガンタイプやドーガタイプも存在する。しかし、その機体稼働率はかなり低い。共食い整備は当たり前だからかろうじてＭＳの体裁を整えているといったものが多数だ。約半数が動けばいいという代物だ」

「骨董市ですか？」

「まあ、そんなところだ、民間人相手の海賊行為や破壊工作などそ

れで十分だからな。もしかしたら《ザク》なんてのも、お目見えする可能性は否定できない。尤も骨董品だからといって舐めてかかると痛い目を見るぞ。敵のビーム兵器は健在だからな」

「あの、敵が籠城する可能性はないんでしょうか？」

実戦経験の少ないフェイカー同様、パープルチーム・バックアップのバッジョ少尉がおそるおそる手をあげる。同じチームのフロントアタックであるマクシミラン・ジュベール中尉を信奉するバッジョは、ジュベールを目の敵にしているカークにとって少々頭の痛い存在だった。

「籠城により、敵にメリットはあるのか？」

投影された戦域の全体をさらに拡大しながらコーナーがバッジョに問いかける。

「あ……」

自分の質問が間の抜けたものである事に気付いたのか、バッジョは気まり悪そうに手を下ろした。

「見ての通り衛星自体の容積はコロニー1基のそれよりも小さい。衛星内に潜む海賊共が艦砲射撃の振動に耐え続ける事は困難だろう……。さらに籠城戦とは援軍が前提にあっての話だ。戦域に完全に封じ込められた海賊共に対して、そのような可能性は皆無と言っていい」

「衛星内、及び周辺にいる者はすべて敵とみなしていいんでしょうか？」

カークの左隣に座るジュベールの言葉に一瞬空気が鎮まった。あまりにも詳しすぎる敵の詳細状況に多くのものが内部協力者あるいはスパイの可能性を疑っていたのだろう。それらもすべて敵とみなす、ある意味残酷な選択肢だった。

ジュベールの問いにコーナーは静かに答える。

「構わん、すべて敵とみなせ。もっとも、貴様らの仕事は基本的にＭＳおよび周辺宙域の自働砲台の掃討であり、衛星制圧は本隊の揚陸チームの仕事だ。作戦時における当該宙域はコロニー政庁により

通行禁止区域とされるため民間船が紛れ込む事はまずあり得ない。貴様らは安心して自分達の仕事を行えばいい」

「了解です」

「他に質問はないか？」

コーナーの問いかけに一同は沈黙を以て返答とする。

「以上が作戦概要だが理解できたか、レイナード中尉？」

「えーと、つまり玄関をノックして、住人を呼び出している間に、勝手口から侵入して暴れ回れという事で……」

「違うわよ、巣を叩かれて怒った蜂が飛び出してきたところを手当たり次第に狩りとれって言ってんのよ」

カークの答えにシャーリーが茶々を入れる。

「実に端的な例えだ。さすがは優秀なブルーチームだ。ついでに今回の作戦は貴様らだけで実行してもらおうと思うが構わんか？」

無表情に告げるコーナーの言葉に二人は首をすくめた。

「まったく、『口は災いの元』って言葉を知らんのか、お前らは……」

あきれ果てたサカキの言葉に周囲が爆笑する。

「あんたのおかげで私まで怒られちゃったじゃない」

真後ろで聞こえよがしに告げるシャーリーに溜息をつくと、カークは正面に立つコーナーに助け船を求めた。

「一応、俺の方が上官なんですがね、少佐。軍隊の規律ってやつをこの小生意気な少尉殿に教えてやってはくれませんか」

「ふむ、だが、上官なら上官らしい事をせんと部下は付いてこんと思うがな、レイナード中尉」

コーナーの答えに再び室内が爆笑する。残念ながら室内にカークの味方は皆無だった。コーナーの答えに再び首をすくめたカークは降参の合図を送った。カークの様子を眼の端に捉えながら、コーナーは再び手元のパネルを操作する。立体映像を表示させていたディスプレーがその冷たい輝きを消し、室内照明の柔らかな光が再びぬくもりを振りまいた。一切の操作を終えたコーナーは再び部下達の

正面に立つと語り始める。
「いいか、貴様らは各方面から集められた優秀なエリート部隊だ。貴様らが当然のように使用している高性能機もその他装備品も馬鹿高いコストがかかっている事を忘れるな！　この程度の相手など勝って当然……、万が一にも堕とされるような事になってみろ、降格処分は免れんと思え！」
（エリート部隊……ねえ）
思わずカークは心の中で苦笑する。確かにこの部隊は、装備品の質をはじめとして、通常に比べてはるかに待遇がいい。カーク自身、転属後につくようになった特別手当に思わずほくそ笑んでしまった。
だが、所属するパイロット達の全てが優れた技術と豊富な経験を持っているかといえば疑問符が付く。フェイカーやバッジョのように新兵同然のような者たちが所属する実態はエリート部隊などという言葉とは程遠い。
軍上層部の肝いりで設立されたと噂されるこの部隊についてはとかく様々な憶測が内外に流れていたが、実態を知る者は皆無と言っていいだろう。今のところ現状に満足しているカーク自身、正直そのような事情など気にも留めなかった。高給を受け取り、高性能機である《Ｆ９１》に乗れるのだから文句のつけようがない。むしろ不満など言おうものなら罰が当たるというものだろう。カークの内心など気にも留めぬコーナーはブリーフィングを終えるべく、一同を起立させる。
「最後に一つ、貴官たちに求められているのは安っぽい正義やちっぽけな自尊心などではない。そんなものが欲しければ今すぐ、軍人をやめ、タレントにでもなって無責任な大衆に媚びへつらうんだな！　貴官たちの命の重要性など二の次である。我々が貴官たちに求めるのはあらゆるものを完膚なきまでに服従させる絶対的な力だ！　それを履き違えるな！　以上、解散！」
コーナーの言葉に室内の全員が敬礼を以て答える。答礼しながら部下達一人一人の目を確認したコーナーは、やがて静かにブリーフ

ィングルームを退出していった。

エレベーターの扉が開くと同時にカークの目の前に広大な空間が開けた。戦艦《エナド》内ＭＳデッキでは整備兵たちの活気があふれていた。いつも以上に臭う体臭とオイル臭、そして金属の焼けるような匂いにカークは一瞬顔をしかめる。部隊初の実戦であるゆえか、デッキ内のあちこちで責任者達の怒鳴り声が響いていた。想定される様々な突発的事故の防止策のため、整備兵用のノーマルスーツは旧世紀の宇宙服のように身動きがとりにくい。このようなスーツを着用しての真空内での作業は必要以上に疲労を誘うため、予定時刻までに整備の完了を急ぐ整備兵たちの殺気だった空気があたりを覆い尽くしている。

デッキ内には各チームのカラーでポイントされた９機の《Ｆ９１》が悠然と佇立している。美しく艶のある曲面と整った平面で構成された装甲の端々から無骨な鈍い輝きのメカニックが垣間見える。その機体は無機質な工業製品というよりは、工芸品、あるいは人体の延長と呼んで差し支えない品位があった。ＲＧＭ系列にはない《Ｆ９１》独特のツインアイは、人の命を奪う兵器であるはずの機体を見る者に人間的な親しみを感じさせる。

かつて、連邦軍で初めて運用されたＭＳに肖ったその意匠は、頼もしく勇ましい鋼鉄の戦士にふさわしい堂々たる印象を周囲に与えていた。

大型ＭＳ全盛の時代に設計されたラー・カイラム改級のデッキには９機の《Ｆ９１》を格納しても十分なほどの余裕があった。予備パーツや多様な試験兵装を収める為に増設された格納ブロックや艦

首部に設置されたビームシールド発生装置などの為に、艦内部のレイアウトに若干の変更があったものの、《エナド》のＭＳデッキは他の艦艇に比べて少々贅沢に感じるほどの余裕がある。宙空を泳ぎながら、カークはそこに佇む巨大な機体群の内の一機に目をやった。

「趣味が悪いんだよ」

０４号機――ほぼ全身をチームカラーの紫紺色に染め上げたその機体に向かってカークは毒づいた。本来、各チームのフロントアタックの機体はそのチームカラーを全身に纏うのが当初の方針だった。しかし、全身を数種類の青色で染め上げた自身の愛機になるであろう機体を、部隊転属後に初めて目の当たりにしたカークは、そのあまりの趣味の悪さに絶句した。即座に隊長のコーナーの元に駆け込んで直談判を求め、白を基調にブルーでポイントするブルーチームの標準的なカラーリングに無理やり戻させた。初対面の席上でいきなり機体のカラーリングにクレームをつけ始めたカークに、コーナーは目を丸くしていたようだったが、カークの主張が割合すんなりと受け入れられたところをみると、パイロット上がりのコーナーにも思うところがあったのだろう。尤もその席上に偶然居合わせたシャーリーには、いまだに何かの折につけ、カークの変人ぶりを示すネタにされていたのだが……。

いけ好かないあの男――ジュベールの紫紺の０４号機はカークの中傷を気にする風もなく悠然と佇立して、整備兵たちにその身を委ねていた。マクシミラン・ジュベール――階級はカークと同じ中尉であり、ＭＳパイロットとしての腕は弱冠向こうの方が上であるか――少しばかり長身で、欧州系の貴公子を思わせる整った顔立ちであり、《エナド》ＭＳ隊の中では実力ＮＯ．１と目されている実に目障りな奴だった。いつか、叩き潰してやろうといきり立ってはいるものの、模擬戦ではカークの連敗続きだった。

不意にコックピットハッチがスライドし、中から人影が現れた。その予想外の人物の出現にカークは目を見開いた。

「あの野郎、ふざけやがって……」
コックピット内から出てきたのは一人の女性士官――ミリー・アーガスだった。
《エナド》ブリッジ内で主にＭＳ管制を担当する彼女は、カーク達ＭＳパイロットとは比較的距離が近く、仕事上とはいえ、言葉を交わす事は多い。愛らしい顔立ちと可憐な笑顔は緊張を強いられるコックピット内では数少ない安らぎとなっていた。しかも、正確かつ端的なその仕事ぶりはコンマ数秒の判断を要求されるパイロット達には、大いに信頼されている。
腹立だしい事に、艦内ＮＯ．１の人気を誇る彼女とＭＳ隊のＮＯ．１であるジュベールとの関係は、カークを含めて艦内の誰もが知る周知の事実だった。
すぐそばのカークに気付く様子もなく、うつむいた顔を真っ赤に染めて小柄な制服が彼の隣りをすれ違って行く。出撃前のコックピット内で何があったか――想像するに難くないその事象にカークは憤慨した。
「みっともないわねえ。嫉妬に狂った男の姿なんて……」
カークの後ろから呆れ返ったような声がかかる。
「うるせえ！」
カークの文句もどこ吹く風とばかりに彼の後ろから流れてきたシャーリーは言葉を続けた。
「あんた、まだあきらめてなかったの。情けないわねえ。ウジウジ悩んでないで堂々と奪い取るぐらいの甲斐性ってのは、ないのかしら」
「お前なあ……」
「まったくあの娘も露骨よねえ。首筋ぐらい隠せばいいのに……。男って、なんでああいう娘にころっとまいっちゃうのかしら？」
カークのすぐ後ろで慣性に身を任せながら、シャーリーは容赦ない言葉で彼の心を抉る。
「お前……、デリカシーって言葉は知らないのか」

「そんなもの、連邦軍入隊と同時に宇宙（そら）に放り出したわ。今頃デブリになってどこかのコロニーに大穴でも開けてんじゃないの？」
（穴を開けてんのは同僚の心臓だろうが！）
思わず突っ込もうとしたカークのノーマルスーツの肩にシャーリーが手をかける。
「恋愛なんてね、妄想と幻想の産物。先に手を出した者勝ちなのよ。あまり近づかないでちょうだい、負け犬が移るから……」
そう告げると、抗議の声を上げようとしたカークの肩を支えに反動をつけて自身の機体へと流れて行く。押された反動でバランスを崩したカークの体はあらぬ方向へと流れて行った。
「何すんだ、馬鹿野郎。覚えてろよ！　弾が当たっても知らねえからな！」
必死で態勢を立て直しながらカークは怨嗟の声を向ける。
「あんたの方こそ気をつけなさい。忘れたの？　あんたの背中にいるのはいつも私なのよ」
均整のとれたグラマラスな肢体を悠然と自身の機体に向かって泳がせながら、シャーリーは振り返りもせずにカークに返答したのだった。

「馬鹿野郎、この程度の問題にいちいち指示を仰ぎにくるんじゃねえ。てめえの頭は飾りか？」
「す、すいやせん……」
いつもおどおどとした様子の部下のエシェ・エシェッソンを、毎度の如く怒鳴り飛ばして、部屋から叩き出す。言われた事は確実にやるのだが、それ以上は自分で考えようとしない部下にさすがにう

んざり気味だった。尤も言われた事すらまともにやろうとせずに自身の主張ばかりを通そうとしたり、実力もないくせに悦に入って他人の批判をしたがるクズ共がごろごろしているご時世なのだから、文句を言うのは贅沢な事なのかもしれない。

そう、自身に言い聞かせ、何とか気分の転換を図ろうとモニターに星空を映し出す。静寂の中で変わらずに輝き続ける星の光にささくれ立った心が僅かに緩む。

「失敗だったかな……」

司令室のモニターに映る星空を眺めながらドッジ・メイスンはぽつりとつぶやいていた。廃棄資源衛星《アステル》周囲の宙域はいつもと変わらぬ静寂を保っていた。

ドッジ・メイスンが連邦軍に入隊したのはクロスボーンの反乱と呼ばれる事件がようやく沈静化したころだった。彼の志願理由は大それた物ではなかった。専門的技能が身につけられて、食いっぱぐれがなさそうだから――そんなところだった。それなりに器用ではあったものの彼に軍隊の水は肌に合わず、木星戦役が始まる少し前に一身上の理由で退役した。幸か不幸か予備役招集がかからなかった彼はあちこちの民間企業に入ったものの、身についてしまった軍人特有のステレオタイプな物の考え方が災いしたのか、どこへいっても長続きはしなかった。水や空気にすら高い税金のかかるコロニーにあっては無職という身はかなりきついものがあり、彼はあっという間に追い詰められてしまった。そんな彼が行きついた先は海賊稼業だった。

幸いな事に木星戦役の影響で人にも資材にも事欠く事はなかった。本来は連邦軍に届け出るべきジャンク屋に回収された破損軍用モビルスーツを隠匿して修復し、数名の彼と似たような境遇のものや敗残兵達と徒党を組んで民間船を襲った。海賊としての才能があったのだろうか？　彼らの初仕事は人死にも出さずにあっけなく片付いた。

基本的に現行犯となりにくい宙域における海賊行為というものは重罪である。ただ、相手が武装していなければその成功率はかなりのものだ。いかに宇宙が無限に広いとはいえ、推進剤の量が限られる以上、コロニー間や月を往還する輸送船やシャトル便の航路はある程度限定されてしまう。精度の高い情報を基に獲物を物色し、軍用ＭＳで襲ってしまえば民間船などひとたまりもない。

強奪した物品は裏市場でさばいて、それなりの人間に渡すべきものを渡してしまえば追及の手は及ばなくなってしまう。５年が経過した今でも木星戦役の戦後処理に追われる連邦軍に、海賊退治の余裕はなく、本来それを取り締まるべきコロニー政庁は内部の腐敗と外交的な管轄の問題に追われ腰が重かった。

ただ残念なことに、この稼業の身入りは少なかった。保身のための散財と機体や艦船の維持費、協力者や仲間への分け前を考慮するととても楽な商売とは言えなかった。海賊行為の最低刑が２０年の懲役であることを考慮すれば、このハイリスクな行為は割りに合わぬといってもいいだろう。

ほどほどの獲物相手に人死にを出さず、ほどほどの仕事をする――当初捜査機関に目をつけられなかったのはドッジ達の奇妙な不文律ゆえであった。持ち前の度胸と連邦軍時代に培った専門的技能で海賊団の主導権を握ったドッジは、こうして海賊業にいそしむこととなった。

そんな彼らの事情が変わったのはアジトの問題が生じ始めたころだった。さすがに度々の海賊行為を行えば腰の重いコロニー政庁も動かざるを得ず、彼らに捜査の手を伸ばし始めた。アジトを追われた海賊団は、近くの廃棄資源衛星に根城を移すことになった。宇宙という環境において無駄な物など存在しない。資源採掘の役割を終えたとしても、その活用方法は多岐にわたる。数基のコロニー

がその領有を主張し、争いの火種になりかねなかったその衛星に逃げこんだ彼らは、皮肉な事に暫しの安住の地を手に入れることとなってしまった。いずれかのコロニーが彼らの討伐を理由に部隊を動かせば、それだけで他のコロニーとの争いになってしまいかねない。また、連邦政府に陳情をすれば、衛星の領有権を奪われ、丸ごと管轄下に置かれてしまうだろう。そんな複雑な政治事情がドッジ達を保護したのだった。

やがて資源衛星にアジトを構えたドッジ達に様々な方面から奇妙な依頼がなされるようになった。

――ライバル企業の船を襲ってほしい
――コロニーの設備を破壊してほしい

表では市民達に対して彼らの存在を激しく揶揄する一方で、裏ではドッジ達を取引しようとする者たちが次々に現れた。各コロニー政庁や一部の大企業が報酬と引き換えに様々な依頼をするようになった。挙句の果てには資金繰りに困った民間中小企業が、

――わが社の船を襲ってほしい

などと、保険金目当てに依頼する始末である。海賊であるドッジが宙域のモラルの崩壊に呆れ返った事すらあった。もっとも仕事は仕事、稼げるうちが華である。人生を静かに送って暮らせるだけの額を稼いでひそかに身を隠そう――そんな小市民的な計算を胸にドッジは海賊たちを率いたのだった。

やがて、ドッジ達の元には人が集まるようになった。誰も彼もが社会のシステムからはじき出された者たちばかりであったが、才あるものも多く、海賊団は彼らを受け入れその規模を少しずつ拡大し

始めた。
　間違いの始まりを問われればおそらくこのあたりからであろう。拡大した組織を養うためにさらに依頼内容が大きくなり、ますます海賊団はその規模を膨らませることとなった。だが所詮は烏合の衆、ゴロツキの集まりである。組織の内紛に発展するのにさほどの時間はかからなかった。ここしばらくは配下の諍いに頭を悩ませる日々に追われていた。ましてやドッジ達は政庁高官や大企業の様々な不正の証拠を握っている。お役御免で消されるのは時間の問題といえよう。適当に稼いで身を隠そうなどという当初の目論見はあっけなく崩れ去り、彼の存在はあまりにも組織に縛られすぎていた。
「失敗だったかな……」
　再び彼はぽつりとつぶやいた。

　彼の後悔が遅すぎた事に気づくのはそれからしばらくしての事だった――。

（２０１０／０３／１３　Ａｒｃａｄｉａにて初稿）
（２０１１／０１／３０　本サイトにて初稿）

03

ミノフスキー物理学全盛の時代に生まれた建艦思想の申し子とも言うべき戦闘ブリッジの中には緊張した空気が満ち始めていた。先発予定のパープルチームの出撃と同時に艦内の様々な部署からの報告が次々に上がり始め、それらのデータがブリッジ内で一元化され、艦長席の正面で立体表示される作戦概要図、及び航宙図へと次々に表示されていく。

「部下の様子はどうかね？　コーナー少佐」

「問題ありません。一部緊張している者もいるようですが、想定の範囲内であります」

《エナド》艦長ウォルフ・レイノルズ中佐の問いかけにブリッジ内で先発したパープルチームのデータの確認を行っていたコーナーは姿勢を正して返答する。楽にしてくれて構わんよというレイノルズの言葉に、コーナーは僅かに表情を緩める。指揮官があまりに緊張していると部下も委縮してしまうだろう、というレイノルズなりの気遣いなのだろう。

戦闘ブリッジへと移行した《エナド》にはすでに艦内のすべての乗員にノーマルスーツの着用が義務付けられている。今時作戦において、《エナド》自体は直接戦闘空域に突入する予定はなかったが、乗組員たちに実戦時の緊張感に慣れさせておこうというレイノルズの判断故であった。

クロスボーンの反乱、木星戦役をくぐりぬけてきた経験がそうさせているのか、あるいは、壮年期を過ぎ、年齢を重ねた者のみが身につけることのできる忍耐力のせいか、又はその両方か……、ともかく豊富な経験を持つレイノルズ中佐のおちついた指揮ぶりに《エ

ナド》ブリッジメンバーは平時と変わらずに己の仕事に全力を傾けていた。
「いやあ～、すんません。遅れちゃいました」
突然、間の抜けた声と共に一人の男が戦闘ブリッジ内に入ってくる。３０代半ばのどこかのっぺりとして、他者を小馬鹿にしたような空気をふりまく男の登場に、実戦を控え、ある種いい意味での緊張に満ちていたブリッジ内のそこかしこから、冷たい空気が男に向かって流れていく。
「軍属ですらないとはいえ、既定の行動指針ぐらいは守って頂けませんかね、ミスター・ブライアン」
しかし、コーナーの皮肉など意に介さないかのようにブライアンと呼ばれた男は言葉を続ける。
「すみませんねえ。どうもノーマルスーツって着心地悪くって……。おまけに着用方法を、誰も教えてくれないんで……。私って嫌われてるんでしょうか？」
ガーディ・ブライアン――サナリィから送られてきた技術顧問である彼は《Ｆ９１》のバイオ・コンピュータのメンテナンスを専門にしており、その技術は一級品だった。尤もその腕に反比例するかの様に問題ある性格とその言動は《エナド》内において何かとトラブルの種となっており、彼に好意的な態度をとるような変わり者は《エナド》内には皆無といってよかった。
「ところで、モルモットちゃん達の御機嫌はいかがですか？」
コーナーの席の端末を覗き込みながらのブライアンの暴言にコーナーは眉をしかめた。
「これから戦場へと赴く者に向かって、少し言葉が過ぎるのではないですかな、ミスター」
「いやあ、すいません。お気を悪くしてしまいましたかねえ、別に他意はないんですよ……今のところ……」
睨みつけるコーナーの視線をニコニコと笑いながらブライアンはやり過ごし、ブリッジ内の自身にあてがわれた席へと流れていく。

どうも、どうも、と周囲に愛想を振りまきながら、自身の席に着座するとブライアンは己の端末を覗き込み、滑らかな手つきでキーを叩き、次々にデータを呼び出していく。

「さーて、しっかり走りまわって、いいデータを提供して下さいね、みなさん」

ブライアンの小さなつぶやきはブリッジ内の喧噪に包まれ、あっという間にかき消されていく。端末の光の中でブライアンの微笑みが不気味に浮かび上がっていた事に気付くものは誰一人としていなかった。

「Ｂ０７（ブルー）、発進どうぞ」

「了解」

澄んだ声で発進許可を伝えるミリーの声に応答する。モニターに映る彼女は先ほどとは打って変わっていつも通りの様子だった。ふとシャーリーの言葉を思い出し、ひそかに彼女の首筋に目をやるがノーマルスーツにしっかりとガードされ、真偽のほどを確かめることなど出来なかった。

（何考えてんだか……）

実戦前に思った以上に余裕のある自分の思考に呆れながらも、カークは発艦シークエンスに入る。はたから見れば複雑に見える行程もカタパルトのセットから発進までそのほとんどがオートでなされるため、パイロットによる直接の操作は少ない。装備の最終確認を終えるとカークは深い虚空へと意識を切り替える。視線の先で先発した機体のスラスターが僅かに煌き、再び闇に呑まれた。

「Ｂ０７　レイナード機、出るぞ！」

射出と同時に全身がシートに押しつけられる。機体が闇の中に放

り出された途端にカークの思考はＭＳパイロットのそれへと完全に切り変わった。ペダルを軽く踏みこみ、スラスターを吹かせると先行する輸送艦に向け一気に突進する。追い越す直前でＡＭＢＡＣ機動とスラスターを使って減速し、輸送艦との相対速度を合わせる。大きなＧが全身を圧迫する中でその作業には全くの無駄がない。輸送船の壁面ぎりぎりで操作がオートに変わり、機体が舷側にとりつくとカークは一息ついた。

「さすがだな」

先行していたサカキ大尉が接触回線を開く。生真面目な彼の事だから同時にカークの心理的なチェックも行っているのだろう。

「こっちは問題なしです」

二重の意味で応答する。

「Ｂ０１、着艦しました」

回線に後続のシャーリーが割り込んでくる。中指を立てて迎えるカークに舌を出してシャーリーが応えた。

そんな二人に苦笑しながら、サカキはデータをリンクさせ、作戦手順を確認する。その間にも次々にレッドチームが着艦し、発進の準備が滞りなく進んでいく。

「お客さん方、準備はいいかい？」

「機内サービスが悪いんじゃないの？」

輸送艦のパイロット達の問いかけにあわせて誰かが砕けた調子で返答する。

（緊張感のない奴らだな……）

輸送艦のカメラに映像をリンクさせながら、カークは思わずそんな事を考えていた。

「それでは皆さま方、目的地までの暫しの行程をゆるりとお楽しみください」

どこか気取ったアナウンスが途切れると同時に、輸送船の質の悪いエンジンから生まれる独特の振動が機体を揺らし、直後に再びカークの体はシートに押しつけられる。心地よい荷重を全身に感じな

がら、偽装された輸送船のカメラの映像にぼんやりと目をやったカークはその先にあるだろういびつな資源衛星の姿を思い浮かべていた。

メガ粒子砲の発射と共に起きる振動が格納庫で出撃準備を整えた愛機を激しく揺さぶった。

「始まったな」

使い込まれた愛機ＲＧＭ－１２２《ジャベリン》のコックピット内でクラップ級巡洋艦《ブッシュ》ＭＳ隊ランサーズ小隊長レスリー・スナイプス中尉は小さくつぶやいた。

ラー・カイラム級戦艦《マーセナス》と２隻のクラップ級巡洋艦、《ブッシュ》《オバマ》からなる第２０８特殊任務戦隊――通称２０８特戦隊は、戦闘開始の合図と共に次々に艦砲射撃を行った。コンピューター制御された各砲台からは数秒置きに順番に発射され、続いて対要塞用ミサイルが打ち出される。数分にわたって続いた第１陣の砲撃が終了するとスナイプス達の出番だった。

強烈なＧに全身の筋力で耐えながら、一気に虚空へと飛び出した彼は編隊の要となるべく、宙域にとどまった。同僚や部下達が次々に彼を基点に集結する。

数による撹乱と揚陸部隊の護衛――おそらく直接戦闘に関わることのないだろう任務としては割と楽な内容と言えなくもない。最も揚陸時において予想される混乱時には何が起きるか分からない。生の感情がぶつかり合う戦場において、気を抜いて当たるほど、緩んでいるわけではないが、戦場の主役として華々しく活躍する事の出来ない今回の作戦において、若干の欲求不満を感じているのは、おそらく彼のパイロットの本能ゆえであろう。もっとも部隊を率いる

上官として部下を失う確率はぐんと下がるわけなのだから、その点においては作戦士官に感謝せねばならないだろう。

「隊長！」

自機の左右に就いた部下達から次々に確認のコールが入る。今回の作戦においてかなりの不満がたまっているのは彼らも同じだった。尤も彼らの不満はここ二カ月間《エナド》ＭＳ部隊のアグレッサー（噛ませ犬）としてさんざんに追い回されていた事によるもののほうが大きいのだろうが……。

ＲＧＭ－１２２《ジャベリン》――十年以上前に制式採用されたこの機体はすでに様々な改良を加えられ、その機体性能は円熟の域に達していた。この機体を使いこなせば一人前――それが多くの連邦軍パイロット達の誇りであり目標であった。スナイプスも例外ではない。しかし、残念な事に彼の誇りはこの２カ月で脆くも崩れ去っていた。

２０８特戦隊に所属するもう一隻の艦であるラー・カイラム改級戦艦《エナド》に配備された《Ｆ９１》――様々な事情で定期的にごく少数が試験量産されるこの機体は、圧倒的な性能を有していた。『ＭＳの性能差が戦力の決定的差ではない』などという名言はすでに過去の遺物となり始めている。自身よりも腕の劣る者が搭乗した高性能の機体で追い回される――屈辱以外の何物でもなかった。過酷な宇宙空間に適応するために進化し続けた驚異的なテクノロジーは、つらい訓練で身に付けた身体能力や精神力、判断能力や戦闘スキルといった人的レベルの能力差を確実に補完し、時に無意味にすることすらあった。

もっともスナイプス自身は《Ｆ９１》を運用する《エナド》モビルスーツ隊について、少々胡散臭さを感じている。軍上層部に何らかの意図があって編成されたであろうこの変則的な部隊に付き合っていれば、厄介事の類いが降りかかってくるのは明白だった。巻き込まれないうちに手を切りたいが、残念ながらそのような自由が許

される身分ではない。畢竟、現状の彼は自身と仲間達に災いが降りかかってこない事を祈る事が精一杯だった。今回の作戦は事実上、彼らの初お披露目である。

「まあ、死なない程度にしっかりやるんだな」

もらった特別手当分くらいの苦労はあっても罰はあたらないだろう、と彼は自身を納得させながら、爆光に浮かび上がる歪な資源衛星に意識を集中したのだった。

目的ポイントに高速移動中の輸送艦でＭＳ同士の通信が活発になった。原因は作戦実行における誤差が生じた事だった。

「９０秒ですか」

「ああ、そうだ、正確には８８秒だがな」

ダミー隕石と輸送船の到着ポイント到達予定時刻におよそ９０秒ほどのずれが生じていた。平時には気にも留める事はないであろう９０秒という時間は、一瞬で命が消えてしまう実戦の中ではあまりに長い。

「気が緩みすぎなんじゃないの？」

発進前のどこか間の抜けたやり取りを思い出したレッドチーム・リーダーのエナ大尉が、輸送艦のパイロット達を揶揄する。

「馬鹿野郎、俺達の仕事は完ぺきだ。向こうが早えんだよ」

パイロットの一人がプライドを傷付けられたのか、エナの揶揄に抗議の声をあげる。

「参ったな」

すでに艦隊砲撃は始まり作戦は進行中である。カーク達を乗せた輸送艦が到着するまでのおよそ９０秒を先行したパープルチームの３機だけでしのぐことになる。

「悪いが変更はできねえぞ。推進剤に余裕はねえんだからな」
質量があり、旋回性の乏しい輸送艦の宇宙空間内での加減速は簡単な事ではない。
「ああ、了解している。定刻通りで頼む。大至急……な！」
サカキの言葉から彼の想いをくみ取ったのだろうか。パイロット達がその表情を引き締める。
（頼んだぜ……）
暗く狭いコックピットの中で逸る己の心を押さえつけるようにカークは目を閉じたのだった。

偽装したベースジャバーにとりついた先行する3機の《Ｆ９１》のコックピットの中で、テッド・ジャクソンが作戦誤差について気付いたのは到着数分前だった。いつも陽気な彼もさすがにその事に気付いた時には戸惑いを覚えた。
「問題ない」
ジュベールの応答は平時同様冷静なものだった。おそらくは上官である自分よりも実戦経験の多いであろう彼の落ち着きに安堵と同時に一抹の不安がよぎった。そんなジャクソンにバックアップ担当のバッジョが気楽に返答する。
「任せてください、９０秒くらい余裕で支えて見せますよ」
混乱時のポジティブな思考というのは実にありがたい。例えそれが無知からくるものであったとしても、前向きな姿勢というものが、いい結果を呼び込むことが多いのはどの世界でも同じであろう。
「いいな、やつらが来るまでの間は無理なツッコミはなしだ」
「了解」「……」
部下達に守備的なフォーメーションを指示しながらも刻々と変化

していくであろう状況展開に対して数通りのシミュレーションを思い描いていた。そんな彼の命令にジュベールが返答をよこさなかった事にジャクソンは気がつかなかった。

「いよいよだ、準備はいいか」

ジャクソンはベース・ジャバーの離艦タイミングのカウントダウンを開始する。

「3、2、1、……ゼロ！」

小さな爆発と共にダミーが排除されると同時に、パープルチームの3機の《Ｆ９１》がスラスターを煌かせて漆黒の闇の中へと踊りだす。前方から急激にかかるＧに耐えながら、ジャクソンは部隊の状況を確認しようとして、息を呑んだ。

「ジュベールの奴……」

はるか衛星の方角にはおそらく第1陣であろうおよそ１０機の敵機のスラスターが煌いている。ジュベールの機体はその輝きに向かって猛然と加速をかけて突進した。

今更停止命令など遅かった。おそらくジュベールがそれを受け付ける事はないだろう。

「已むを得んか」

即座にバッジョにフォーメーションの変更を指示するとジュベール機のバックアップの為に再度加速する。

（ジュベールのネクラ野郎、後で覚えてろよ）

命令無視の彼の行為にジャクソンは憤慨する。もっとも彼にペナルティーを食わせるのはこの状況を無事に生き残る事が出来ればの話だったが……。９対４０どころか3対４０になりかねないこの状況でＭＳパイロットの本能がジャクソンの心を熱く揺さぶった。

モニターに表示される敵機の機動を確認しながらジュベールは小さくつぶやいていた。

「温いんだよ、どいつもこいつも……」

予想以上に機体稼働率は低いのだろう。衛星内から飛び出してきた敵機の機動はあまりにも緩慢だった。大した連携も取れず各機が思い思いに動いている――そんな様子だった。先発の１０機のはるか後方で増援が発進しているようだった。合流されれば厄介な事になる――そう感じた彼は後方に位置する２機の寮機の様子を確認する。僅かに遅れてはいるものの思った以上にその対応は早く、自機のバックアップ体制に入ろうとしていた。

「先に頂く！」

右のマニュピレーターにライフルを左にヴェスバーを選択し、右のヴェスバーを自動追尾設定にする。気の早い敵機の初撃をものともせずに突進し、ロックオンと同時にトリガーを押す。

「堕ちろ！」

左右の兵装が火を吹くと同時に、ジュベールの冷たい言葉通りに２機の敵機が火球と化した。エネルギー回復の早いライフルでさらに一撃――再び火球が一つ生まれる。寮機の爆散に臆する事もなく突進する残りの機体とすれ違いざまに再び《Ｆ９１》の兵装が火を噴き、３方へと火線が延びる。即座にＡＭＢＡＣ機動を利用して方向を転換し、スラスターを軽く吹かせて調整すると、即座に敵機の後方をとる。

コックピット内で全身の血流が背中側に集まっていくような減速Ｇに耐えると、態勢を立て直して再び機体を加速させ、押し寄せる骨董品の群れよりもはるかに優れた運動性を武器に、さらに混乱する敵機を追いこんでいった。

「凄え、凄えよ」

モニターにかろうじて捕えられるジュベールの動きにバックアップに入ろうとしていたバッジョは自身の役割も忘れて驚愕していた。先発の１０機は直進性と加速性に優れるものの旋回性の乏しい旧木星軍の鹵獲機体だった。ジュベール機の放つ火線に次々に吸い寄せられ、爆散していく。獅子奮迅という言葉にふさわしいその動きは

いつもの模擬戦などとは全く異なるものだった。
「た、大尉……」
ジュベール機の動きに唖然としていたのはチームリーダーのジャクソンも同様らしい。バッジョの呼びかけに己の役割を思い出した彼は次々に砲撃を始める。
ジャクソン機のヴェスバーとバッジョ機のロングレンジランチャーの砲撃で再び漆黒の宇宙に光の華が咲く。
パープルチームの活躍で先発の１０機の敵機は瞬く間に宇宙の塵と化していた。すべての獲物をしとめた３機の狩人はさらなる獲物を求めて、爆発の光の中に妖しく浮かび上がる廃棄衛星へと突撃を再開した。

「やりやがったな、あの野郎」
輸送船の超望遠カメラからの映像と表示される戦況分析データを見ながらカークは歯軋りしていた。
９０秒のズレ、こちらは小規模の部隊、――独断専行など以ての外だった。合流を待って火力と運動性で圧倒する。それがセオリーだった。ブルー、及びレッドの両チームはそのつもりでスタンバイしていた。
そんな彼らを嘲笑うかのようにジュベールは突撃し、やりたい放題に戦域を暴れまわっていた。ビーム兵器と爆発が生み出す光の中でジュベールの機体が鋭い弧を描いて踊るたびに確実に敵機の数が減っていく。
「待て、カーク」
ジュベールの動きに引き寄せられるかのように輸送船から離脱しようと機体を起動させたカークをサカキが制止した。

「焦るな、まだだ」
輸送船の離脱ポイントは航法士によって正確に計算された戦域到達までの最短のルートだった。現時点で輸送船を離脱すれば彼の機体が戦域に到達するころにはおそらくすべてが決しているだろう。頭の中では分かっていても逸る心を押さえつける事など難しい。
「分かってますよ」
戦域から目をそらすように天井を見上げる。全天周型モニターには何事もないかのように悠然と佇むコロニー群が映し出されていた。
着々と撃墜数を重ねていくジュベール。物足りない敵を相手にまだ8割程度しかその実力を示さずに、戦場を楽しんでいるということは、同じフロントアタックだからこそわかる事だった。
「少しは根性見せてみろよ、海賊共」
不甲斐ない獲物達に筋違いな要求をぶつけながら、カークはいらただしげにコンソールを蹴飛ばした。

（２０１０／０３／２０　Ａｒｃａｄｉａにて初稿）
（２０１１／０２／０２　本サイトにて初稿）

04

艦隊から一斉に放たれるメガ粒子砲の光が衛星《アステル》の表面を削り砕けた岩塊がデブリと化して宙空に舞う。高速でとび散っていくそれらにぶつかればＭＳとてただでは済まない。そして、艦隊砲撃が衛星内に与える衝撃はあまりにもすさまじかった。割れんばかりの轟音と激しい振動は衛星の内側に潜む海賊たちの心を震わせた。

突如、周辺宙域に現れた３隻の艦からなる戦隊は一方的に、降伏勧告を行い、こちらの返答も待たずに次なる行動を開始した。

「ひー」

磁力靴のパワーを最大にし、固定された機材に捕まるドッジの横でエシェッソンが頭を抱えて座席の下に潜り込んでいた。司令室は衛星の深部に存在するものの、衛星それ自体の大きさはさほどではない。この場所ですらこれほどの衝撃があるのだから表面により近い場所ではどうなっているのか。先ほどからひっきりなしに鳴り響くコールは、次々に発生する負傷者と火災の状況を怒涛のごとく伝えている。

超望遠カメラに捉えられた艦隊はその位置を変えることもなく悠然と佇み、定期的に激しい砲撃を繰り返す。その周囲をＭＳ隊のスラスターの光が退屈そうに飛びまわり、支配する側の圧倒的な余裕を見せつける。

対して、こちらは烏合の衆。自分達より弱いものを相手に略奪ばかりを行っていたのだから防衛戦の経験など皆無だった。周辺索敵を行う前にミノフスキー粒子をばらまくような失態をはじめとして、これでもかとばかりに素人丸出しの失態を次々に行う。艦隊が艦砲射撃を行う前からすでに衛星内は大混乱だった。

「ＭＳ隊はなにをやってるんだ」
いつも勢いと威勢が良いだけのパイロット達の顔を想い浮かべながらドッジは無線に怒鳴りつけた。十分ではないがそれなりに費用を食うＭＳ隊にはここぞとばかりに働いてもらわねばならない。しかし、無線からの返答はあまりにも無残な結果だった。
『先発隊全滅』
『第２陣半数撃破。……さらに１機大破！』
「どういうことだ？　出撃したばかりだろうが！」
艦隊周辺に展開するＭＳ群に動きはない。あまりにも不可解な事態にドッジは激昂した。彼の詰問に十分な解答が得られたのは暫く立ってのことだった。どうやら後方から別働隊が接近してきたらしい。しかもその実力はけた違いであるようだ。その事実にドッジは青ざめた。
「ＭＳ隊、出撃を拒否してやがる！」
「何だと！」
出撃した途端に瞬殺されてしまう。その恐怖はすでにパイロット達の間に伝染しているのだろう。
「ＭＳ隊、籠城戦に作戦変更を要求」
「馬鹿野郎、籠城したってどこからも増援なんか来ないんだ。もらった金の分だけは働け！」
ドッジの言葉にＭＳ隊からの通信は途切れた。おそらく、もはやドッジの命令など聴きはしない。所詮は烏合の衆。落城が時間の問題である事は疑う余地もなかった。そうなればもはや彼のとる手段はただ一つだけだった。
「どこ行くんだ、大将？」
「便所だ！」
退室しようとするドッジにかけられた部下の咎めるような声に、ドッジは怒鳴りつけて返答する。彼が司令室から姿を消すと同時に室内の誰もが顔を見合わせると……、一斉に立ち上がった。それから司令室がもぬけの殻となるのに一分とかからなかった。無人の司

令室内には無線からの怒号と悲鳴が耳障りなハーモニーを空しく奏でていた。

司令室から退出したドッジは自室に飛び込むと即座に逃亡の準備を始めた。口座に振り込んである現金などはすぐに当局に抑えられるだろうから、諦めるしかない。貴金属、債権、曰くつきの書類、長年の海賊行為で得た物の内、換金性の高いものを手当たり次第に物色しては荷物に詰め込む。もしもの時のための準備を常日頃から怠らなかったせいか、支度を整えるのにかかったのは僅か数分だった。後はひそかに準備していた専用の脱出艇に乗り込んで一か八かの逃亡を図るだけだった。烏合の衆である海賊たちは互いの事など信用していない。いざという時の手段など誰もが考えているだろうから、今頃脱出ポッドの配置区画は大混乱だろう。それにまぎれて虚空に飛び出せば運が良ければ周辺のコロニーに漂着出来るはずだ。後は身を隠してほとぼりが冷めるのを待って……。トランクの中には逃亡資金を引き出すための様々な書類がある。何とかなるさ、と自身を鼓舞すると、入口に目をやり、はっとしてその場に立ち尽くした。

いつの間に侵入したのだろうか。彼の部屋の入口にはエシェッソンが立っていた。

「何をやってる？」

思わず怒鳴りつけようとしてエシェッソンの右手にあるものに気付いた彼の顔が青ざめる。

ドッジの様子を気にする風もなくエシェッソンは自然な仕草で右手のものをドッジに向けた。いつもの少し怯えた感じの様子はすっかり消え去り、そこに立っていたエシェッソンは別人といってよかった。

「まあ……、そういうことです」

穏やかに微笑みながらもエシェッソンの視線は冷たい。
「お前、スパイだったのか」
ドッジの問いにエシェッソンはあいまいな返答をよこした。
「ふつうはトップを生かして金庫番を、というのがセオリーなんですが……。あんたは一人で何でもやりすぎなんですよ。個人的には嫌いじゃないんですけどね。まあ、これも仕事なんで……勘弁してくださいや」
言葉が終ると同時にサイレンサーが装着された無反動銃の発射音が数発、短く室内に鳴り響いた。撃たれたドッジの体は低重力の室内をゆっくりと舞い、質の悪い家具にぶつかって倒れた。そして、外からの砲撃の振動でバランスを崩した本棚が、ゆっくりと着地する彼の体の上に覆いかぶさるように圧し掛かっていった。ドッジの身体が動かなくなったのを確認したエシェッソンは、静かに十字を切る。
「毒をもって毒を制すなんて昔から言いますけどね……、あまりいいもんじゃないですよ、実際……」
ぽつりとつぶやいたエシェッソンだったが、即座に次の仕事に移る。ぐずぐずしてはいられなかった。制圧部隊の侵入までに速やかに作業を終えねばならない。作業に取り掛かったエシェッソンの顔にはすでに仲間の死を悼む色はなく、冷酷な別人の顔へと戻っていた。

予定通りに離脱ポイントに到達したカーク達後続部隊は、衛星に急いだものの、戦局の流れはパープル小隊の奇襲によってほぼ決定的だった。敵部隊の第2陣に対して、合流した9機の部隊は瞬く間にこれを殲滅し、その勢いで衛星近くにまで迫った。

拡散モードにセットされた3基のロングレンジビームランチャーが衛星表面に向けて火を吹くと、それを皮切りに各チームのフロントアタックが衛星にとりつき、周囲の自働砲台の排除を始める。衛星表側ではすでに本隊からの艦砲射撃は止み、ＭＳ隊による牽制が始まっている。

射角の取れない砲台を潰す事など造作もない。厄介なのは表面を浮遊するデブリの方であろう。

ビームシールドやサーベルでデブリを弾き飛ばしながら、カーク機とジュベール機が、そして若干遅れ気味のセレナ機が次々に砲台を潰していく。港湾部ではバックアップの3機が交互に衛星裏面の港湾部にランチャーを打ち込み、要塞にプレッシャーを与え続ける。すでにさんざんに蹴散らされた第3陣が撤退した海賊達のＭＳ隊は戦意を喪失したようでまともな反撃はない。着々と侵攻していく戦況をひっきりなしに伝えるコンソールで確認しながら、各チームのリーダー達は戦闘の終息が近い事を予想していた。

ミノフスキー粒子で溺れそうな衛星表面すれすれから僅かに飛び出しては、自機を囮に砲台の設置場所を確認し、発射後の僅かなタイムラグを利用して次々に殲滅していく。その作業はあまりに機械的で面白みに欠ける。

「遅いんだよ！」

あまりにも歯ごたえのない砲台に毒づきながらカークは黙々と単純作業を行っていた。

コンソールに次々に表示される膨大な情報の中から必要なものを瞬時に選択し、攻撃と回避行動を繰り返す。消化不良気味のＭＳ戦に対して弱冠八つ当たり気味で砲台を潰していったのだが、衛星表面部を制圧するのにさほどの時間は必要としなかった。本隊側の空域からはＭＳ隊のスラスターが次々に煌き、表側港湾部の制圧にとりかかるようだった。

時折、資源排出口から隙を見て小型脱出艇が発進しているようだが、宙域に漂うデブリに衝突し、爆散するか、すぐに本隊のＭＳ隊

に拘束されているようである。作戦の成功は時間の問題だろう。後はいかに滞りなく速やかに衛星内部を制圧するか――ここから先は本隊の揚陸部隊の手際次第だった。

そんな矢先に異変を感じたのは、降伏を示す発光信号が衛星の各所から派手に打ち上げられ、戦闘の一応の終結を確認した時だった。

（何だ？）

何処かから見られている――そんな感覚がカークを襲った。

（敵か？）

さすがに周囲の警戒は緩めていない。敵が降伏したといっても、すべての人間がその意思を持っているとは限らない。各センサーを使って周辺の索敵を行うが敵の反応はない。サカキとシャーリーが合流しようとこちらに近づいているのが確認できただけだった。

（気のせいか？）

僅かに感じる視線――敵意を持っているわけではなく、ただ冷静にこちらを観察しているようなそれは、戦域のはるか向こう側――宇宙の深い闇の中からうっすらと感じられるような気がする。

「カーク、どうした？」

「誰かに見られているような気が……」

自らの問いかけに珍しくあやふやな答えが返ってきたため、不審に思ったサカキは自機のセンサーで周辺を再び索敵する。

「とりたてて異常はないようだがな……」

「疲れてるんじゃないの？」

通信索敵機能がより強化された機体に搭乗するサカキの返答にシャーリーが追い打ちをかける。

圧倒的な勝利だったとはいえ、それなりの緊張を強いられたせいかシャーリーの顔には僅かに疲労の色が感じられる。久しぶりの実戦で自分でも気づかぬうちに興奮しているのだろうか。カークは再び意識を虚空に向けてみるものの、もはや視線は感じられなかった。

（気のせい……だったみたいだな）

そう言うには、先程の感覚はいささかハッキリとしすぎていた。

だが、カーク自身の本能がそれを危険と感じとっていない以上、放置しておくべきなのだろう。

先程まで熱く滾っていた戦場を、沈黙と闇が再び覆い始めている。

「帰投するぞ」

宙域に近づく《エナド》からのサインを確認したサカキが二人の部下を促した。サカキの命令に二人が『了解』の意思を示すと、ブルーチームの3機の《Ｆ９１》がふわりと衛星表面から離れスラスターを輝かせながら一気に上昇する。

周辺にデブリや様々な残骸を撒き散らしながら頼りなげに浮かんでいる歪な形の資源衛星が、ぐんぐん小さくなっていく。戦闘のほてりがおさまらない身体を加速Ｇで押さえつけながら、カーク達は母艦への帰路を急いだ。僅か数時間程度しか離れていなかったにも関わらず、接近する《エナド》の航宙灯の輝きに、カークはどこかしら、心が緩んでいくのを感じていた。

遅れて空域に到着した《エナド》のＭＳデッキは整備兵たちの歓声に包まれていた。制圧部隊を護衛しながら上陸した本隊に事後処理を任せると、カーク達ＭＳ隊は堂々と帰還した。

初の実戦において、多少煤けてはいるものの、大きな損害はなく全機が無事に帰投した。整備兵たちにとって己の担当する機体が無事に帰投した時の喜びは大きい。全機がハンガーに固定されるや否や、さっそく担当機体にとりつき、無事に帰還したパイロット達を手荒く歓迎した。中でも大戦果をあげた《０４》号機―ジュベール機の周囲の盛り上がりは異様なものがあり、コックピットから遅れて出てきたジュベールのいつもと変わらぬ冷静な態度とはあまりに対照的だった。

キャットウォークでは戦闘の余韻が各所にみられる愛機を整備兵

たちに預けて集まってきたパイロット達が、ハイタッチを交わしながら互いの無事と健闘を讃えあっていた。その集団に最後に遅れてジュベールが近付いた。互いを讃えあっていたパイロットたちの輪が一瞬沈黙した。命令違反と圧倒的な大戦果――相反する二つの結果に誰もが戸惑っていた。

そんな彼らの心情を気にする風でもなくジュベールは彼らに近づき、輪の中心近くにいたカークの眼前で留まった。

「あんまりのんびりしてたんで、先に頂いたぜ」

撃墜数13――部隊の撃墜数のおよそ半分を一人で叩き出したその戦果に誰もが沈黙する。

「お前らのフライングだろうが……。それより随分と容赦なく獲物を殺りまくってたじゃないか。良心ってのは傷まないのか？」

「何だ？　お前はいちいち、自分を殺りに来る相手に同情しながら戦ってんのか。博愛主義のMS乗りなんてガキの冗談かと思っていたが、本当にいたとは驚きだ」

両者の視線がぶつかり合い火花を散らす。二人の対立に周囲の者が皆息をひそめた。

「あんた、何考えてんだ。同じ部隊の人間の活躍で大勝利だったのに、つまんねえイチャモンつけてんじゃねえよ。妬んでんのか？」

パープルチームのバッジョ少尉が崇拝する上官をかばってカークに食ってかかる。

「何だと！」

「二人ともよせ！」

ジャクソンとサカキが二人を押しとどめる。

「何を言ってもあんたの負けよ」

シャーリーが冷ややかに言い放つ。

「――んな事は分かってんだよ！」

例え命令無視であろうとも、圧倒的な戦果を見せつけられてしまえば同じフロントアタックとしては黙るしかない。そんなカークの姿に僅かに冷ややかな笑みを浮かべるとジュベールはエレベーター

に向かって流れていく。カークを睨みつけながらバッジョがそれに続く。

「くそったれが！」

手にしたヘルメットを壁に向かって投げつける。壁にぶつかってあらぬ方向へと跳ねかえったヘルメットを機材搬入中の整備兵が慌ててよけた。

「カーク、ご苦労だった。貴様も十分に仕事をしたんだ。ゆっくり休め」

サカキがカークの肩に軽く手を置き彼をねぎらった。

「あいつには俺から言っとくから、今日のところは勘弁してやってくれ」

おどけた調子でジャクソンが相槌を打つ。二人のリーダーの機転で凍りついた周囲の空気がゆっくりと緩み始める。

やがてパイロット達の輪が少しずつ解けはじめ、各自がそれぞれの思う場所へと散って行った。誰かが止めてくれたのだろうか？

ふらふらと宙に浮遊するヘルメットを無造作に引っ掴むとカークは無言でその場を離れ、皆とは別の出口へと向かう。怒りの収まる様子のないカークの背中をシャーリーとサカキは肩をすくめて見送ったのだった。

虚空に悠然とたゆたう巨大建造物――その大きさを誇る航宙戦艦が足元にも及ばぬほどに巨大な人工の建造物が全天周モニターの前面に迫ってくる。かなりの速度で回転しているその建造物――スペースコロニーと呼ばれる人類の第二の故郷は、真空の宇宙空間の中で自ら輝き、異彩を放っている。しかもそれは一基だけではない。数百基ものコロニーがラグランジュポイントと呼ばれる地点に集ま

り、サイドと呼ばれる集団を形成していた。
　これらすべてが人の手によって生み出されたというのだから、人間の英知というものの偉大さに畏れ入るのは自分だけではないはずだ――そんな事を考えながらもゴルド・ガーラントは眼前のコロニーの陰の部分にその身を潜めている母艦への道のりをたどっていた。

　つい先程まで彼は自身の愛機となった《Ｆ９７》と共に閃光の飛び交う廃棄資源衛星に単独で可能な限り近づき、おそらく未来において自身の敵となるであろう部隊の華々しい活躍を目の当たりにしていた。ミノフスキー物理学の影響で驚異的な発展を遂げた光学センサーや熱感知システムの監視の目をくぐる事は容易ではない。しかし、それでもゴルドにそのような芸当を可能とさせたのは《Ｆ９７》の特殊装備であるＡＢＣマントの性能故の事だった。ビーム兵器や実弾兵器に対しての防御兵装として開発されたこの一見冗談のような装備は、ＭＳの隠密行動を容易にさせるという副次的な利点があった。難点といえばその製造時における高額のコストゆえに、量産には不向きであるということだろう。
　ともかく愛機を駆ったゴルドは戦域に可能な限り近づき、目標の動向を探っていた。
（面白い奴らがいたな……）
　一目で他の機体と明らかに格の違う動きの機体が２機、――もしも１対１でやり合えば結果はどうなるかは分からない――そんな好敵手とも呼べる存在の活躍を思い浮かべながら、ゴルドの心は年甲斐もなく逸っていた。いかにしてあの狩りがいのある獲物達をしとめるか、ゴルドの頭の中で様々なシミュレーションが描かれていた。

　母艦への着艦コースに入ろうとしたゴルドは思わず苦笑いをする。後部甲板からはご丁寧にガイドビーコンが発せられゴルドの着艦を

促していた。
（やれやれ、こっちはまだまだ問題ありのようだ……）
時として混乱する戦場で一切の誘導なしで着艦しなければならない場面すらあったゴルドにとって、レーザーによる誘導があれば十分すぎるほどである。相手の技量や隠密行動中であるという状況を理解せずにただマニュアル通りに作業を行うクルーなど、いざ実戦になれば使い物にはならない。最も乗員の多くが素人同然の艦では仕方がない事なのだろうが……。
（まあいい、艦長あたりにしっかり発破をかけさせるか……）
少々頼りない風貌の男の顔を思い浮かべながら、ゴルドは愛機を着艦させたのだった。

Ｃｈａｐｔｅｒ－？―了

（２０１０／０３／２０　Ａｒｃａｄｉａにて初稿）
（２０１１／０２／０６　本サイトにて初稿）

０４（後書き）

読んでいただいた多くの方々に心よりの感謝を……

01

サン・アンジェラス・コロニー――アメリア・コロニーと並び、現在サイド2内にて経済が大きく発展しつつあるコロニーの一つである。経済の発展と共に増え続ける電力需要を賄うため、サン・アンジェラス・コロニーの構造は解放型コロニーでありながらも人工太陽が設置されている比較的新しいタイプだった。

天候すら自由に設定されるコロニーの生活において、一年中温暖な気候である方が何かと合理的であるようだが、生体としての人体にとっては多少の不便や変化は必要――そんな環境科学的な観点から、コロニー内においては四季というものが設定されている。もっとも地球におけるそれに比べればあまりに緩やかな物ではあるが……。

初夏に設定された気候に伴い、このところの人工太陽の日差しは日に日に強まりつつある。そんな陽気に照らされる地球連邦軍サイド2駐留部隊の中央庁舎から足早に一人の男が現れた。

「クソ軍人ども、ふざけおって！」

近頃どんどん寂しくなりつつある禿頭は、湯気をたてんばかりに上気し、荒々しい靴音が石畳を叩く。

玄関で彼を待っていたエア・リムジンに足早に乗り込むと、秘書が用意したグラスを引っ掴み、中身を一気に飲み干すとグラスを床に叩きつけた。深い毛足の上質のフロアマットが優しくグラスを受け止め、転がったグラスの中に僅かに残った液体がマットの上にこぼれた。

彼の怒りの発端は数日前に連邦軍によって行われた海賊狩りだっ

た。

その映像がセンセーショナルに地球圏を駆け巡り、娯楽に飢えた視聴者たちは脚色された空間戦闘の映像に酔いしれた。戦場に投入された超高性能機である《Ｆ９１》の姿に大手メディアが湧き、その詳細解説において、ちらりと画面に移った女性パイロットの後ろ姿にネットが湧いた。

明らかな連邦軍によるプロパガンダ映像には、宙域を野放図に荒らしまわっていた海賊たちのみじめな結末をも加えられ、不透明な税金の使い道や閉鎖的かつ秘密主義的な色合いの強い組織構造故に、旧態的なメディアや安穏とした市民団体に支持される少数派政党等が日頃からやり玉に挙げる連邦軍の評価は、大きく上がっていた。

瀟洒な内装のリムジンの中で、おさまらぬ怒りを吐き出し続けている男の名は――フォンセ・カガチ――木星公社重役をはじめとする様々な肩書きをもつ彼の半生は、実に波乱万丈だった。地球圏の貧しいコロニーで育った彼は、先行きの見えない故郷にいち早く見切りをつけ、無尽蔵ともいえるヘリウム資源を有する新しいフロンティアとなりつつあった木星圏へと渡った。そこでの暮らしは、地球圏以上に苦しいものだったが、ひょんなことから体制側の人間達とパイプを持つことが出来たのは彼の運だけではないだろう。

もともと才覚のあった彼は帝国内でめきめきと頭角を現し、地球連邦政府に対して折衝を行う外交官として地球圏へと帰還した。二十数年ぶりに地球圏に帰還したカガチだったが、やがて、直ぐに残酷な現実を直視することとなった。国力の差――それは、あまりにも自分が考えていた以上のものであった事をカガチは思い知らされた。

木星圏であれ地球圏であれ、コロニーという環境下でのスペースノイドの生活様式というものは、大きく変わらないはずである。水や空気を自前で調達し、資源やエネルギーを徹底的にリサイクルし

ながら、コロニーの生活は成り立っている。その点において両者には差がないはずだった。しかし現実には、帝国は地球圏に比べてあまりにも貧しかった。その差の元凶を、カガチはそこに住む人々の余裕の差であると考えていた。

生活の中に生じる様々な無駄やわずかな余裕を地球圏の人間は楽しみ、木星圏の者たちはそれらを切り詰めていた。

その積み重ねは、やがて前者の社会に協調性と発展性を与え、後者には不満と猜疑に満ちた余裕のない社会を構築させる大きな要因となっている――そう考えたカガチは、連邦政府の国力とは比べるものですらないにも関わらず、いびつに歪み続ける木星帝国の未来にいち早く見切りをつけていた。

彼に再度の転機が訪れたのは、帝国皇帝が地球圏に来訪することによって勃発した木星戦役と呼ばれる事件だった。

外交官の特権を生かして、自身の私腹をしっかりと肥やしていたカガチは、個人の所有という概念の薄い木星帝国においては、間違いなく極刑であっただろう。だが暴走する皇帝の狂気の前にはカガチの不正など些細な事でしかなく、幸運にも皇帝が戦死することで、帝国は一外交官の処分などという些事に関わっている余裕は微塵もなかった。

指導者を亡くし、どこへ向かって進んでいけばよいのか、混迷する本国をよそにカガチは着々と次の段階へと足を運んでいた。帝国の反乱という情報を餌に、前もって一部の連邦政府の高級官僚たちと結託し、事件の影響で乱高下した幾つもの相場を巧みに操作し巨万の富を得ることに成功した。それらを元手に彼は地球圏での足場固めを行う一方で、木星とのパイプを保つために中立勢力である公社重役の地位を手に入れ、指導者を失って混乱する帝国の矛先をうまくかわして身の安全を図った。

クロスボーンの反乱と呼ばれる事件が内紛の果てに終結して以降、連邦軍はコロニーの防衛を各コロニー政庁に任せるようになっていた。

いかなる武力蜂起も一時的にその優位性を奪いとることはできても、長期的な戦力の維持は困難であり、結局、連邦という巨大な国力の前では蟷螂の斧と化し、さらに排除の過程において生まれる莫大な消費は次なる発展のきっかけとなる――そう考えた連邦政府は軍のコスト削減を目的に、自衛手段としての戦力の保持を各コロニーに許可していた。

かつてのジオン独立戦争時のような国力差を脅かすほどの圧倒的な技術力を、独立自治権のないコロニーが持つ事などありえない――そのような思想が連邦政府の統治戦略の基盤となっていた。

皮肉な事にこの戦略の正当性は木星軍の武力蜂起の際に証明され、連邦政府上層部の自信を深めさせ、内外で戦略の継続を求める声が強まった。反面、これらの政策はコロニーの各政庁に多額の負担を与え、経済力の弱いコロニーは多くの不満と潜在的な破綻の危機を抱えるようになっていた。

このような政府とコロニー間の矛盾に目を付けたカガチは自身の私財を投じて、民間軍事企業を立ち上げた。

必要人員は人件コストの安いコロニーから調達し、あちらこちらから引き抜いた専門的スタッフによる教導を行い、必要兵装や物資をアナハイム・グループと対立する企業群から調達した。もちろん組織の成立はカガチだけの力によるものではなく、彼の試みに賛同した数基のコロニーが資金や人員を融通しあい、その見返りとして自コロニーの防衛を依頼した。様々な問題を抱えつつも何とか形になってきたカガチの組織《Ａｅｇｉｓ・Ｓｅｃｕｒｉｔｙ・Ｓｅｒｖｉｃｅｓ》（イージス・セキュリティ・サービス）――通称《ＡＳＳ》は『カガチの私兵団』と陰口をたたかれながらも、サイド

2の各コロニーに対してひそかにその存在感を深めつつあった。ゆくゆくは、これらを足がかりに地球圏に自身の理想郷を作り上げよう――留まる事を知らないカガチの野望はひそかに進行していた。

そんなある時、彼は混迷しつつあるサイド2宙域におけるとある問題に目を向けた。廃棄資源衛星を一方的に占有する海賊達――コロニー各政庁の利益が複雑に絡みあうその場所で、うまく綱渡りをし続ける彼らはカガチにとって絶好の標的だった。ただ、小規模ながら指導者がしっかりしているのか、その行動は手堅く、それなりに統制のとれた組織であったため、彼らを取り巻く事情をも含めて、切り崩す事は容易ではなかった。

一計を案じたカガチは、彼と懇意のサイド2各コロニーの実力者達に依頼して、裏側から手を廻し、人を送り組織を急拡大させた。彼らの組織をその急激な成長に比例しない人的資源の不足状態に意図的に追い込み、その組織力の弱体化を図った。やがて、組織力を弱めた彼らは野放図に暴れまわるようになり、宙域の鼻つまみ者となった。頃合いを見計らって、様々な利益とリスクが衝突しかねないコロニー政庁に代わって、自由度の高い民間企業の強みを生かした《ＡＳＳ》が彼らを討伐し、組織としての実績をあげ、同時に海賊達が握っていた各政庁や大企業の様々な不正の証拠を奪い取ることで、サイド2内において、より強力な実権を握ろうと画策した。

海賊たちに対する《ＡＳＳ》の武力行為を正当なものとするために、大金を使ってあちらこちらに根回しを行い、ようやく準備を整えた矢先だった。

突然横から現れた連邦軍によって、海賊達が掃討され、《ＡＳＳ》が手に入れるはずだった手柄をすべて横取りされたのである。

烈火のごとく怒り狂ったカガチは、サイド2に駐留する連邦軍庁舎に怒鳴りこみ、彼と懇意の将官に面談を申し込んだ。今回の連邦軍の横やりを当然知っていたはずの彼に事の次第の釈明を求める為だった。要求されるがままに賄賂を握らせ、さんざんにうまい汁を

吸わせたのだから、納得のいく説明なり、謝罪なり、あるいは相応の見返りを要求しても罰は当たらないだろう。
だが、目当ての彼との会見は成立する事もなく、『現在会議中である』という定形句で体よくあしらわれ、それでも引こうとしないカガチは暴力集団特有の実に婉曲的な脅しとともに門前払いをされることとなった。
高速で静かに道路を滑っていくエア・リムジンの窓から、遠ざかる庁舎の建物を睨みつけながら、カガチは行き場をなくした怒りと共にあらん限りの罵声を浴びせ続けたのだった。

「馬鹿野郎、あんなので堕とせるわけねえだろうが、あたし達を殺す気か」
チームカラーの赤（ルージュ）に全身を染めた０３号機の前で大柄な体躯のセレンの鉄拳が同じチームのフェイカー准尉の頬に炸裂した。殴られたフェイカーは慣性に流され宙を漂っていた。
「あいつら、又、やってんのか」
調整中の《Ｆ９１》のカメラが映し出すラー・カイラム改級《エナド》ＭＳデッキ内の様子を眺めながらカークは溜息をついていた。先ほど行っていた宙域でのシミュレーション演習に何か不満があったらしい。
「毎度のことながら、ご苦労な事だな」
「まあ、フェイカー少尉のチキンハートは有名ですからね」
天井のハッチからコックピットを覗き込みながらカークの機体を担当する整備兵――アイシャ・マーディン曹長が相槌を打つ。女性らしい名前とは裏腹に少年とも見まがう彼女の容貌に本人はいたく不満気だが、一部のマニアには熱狂的な人気がある。メカニックに

対する勘の良さは、整備兵の誰もが一目置いており、カーク自身も彼女に安心して機体を任せていた。

「あんなやり方じゃ、人は育たねえよ。人間は自分の感じた物しか受け入れられないんだ。そいつの感性を無視して形ばかり押し付けちまえば、生き残る技術なんて身に付くわけがねえ。訓練兵の教導とは訳が違うんだ」

徹底した反復による基礎技術を習得をした上で、実戦時の恐怖と緊張感の中で自身の頭と身体をフルに使って生き残ることで、初めて本当の技術が身に付くものだ。小手先だけの訓練など所詮は訓練の為の訓練でしかない。

レッドチームの技量は他の2チームに比べると劣る。様々な要因があるのだが、彼女達はその差を己の努力で埋めようと必死だった。

『男なんかに負けてたまるか』

それを合言葉に過酷な訓練を行う。先日の海賊狩りの際の圧倒的なジュベールの動きを目の前で見せつけられた同じフロントアタックのセレンは、完全に余裕を失っていた。旧世紀に衰退した国家が好んで使った安直な精神論を持ち出しては、必要以上にフェイカーをしごいている。

「そんなのんきなこと言ってちゃ、時間なんていくらあっても足りませんよ。みんな目の前の事で精一杯なんですから」

「そうかもな。でも、男は男。女は女。それぞれに良さがあるんだ。人間個々人にもな。それをお互いに認め合い、補い合わなきゃ進歩も成功もないんだよ。押さえつけるのにも限度ってやつがあるんだ」

当初、女性3人で編成されていたレッドチームが現在の状態に至るのには、事情がある。だが、その原因にカーク達ブルーチームも少なからず関わっている為、彼女たちに対してあまり強い事は言えなかった。

「そんな事ばかり言ってるから、ブルーノ少尉に『時代錯誤』だなんて言われるんですよ」

「あいつの話はいいんだよ」

均整のとれたグラマラスなプロポーションと抜群の美貌を誇り、ハッキリした性格のシャーリーはアイシャの憧れだった。そのシャーリーの悪影響か、アイシャのカークに対する態度は少しずつ馴れ馴れしいものになっている。もっとも、それを不快に思った事などなかったが……。

「あっ、ブルーノ少尉」

「マジか？　どこだ？」

条件反射で思わず身構えたカークは、素早くモニターの映像を確認する。しかし、目指す影は見当たらなかった。どうやらアイシャに担がれたらしい。

「お前なあ」

ペロリと舌を出し、おどけた仕草で、アイシャの顔がハッチから覗きこむ。

「冗談やってないで、さっさとチェックを済ませやがれ！」

「了解です。レイナード中尉殿」

人懐っこい笑みを浮かべて、彼の名字に『殿』をつけて呼ぶのは勝利を確信している時のアイシャの癖だった。その事を知っているカークは不機嫌な顔で自身の作業に再び没頭し始めた。

『宇宙は狭い』――様々な航宙法とコストの網にがんじがらめになった輸送船の船長がよく使う言葉である。

道を外れることのない窮屈さを代償に得られたのは、それなりの安全と日々の糧――定められた航路をただ往復するだけの毎日の中で、船窓から眺める果てしない宇宙の広さは、彼らには決して手の届くものではない。少年の頃に見た自由な冒険の夢は儚いまぼろしと化し、大人になってしまえばただひたすらに現実に追い立てられ

てしまう。
　そんな彼らに比べれば今の自分は幸せなのだろうか？　アレキサンドリア級航宙重巡洋艦《ゲオルグ》の艦長席に座るヴイットーリオ・ヴォラスコフはふとそんな思いに駆られた。４０半ばの男盛り――等と言えば聞こえは良いが、その実、ここ数年の不摂生がたたり身体のあちこちにガタがきはじめている。先の事も考え、多少なりとも労りたいところではあるが、彼の背中にかかる責任は日々重くなる一方で、先行きの見通しはあまり明るくないようだった。
　そんな彼の不安を周囲は寛容と慈愛の心で慮る事は――決してなく――これでもかと言わんばかりに彼にさらなる忍耐と刻苦を強いていた。
「それでは、く・れ・ぐ・れ・も、よろしくお願いいたします」
　ここしばらくすっかりなじみとなった彼女――ネーナ・サリンジャーは、艦内で日々生まれる諸問題への対応を彼に押し付け、嫌みたらしく念押しをするとブリッジを後にする。何かと忙しく動き回る彼女は次の仕事に取り掛かるべくいくつかのディスクの入ったカバンを小脇に抱え別ブロックへと向かって行った。
「女王様、御退出～～」
　戯曲めいた節回しでブリッジオペレーターの一人が彼女の退出を宣言すると、張り詰めていたブリッジ内の空気が一気に緩んでいく。緊張が緩んだのは艦長席に座るヴォラスコフも同じで、一息つこうと座席横に無造作に放りこんである愛用の携帯ボトルに手を伸ばそうとするが、その手は空しく空をきる。
（そういえば、そうだったな……）
　目当ての物を自室に置いてこざるを得ない状況であった事を思い出し、ヴォラスコフは思わずため息をつく。寄り合い所帯の雇われ艦長などという職務は心労とストレスのフルコースである。出資者の無理難題と若いクルーや技術者たちの不平不満のサンドバック状態からの回復に欠かせない唯一の慰めが適量のアルコールだった。
「仕事場にアルコールを持ち込むとは如何なものでしょうか？」

これ見よがしに厚さ数センチにも及ぶ契約書を取り出して、義務と責任と大人のマナーなどというものを、ねちねちと自分よりも年下の小娘に説教されてしまってはやる気も失せるというものだ。ヒステリックに叫びもすればまだ人間臭さを感じさせ、取り付く島もあるのだろうが、残念な事に彼女はそういった種類の人間ではないらしい。あくまでも優雅に微笑みながら丁寧な言葉で、出資者の権限を十二分に利用して容赦なくこちらを締め挙げ、自身の要求を通そうとする。

（生きにくい時代になったものだ）

『先達への感謝と尊敬』などという言葉はすでに死語である。ゲーム盤の上でマネーというアイテムをより効率的に運用して得られる圧倒的な資本こそ正義である　世界においては、所詮自分も無力なただの雇われ者に過ぎない。連邦軍を不名誉除隊させられた身としては将来に宛てがある訳もなく、かといって閉塞しきった世の中で今更新しい人生を切り開くだけのエネルギーを持ち合わせている訳でもない。どうにか自身のキャリアを生かせるこの仕事につけたのは、どちらかといえば運のいい方であろう。価値観の相違から次々に起こる様々な艦内トラブルを知恵と勇気、時には契約や武力という名の脅しを使って乗り越える日々が続いていた。

とはいえ、雇われ艦長職など実に孤独なものである。そんな彼の孤独を共に分かち合ってくれるただ唯一無二の酒（とも）までも奪われてしまい、若者のように『理不尽だ！』と無責任に叫ぶ事も出来ないヴォラスコフの背中は、すっかり中年男の悲哀を醸し出していた。

そんな彼の心情など、慮る事もない他のブリッジメンバー達は口々に不満とつまらぬ噂話に花を咲かせている。もちろんその対象は彼女――アナハイムからやってきた女王様ネーナ・サリンジャー女史についてである。『よくもまあ、そこまでひどい事がいえるものだ』とこちらが感心するぐらいにその噂話は容赦ない。もっともこちらも留飲を下げさせてもらっているのだから、口を挟むのも野暮

というものだろう。

重役の愛人、職場から締め出されたお局様、欲求不満の行かず後家、等々、次々にエスカレートし続ける彼女の噂話に耳を傾けながらも、ヴォラスコフは艦内のもう一人の重要人物の事を考えていた。ゴルド・ガーラント――寄り合い所帯の《ゲオルグ》内で圧倒的な存在感を放つＭＳパイロットの事である。

その世界ではかなり有名な腕利きの傭兵――彼と初めて顔合わせをした時、それまでのイメージとは全く異なる彼の姿にわずかばかり戸惑った。

噂話から想像していた彼はどちらかというと野卑で暴力的なイメージが付きまとっていたのだが、実際の彼はそのような匂いを全く感じさせないほどに理知的で穏やかだった。どこか達観した彼の姿は、悪意と猜疑が充満する戦場とは無縁の世界で悟りを開いた聖者のような高潔さを感じさせる。人は見た目で判断できない――４０半ばになっても尚、思い知らされる言葉を噛みしめる。

もっともその数日後には言う事を聞こうとしない生意気なパイロットと自己主張ばかり強い若いメカニック達にまとめて容赦ない鉄拳制裁を加え、僅か数日で《ゲオルグ》ＭＳチームとＭＳハンガー内に強引に確固たる秩序を作り上げたことで、再び人物像の変更を迫られる事になったのだが……。

（２０１０／０４／０３　アルカディアにて初稿）
（２０１１／０２／１１　本サイトにて初稿）

02

アレキサンドリア級航宙重巡洋艦《ゲオルグ》――この艦を所有する民間軍事会社《ＸＸＸ》（トリプル・エックス）はアナハイム・エレクトロニクスが幾つかのダミー会社を経て所有する子会社である。尤も《ＸＸＸ》自体、たちあげられて、まだほんの数カ月でしかないのだから、組織の規律や体裁などあって無きがごとしである。新型ＭＳの運用テストを名目に、６０名近い乗員のおよそ半数がアナハイム側から出向し、残りの半数はフリーランスの人材で構成され、彼らを縛るのは分厚い契約書と仕事内容に見合うかどうか不明な報酬だった。

このような寄り合い所帯が何とかやっていけているのは、一重にヴォラスコフの苦労のたまものであろう。本来ならば連邦軍在籍時に培ったノウハウを利用して艦をまとめ上げる事などヴォラスコフにとっては造作もないはずだった。

しかし、アナハイムという出資者が押し付ける資本の論理が彼の行動を幾度も阻んでいた。『高額の費用をかけているのだから結果など出せて当然である！』という資本家特有の傲慢な理論と、数字に縛られ常に右肩上がりの結果を求め続ける短気さは未熟な組織の成長を大きく妨げた。

艦の頭脳ともいえるブリッジメンバーには、ヴォラスコフがある程度信頼できる人材の登用に成功したものの、その他部署においてはアナハイムからやってきたネーナの采配によるところが大きい。

彼女自体は優秀であり、かつ合理性を重んじる女性らしくない思考の持ち主であったが、いかんせん、民間企業出の性であるのか、あるいは組織人の性なのか、資本の力を利用して常に支配権をとりたがり、これが艦内の混乱につながっていた。

便宜的な目的で設立された《ＸＸＸ》は、その設立目的ゆえに軍隊的な明確な階級制を否定した為に、指揮命令系統があいまいになりつつあった。

艦内に二つの指揮命令系統が存在することなど論外である。実戦の場では文字通りの命取りといえた。ゴルドも交えた数度の彼女との会談も効果はなく、結果としてヴォラスコフの言葉を証明するに至ったのは、試験航海中に偶然に巻き込まれたたった一度の実戦であった。もっとも女のプライドゆえか、彼女が己の非をはっきりと認めることなどなかったが……。

３機のＭＳの調整が終わった《ゲオルグ》内モビルスーツ格納庫ではようやく穏やかな空気が流れ始めていた。就航から１カ月半、『てんやわんや』という言葉を文字通りに体現していたころの当初に比べれば、はるかに艦内の雰囲気はまとまっていた。

３機のＭＳと《ゲオルグ》の稼働テストを目的とした出航時には、慣れない無重量下においての作業、アナハイム出向組とフリーランスの技術者達との立場と意識の違いから生まれる対立、等といった要素から、艦内の空気は一時はかなり険悪なものになりかけていた。幸か不幸か、偶然巻き込まれた戦闘を無事に乗り越えた事をきっかけに、艦内の空気はよい方向へと変わりつつあった。もっともよい事ばかりではない。自身の命が失われるかもしれないという理不尽の重さに気付いたもののうちの数名は、技術者としてのスキルアップなどという安直な目標よりも平和な場所で安全に暮らす事を選び、脱落者となっていた。

Ｕ．Ｃ．１００年代に提唱されたＭＳの小型化という概念は提唱後１０年の歳月を経て完成した《Ｆ９０》という機体によって、その理論が実証されることとなった。小型化によって得る事の出来た

圧倒的な運動性、余剰電力によって可能となったビームシールドによる防御能力の向上など、それまでのＭＳの常識を凌駕する要素が生まれていた。特に小型化によって得られた運動性は驚異的な武器であり、『当たらなければどうという事はない』という言葉が示すように、旧世紀の航空戦の時代から受け継がれてきたこの概念は現在に至っても尚、破られる事はない不動の真理だった。

　このようにＭＳが小型高性能化していく一方で、それを操作する人間側により多くの負担がかかるのは至極当然の事だった。人間自体の基本的な能力というものはＭＳの目覚ましい性能の向上に比べれば、いつの時代もそれほど大きくかわる事はない。それゆえにＭＳの性能向上に取り残されがちな人間の能力を補完するためのシステムが一般化、普及化するまでにはさらなる時間が必要だった。

　汎用性、量産性、簡便性等、小型化されたＭＳがより優れた兵器システムとして一般化する一方で、さらなる高性能化を求められた結果生まれた《Ｆ９１》は、『現時点でのＭＳの限界性能の達成』という謳い文句通りの性能を有し、比類なき機体として現在に至っている。誕生から二十年近くたった現在でもそのポテンシャルを最大限に引き出した者は存在しないとすら言われていた。

　技術者のあくなき性（さが）であろうか？　さらなる高性能の追求の為、性能を限定化することを前提に設計された《Ｆ９７》は、近接戦闘に特化することでその機体ポテンシャルを最大限に引き出すことが可能となっていた。尤も、《Ｆ９０》で実証されたミッションパック方式による武装強化の概念とアナハイムの持つ基礎技術、そして非常に繊細な動作が要求される近接戦闘に耐えうるセンサー類やコンピューターの処理能力が合わさって、中、遠距離戦においてもある程度、オールラウンドに性能を引き出すことが可能だった

《Ｆ９７》に初めて搭乗したゴルドはその機体ポテンシャルに驚かされた。長年の経験からある程度の予想はしていたつもりだったが、実際のそれはとてつもないじゃじゃ馬だった。特に木星圏の重力化

でも運用可能なフル装備での爆発的な加速能力はすさまじく、全身を巨大なハンマーで殴られるような衝撃に、さすがのゴルドも手を焼くこととなった。

さらにゴルドを悩ませたのが《Ｆ９７》のあまりにも個性的かつ特異な武装の数々だった。

ＭＳの武装は中遠距離戦用のビームライフルと近接戦闘用のサーベルが基本であり、それを補完するものとして、目的に応じて様々な武装が施されるのが基本である。尤も過剰な武装はデッドウェイトとなり、せっかく向上した運動性を殺す事になりかねない。

ＡＢＣマントをはじめとして、巨大な余剰電力を食らうサーベルの化け物や、一度に十機近い敵を落とす事が可能なライフル――尤も使用回数があまりにも少なすぎる代物であったが――、あるいは近接戦闘を想定したアンカーやロッドなど、その種類は多岐にわたる。引き渡されたデータを基に設計されたというのだから、おそらく実戦においても使用されたのであろう。一体どんな戦いをしていたのか？

しかも、あまりにも奇をてらったその装備品の数々を出資者（ネーナ）は、実戦の場において試す事を望んでいた。兵器とはより単純化されるべきであるという事が信条のゴルドには苦悩の連続だった。それを使用する為のタイミングや間合、といったものを《Ｆ９７》の爆発的な加速力にさらされるコックピット内で瞬時に判断し、変化し続ける実戦の場において意図的に使用する事は、あまりにも困難だった。

幾度かのネーナとの衝突の末、結局ゴルドは、デッドウェイトになりがちなアンカーやロッドを排除し、固定武装をさらに限定することを決断した。多様な装備は変化する戦場で予想される状況に応じて使用すればよい――《Ｆ９０》で確立されたミッションパックの概念に忠実であることを選択した。

現代ＭＳ戦において運動性こそ最大の武器である――ゴルドはそ

の一点にこだわり徹したのだった。

たった3機のMSが搭載されただけの《ゲオルグ》MSデッキ内はあまりにも広く感じられる。その片隅の一区画で《F97》の予備の頭部パーツが釣り下げられ、その首元からは幾本ものケーブルがのびて周囲の様々な機器と繋がっている。なまじ人型であるだけに遠くから見るといささかシュールな光景ではあるが、見慣れてしまえば巨大なオブジェといえなくもない。

「調子はどうだ?」

その足元で自身の作業に没頭する一人のメカニック――アロルド・マコーミックにゴルドは声をかける。フリーランスのマコーミックは一匹狼にありがちな頑固さの塊のような男だった。

就航の際、ゴルドがあまりにも勝手な事ばかり云う若いメカニック達に修正を加えた時、不運にも彼は巻き込まれることとなった。明らかにゴルドの落ち度だったのだが、殴られて直ぐにしおれてしまう若者たちに反してこの男は真っ向からゴルドに歯向った。決して勝てる見込みのない相手に食らいついていき、世辞や曖昧さといったものとは無縁のマコーミックの性格をゴルドは気に入っていた。故郷の両親に預けてきた幼い息子と共に暮らすのが夢だというのが彼の口癖だった。

「駄目ですねえ」

先日の海賊退治の折にみた連邦軍の機体の機動はおそらくゴルドでも手を焼くであろう事は想像がついた。メカニック達と相談して考案した打開策がバイオ・コンピュータの搭載による機体追従性・及びシステムの反応速度のアップであった。

「こいつは、もともと《F91》用だったものを無理やり《F97》用に変更してありますからねえ。たった3機分の現時点の《F97》の蓄積データじゃ、使い物にならんのですよ。せめて《F91

≫の戦闘データでもあれば話が違うんですが……」
「工場の方でも駄目なのか？」
「サナリィから引き継いだのはおそらくハードウェアの部分だけなんでしょ。ソフトウェアに関してはワザと引き渡さなかったんじゃないんですかね。まあ、当然と言えば当然なんでしょうが……。さすがのアナハイムもないものは出せないって事でしょ？」
「そうか……」
何事もすんなりと解決するものではないらしい。
「それに冷却材の問題もありますしね」
初期型に比べれば随分と改良を加えられて高性能化しているものの、熱に対する弱さというのはバイオ・コンピューターの根本的な問題である。
「まあ、どうにか足掻いてみますが、あまり期待はしないでください。いい加減なものをゴルドさん達に渡すわけにはいかないですからね」
「すまんな」
貴重な時間を割いてゴルドの我儘に付き合ってくれる彼の仕事の邪魔はこれ以上できない。肩を一つ叩くとゴルドはその場を離れ、デッキ脇にある作業部屋へと向かっていった。

形式的にはＭＳテストパイロットという立場にあるゴルドの仕事は多い。単純に宇宙でＭＳを振り回してさえいればいいという訳ではない。様々なテスト項目に対する、パイロットからの視点による意見、あるいは変更点、及び変更すべき数値の設定、消耗品使用報告書、等の様々なデスクワークをはじめとして、戦闘艦の乗組員としては全くの駆け出しのメンバー達への改善点に対する意見書や要望書まで、その仕事は多岐にわたる。
特に《ゲオルグ》を所有する《ＸＸＸ》の設立目的が兵站、整備、物流請負型の後方支援であったため、それを前提として《ゲオルグ≫に乗り込んだ乗員たちの意識が問題であった。自分達は後方の安

全な場所で作業を行い、戦場という危険な場所にはＭＳのみを投入すればよいという、机上の空論が現実には成立しえないという事実は彼らの心を大きく揺さぶった。戦闘艦に乗るという事は命のやり取りをすること――時として理不尽に狙われる事すらある。初めて彼らを巻き込んだ実戦は、平和というものが儚い幻であると同時に、戦闘という現実の生々しさを切実に痛感させた。

デスクワークにひとしきりの区切りをつけたゴルドは、傍らに置いてあったピルケースから数種類のカプセルをとりだすと、飲料チューブの水分とともに飲み下す。唯でさえ、不規則な生活を長く続けてきた上にＭＳパイロットという身体に多くの負担を与える仕事は身体のあちらこちらにダメージを与えていた。元来無精者であったゴルドだが、健康管理も仕事のうちであるとばかりに、近頃はこの行為がしっかり習慣づいてしまっていた。

「おい、おっさん！」

礼儀という言葉とは無縁の無礼な暴言にゴルドは一つ溜息をつく。振り返ると一組のパイロットスーツの男女がノックもなしに作業場の扉を開けて立っていた。ヴァレンタイン兄妹――ゴルドの寮機である２機の《Ｆ９７ＸＥ》のパイロットである。

兄のジノ・ヴァレンタインは非常に攻撃的な性格であり、押さえつけられる事を極端に嫌う性格ゆえか、初対面のときからゴルドに対して反抗的だった。ゴルドが爆発的な瞬発力と運動性を誇る《Ｆ９７》に搭乗する事に納得のいかなかった彼は、ゴルドに勝負を挑み、双方が地球圏仕様である《Ｆ９７ＸＥ》を使っての模擬戦で、ぼろ負けを喫した。それでも負けを認めず反抗的なジノを不本意ながらもゴルドは腕力にものを言わせて従わせることにした。獰猛な肉食動物の調教と言っても差し支えのない一連の事態とその結果２倍にはれ上がったジノの顔面は、寄り合い所帯のＭＳ関連部署をまとめるのに一役買ってしまったのは皮肉な結果だった。

貧しいコロニーで育った彼らは幼くして両親を亡くし、生活の糧を得るために働く事を余儀なくされ、宇宙という環境やＭＳという

道具に、同じ時代に育つ子供たちよりも早くに触れて育った。腕次第で得られるより多くの報酬を求めて、彼らの活動の場が作業場から複雑多様化する戦場へと変わっていくのはこの時代においてそれほど不思議な事ではなかった。

プチモビをはじめとして様々なＭＳを乗りこなしてきた経験故かジノのＭＳに対する感性は、天才的でありゴルドも舌を巻くものがあった。正規の訓練を受けた事のない彼の我流の操縦は、機体に多くの負荷をかけ無駄な動きも多かった。尤もそれでも並のパイロットが束になってもかなわないであろうその実力は同じチームのメンバーとしては心強い。

妹のリリア・ヴァレンタインは兄とは対照的に寡黙な性格であり、常に兄につき従っていた。長らく二人だけで世間を渡ってきた故であろうか、いささか彼女の行動は兄に対して依存的であった。ジノの攻撃的な性格はそのような彼女を守ろうとする故のものなのだろう。ジノ同様に彼女も又、優れたＭＳパイロットであり、特に彼女の射撃センスは抜群で《Ｆ９７ＸＥ》との相性はよかった。

「言われた訓練は終わったのか？」

「へっ、あんなもん、いつまでもやってられっか！」

「……」

反抗的な言葉で返答をよこすものの、つい先ほどまでシミュレーター訓練に明け暮れていた事は彼らの汗に濡れた髪を見れば明らかだった。己を支える最も得意なものであり、経験上得てきたものをとことん叩き潰され、加えて、腕力でもねじ伏せられてしまったジノは、表面上はともかく、ゴルドの下に就く事をある程度納得はしているようだった。何よりも自身の足りぬものを認め、貪欲に取り込もうとするジノの執念を、ゴルドは好意的にとらえていた。へらへらとおべっかを使うような奴よりも、反抗的であれ、心の中に何か確かなものを持っている奴の方がいざ実戦という場では何かと信頼できるものである。退屈かつ基礎的な操縦技術の反復を強制されても根をあげようとしない彼の根性も評価できる。もちろん、ジノ

のエネルギーの源はゴルドへのリベンジである事は疑う余地もなかったが……。

「おっさん、こっちは暇なんだ。ＭＳの整備はとっくに終わってんだろう！　きっちり相手をしてやるよ！」

若いということはある意味恐ろしい。少しは休憩でもしておけばいいものを、がむしゃらにひたむきにゴルドを乗り越えるべき壁と定めて挑みかかってくる。もっとも、そのようなジノのエネルギーがゴルドにとってもよい刺激になっていた。

作業場のロッカー内に無造作に放りこんであったパイロットスーツを取り出しながら、ゴルドは不敵に笑った。

「いいだろう、だったら少し揉んでやろう……」

「上等だ！　俺が勝ったらあんたの機体は俺のもんだ！」

「まあ、せいぜい頑張るんだな……」

ジノの執念に苦笑いを浮かべながらも、スーツに着替えながら、ゴルドは端末でブリッジを呼び出すとヴォラスコフに発進の許可を求めた。

さすがに1カ月以上行動を共にしていれば、ヴォラスコフをはじめとして艦内のスタッフ達はある程度ゴルドの考えを理解し始め、緊急事態への対応というものがいかに実戦の場において大事であるかという考えが受け入れられつつあった。突然のＭＳの緊急発進という事態に、多少の不満をもらしながらもデッキ内の誰もが即座に臨戦態勢を整えるために各々の持ち場へ向かっていく。

彼らの姿を横目でとらえながら、その意識の変化にいくらかの満足を感じながらゴルドは己の愛機へと向かう。挑みかかってくる物は容赦なく叩き潰す――それがゴルドの変わらぬ流儀であった。

（２０１０／０４／０３　アルカディアにて初稿）
（２０１１／０２／１３　本サイトにて初稿）

03

ラー・カイラム改級戦艦《エナド》パイロット待機ルームの窓ガラスの向こうでは整備兵たちの熱気があふれかえっている。開始時刻が間近に迫った10日ぶりに行われる作戦行動に備えて、分厚い強化プラスチック製の窓の向こうの熱気が空調の整えられたこちらにまで伝わってくるようだった。僅かのミスも見のがすまいと整備兵たちは各々が担当する機体の最終チェックに余念がない。先日の海賊狩りの時と同様に再び全機が無事に帰投できるよう、彼らは入念な作業を行っていた。

待機ルームにおかれた端末に表示される自機の整備状況を確認したサカキは、浮かぬ様子で同じように自機のチェックを行っているカークに声をかけた。

「どうした、何かトラブルか？」

戦場を自在に駆け回り、敵陣に切り込むフロントアタックの心理状態は作戦の成否に影響する。平時は何かと問題ある彼も、戦場では腕の立つエース級のパイロットである。彼の機体と心理状態は作戦遂行の上で絶対に無視はできない。何事にも完全を求めるサカキはいつもと様子の違うカークを心配した。

「いや、問題はありませんよ」

端末のキーを乱暴に叩きながら、最終確認を終えると、カークはどこかいらただしげな様子でサカキに応えた。

「その割にはなんだかいらついているように見えるがな……」

幸いな事にもう一人のチームメイトであるシャーリーはいまだに整備デッキで自機の調整中である。男同士でなければ話せない事もあるだろうから、いいタイミングだった。

「この作戦――何、考えてんですかね？　上層（うえ）部の連中？」

その疑問は、コーナーからブリーフィングで作戦内容を聞かされた時にサカキも又、感じた事だった。ただ、それは彼の立場上、決して口には出来ない事だった。例え、軍人であったとしても、上からの命令に疑問を持たぬものなどいない。組織に所属する以上、疑義のある命令など日常茶飯事である。ただそれを軽々しく口にするにはいささか彼の立場には責任がありすぎた。それを口にすることで部下や仲間にいたずらな不安を与える事は好ましい事ではない。ましてや彼らはＭＳパイロットである。迷いや不安は戦場では死に直結する事になってしまう。

サカキに公開されているカークの経歴から、カークがこのような場面でもある程度、自身でメンタル面をコントロールできるだろうと安心していた。心配なのは、むしろ、シャーリーの方である。平時は気丈なだけに崩れた時の脆さというのは恐ろしい。極力、いつも彼女のメンタル面に注意を払っていたのだが、思わぬカークの言動にサカキは内心、動揺した。

そんなサカキの内心を推し量ったカークは、思わず苦笑いしながら慌てて、訂正する。

「違いますよ、大尉。その、なんていうか……、無理やり俺達を目標にぶつけようとしているのが妙に気になりましてね？」

「なんだ、そういうことか」

カークの言葉に僅かに安堵の色をみせながらも、サカキはその内容に今度は困惑した。

カークの疑問――それは先程のブリーフィングで行われた作戦の内容だった。

サイド２宙域内でおこるであろう戦闘の鎮圧――簡単に言ってしまえばそのような内容であるが、あまりにもそれはいいかげんな状況設定だった。さらに想定される初期戦力比は１．５～２倍の開きがある。攻撃側に必要な戦力は最低限同数であるという航宙戦闘の常識を逸脱したこの作戦にはカークでなくとも疑問を持つのは当然

だろう。まして、彼らのターゲットに設定されたのは明らかに戦闘の理がある側だった。

戦術レベルでは明らかに暴挙であったとしても、大局から見たときにはそこには何らかの戦略的なあるいは政治的な意図があるのだろう。カークもおそらくその事は頭で理解しているには違いない。ただ、実際にその立場に立たされた時の感情の処理というものは、やはり場数と年齢が必要なのかもしれない。

「命令には従えそうにないか？」

注意深くカークの様子を観察しながらサカキは冷静に言葉を選ぶ。

「大丈夫ですよ。うだうだと考えているのは出撃前までです。一度、カタパルトに乗っちまったら、もうそんな事ははるか宇宙（そら）の彼方へと飛んでいっちまいますから……」

その言葉にわずかばかり安心する。それはＭＳパイロットとして一人前である証しだった。

戦場に迷いやためらいは必要ない。自分に対するゆるぎない自信があってこそ、コンマ数秒の世界で冷静な判断が可能となる。人間であることと軍人である事は両立しない。決して、人は神とはなりえないのである。目の前に敵として立ちはだかるものは堕とす――それがＭＳパイロットの本質であり、鉄則であった。

「男同士で集まって何の相談をしてるのかしら？」

ようやく機体の調整にめどがついたのか、飲料チューブを手にしたシャーリーが待機ルームへと入ってくる。

「お前の悪口を言ってたのさ」

カークの悪態にシャーリーが持っていたチューブを軽く放りつける。慣性のままに流れるそれを掴んだカークは、一息に残った中身を吸い出すとそのまま、ダストシュートへと放りこんだ。

吸い尽くされた飲料チューブを無造作に放りこまれたダストシュートは抗議の声をあげるかの様に低い音で作動音を響かせる。と同時に待機ルームには、聞きなれたコールがかかり、ＭＳ隊への発進準備を告げるアナウンスが、ミリーの澄んだ声で流れ始めた。

それを聞くや否や3人は顔を合わせ、即座に行動を開始した。待機ルームを後にし、自身の機体へと向かう彼らの顔はすでにMSパイロットのそれであった。

「……さい」

遠い場所で誰かが呼んでいるようだった。

「大尉、起きて下さい」

どうやら呼んでいるのは部下のようだ。覚醒する意識の中でその事に思い当たった彼はそのまま、身動きせずに寝たふりをする。

「大尉～」

全天周モニターの一部に映る画像の向こうでは、半泣きの部下が叫んでいる。思わず心の中でにやりと笑う。彼はなぜかこの優秀な部下の泣きそうな声が好きだった。無理難題を押し付けては、半泣きで与えられた命令をこなそうとする彼を眺めるのは至極の喜びだった。自身がサディストであることは十分に理解しているのだから、始末に負えない。

おそらく作戦士官あたりから何か通信が入っているのだろう。いつもなら優秀な部下であるミハイル・ヤードック中尉が彼に代わって対処するのだが、半泣きで彼を起こそうとするところをみるとおそらくはかなり緊急かつ重要な要件なのだろう。

彼が通信に応答しない事をいいことに作戦士官がねちねちと日頃のうっぷん晴らしをヤードックに対して行っているらしい。タヌキ寝入りを決め込みたいところだが、さすがにそうはいかないようだ。何よりも部下を苛めるのは彼だけの特権である。他の奴にその特権を奪われるのは気に食わない。ましてやそれが能無しの上官であればなおさらだった。

ごそりと起き上がり体を座席に固定していたエアベルトを調節する。暗いコックピット内に灯が入り、システムが次々にスリープ状態から目を覚ます。狭いコックピット内で伸びをすると、彼――《ＡＳＳ》艦隊所属ＭＳ中隊中隊長・アリー・クロムウェル大尉――はいつも通りのクレームをつけ始めた。

「ヤードック、モーニングコールはヴァネッサにやらせろといつも言ってるだろうが……。お前の役目は俺のために濃いブラックを運んでくる事だけだ、と何度言ったら分かるんだ」

いつもならば「勘弁して下さい」などとヤードックが弁解し始めるところだが今日はいつもと様子が違う。

「そんな事言ってる場合じゃないですよ。キツネの奴が顔色変えて、大尉を呼んで来いって言ってるんです」

「あいつの顔形が変ってるのはいつもの事だろうが……」

クロムウェルの茶々を軽くスルーしたヤードックは調子を崩さずに言葉を続ける。

「とにかくブリーフィング・ルームに出頭しろと、そりゃもう偉い剣幕で……」

「出頭命令？　アラート勤務中だぞ？　何考えてんだ、あいつ？」

勤務中に熟睡していた自分の事はしっかりと棚に上げてクロムウェルは毒づいた。

「お願いしますよ～、大尉～」

例によって半泣きになりながらヤードックは懇願している。

「分かった、分かった」

一つ溜息をつくと仕方なく、クロムウェルはコックピットハッチを開け外に出る。

（全く、下らん要件だったら半殺しだからな）

その対象をどちらにしようかと考えながらクロムウェルはエレベーターへと向かう。ふと気づけばＭＳデッキ内はいつもより慌ただしい。まるで、これから実戦が始まるかのような忙しさである。どうやら、何かが起こり始めているようだ――そう気付いた彼は携帯

端末を取り出し、すぐさま艦内情報を呼び出したのだった。

「失礼します」

ブリーフィング・ルームにヤードックと共に出頭した彼を出迎えたのは、天敵である無能な上官（キツネ野郎）だけではなかった。

「随分とのんびりしたご登場ではないか、クロムウェル大尉、アラート中に昼寝とはいい御身分だな。さぞかし、いい夢が見られた事だろう」

「ええ、嫌みな上官がみじめに更迭されていくとてもいい夢が見られましたよ、少佐。ぜひとも正夢になってほしいんですが……」

いきなりの先制攻撃に容赦のないカウンターパンチを浴びせる。室内には例によって険悪な空気が走り、ヤードックが青ざめた。

「双方、じゃれ合いはそこまでにしてくれたまえ」

室内にいたもう一人の男が静かに厳しい声で命令する。

「大変失礼いたしました。司令」

《ＡＳＳ》艦隊司令官――リチャード・ワイズナーの言葉にクロムウェルはすぐに居住まいを正す。尊敬に値する数少ない上官が直々に彼らを迎えたのだ。いつまでもキツネ（小物）に構っている場合ではない事はさすがのクロムウェルも理解している。

「状況は把握しているな」

「ええ、一応は……」

先程端末で呼び出した情報からすでに現状は把握している。敵性艦隊の領海侵犯の可能性――２０数分後にはおそらくそれが現実となるであろうと予想された。

サイド２マケドニア・コロニー部隊――急速に発展が進むサイド２において各コロニー間で生まれる様々な軋轢を解決するため、各々が緩やかな歩み寄りを模索する中で、独立独歩の精神を重んじ、自身の努力と才覚により発展を目指す――等と言えば聞こえが良いが

実のところは単なるサイド2宙域のはみ出し者であった。　自コロニーの権益のために周辺コロニーの領海を度々侵犯しては、政治問題に発展させ、その隙をついて様々な要求を行う――どちらかと言えば、その方法はならず者に近い。尤も宙域を規制する航宙法が穴だらけであり、現実にそぐわないものであることを考慮すれば、彼らのやり方に、必ずしも非があるという事も出来なかった。

本来ならば、レーザー観測により割合はっきりと領海侵害の事実を証明することが可能であるため、問題がこじれる事はないはずなのだが、足並みを揃えにくい各コロニーの隙をついたマケドニア政庁の巧みな外交戦術が一枚も二枚も上手であり、隣接するコロニー群にとっては悩みの種となっていた。しかも、彼らの技術レベルや経済力が低いことからその装備一式は型落ち品が多く、主力ＭＳがいまだにＲＧＭ－１０９《ヘビーガン》であるという現実は、必ずしも武力的脅威となりえないと考えられ、それがさらなる混乱の一因となっていた。

ただ、今回はいつものことと言うにはあまりにも事情が違った。マケドニア・コロニー部隊は艦隊行動をとりながら、領海を通過しようとしていた。単艦であればともかく艦隊行動を取られては、領海を警固する側としても黙ってはいられない。何よりもスポンサーであり、領海を侵害された当事者のコロニーが黙ってはいないだろう。

連邦政府が自衛手段としての戦力の保持を各コロニーに許可しているＵ．Ｃ．０１３８現在において、各コロニーの守備隊が所有するＭＳ数に規制はない。その所有数を連邦軍に届け出さえすれば、実質何機でも所有する事は可能だった。一基のコロニーの経済力から割くことのできるＭＳパイロットの育成費や高額の製造費及び維持管理費、あるいはコロニー守備隊の運営費用を考えれば、ＭＳの所有数＝戦力という図式は成立しえない為である。

しかし、ＭＳの運搬や大量の兵員を輸送する能力を持つ航宙戦艦

や巡洋艦については、話は別である。
ＭＳの推進剤に限界がある以上、それらを大量に運搬可能な艦船は他のコロニーあるいはサイドに対して脅威になりうると考えられていた。半世紀以上前の戦争を教訓としてそれらの所有は原則許可制であり、コロニー一基あたり、一個戦隊までと厳密に法で定められていた。
もっとも多分にもれず、この法律にも抜け穴が存在し、武装した民間船や、巡洋艦以下のクラスである駆逐パトロール艦といったものは数には入らない。あるいは民間軍事企業といった法律制定時には想定されていなかった存在にも適用されるかどうかは未だに議論の最中である。さらに、造船業をはじめとした様々な分野における産業の複雑な利権構造に関わる問題でもあり、法律とその抜け道を探す者達の間で、イタチごっことなっていた。

マケドニア部隊の侵害行為はどうやら意図的なものらしい。
「何、考えてんですかね、あいつら」
その解答は決して得られない事は分かっていたがそれでも口に出さずにいられない。常にぎりぎりのラインで他のコロニーと渡り合ってきた彼らにしてはあまりにもお粗末な行動であろう。クロムウェルの質問に解答することなくワイズナーは続ける。
「貴官たちはこれより直ぐに出撃し、侵入する敵に対し、警告行動を行ってくれたまえ」
「それだけじゃ……ありませんよね」
そんなことならばさっさとスクランブルをかければ済む事だ。わざわざ司令自ら出向いて、直接用向きを伝えるのだから、さらに何かがあるのは疑いようはない。おそらく、その内容は……。
「貴官の考えている通りだ」
まるでクロムウェルの思考を呼んだかのように司令が告げる。

「やっちゃって、いいんですね」
「うむ、但し……」
「相手に先に手を出させろ……と。しかも可能な限り領海に近付けて……」
「その通りだ」
どうやら、完全に叩き潰すつもりらしい。マケドニア周辺のコロニー政庁の皆々様は相当にお冠のご様子なのだろう。
「お願いがあります」
「言ってみろ」
迷うことなく即断する。
「この任務、自分一人だけで出撃したいのですが……」
「大尉！」
部下のヤードックだけでなくワイズナーやそばにいるキツネ野郎までもが動揺する。
「な、何を言ってるんだ貴様！　この任務は貴様の遊びではないんだぞ！」
「悪いが、今は緊急事態だ。あんたとじゃれ合ってる暇はない。下がっててくれ」
「貴様！　上官に向かって、なんだ！　その物言いは！」
状況を読まずにいきり立つ能無しの頭を飛び越して、クロムウェルと司令の目があった。クロムウェルは決して視線をそらそうとしない。そんな彼をまっすぐ見つめていた司令はやがて一つ溜息をつくと彼に返答をする。
「分かった。許可しよう」
「では、もしもの時にはくれぐれも部下の事をよろしくお願いします」
彼の返答に室内に動揺が走る。それを無視したクロムウェルは即座に行動に移る。退出しようとする彼にワイズナーが静かに声をかけた。
「クロムウェル大尉、君の命と装備もコストのうちであるという事

は忘れんでくれ」
　その言葉に振り返ったクロムウェルは完ぺきな敬礼で答え、部屋を後にした。

「大尉、待って下さい！」
　グリップに捕まり、ＭＳデッキに急ぐクロムウェルの後をヤードックが追う。
「一体、何考えてんですか、確実に戦闘になるんですよ」
　久しぶりの大掛かりな実戦の露払いとなるかもしれないこの一大事に、たった一人でのこのこと的になりに行くと言い出した困った上官にヤードックはあきれ果てている。
「足手まといなんだよ、お前らは……」
「大尉～～」
「お前らは、大人しく後ろで待ってろ！　もし、俺が帰った時に艦隊が損傷の一つもしていたら、中隊全員裸で宇宙遊泳させてやる！」
「なっ……」
　抗議の声をあげるヤードックを無視して、コックピットに潜り込んだクロムウェルは即座に機体を始動させる。デッキ内はすでに臨戦態勢が整っており、幾つもの鋼鉄の騎士たちがその出撃を今か今かと待ちわびている。
「大尉！　無事に帰ってきてくださいよ」
　全天周型モニターの一角に映ったヤードックは相変わらず半泣きのように見える。
「やかましい！　それを言うのはヴァネッサの役目だと何回いったら分かるんだ！」
――使えない部下である。溜息を一つついたクロムウェルは愛機デナン？（デュ）をカタパルトに乗せると一気に宇宙の闇へと飛び込んで行っ

た。

（２０１０／０４／１７　Ａｒｃａｄｉａにて初稿）
（２０１１／０２／１６　本サイトにて初稿）

04

ブッホ・コンツェルン――かつてのクロスボーンの反乱の首魁、ロナ家の母体となった企業体である。

過去の栄華はすっかりと消え失せ、解体してしまった今は見る影もない。一部では連邦政府の干渉により内紛が助長されたとも言われているが、その実は歴史の闇に葬られている。尤も企業という生き物は強かなものであり、コンツェルンの中核に位置していたＭＳメーカーであるブッホ・エアロダイナミックス社はロナ家の支配から表面上逃れ、政治色を消した健全な企業として現在も作業用ＭＳをはじめとして様々な分野で活動を行っている。

ブッホ・エアロダイナミックス社の初の軍用ＭＳであるデナン・ゾンの後継機として開発されたデナン？（デュ）は、ハードポイントシステムを採用し、ベルガ及びビギナシリーズや、ダギ・イルス等といった機体に搭載された高機動システムや特殊武装、索敵システムなどの様々な装備を追加あるいは交換することで幅広いミッションに対応する事が可能となっていた。潜在力及び拡張性に優れ、非常にコスト・パフォーマンスの優れた機体ではあるが、生産設備の少なさがネックとなり、アナハイム・エレクトロニクスの横やりもあって、高性能の割に評価は低かった。

高機動戦闘仕様のクロムウェルの機体は漆黒の宇宙を目標に向かって一直線に加速していた。しっかりと身体にかかる加速Ｇが脳内のアドレナリンを刺激し、クロムウェルの意識を覚醒していく。宇宙は心地いい。モニターの表示をダイレクトモードにして、カメラに直接映る生の宇宙を体感する。後方には自艦隊のテールノズルが

輝き、さらにその向こうには巨大なスペースコロニーが堂々と浮かび上がっている。

現在、彼のデナン?は射撃装備を外している。攻撃兵装はサーベルのみ。それすらもラックにしっかりとホールドされている状態である。もっとも奥の手はしっかりと隠しているが……。

今回の任務の目的は相手に先手を取らせ、戦いのきっかけがあくまでも偶発的な防衛戦である事を証明しなければならない。その為には極力こちらは数を減らし通常の任務であるかのように見せるのが常道である。ミノフスキー粒子を散布していないとはいえ、艦隊行動をとってくる以上、向こうにもそれなりの覚悟があるのだろう。このような状況ではシビアな判断が要求される。チームで動く事が基本となっているＭＳ隊とはいえ、先の読めない展開が待ち受けている以上、数を繰り出せばそれだけ個々の動きが制限される。あるいは近づいた途端に一斉砲撃される可能性ということも考えれば、無駄死にする数は少ないほどいい。クロムウェルは自身の意図をくみ取ってくれた司令官に感謝した。後は自分が任務を全うするだけであろう。

「やる気まんまんだな……マケドニアの奴ら」

４隻の艦の陣形を縦列陣にとり、ミノフスキー粒子も撒かずに公海上を堂々と進軍している。明らかに領海を侵犯する意図が見え見えの行動である。

「上等だ！　人を舐めるとどういう事になるかたっぷりと教えてやる」

気合いと共に一気にスラスターを吹かせ艦隊に突っ込んでいく。彼の動きに呼応するかのように艦隊から４機のＭＳのスラスターが煌いた。

どうやら奴らが、相手をしてくれるらしい。目標を確認したクロムウェルはにやりと笑うと、領海侵犯に対する警告アナウンスシステムを起動し、全チャンネルを使ってメッセージを送り始めた。お

約束のミノフスキー粒子による電波かく乱という言い訳を封じるために、光通信をも使ってメッセージを送りつける。今頃、向こうではにぎやかなメッセージのハーモニーが流れているだろう。無線を封鎖したのか、一瞬乱れた４機の敵機の動きが再びまとまった。それなりに訓練された部隊であるらしい。

「所詮は型落ち品だがな」

さらにペダルを踏み込む。クロムウェルと敵機が平行に飛び始め、いよいよ駆け引きが始まった。

４機の《ヘビーガン》がクロムウェルの機体を取り囲む。その包囲網から外れようとクロムウェルの機体は螺旋を描きながら飛行する。時折故意に機体を接近させ、敵機の技量とパイロット達の胆力を確認する。互いに射撃武器は外している。公海上でありながら、攻撃をしてこないところをみるとどうやら警告メッセージは十分に機能しているらしい。このまま４機かがりで、クロムウェルを封じこみあらぬ方向へさそいだして、その間に目的を果たすつもりなのだろう。

一瞬加速をかけ敵機を振り切る。ＡＭＢＡＣを使って方向転換したのちに再び加速をかけて、艦隊へと突進を始める。慌てて、クロムウェル機を追う４機の機体のうちの一機の動きが一瞬遅れた。

（こいつだな……）

即座に狙いを定めたクロムウェルは減速をかけると、自艦隊へと撤退すると見せかけながら、遅れた機体にとりつき、プレッシャーをかけ始めた。高機動状態での接近格闘戦も想定される現代のＭＳではパイロットを補完するセンサー類は非常にデリケートである。近接戦闘用武器の間合いも考慮に入れられ最低限、肉薄出来る距離には制限が加えられている。クロムウェルは自機のセンサーのリミ

ットを解除すると、さらにその限界距離を縮めていった。

少しずつ縮められる相対距離。それに反比例するかのように増えていく警告表示。コックピット内はけたたましい警告音がヒステリックに鳴り響き、表示がモニターを赤く染め上げていく。おそらく敵のコックピットの中も同様のはずだ。そして、衝突寸前の状況におかれたパイロットの心中は……。

呼吸が荒くなり、背筋が震える。だが、敵の機体の一挙手一投足を見逃さない。油断は即命取りとなる。

――そして、その瞬間は突然訪れた。

緊張状態に耐え切れなくなった《ヘビーガン》の頭部バルカンの火線が走る。一瞬早くそれを予想したクロムウェルは難なく回避する。そして反撃が始まった。

回避行動を行った軌道のまま軽く左肩のスパイクで下から突っかける。バランスを崩した《ヘビーガン》はあらぬ方向へと軌道がそれ、味方を一機巻き込んで爆発した。どうやらツキはこちらにあるらしい。動揺する敵機の隙をつき、さらに接近する。3機目の《ヘビーガン》はクロムウェルと距離をとろうとバルカンで応戦し、サーベルを引き抜こうとする。

「馬鹿め。こういう時は前に出るんだよ」

ビームシールドで防御しながら一気に間合いを詰める。そして左マニュピレーターにセットされた奥の手――ヒート・ストリングを射出して、敵機を絡め取る。ストリングから流された電流で幾つかの回路がショートしたのか《ヘビーガン》の動きはみるみる悪くなる。まだまだ、牽制程度にしか使えないヒート・ストリングだったが、それなりに効果はあるようだ。すかさず動きの鈍った敵機を絡め取ったまま背後にまわり、盾代わりにしながら最後の敵機を牽制すると、クロムウェルの《デナン?》はビームサーベルを引き抜い

た。Ｉフィールドに固定されたビーム粒子が盾にした《ヘビーガン》の機体を明るく照らした。

「ほらほら、どうするよ？　お客さん」

寮機を盾に取られて平静でいられるほど場馴れしてはいないようだ。明らかに同様の色が見られる。すかさず、クロムウェルは横目でモニターに表示される現在の戦域状況を確認する。すでに敵艦隊は領海ラインにかかりつつあり、後方の味方艦隊からは支援のＭＳ隊が一斉に発進している。任務は完ぺきに果たしたようだ。ならば後は……。

「逃げるだけだ！」

スラスターを全開にして、盾にした機体を、残りの一機に向けて押し出した。突然のクロムウェルの行動に戸惑う敵を尻目に、ストリングを強制切断すると、おまけとばかりにサーベルを突き立て、そのまま蹴り飛ばす。３つ目の爆発が確認できたころには、クロムウェルの《デナン？》は一目散に戦域を離脱していた。

隠密行動中の戦闘ブリッジの中で、《エナド》艦長レイノルズは目の前で刻々と変化する作戦宙域の状況を冷静に観察していた。現在２０８特戦隊の３隻の艦――《マーセナス》《エナド》《オバマ》――がその巨大な艦体をダミー隕石に隠してゆっくりと作戦予定宙域に向けて慣性航行中だった。浮かび上がる立体映像画面にはすでに２隻の艦を撃沈され、這う這うの体で戦域から離脱しようとするマケドニア・コロニー部隊とそれを堂々と追撃する《ＡＳＳ》艦隊の様子が映し出されていた。

戦域はコロニー領海線上から公海上へと押し戻されていた。さんざんに撃退されていたマケドニア部隊だったがどうやら最低限度の

役割は果たしてくれたらしい。公海上で無意味な戦闘を行う部隊の鎮圧――連邦軍による武力行使のためのお膳立ては十分に整っていた。

「阿漕な作戦だな」

命令とはいえ、さすがに、詐欺師の片棒を担いでいるのは多少なりとも気が引ける。もっとも正義の軍隊など存在はしない。軍隊とは所詮道具でしかない。自身が敗北すべき状況へと追い込まれたのは、意思決定を持つ者の怠慢であり、己の戦略の未熟さを呪うべきであろう。

この作戦には二つの目的があった。一つはサイド2宙域を混乱させるマケドニア・コロニーに制裁を加え、己の立場を自覚させること、そしてもう一つは、現在各サイドにて、大きな力を持ちつつあるコロニー部隊や民間軍事企業に対しての牽制、その見せしめとして複数のコロニーに跨り、大きな勢力の一つとなりつつある《ＡＳＳ》が標的にされた。地球圏の覇者はあくまでも連邦政府であり、その剣である連邦軍こそが宙域の法律である――軍上層部《お偉いさん達》の机上では常にその図式が成立していなければならなかった。

本来ならばこの仕事は連邦軍サイド2駐留艦隊の仕事であった。しかし、幸か不幸か、自分達第２０８特戦隊という手ごろな駒があるのをいいことに情報だけを流して、高みの見物を決め込んでいるらしい。敵性勢力がさんざんに駆逐されたのを見計らって、一番おいしいところを持っていこうという訳である。

自身の手を汚さず、損害を出さず、利益だけを手に入れる――戦略としては実に優れたものではあるが、正直、同じ連邦軍の一員としては納得しがたいものがあろう。尤も個人の事情など連邦軍という巨大組織の都合の前にはものの数ではない。

１００億以上の人類を束ねる政府が後ろ楯となった連邦軍と言う

決して一枚岩ではない組織には、様々な思惑をもつ者たちが魑魅魍魎の如くうごめきあって、それぞれの勢力を牽制しながら成り立っている。

２０８特戦隊もまたそのような勢力の様々な思惑と妥協の上に成り立っていた。上層部（お偉いさん）の机上の計画を実現すべく、多くの矛盾をはらみながらも、任務を与えられている。今回の任務もそのようなものの一つであった。

すでに巡洋艦《ブッシュ》は搭載力をはるかにオーバーする１５機のＭＳと共に別行動をとっている。《エナド》ＭＳ隊のレッドチームもそちらで別行動をとる予定だった。

残る３隻の艦で倍近い戦力を相手にする――その作戦開始の合図はマケドニア・コロニー部隊の３隻目の艦が沈んだ時となるのであろう。瀕死の部隊の前に颯爽と援護に現れた騎兵隊――そんな役回りを演じることになるはずだ。

だが、敵対するターゲットが『連邦軍』という看板に委縮するだろうか？　あるいはそれを試すこともこの作戦の目的なのかもしれない。一度疑念に駆られてしまえば、際限のない迷宮にはまり込んでしまいそうになってしまうことに気付いたレイノルズは意図的に思考を止めた。連邦というシステムの中枢に近づけば近づくほど、誰もが無意識に持っている不信感はより明確になっていく。様々な思惑の垣間見える巨大な組織に対して盲目的な忠誠と信頼を示す事など阿呆の極みである。

その事を認識しながらも部下の前では毅然とした態度で組織に忠誠を示してみせる事――それが一隻の軍艦を預かるレイノルズの義務だった。軍人はいついかなる時も命令に従わねばならないのである。

けたたましいコールが鳴り響き、次々に悪い知らせがネズミのように駆け回るブリッジの中で、マケドニア艦隊司令官は抗議の声をあげる。「連邦軍は何をやっているのだ！」

連邦軍との共同作戦をとることで、人の命を金勘定でしか測れない傲慢な資本力の権化ともいえる民間軍事企業《ＡＳＳ》を叩き潰し、コロニー主義こそがもっとも正しい社会の在り方である事を証明しなければならない。

《ＡＳＳ》艦隊を挑発し、公海上に引きずり出し、連邦軍と共に叩き潰す――その為に自コロニーの戦力をかき集めてこの戦いに臨んだのである。しかし、肝心の連邦軍がいつまでたっても現れなければ意味などない。明らかに型落ち品の装備では資本力に裏打ちされた《ＡＳＳ》の戦力にかなうはずもない。気合いと根性ではミサイル一つ堕とせないのが現実である。

『自分達は嵌められたのだ！』

決してそのような事は認められない。何らかの手違いがあって援軍が遅れているだけなのである。劣勢であればある程己を正当化しようとする心理と藁にもすがる安直な希望が、さらなる部下達の死につながっている等とは想像すらしていない。

「連邦軍です！」

ようやくの思いで、待ち焦がれた報告を受けた次の瞬間、マケドニア艦隊の旗艦ブリッジは火の海に包まれていた。

「右翼より艦隊出現！　総数３隻！　連邦軍です」

「何、どういうことだ？」
オペレーターの報告を聞き《ＡＳＳ》艦隊司令官ワイズナーは怪訝な顔をする。このタイミングで突然現れた連邦軍――おそらく隠密行動をとっていたのだろうが意図が解せない。そして、さらなる報告に驚きの表情を浮かべることとなった。
「交戦停止命令だと？」
いかに連邦軍とはいえ、そのような命令をされるいわれはない。自分たちは法に則って正当な行為を行っているのである。航宙法を破り、他のコロニーに対し、艦隊を組んで無用な侵害行為を行ったのならば相応の痛手を受けるのは当然であるはずだ。むしろ、正当な防衛行為を行わなければ、この先クライアントに対して示しがつかない。強力な戦力を保持しながら日頃は何もしない癖に、こういう時だけ現れては理不尽な命令を下す――権力を傘にきたその身勝手さにワイズナーはいらだたしさを覚えた。
「『クソ喰らえ、引っこんでろ、ウスノロ共』と伝えてやれ」
ワイズナーの隣りに座る艦長が毒づいた。
「『我が隊は、現在連邦航宙法に基づき正当な防衛行動中である。すでに事態は掃討戦の局面であり、貴艦隊の援護は不要である。』――でよろしいでしょうか」
「十分だ！」
通信士官の機転にワイズナーはにやりと笑いながら返答する。しかし、その直後の連邦軍の行動に青ざめることとなった。
「連邦艦隊よりＭＳ隊発進――さらに高エネルギー反応増大、艦砲射撃――きます！」
同時に、数条のメガ粒子砲の光が漆黒の闇を走り抜け《ＡＳＳ》艦隊を襲った。思わぬ方向からの攻撃に無防備だった数隻の艦が損傷を受ける。
「馬鹿な！　奴らは何を考えているんだ」
傍若無人な連邦艦隊の突然の暴挙に、震える拳をおさえつけながらも、ワイズナーは全艦艇に連邦艦隊を敵性部隊として認識させる。

ブリッジ内に走る動揺を感じ取りながら、次なる命令を下す。
「ＭＳ隊に応戦させろ！　本部、及び敵艦にも通信をつなげ！」
何かの手違いがあったのかもしれない。急ぎ本部の意思を確認し、速やかな事態の打開を図らなければならない。多少気短かではあるが、その行動は非常に合理的であるオーナーの禿頭をワイズナーは思い浮かべる。いかに敵性部隊と認識しても、連邦軍は連邦軍である。大胆さと慎重さを兼ね備えている彼が連邦軍に対して打つ手を謝るとは考えにくい。
しかし、《ＡＳＳ》艦隊からの通信を連邦軍艦隊は取り合おうとしない。艦砲射撃を加えながら着々と公海上にＭＳ部隊を展開していく。そして、さらなる驚くべき報告がワイズナーにもたらされた。
「本部との連絡、取れません」
「馬鹿を言うな、向こうはコロニーだぞ、連絡手段なぞ幾らでもあるはずだ！」
「しかし……」
彼らもプロである。ワイズナーが思いつくほどの事はすでにやっているに違いない。それでも連絡がとれないとなると、コロニーに置かれた《ＡＳＳ》本部に何らかの異常が発生していると考えるのが妥当であろう。たとえ、この場で優勢を得る事が出来たとしても、連邦艦隊と事を構えるという事は、その後ろにある連邦政府に反逆したと取られ、確実に《ＡＳＳ》の死活問題になる。
（降伏するか？）
しかし、正規の軍隊ではない彼らにはその選択肢にも問題があった。民間軍事企業である彼らが戦いもせずに降伏をしてしまえば、今後のクライアントとの信頼関係の悪化は免れない。一度失った信頼の回復には大きな時間がかかるのは何の世界でも同じであろう。
「一体何が起きているのだ！」
混迷する事態と底知れぬ不気味な何者かの思惟にワイズナーは混乱していた。

合流した部下達から主兵装であるビームショットランサーを受け取り、さんざんにマケドニアＭＳ隊を追いまわしたアリー・クロムウェルは一足先に帰投していた。

整備兵に補給と機体調整を任せると、待機ルームで戦闘の興奮が収まらぬ勢いのままクロムウェルは激辛ホットドッグを片手に携帯端末で主計課のヴァネッサを呼び出していた。彼女は補給時の艦の物資調達や平時の物資管理などが主な任務である為、戦闘時は艦の安全ブロックへ退避していた。それをいい事にクロムウェルは自身の立場を利用して堂々と私的な通信を行っていた。このようなクロムウェルの図々しさが生真面目な彼女に受け入れられない一因であるのだが、本人はいたって気にしていない。

『知的な女を泣かせるのがたまんねえんだよ！』という信念の元、彼は暇さえあればアタックをかけているのだが、収穫に大きな変化はない。そして、その犠牲になっているのがヤードックを筆頭とした彼の部下達であるということは艦内の誰もが知っていた。

かわされっぱなしの会話を楽しみながらの最中にクロムウェルは異変を感じ取っていた。突然に艦体に走る衝撃。あり得ない事だった。すでに、ＭＳ隊はさんざんに打ち破られ、マケドニア艦隊は敗走しはじめている。いくらなんでもこちらの旗艦が攻撃を受けるとは考えにくかった。どこかの馬鹿が着艦にドジったとも考えられるが、艦に走った衝撃は規模が大きい。すかさず端末にアクセスし、状況を確認したクロムウェルの表情が一瞬曇った。新たな敵性艦隊の出現――総数３隻と戦隊にも満たない規模であるものの、その所属は連邦軍となっている。この事実は十分に士気に影響するだろう。

マケドニア（獲物）部隊がいまいち物足りなかったせいか、新たな敵の出現をＭＳパイロットとしてのクロムウェル自身は歓迎していたが…

…。

『お気をつけて』

クロムウェルの再出撃を察したのか、通信中のヴァネッサの碧い瞳は揺らぎ、表情はさすがに硬くなっている。安全区画にいるとはいえ、艦体に走った衝撃は彼女も感じているはずだ。現在待機中であり特に何もすることがない彼女たちには逆にそれは不安であろう。

「帰ってきたらデートだぜ」というクロムウェルの誘いに『ダメです』と僅かに微笑むと彼女は通信を切る。手に残ったホットドッグを一息に飲みこむとクロムウェルは宙に浮いていたヘルメットを引っ掴み、愛機へと急いだ。人が女を口説いている最中に邪魔をする野暮な連邦軍（バカ共）に制裁を加えてやらねば気が済まない――ＭＳパイロットの顔に戻ったクロムウェルは『すべて完了です！』という整備兵の報告に親指をたてて応えるとそのままコックピットへと飛び込んでいった。

（２０１０／０４／１７　Ａｒｃａｄｉａにて初稿）
（２０１１／０２／２０　本サイトにて初稿）

05

いつもの起床時刻よりも早くに目が覚めたのは虫の知らせというもののせいであろう。

自室の寝台で起き上がったカガチは妙な胸騒ぎを感じた。若い時からの苦労性が身に染み付いてしまっているのか、基本的に質素な生活を好むカガチの自室はそれなりの広さはあるものの、室内の調度品にはそれほどの贅沢さは感じさせない。もっとも応接間や客室といった外部の人間と接する場所には、それなりの贅をつくした調度品を置いているのは合理主義的な彼らしいところである。

しんと静まり返った暗闇の中で目を閉じて耳を澄ます。まだ夜の明けきらない屋敷内はいつもと変わらぬ静けさに包まれているように思えた。だが、彼の胸の内に生まれた胸騒ぎはなぜかおさまらなかった。違和感と共に寝台から抜け出したカガチは、暗がりの中、傍らのサイドテーブル上のインターホンを手探りで探し当てると、屋敷の警備詰め所を呼び出そうとした。仕事上、命を狙われる事もある彼の屋敷には最高のスタッフが常に警護に当たっている。カガチが滞在時の屋敷のセキュリティは常に最高レベルに保たれ、屋敷の内外にクモの巣のように張られたセンサー網になにか異常が感じられれば、即座にカガチの元に警備員たちが駆け付ける手筈となっていた。

しかし、インターホンで呼び出そうとした警護班がカガチに応じる事はなかった。いや、そもそもインターホン自体が通じていないのである。手に取った受話器を眺め、その事実に暫し呆然とする。

よく考えれば室内の照明も消えている。時間帯と主の行動パター

ンに合わせて、細やかに反応する室内の照明のセンサーが一切動作していなかった。

停電――それは考えられない事である。カガチの屋敷は例え何らかの事情で外部からの電源が途絶えたとしても屋敷内にある自家発電システムが直ぐに作動し、ライフラインの維持に最低限必要な電力は賄えるように設計してある。屋敷内に異変が生じている。カガチの胸騒ぎは確信へと高まった。

――突然上がった小さな女性の悲鳴。

しかし、直ぐにそれは収まり、代わりに多数の人間が動き回る足音と気配がそこかしこから感じられる。

暗闇の中、手探りでサイドテーブルの引き出しから拳銃を取り出す。荒事が不得手のカガチには、正直このような物の取り扱いは苦手だった。ないよりはましといったところだろうか。携帯端末で外部とアクセスをとろうにも日頃から己の行動スケジュールを秘書任せにして、それを常に持ち合わせる習慣のないカガチは室内のどこにそれを置いていたか直ぐには思い出せない。急ぎ身を隠すべく思案しようとした時だった。

侵入者と思しき集団の足音がカガチの私室の直前で立ち止まった。同時に扉が蹴り開けられ、室内に閃光が走る。暗闇に慣れ始めていたカガチの目にその光は激痛となって押し寄せた。数名の侵入者達が即座に押し寄せ、カガチを床にねじ伏せて、拘束する。右手に持っていた拳銃はあっという間にねじりとられた。

「なっ、何者だ！　貴様ら！」

だが侵入者達の答えはない。侵入したもののうちの半数はすぐに部屋の四隅に散ると周囲を警戒する。暗闇の室内に十本近いレーザーポインタの光が交錯し、そのすべてがねじ伏せられたカガチに向

かって固定される。
　無駄のない身のこなしと統率された行動、訓練された部隊のものである事は明らかだった。
『対象の確保、完了しました』
　部隊の隊長らしき男が無線で交信を始めた。耳障りなノイズの後で無線機から低い声で返事が響く。
『了解した。現状を維持せよ』
　どこかで聞いたような声と話し方にそれが誰のものであったか記憶を探るカガチ。だが、あまりにも異常な状況に興奮した彼の頭脳は記憶の検索を拒否した。
　交信が終わると同時に室内の照明が一斉に灯り、眠っていたシステムが復旧を開始する。
『おはようございます、旦那様。本日はＵ．Ｃ．０１３８……』
　平時はカガチの目覚めと共に、時刻やニュース、メールの有無を知らせるアナウンスシステムが周囲にあまりにも空しく響きわたる。アナウンスが終わると、重苦しい装備の擦れる音と男たちの息遣いのみが室内に響き、カガチがよく知るはずのその場所は異空間と化していた。

　床にねじ伏せられたカガチの耳に部屋の外から近づいてくる何者かの足音が聞こえる。どこかのんびりとしたあまりにも警戒心のないその足音のリズムになぜかカガチはいらだちながらも、直感的にその足音の主は彼がよく知る者である事を理解していた。
「どうも、御無沙汰しております、カガチ殿。アポイントなしでの突然の訪問という非礼、心よりお詫びいたします。もっとも先日はカガチ殿のほうからという事でしたので、これでおあいこという事にしていただければよろしいのですが……」
　あらわれた男はのんびりとした声で緊迫した室内の空気をぶち壊

す。カガチとはさほど年齢は変わらないものの、小柄な身長とは裏腹にしっかりと腹周りに付いた贅肉が彼の存在感を示す。周囲を警戒しながら刃物のように尖った空気を振りまく特殊部隊員達とは明らかに違う空気を纏って、床にねじ伏せられたカガチの前に男は立っていた。

地球連邦軍サイド2駐留部隊副司令ハンク・アインラッド少将――カガチとは懇意の中である。

アインラッドはニコニコと笑みを浮かべながら、懐かしい知人に再会したかのように訪問の挨拶をのべる。しかし、愛嬌のある丸メガネの奥の瞳は決して微笑んでなどいなかった。

「近頃は他人の屋敷を訪問するのに特殊部隊を放って、主を拘束したうえで挨拶をするのが正しいマナーなのですかな？」

屈辱に震えるカガチは精一杯の皮肉をこめてアインラッドに挨拶を返す。尤も床にうつぶせで拘束されている現在の状態では、じたばたする方が見苦しい事は十分に承知している。

「ああ、これは気付かずに申し訳ない。君達もう十分だから放してあげたまえ」

見えていないはずなどないのだから、明らかな確信犯である。アインラッドの指示に速やかに拘束を解いた2名の隊員達は、ライフルの狙いをカガチに合わせたまま、部屋の端へと移動する。拘束を解かれ、しびれる腕をさすりながらのろのろと起き上がろうとしたカガチをアインラッドが助け起こした。

「いやいや申し訳ない。デスクワークに追われて、荒事を離れていると、時々現場の荒っぽさというものを忘れてしまいがちになるものでして……」

屋敷の主に対してソファを進めながらアインラッドは言葉を続ける。

「ご安心下さい。カガチ殿。家人の方々の身の安全は保証します。尤も突入の際に抵抗なされた警備の方々の何名かは怪我をなさいま

したが、命の心配はございません」
　アインラッドの言葉にぎろりと彼を睨みつけながらもわずかばかり安心する。これだけの騒ぎで死者が出なかったのは幸運な事である。尤も1時間後のカガチ自身の命の保証はないのであろうが……。そんなカガチの様子に臆する事もなくアインラッドは室内に控える隊員の一人に命令した。
「ああ、君、すまないがメイドさんに頼んでお茶を二人分と何か軽いものを見つくろってくれるように言ってはくれないかね？」
　アインラッドの言葉に室内の隊員の一人が速やかに反応し、部屋を出ていく。
　まだ僅かにしびれの残る右手の状態を確認しているカガチを尻目にアインラッドは彼の正面のソファに腰掛け「失礼」と一声かけると懐に手を入れる。アインラッドの行為にびくりと一瞬警戒を示したカガチだったが、懐から取り出された物が煙草と携帯灰皿であった事を確認し、再びその警戒を僅かに緩めた。
　近時のサイド全体に広がる神経質なまでの清潔志向と魔女狩りとも呼べる健康ブームは、多くの愛煙家たちを追い詰め、旧世紀に制定された悪名高き『禁煙法』と同様の狂気じみた世相を大きく反映している。
「気ままに煙草を吸いたくて、出世したのですよ」
　常日頃から冗談のように繰り返すアインラッドの言葉だったが、彼のヘビースモーカーぶりを知るカガチは、それが決して冗談ではないはずだと確信していた。
　吐き出した煙をゆったりと燻らせながら、奇妙な静寂の時間が二人の間を流れる。明け方の光が差し込み始めた広い屋敷内は先ほどまでの喧噪が嘘のようにひそまり、静寂に包まれていた。

　突然、控えめなノックとともに破損した扉が開かれ、屋敷のメイ

ド長が入ってくる。建てられて日の浅いカガチの屋敷の家人としては比較的長く務めているもののうちの一人であり、すでに４０を過ぎてそれなりの貫禄のついた彼女であったが、このような異常な状況での給仕はさすがに初めての事であろう。

部屋の片隅に陣取る特殊部隊の隊員たちから発する無機質な鉄と硝煙の臭いに、幾分緊張した面持ちと足取りで、サイドワゴンを運びこみ、ソファに座る二人の元へとおそるおそる近づいていく。

『失礼します』という言葉と共に僅かに震える手を抑えながら、テーブルの上に二人分のティーセットとサンドウィッチ、フルーツの盛り合わせ、最後に見事な意匠のクリスタルの灰皿を丁寧に並べると一礼し、主であるカガチと目を合わせ、彼の無事を速やかに確認する。弱冠怯えの色の残るその表情にカガチが精一杯の微笑みを返すと、わずかばかり安堵したのか、その表情が緩んだ。安堵した彼女は主に決して恥をかかせてはならないとばかりに「ごゆっくり、どうぞ……」と無礼な来客達に対して丁寧に挨拶すると、入室してきた時とは異なる足取りでそのまま部屋を後にした。

気丈な彼女の事である。主の無事を確認した以上、ここからは使用人のプロとしての戦いを無作法な訪問者達に挑むに違いない。極上のお茶と菓子を準備し、そこらのメイドごっこをしている小娘共が束になってもかなわない胆力で、『皆様の仕事と同様に、お客様をおもてなしする事が主に命ぜられた私達の仕事です』という言葉と共に、『おもてなし』という好意を武器に、想定外の事態に困惑する兵士たちにそれらを勧め、見事、状況を制するのであろう。

そんな情景を思い浮かべたカガチはいつの間にか自身の緊張がほぐれ、思考が冷静になりつつある事を自覚した。もはや、じたばたしても仕方がない。それよりもこの状況においてもまだ自分を消そうとしないアインラッドの真意を探る事が今のカガチに出来る唯一の事である。

そう考えたカガチはゆっくりとティーポットに手を伸ばし、温められた二人分のカップに上品な香りと色艶の紅茶を、しっかりした手つきで注ぐ。ここは彼自身の屋敷なのだ。例え無礼な客であっても主自ら丁寧にもてなす事こそ、奪われた誇りを取り戻す最善の策であろう。難を言えば、寝間着姿のままというのがいささか心もとなかったが……。

そんなカガチの心情を読み取ったのであろうか？　冷静な視線でカガチの振舞いを確認したアインラッドは、僅かに笑みを浮かべると室内で彫像のように起立している部下達に命令を下した。

「外してくれたまえ」

アインラッドの意外な命令にそれまで彫像のように起立していた隊員達の呼吸が僅かに乱れる。想定外の命令だったのだろう。丸腰のアインラッドを一人にしてもいいのか？　隊長格と思われる男の顔に一瞬、迷いが浮かび上がるが即座に組織の駒としての顔を取り戻す。男の指示に従い、隊員達は速やかに退出していく。がらんとしたカガチの私室内にはアインラッドとカガチのみが残された。

「さて、何からお話しいたしましょう？」

一本目の煙草を吸い終わり、背もたれに深々と身体を預けたアインラッドの言葉を皮切りに戦端が開かれる。自身の命は風前の灯である事を自覚しながらもカガチは相手の真意に切り込んでいく。

「まずは先日の海賊狩りについての説明を聞きたいのですが……」

おそらくこの暴挙はあの一件に端を発しているに違いない。まずはその原因を探るべきであろう。挑むようなカガチの視線を軽くかわしながらアインラッドは話し始めた。

「おおよそお察しの事でありましょうが、あれは私が月本部に情報をリークいたしました。まあ、理由は政治的な物です。」

「私があの作戦にどれだけの資財を投入し、各方面の折衝に大変な苦労を重ねたかをご存じの上で、ですか？」

「当然です」

間髪をいれないアインラッドの返答はある意味すがすがしい。も

っとも予想はしていた事なので、もはや腹も立つ事はない。権力を握ったものとの交渉ごとなど利用されるのが当然である。

「彼らはコロニー政庁だけでなく連邦政府の闇部にもいろいろと関わっていましたからね」

連邦軍が介入することで、様々な不正の証拠を闇に葬ると同時に多方面にたっぷりと貸しを押し付ける――決して表に出てくる事なく裏でほくそ笑む者達に感謝されると同時に、首根っこを押さえられ、ぐうの音も出なくなってしまった者達も大勢いるだろう。

本来ならば自身が得るはずだった利益を横取りされたカガチは渋面を作る。そのようなカガチの様子を気にする風もなくアインラッドは言葉を続けた。

「カガチ殿、確かにあなたは聡明な方だ。いち早く未来を見通し、最良の選択肢を選びとり、迅速に行動する――一代で大きな組織を作り上げつつあるあなたの人としての器や能力の前では、私のそれなどとても足元にも及びはしません」

「……」

「しかし、今そんな私にあなたは拘束され、その命は風前の灯となっています。この差はどこから生まれたものでしょう?」

そんなことは問われるまでもない。組織力の差――圧倒的な多数と百年以上の歴史、そして現在に至るまでに流された多くの血を礎にした連邦の国力――そんなものに比べれば、今のカガチを支えているものなどあまりにも薄っぺらい紛い物でしかない。

「軍事力とは表面的には平和に見えるこの時代においても確かに有効な手段です。今や連邦の支配力が地球圏の隅々まで行きわたり、小規模な地域紛争以外は起こり得ないと言われております。しかし、兵器(おもちゃ)を使ってのドンパチなど戦争のほんの一面でしかありません。そして軍事力という手段、あるいは戦争という行為は、気の遠くなるような長い人類の歴史の中で、多様な価値観によって様々な解決手段を生みだした人類という種がもつ負の財産のほんの一部でしかありません。そして強力な軍隊とは強い経済基盤の上に立つ民衆に

支持され、彼らの剣となり盾となるものであって初めて成立するものなのです」

いつになく饒舌なアインラッドにカガチは不信感を浮かべる。一体この男は何を言いたいのだろうか？　彼の言葉の一つ一つを反芻しながらカガチはアインラッドの真意を探る。

「確かに連邦政府の国力は強大です。しかし、今の体制が長続きしないと思っている賢明な者は少なくありません。様々な分野でその破たんの兆しは見え隠れしています。連邦政府のエリートたちが百年以上にわたってあれほど固執していた地球を捨て、月への遷都を容認せざるを得ない事態はその好例といえませんかな？」

それはカガチも予期していた事だった。経済の中心が地球から月、月からコロニーへと変わりつつある今、その歪みはますます拡大し、確実に連邦の屋台骨を蝕みつつあった。ゆえに多くのコロニーにおいて、様々な分野でカガチのような成り上がり者が次々に生まれる現状へと繋がっている。

「しかし、遷都の直接の理由は木星からのテロを防ぐ為……ではありませんでしたか？」

「あれは方便ですよ。あまりにも子供だましな……ね。尤もああいう理由でもなければ政府の官僚たちの面子が立ちませんからね。流動化しつつある世界をコントロールする力を失っているという事実だけは絶対に認めるわけにはいかないのですから。そして、何よりも自分達の権益や利権を失ってしまう連中の支持が得られなければ、遷都など簡単に出来るものではありません。世の中がいかに変わろうとも自分達だけは安泰だ――多くの人間はそう考えるものです」

人とは愚かな生き物。特に自分に対してのこととなるといかに聡明な者でも驚くほどに物事が見えなくなるものである。

「常に収奪される側であったコロニーが強い経済基盤を持ち始め、さらには自身を守ることが出来るほどに力をつけ始めれば、次に彼らが望む事は何でしょう。そして、その事に気付かぬままに古き体勢の理屈で彼らと接すれば、はたして世界はどのような答えを出す

でしょうか？」
「不平も持つものが力を増し、徒党を組み、やがては大きな破壊の流れを生みますな」
「しかし、問題も生まれます。物事をただやみくもに破壊するだけではその先に未来等あり得ません。否定の先には何も生まれないのです。世界がその事を理解している限りは小規模紛争でガス抜きされる現状が続き、連邦政府も安泰です。しかし、その先にあるものを人々が見出すことが出来たのなら、社会の変革を望む力は怒涛のように流れ込んでいくでしょう」
「その先にあるものとは？」
「さあ、それは一介の軍人である私には分かりません。むしろ、それを見出すのはカガチ殿のような方ではないのかと考えております。ただ、一つだけ私に言える事はそれを見つけるためには拝金主義者であってはならないということです」
「拝金主義者？」
「ええ、確かに金の力というものは偉大なものです。理想や生真面目さだけでは人も組織も動きません。それはお分かりでしょう。しかし、金とはただの手段でしかありません。いかに世界が変わっても決して目的とはなりえないのです。所詮、金は金。代価に見合うものを得られなければ人はそこに価値を見出しませんし、より多くの金を積まれれば人は簡単に裏切ります。木星戦役以降のほんのわずかな時間で作り上げられた今のあなたを支えている物は、所詮金で作り上げられたものでしかありません。一見派手に飾りつけられてはいるものの、実態の薄さというものには貴方ご自身が気づいていらっしゃるのではありませんかな？」
　カガチ自身もすでにその事には気付いている。しかし、長い時をかけて積み上げられたものには決してかなわない歯がゆさばかりはどうする事も出来ない。自身が極力目をそむけていた事を他者にまざまざと指摘されるのは、腹正しいものだ。
「人の歴史を見ればお分かりになるでしょう。世界の変革の節目に

おいてはそれを起こすのは人間そのものに他ならず、そして、必ずといっていいほどそこには新たな理念や、思想といったものが生まれます」

「理念、思想ですか……。そのような物が目先の事しか見えぬ大多数の一般大衆に受け入れられるとは思いませぬが……」

「受け入れられる必要などないでしょう。要は目標たり得ればよいのです。未来に希望を見出すことのできる都合のいいウソ……不満というエネルギーを一気に流し込む事のできる目標があれば、それが真理であれウソであれ大衆はなびくものです。最近のものであればジオン・ダイクンでしょうか？　彼の残したニュータイプ論は、良くも悪くも世界に大きな影響を与えてしまった……」

「連邦軍の将官であるあなたがそれを言うとは意外ですな」

「事実は事実として認めねばなりません。つまらぬ偏見で事実にふたをしてしまえば、見えるものも見えなくなってしまうでしょう。ニュータイプ論はまぎれもないあるべき世界の未来だった。そしてその幻想的といってもよい理念ゆえに、それは利用され、悲惨な選択肢へと繋がっていった――過去の歴史の中に存在する幾多の歴史的事実と同様に……。これはまぎれもない事実なのです」

「私にそのような物を見つけ出せと仰られるのですか？」

その質問にアインラッドは応えようとしなかった。かわりに再び煙草を取り出すとゆったりと火をつけ、うまそうに煙を吸い込んだ。

「私個人としましては、カガチ殿の人となりを高く買っていることも事実なのです。常日頃から十分な便宜を図って頂いていることも考慮する要素の一つではありますがね……。しかしながら、私も連邦軍という組織に属し、その権限において組織を動かす以上、相応の結果を出さねばなりません。まあ、言うなれば保身という奴です」

「……」

「もう、ご理解頂けておられるでしょうが、カガチ殿の身の安全を保証する代償として十分な生贄が必要なのですよ」

「私の安全？　十分な生贄？」

てっきり消されるものとばかり思っていたカガチはアインラッドの意外な言葉に混乱する。そんなカガチの様子を尻目にアインラッドは残酷な事実を突き付けた。

「現在、サイド2宙域で貴殿の《ＡＳＳ》艦隊と我が軍の特務部隊が交戦中です。そして同時に当コロニーの《ＡＳＳ》本部が私の配下によってすでに制圧されています」

「なっ……」

衝撃的な言葉とは裏腹にアインラッドは再び火をつけた煙草をゆっくりと燻らせる。

「馬鹿な、一体何の名目で……。第一、サイド内でそのような事態が起これればコロニー政庁やメディアが黙ってはいますまい」

「彼らとて懐をさぐられれば痛いところの一つや二つはあるものです。そして、所詮は能動的な他者に対して尻尾を振るか、あるいは噛みつくことしか出来ぬ者達の集まり……、落とし所の理由などなんとでも付けられるものです。不正な経理操作、違法な武装集団への武器供与疑惑、内乱予備罪……などなど。おりしも先刻の『海賊狩り』で連邦軍の評価は上がっていますし、きっとコロニー各政庁のお歴々も進んで協力してくれることでしょう」

含みをもたせたアインラッドの言葉はカガチを打ちのめす。どう考えても詰んでしまっている現在の状況の打開は不可能だった。

「私の命の代わりに《ＡＳＳ》を差し出せという訳ですか」

「いえいえ、ほんの少しばかり己の立ち位置を確認して頂くだけですよ。今後の為に……というやつです」

丸メガネの奥の目を細め、ゆっくりと煙草の煙を燻らせる。吐き出された濃い紫煙がゆっくりと拡散して薄れてゆく様はまるで世界のあり方そのものを指し示しているようだった。

「さて、それでは私はここらでお暇しなければなりません。なにぶん様々な事後処理がありますので……」

いくつかの吸い殻が無造作に放りこまれた灰皿に、火のついた煙草を押し付けるとアインラッドは立ちあがる。すでに様々な状況に

打ちのめされているカガチには、声をかける気力はなかった。そんなカガチにアインラッドは優しく声をかける。

「昔から『明けない夜はない』と言います。どうか一日も早く立ち直られますよう心からお祈りいたしております」

カガチの窮地を自ら演出しておきながら、しらじらしくも慰めの言葉をかけるアインラッドだったが、そんな彼の言葉にカガチは返す言葉もなかった。呆然とソファに座り込んでいる彼を尻目にアインラッドはいそいそと部屋を後にする。事態がすべて完了したわけではない。

未来においては分からないが、力を失った今のカガチには利用価値はない。それよりも一連の事態に右往左往するであろう者達からどれだけのものを引き出し、自身のチップとなす事が出来るか……連邦という巨大なゲーム盤の上で自身の立ち位置と生き残りをかけたアインラッドのゲームは始まったばかりだった。

（２０１０／０５／０１　Ａｒｃａｄｉａにて初稿）
（２０１１／０２／２４　本サイトにて初稿）

06

（こいつらさすがにプロだな……）

突然の横合いからの襲撃にも動じず陣形を立て直し、ＭＳ隊で迎え撃とうとする《ＡＳＳ》艦隊の様子をモニターで確認しながら、カークはそんな感想を抱いていた。練度も高く、統制は十分に取れている。何よりもマケドニア部隊をさんざんに打ち負かした後なので士気も上がっているようだった。先日の海賊達とはまるでレベルが違っている。戦力差はおよそ2倍といったところだろう。

友軍であるはずのマケドニア部隊は残念ながら露払いにもならなかったようで、むしろ、敵の士気をあげる事に一役買ってしまったようだ。尤もこちらの作戦士官の頭の中には最初から彼らは数に入ってはいないのだろう。実質２０８特戦隊と《ＡＳＳ》艦隊との戦闘であるといっても過言ではないらしい。

艦砲射撃を終えた互いの艦艇が陣形を整えながら安全距離まで下がると同時に、迫りくる《ＡＳＳ》ＭＳ隊に対し、２０８特戦隊のＭＳ部隊は、６機の《Ｆ９１》を中心に網上に広がりこれを迎え撃つ。シャーリーとバッジョが放つ拡散ロングレンジビームランチャーの光弾が戦場を駆け抜けるのを皮切りに両軍が衝突する。最初の砲撃で数機の《デナン?》が爆発するものの、無事に回避した残りの敵機は迷わずライフルで応戦する。漆黒の虚空にエネルギー弾の閃光が激しく駆け抜け、それを受け止めるビームシールドの鮮やかな輝きが花のように広がると、さらにそこへ向けてビームの雨が降り注ぐ。両軍ともに犠牲を出しながらもその距離を縮め、やがて、事態は乱戦へ発展していった。

戦場が乱戦の様相に展開し始めると《Ｆ９１》チームの６機はいったん後方へと下がり戦域の端へと移動する。ロングレンジビーム

ランチャーという強力な武装は運動性を犠牲にするため、極力、敵部隊と対峙する時は一方向に集中させなければならない。
　ランチャーの威力を落し、精密狙撃にシステムを変更したシャーリーとバッジョを守るように４機の《Ｆ９１》はフォーメーションを組む。彼らの戦域に近づいた《デナン?》部隊は次々に堕とされ、それに呼応するかのようにさらなる敵が舞い込んでくる。
「まったく切りがねえ……」
　堕としても堕としても現れる敵機にカークは毒づいた。初期戦力に倍近い差があり、敵機の主力の《デナン?》は《ジャベリン》に比べ弱冠性能が高い。本隊の《ジャベリン》及び《Ｆ７１》隊は善戦しており、戦場が膠着し始めた分だけ、その勢いがこちらに向かってきているようだった。敵機の射程外である遠距離戦では分があるものの、接近されてはさすがのカーク達でも手間取ることとなる。《デナン?》の滑らかな運動性能とビームシールドの堅い防御、決して連射をせずに基本に忠実な回避技術、そして必ずエレメントを組んで行われる攻撃は、カーク達に的を絞らせない。ヴェスバーの性能もあって損害は与えられるものの撃墜に至るまでには多少の時間を要することとなる。そして、要される多少の時間が次の敵を呼び込み、さらなる敵機の波状的な攻撃へと繋がっていく。
（この程度の奴らにいちいち手間取ってられるか！）
　守ってばかりでは埒が明かない。しびれを切らしたカークが単独で飛びだした。
「カーク！」
　フォーメーションを無視したカークをひきとめようとしたサカキだったが次の瞬間、さらなる状況の変化を確認する。
　カークと同様にそれまで大人しく戦っていたジュベールが、こちらもしびれを切らしたかのようにカークの機体を追って敵部隊に突っ込んでいく。突然の２機の突進に敵部隊の間に動揺が走る。
　正面からの敵機の攻撃をビームシールドで防御しながら突撃したカークとジュベールの機体に群がるかのように、７、８機の機体が

各々を追撃する。２機の《Ｆ９１》は追撃機の攻撃をあざ笑うかのようにひらりとかわしながら大きく左右へと広がっていく。そして、緩やかな弧を描きながら再び中央で合流するかのように接近していった。《Ｆ９１》のスラスターを全開にして、追手との距離を徐々に開けながら、カークとジュベールの機体が激突するかの勢いで近づいていく。

様々な情報が次々に表示される狭いコックピット内で、強烈な加速Ｇを全身に受けながら、カークは歯を食いしばっていた。全天周モニターの中央に映るジュベール機の反応が徐々に大きくなり、高速で接近してくる。どうやら考えている事は同じらしい。

「気に入らねえんだよ」

カークは正面のジュベール機に向けてターゲットを設定する。左右のマニュピレータにヴェスバーをセットし、射程圏内まで近づける。カークの考えが正しければ、向こうも同じことをしているはずだった。後方からの攻撃は一切無視して、意識を正面にのみ集中する。そして、射撃管制システムがロックオンすると同時に発砲した。

漆黒の闇の中を、二本の光跡が接近するジュベールの機体の――、さらに後方の敵へと向かって鮮やかに走り抜けていく。ジュベールの機体のはるか後方で２つの火球が生まれると同時に、今度はジュベールの機体からも光跡が走り、カークの後方に二つの火球を生み出した。互いの後方の敵を打ち合った両機はスピードを緩めることなくさらに接近していく。

危うく、正面衝突するかと思われた2機の機体は、衝突の直前に僅かにその軌道をずらし、至近距離で交錯すると同時に第２撃を放つ。一瞬ビームシールドの光が輝いたもののヴェスバーの威力がそれを上回り、再び敵機が火球と化した。交錯したジュベール機を無視したカークは左のマニュピレータにビームサーベルを選択し、高速で接近する最後の敵機をすれ違いざまにその高熱の刃で切り裂いた。

あまりにも鮮やかな2機のコンビネーションに、接近しつつあったさらなる敵部隊が一瞬躊躇する。その隙をつくかのように、シャーリー達の４機の《Ｆ９１》がヴェスバーとロングレンジランチャーで敵機を砲撃する。膠着しつつあった戦場が一気に崩れ始め、その勢いは２０８特戦隊側へと有利に流れ始めた。

「く～～。派手ですね～。いやあ～、本当に素晴らしい！」

緊張した空気がすでに飽和状態に達している《エナド》内戦闘ブリッジにて、技術顧問であるガーディ・ブライアンは表示される戦域情報と《エナド》ＭＳ隊の活躍に歓声をあげる。戦場で火球が一つ生まれるたびに、敵味方を問わずその中で確実に一つの命が散っていく。その現実に対し、彼のあまりにも場違いな歓声は周囲をいらだたせるものでしかなかったのだが、その事を彼は一向に気にする様子もない。眼前で繰り広げられる戦場の映像と時折《エナド》の艦体を揺らす振動を、まるで遊園地のアトラクションに乗った子供のように楽しんでいる。

「ミスター・ブライアン……」

平時と変わらぬ様子で艦長のレイノルズがブライアンに警告を促す。

「申し訳ないのですが、戦闘指揮に差しさわりが生じますので、もう少し静かにしては頂けませんかな」

この手の人間に良識を求める事は無駄だという事はすでに分かっている。ブライアンの立場上、戦闘ブリッジから叩き出すわけにもいかず、極力機嫌を損ねぬよう、言葉を選びながらレイノルズは彼に沈黙を促した。

「これは申し訳ありません、艦長殿。こんな派手な航宙戦闘を間近

で見るのは初めてなもので……。いやあ、さすが連邦の軍人さんは凄いですねえ。正義の剣で並居る悪の軍団をばっさばっさと……」

「ミスター・ブライアン！」

芝居がかったブライアンの台詞回しに今度はきつい調子でレイノルズは彼をたしなめる。すでに彼に向って流れる周囲の空気は敵意に近くなっている。彼の反対側の座席に位置するコーナーに至っては、震える拳を必死で押さえつけているようだった。

「はいはい、申し訳ございません。静粛にでしたね……、静粛に……」

レイノルズの厳しい表情を軽く笑顔で受け止めながら、ブライアンは肩をすくめると再びモニターに向かう。渋々とモニターに向かうブライアンの様子を確認したレイノルズは再び各所に指示を出し始める。レイノルズの警告で多少の留飲が下がったのか、戦闘ブリッジ内の乗組員たちは再び己の役割に集中し始める。各所からの指示と報告が行き交い、再びブリッジ内は戦闘中にふさわしい張り詰めた緊張感に包まれ始めた――と思われたのもつかの間、再びブライアンが歓声を挙げ、ブリッジ内の空気が硬直化し始めるのはほんのわずかばかり先の事だった。

部下達を率いて《ＡＳＳ》艦隊の守備についていたクロムウェルは、膠着しつつあった戦場の流れが変わり始めたことを敏感に感じ取っていた。十機以上のＭＳが一気に堕とされ、向かってくる火線の量は格段に増加しつつある。さらに、その原因となったであろうＭＳ部隊のスラスターの光跡がこちらへと接近している。

慣れ親しんだ《デナン？》の性能は十分に把握している。ＭＳ戦が、ある程度パイロットの腕に左右されるとはいえ、目の前で起き

た戦線の崩れ方には異様な物があった。おそらく目の前に立ちはだかるのは相当に手練の部隊なのであろう。そして、彼らのターゲットが自分達になりつつある。本能的にそれを嗅ぎ取ったクロムウェルは武者ぶるいをする。

（上等だ！　やってやろうじゃねえか！）

即座に部下達にコールをかけると、迫りくる敵部隊にターゲットを設定する。

「おい、マジかよ！」

センサーに識別された接近する敵の機体識別を確認したクロムウェルは思わず喜びの声をあげる。彼の目の前に立ちふさがるのは地球圏で最高の性能を有する《Ｆ９１》。相手にとって不足はなかった。自分より強い敵を自身の技量と才覚でねじ伏せる。クロムウェルにとってこの上ない喜びだった。

「遅れるんじゃねえぞ！」

部下達に発破をかけると、９機の部隊の戦闘に立ったクロムウェルの機体は一切の迷いなく敵の只中へと突っ込んでいく。

――カーク達６機の《Ｆ９１》とクロムウェルの部隊が激突した。

派手な動きをする一機に目を付けたクロムウェルはそれを己のターゲットに設定するとヤードックに戦闘指揮を任せ、目を付けた敵機に向かって突っ込んでいく。

残る戦力比は８対５――いかに《Ｆ９１》の火力が強力とはいえ、日頃から苛めまくっている部下達の技量があれば、負ける事はないはずだ。接近してヴェスバーを封じてしまえばあとは、技量と胆力の勝負である。少なくともそれほどに、クロムウェルは己の腕と愛機の性能を信頼していた。

激しい加速Ｇが全身を圧迫する。歯をくいしばって、その重さに耐えながらも迫りくる敵機の挙動からは決して注意を逸らさない。こちらの機体がヴェスバーを有する《Ｆ９１》であるにも関わらず、迫りくる敵ＭＳの動きには全くのためらいがない。ファースト・アタックの直後に自機にとりついたのはかなり厄介な敵――おそらくエースクラスである事をカークは感じ取っていた。有利な距離をとってから攻撃を加えようなどと甘い事を考えれば即座に食いつかれるだろう。ビームライフルを後腰部に戻すと、両のマニュピレータにビームサーベルをセットし敵機との距離を少しずつ詰めていく。《デナン？》の武装に関するデータ・特に奥の手についてはすでに了解済みだった。

接近戦は恐ろしい。必要なのは技術でなく度胸である。どちらがより一歩先に踏み出すか、それが勝負の分かれ目となる。

喰らいついた敵機に放されまいと執拗に追いすがりプレッシャーを与え続ける――クロムウェルは持ち前のしつこさで目の前の《Ｆ９１》を追い続けていた。執拗な接近戦にしびれを切らしたパイロットが己の有利な距離を確保しようとわずかに見せる隙――それがクロムウェルの狙いだった。

「へっ、死なばもろともってね……」

距離をとられれば、ビームシールドの防御力などものともしないヴェスバーの一撃で必ずやられる事になる。身体にかかる圧倒的なＧに耐えながらクロムウェルは《Ｆ９１》の軽やかな動きに食らいついていく。

リスク覚悟で距離を殺した接近戦ならば、多少の性能差など問題はない。そして、このような状況を制するのは実戦において磨き抜かれた勘と経験である。数と性能に頼り切って厳しいだけの訓練に明け暮れる連邦軍のパイロットごときに遅れをとるはずなどない。己の技量に絶対の自信をもつクロムウェルに迷いはなかった。だが

時として絶対の自信は傲慢になり、傲慢は綻びへと繋がる。目の前の敵パイロットがクロムウェルの想定外の人間であることが彼の唯一の誤算だった。

「そういう戦い方にはうんざりしてんだ！」

クロムウェルの予想に反して、カークはさらに一歩機体を近づけた。両機はすれすれの間合いを保ち合いながら高速で宙域を螺旋飛行する。

先に手を出したのはカークだった。姿勢を微妙に変えて、胸部マシンキャノンで牽制する《Ｆ９１》に対し、ビームショットランサーで反撃を加え、そのままショットランサーをビームランスモードに切り替えると、カークの《Ｆ９１》に突撃する。二機の螺旋の軌道がどんどん狭まりついには直線となって衝突する。サーベルとランスのビーム粒子を固定するＩフィールドが互いにぶつかり合い、二機の周囲を明るく照らす。

《デナン？》の左側に回り込むことでヒート・ストリングスを封じこみ、ランスの強力なエネルギーを二本のサーベルでいなしながら、カークは隙をうかがう。強力なビームランスとの真っ向からの衝突はこちらに分が悪い。弱冠押され気味である事を感じながらもカークは冷静さを保ちながらも戦いの熱に身を任せていた。

激しい攻防の熱に冒されつつあったのはクロムウェルも同じだった。先手をとり、格闘戦で僅かに押しているものの敵機の防御は堅い。そして、明らかに何かを狙っている敵パイロットの思惑を敏感に感じ取っていた彼は攻撃の手を休めるわけにはいかなかった。

一瞬、機体のセンサーが反応すると同時に、クロムウェルの目が《Ｆ９１》の機体からパージされる白っぽい何かをとらえた。驚異的な動体視力で瞬時にそれが、ビームライフルである事を確認すると同時に、敵機を猛追する。ダミーの代わりに質量のあるライフルを使い、センサーの撹乱を図ったのだろうがそうはいかない。この

まま接近し続けてヴェスバーを封じれば後はビームランスのパワーで押し切れる――そう確信するクロムウェルの視界に、敵機から再び大質量の物体がパージされる様子がちらりと映った。

（えっ……）

生じる迷い。もはやパージできるものなどないはずだった。宙空に漂う見慣れぬ形状のその物体がヴェスパーである事を理解した1秒に満たぬ時間。押していたクロムウェルの心にわずかな隙が生まれた。

「悪いな、ヴェスバーってのは取り外せるんだよ」

左のヴェスパーを機体からパージさせ僅かに敵機が気をとられた隙をついて、そのまま後方に距離をとったカークは右のヴェスバーをセットする。射軸をしっかりと確保すると同時に敵機をロックオンする。ヴェスバーが火を噴き、伸びた光跡がクロムウェルの《デナン?》を至近距離から鮮やかに貫いた。

「やりやがったな……この……」

漆黒の宙域に鮮やかな花となって爆散するクロムウェルの《デナン?》。彼の激しい生き様を示すかのように宙域に鮮やかに飛び散ったその輝きはほんの一瞬のことだった。飛び散った機体の破片は闇の中へと消えていき、やがて周囲は何事もなかったかのように静寂に包まれていく。モニターに映し出されるその様子を眺めながら、カークは強力な好敵手とのほんのひと時の邂逅に対して敬礼をむけた。戦場は変化し続ける。わずか一瞬の後には、カーク自身がその輝きとなってしまう事もありうる。

パージした武装を回収したカークは劣勢な戦いに奮闘しているであろう仲間と合流する為に宙域を後にした。

（２０１０／０５／０１　Ａｒｃａｄｉａにて初稿）
（２０１１／０２／２７　本サイトにて初稿）

07

１―２―２にフォーメーションを切り替えた《エナド》ＭＳ隊は迫りくる８機の《デナン？》との交戦を開始していた。敵のエース機を一人で受け持っているカーク機のかわりにジュベール機を先頭にジャクソン機とサカキ機がフォローし、シャーリーとバッジョが後方から援護する。

これまでの敵部隊とは比較にならないほどに統制がとれており各機の技量も高い。ファースト・アタックで一機も落せなかったのは初めての事である。

先行するジュベールがライフルで牽制の射撃を行いながら敵の前衛をひきつける。４機の敵に群がられながらもジュベールの機体は躍るように敵機の攻撃をかわしていく。

統率された部隊が無意識に生み出すリズムをしっかりと読み取った上での驚異的なジュベールの回避技術に後列に位置するサカキとジャクソンは舌を巻く。自分たちとは次元の違う彼の戦い方に、敵でなくてよかったという安堵感とわずかばかりの嫉妬を感じながらも、二人は残る敵を迎え撃っていく。便宜的なエレメントを組んだ２機のリーダー機が残る４機を迎え撃ち、後方からバックアップの２機が彼らを援護する。同数ならば負けるはずはない。《Ｆ９１》の性能に絶大な信頼をよせる《エナド》ＭＳチームは、細心の注意を払いながらも堂々と迫りくる敵機を迎え撃つ。

「ちっ、シャーリー！　一機抜けたぞ！」

「見えてるわ！」

包囲を突破した一機の《デナン？》がロングレンジランチャーを構えたシャーリーの機体へと突撃する。射軸をうまくずらすように回り込みながら《デナン？》はシャーリーの機体に急接近していく。

とり回しの悪いランチャーを抱えた機体に接近戦は不利である――確信したかのように《デナン?》は迷いのない動きでシャーリーの機体へ迫っていく。ビームショットランサーで中間距離から撹乱しつつ、ヒート・ストリングで動きを封じこみランスの一撃で息の根を止める。最も基　本的な必勝パターンを頭に描きながら《デナン?》のパイロットは迷いなく己の機体を目標に突進させる。

しかし、迫りくる敵以上にシャーリーは冷静だった。即座にロングレンジランチャーをパージして、迫りくる《デナン?》の眼前に放り出す。

ＭＳサイズに匹敵する全長を誇るランチャーの質量を利用し、敵機に衝突を回避させ、突進を防いだ。射出されたストリングがランチャーを絡め取り、慌てて強制切断を行おうとする《デナン?》のわずかな隙をつき、後方に宙返りする要領で左背部の４連ビームガトリングを《デナン?》に浴びせる。ビームシールドでそれをガードしながら態勢を立て直した《デナン?》は武装をビームランスモードに切り替え、再びシャーリーに突進する。

「悪いわね。ホントは格闘戦が得意なの……」

いつの間にか左マニュピレータにセットしたビームサーベルを逆手に構えたシャーリーの《Ｆ９１》は、ビームランスを構え必殺の一撃とばかりに突進する《デナン?》のコックピットを正確に貫いた。瞬時に動きを止めた《デナン?》をシャーリーの《Ｆ９１》が蹴り飛ばす。糸の切れた操り人形のような濃灰色の機体はくるくるとバランスを崩しながら、闇の中へと消えていった。

ブリッジ内に投影される作戦概要図に次々に表示される芳しくない戦闘報告にワイズナーは苦虫を噛み潰していた。半減したＭＳ隊

の中にはすでに許可なく戦域を離脱し始めているものまで現れ始めている。明らかな敵前逃亡行為であるが、所詮は金で雇われた傭兵、組織に対する忠誠度というものは正規の部隊に比べればあきらかに低い。いや《ＡＳＳ》という組織自体がまだそこに所属するすべてのものにそれを信じ己のすべてを投げ出すだけの運命共同体たる性格を持つに至ってはいなかった。頼みの精鋭部隊もすでに宇宙の塵と化し、敗色濃厚な状況にワイズナーは決断を迫られていた。

連邦艦隊出現と同時にすでに艦隊の進路をコロニー領海内へと向けているが、このまま逃げ切る事はおそらく不可能であろう。本部との連絡も取れぬ今、領海内へ逃げ込んだとしても果たして、それで事が収まるのかは疑問である。

「ＭＳ隊接近します」

手薄になった守備隊の隙をついて二機のジャベリンが一目散に旗艦に迫りつつある。

「投降信号を打ち出せ！」

艦隊を率いる司令官として屈辱的な命令をワイズナーは絞り出すように告げる。負けを認めるのならもっと早くにするべきであった。様々な人の世の事情を考慮したがゆえに招いた自身の決断の遅さが、多くの部下の命を散らせることになってしまった。

命令と共に次々に打ち出される投降信号の鮮やかな輝きを目の当たりにしながらワイズナーはふと疑問に駆られた。けっして負けるはずの戦いではなかった。不意を突かれたとはいえ、直前の戦闘の勝利で士気も高く、戦力も倍近く開きがあった。兵の練度も決して低いわけではない。正規軍と比べても決して遜色はないはずだった。

しかし、蓋を開ければこの敗戦である。敵ＭＳ部隊にも損害はあるもののこちらの部隊の損害とは比べるべくもない。癖だらけの指揮官に率いられた精鋭部隊を無傷で退けた《Ｆ９１》を有する部隊の存在ははっきり言って誤算であった。同時にそんな部隊を有する艦隊が偶然にもサイド２付近にいる事が何よりも疑問だった。

「司令、敵ＭＳが……」

怯えたようなオペレーターの声にワイズナーは意識を取り戻す。
守備隊を突破した2機の《ジャベリン》のシルエットが投降信号の輝きの中に鮮やかに浮かび上がる。しかし、その姿にワイズナーは違和感を覚えた。浮かび上がる《ジャベリン》のシルエットにどこか悪意のようなものが感じられた。
「敵MSにロックオンされています」
再び悲鳴のような声で報告するオペレーターの声。艦橋内の空気が一気に動揺する。
「馬鹿な、こちらは投降の意思を示したのだぞ!」
対艦用武装であるメガスピアを装備した2機のジャベリンは《ASS》艦隊の意思を無視するかのように無慈悲に2対の兵装を旗艦に向けていた。
「撃ち落とせ、エンジンの融爆にかまうな!」
ワイズナーの怒号にこたえるかのように艦体の迎撃装備が火を噴いた。しかし、僅かに射出が早かったメガスピアが、旗艦の艦橋部を打ち抜いた。撃ちこまれた二本のメガスピアはそのまま抉りこむように艦を貫き内部で爆発する。旗艦が爆光の華と化す中でメガスピアを打ち出した二機の《ジャベリン》が、損傷した《デナン?》のビームランスによって貫かれるシルエットが鮮やかに浮かび上がった。

モニターには数基のスペースコロニーが悠然と回転しながらその巨体を堂々と星の海に横たえている様が映し出されている。
コロニー領海線に近い空域に位置していたレッドチームは与えられた任務をこなすべく、本隊が戦っているであろう宙域に生じた光を眺めながら、静かに待機していた。

今作戦ではヴェスバー装備のノーマル仕様で挑むこととなった３機の《Ｆ９１》に与えられた任務は、戦域を離脱するであろう部隊の追撃及び殲滅――容赦のない作戦内容とその重さにロン・フェイカー准尉は愛機のコックピット内で身震いをしていた。

敵戦力数に及ばない自戦力をさらに分割する――教本を完全に無視した作戦内容とそれを平然と受け止める上官たちの神経に彼は内心辟易としていた。

さらに、ほんの数時間程度ではあったが臨時の乗艦となったクラップ級巡洋艦《ブッシュ》では、先任パイロット達のヤジ混じりの歓迎を受け、ＭＳデッキが満杯である事を理由に、レッドチームの３機の《Ｆ９１》は艦の舷側に固定されて移送されていた。神経を尖らせた上官達と《ブッシュ》ＭＳパイロット達の皮肉なやり取りの間に立たされ、ただでさえ緊張した精神は戦闘前から限界に達しそうだった。

士官学校では優秀な成績であったにもかかわらず、いざ部隊に配置されれば、上官たちの動きに全くといっていいほどついてはいけなかった。加えてフェイカーは現在のチームメイトから全く信頼されていない事を自覚していた。なんとか役に立とうと努力をしてみるものの、そのほとんどが空回りをし、上官の鉄拳が飛んでくる始末だった。

挙句の果てには『チキンハート』などと不名誉なあだ名を与えられ、整備兵にまで笑われている事にも気づいている。

（うまくやらなければ……）

己を鼓舞する心情とは裏腹に自身の心臓は激しく鼓動し、その音が無線を通して上官たちにまで聞こえているような気がした。

「来たぞ」

見れば、ノイズの混じるレーダーに僅かに機影が映っていた。セレン少尉の言葉にさらに鼓動が跳ね上がる。二人の上官たちは敵機

に向かって猛然とスラスターを吹かせて、突進し始めた。
（出遅れた！）
何度も飛んできた鉄拳の味を思い出す。これ以上殴られてはたまらない。二機の寮機にかなり遅れてフェイカーはふわふわする下腹に力を込めてペダルを踏み込んだ。加速Gを受けた体がシートに押し付けられるのを感じながら、彼は一刻も早い戦闘の終了を心の奥底で願っていた。

「へっ、楽勝だ、こんな奴ら！」
２つめの火球が消え、周囲が再び闇に包まれ始めるとレッドチームのリーダーであるエナは僅かに緊張を解く。
ファースト・アタックの際には誰もが緊張する。大抵は冷静さを失い、夢中になって終わるものだ。幾度かの実戦をくぐりぬけてもそれは変わらない。加えて、彼女達レッドチームの力量は低い。個人的にはジャクソンやサカキに自身の実力が劣るとは思っていないが、いかんせん他のメンバーの実力に問題が多い。フロントアタックのセレンはもともとバックアップに配置されていた人間であるため、敵に突撃し突破口を切り開くフロントアタックの任はいささか重い。彼女なりに必死で役割を果たそうとしているがこればかりはどうにもならない。そして、もうひとつの問題が……。
「あのノロマ、又、遅れてやがる」
遅れて接近しつつあるフェイカーの機体を確認しながらセレンが苛立たしげに告げる。
「まあ、いい。あいつは数に入っちゃいねえ……」
「ほどほどにしときな……」
貧乏くじをひかされた苛立ちを隠せないセレンをリーダーであるエナは宥める役割に回る事が多かった。時として怒鳴りつけることはあるものの、フェイカーもまた彼女達の部下である。いかに使え

ないとはいえ、チーム戦が当然である現代のＭＳ戦において《Ｆ９１》という機体を預けられている以上、彼もまた重要な戦力の一つだった。

士官学校出たての彼の経歴を考えれば、今の状態は仕方ないとも言えよう。いや、むしろよくやっているといえるかもしれない。しかし、命のやり取りをする戦場では『一生懸命にやっています』という言葉は通用しない。結果がすべてだった。

「す、すみません」

多少、顔をひきつらせながらフェイカーからの通信が入る。セレンがフェイカーに対して何事かを言おうとする前にエナは先手を取ってフォーメーションの指示を出した。ツートップ――力のない自分達に最適なフォーメーションを選択し、敵を迎え撃つ。戦いで生き残るには現時点での最良の選択肢を見出し、チームで一丸となって目的を果たす事が必要である。仲間内での足の引っ張り合いなど愚の骨頂――その事を理解しているエナは、ぎすぎすしたチームワークをなんとかまとめる事に心を砕いていた。

遅れて戦域に到着したことでセレンからの罵声を覚悟していたフェイカーは、何も言わずにフォーメーションの指示を出したリーダーであるエナの態度に内心の動揺が隠せなかった。

（又、落胆させてしまった……）

訓練兵時代は、厳しいながらもあんなに楽しかったＭＳの操縦が今では苦痛にしかならなくなっていた。あらゆる場面で上官から罵声を浴びせられ、もはや自信など欠片もなかった。いつになったら終わるのか、実戦の最中にただひたすらに戦いが終わった後の事ばかり考えている自身にうんざりしていた。

（仕方がない、いつもの事だ……）

一度失ってしまった信用を取り戻す事は難しい。いや、それ以前

に初めから信用などされていないのだから、どうしようもない。湧き上がってくる思考は逃げの一手。自身が場違いな存在であるという感覚だけがフェイカーの心の中に充満していた。

「聞いているのか！　フェイカー！」

セレンの怒声がコックピットに響く。

「す、すみません……」

ほとんど条件反射で出てくる心のこもらない反省の言葉にモニターに映るセレンの顔がさらに歪む。目をそらしたフェイカーは、はるか彼方で散発する戦闘の光を目にしながら、一刻も早く次の戦闘に突入して、この場をやり過ごすことを心の底から望んでいた。

皮肉な事にそんなフェイカーの願いが通じたのか異変は突然に訪れた。

全天周モニターの正面で天頂面からまっすぐに光跡がのびる。そして、自機のすぐ前方で大きな爆発が起きる。ＭＳの撃墜――今日が二度目の実戦となるフェイカーにはようやく慣れ始めた輝きだった。

（えっ？）

鮮やかに咲く光の華――一瞬、何が起きたのか、フェイカーには理解できなかった。そこにはつい先程までエナの機体があったはずだ。彼女に新しいフォーメーションを指示され、その通りに動き、次の敵の登場を待つ……はずだった。

（ナニガ、オキタノダ……）

浮かび上がる疑問。

「……畜…生っ！」

途切れがちな無線にセレンの悲鳴が入る。目をやれば、セレンの機体はすでに何者かと交戦中だった。次々に繰り出されるライフルの射撃とサーベルの斬撃に防戦一方のセレンの機体はみるみる追い

詰められていく。
（ナニガ、オキテイルノダ……）
落ち着け、冷静になれ、必死に呼吸を整えながら現状を理解しようとする。しかし、無情にも彼に現状を正しく理解する時間は与えられなかった。
ロックオン警報が張り詰めたコックピット内に鳴り響き、目の前に再び光跡が生じた。条件反射的に天面を見上げ、フェイカーは本能的に理解した。彼に向って死神の翼が舞い降りてきた事に……。

リリアのロングレンジライフルによる遠距離狙撃が生み出した爆光を合図に、ひそかに潜行していたゴルドの《Ｆ９７》はターゲットに対し砲撃を加えた。同時に寮機のジノも残りの一機に対し攻撃を加えているだろう。己の知覚の片隅でそれを感じながらゴルドは目の前の獲物に一気に襲い掛かった。
全身を深紅に染めたセレンの《Ｆ９１》。おそらく部隊内で尤も攻撃的なポジションにつくであろうその機体に対し、ゴルドの《Ｆ９７》は砲撃を加えながら接近し、間合いに入るや否やビームサーベルで切りつける。流石に敵も対応が早いが、それでも不意を突かれた事による形成の不利は容易に覆せない。動作の全てが後手に回りセレンの機体は一気に追い詰められる。
距離を詰めるゴルドの機体に対して、距離をとってヴェスバーの一撃で迎え撃とうとするセレン機。勝負に対する積極性が両者の明暗を分けることとなった。
ビームシールドを展開したセレン機の左マニュピレータを強引に斬りおとし、《Ｆ９７》は頭部バルカンと胸部マシンキャノンを至近距離から無造作に撃ちこむ。数発の弾丸がセレン機の頭部に着弾し、メインカメラを損壊する。同時に被弾したセレンの機体のコックピット内のモニターは、輝きを失い、次々に無機質な壁へとその

姿を変える。煙の充満し始めたコックピットの中でセレンが最後に目にしたのは、わずかに輝きを失わなかったモニターに映った不気味な髑髏の意匠だった。

セレン機のコックピットに左腕のビームサーベルを突き立てたゴルドの《Ｆ９７》は、動かなくなったセレン機の腹部をけり飛ばすと右腕のビームライフルでとどめの一撃を放つ。最大出力の光弾がセレン機を貫き、光の華となって散っていく。攻撃開始から敵機が火球と化すまでわずか３０秒足らず……、文句なしの勝利だった。しかし、生み出した火球が輝きを失っていく様を眺めながらもゴルドの心中は複雑だった。

数時間前に《ゲオルグ》から出撃した３機のＭＳは例によってＡＢＣマントに身を包み、さらにダミー隕石にその身を隠してゆっくりと浮かぶ周辺のデブリと共に宙域を漂っていた。情報どおりに配置についた連邦軍の追撃部隊の位置を確認すると、ターゲットの設定を行う。このような行動が可能だったのは、おそらくはアナハイムを通じて得られたであろうネーナからの情報故だった。

連邦の特務部隊による隠密作戦――その情報がダダ漏れとなっている事実は、かつて軍に在籍していた身としては、心中穏やかではない。自身が信頼するべき後方の味方に裏切り者が存在する――命をかける戦場にその身を置く者にとってその事実は許容しがたいものがあるのは当然のことだろう。しかし、それも又、戦いの世界の現実である。ゴルド達、圧倒的少数が連邦という巨大な相手を敵に回すには、公正さやルールなどというものは頼りにならない。

ターゲットは本隊とは別行動を行う３機の《Ｆ９１》。彼らの機体の挙動から、チームワークに不和を抱え、連携がうまくいっていない事は明らかだった。ターゲットの位置を確認したゴルドは、パ

イロットが尤も安堵する瞬間――ファースト・アタックを無事に終えた直後を狙って攻撃を仕掛けた。
隙を見せたもの、もっとも弱い者に食らいつく。生存競争の鉄則をゴルド達は忠実に実行する。密林に潜む肉食獣の如く3機の《F97》は漆黒の虚空に紛れて隙だらけの獲物達へと近づいて行った。

（２０１０／０５／１６　Ａｒｃａｄｉａにて初稿）
（２０１１／０３／０２　本サイトにて初稿）

08

胸部に一対の翼のマーキングを施した所属不明の機体がフェイカーの機体に襲い掛かった。必殺の念が込められたその一撃をかわせたのは運が良かったと言うべきだろう。しかし、回避行動をとったフェイカーの思考は真っ白になっていた。

「畜生、堕ちやがれ！」

「ひぃ～～～～っ」

見ず知らずの人間から突然向けられた悪意と殺意。モニターに映る敵機からそれらを感じとったフェイカーは、激しく振動するコックピット内で恐怖する。自分の存在を消しさる事を唯一の目的として挑みかかってくる他者――敵というものの本質と理不尽さをフェイカーは初めて感じ取っていた。

――怖い

――逃げ出したい

――死にたくない

連邦軍への忠誠、エリートともいえるＭＳパイロットの証左、積み上げてきたあらゆる訓練の記憶も軍人としての誇りもすべてが吹き飛んでいた。顔は涙と鼻水とよだれでグチャグチャになり、押し寄せる死の恐怖でフェイカーは失禁していた。

死にたくない、生き延びたい――ただその一念で彼は敵の攻撃から逃げ回っていた。

「てめえ、ふざけるな。ＭＳ乗りなら堂々と勝負しやがれ！」

逃げ回るフェイカーの機体に対し、激情に駆られたジノはビームライフルで砲撃を加えながら追い回すものの、どれも致命傷になりえない。ただひたすらに逃げ惑うフェイカー機の無様な姿は、さらなるジノの怒りを引き出した。獲物を確実にしとめるために、ビー

ムサーベルを抜き放つと、フルブーストで突進する。
（まずいな……）
手間取るジノの様子を窺いながらゴルドは当惑した。
ジノの獲物は明らかに各下だった。だが、運が悪い事に、ジノとは動きの相性が合ってしまったようでギリギリのところでするりと逃れられてしまう。尤も相手のパイロットもすでにパニック状態に陥っているようで、その回避行動を意識してとっているわけではない。それはもはや出鱈目だった。そしてあまりにも無様な機体の軌道が逆にジノを混乱させていた。二人の戦いはもはや泥仕合と言う言葉にふさわしい様相を呈していた。
（嵌まったな……）
それは、ジノのような感性で機体を操るタイプが陥りやすい罠だった。経験を積めば、動きのリズムを変えてそのような罠を回避し、容易く敵機を絡め取ることが出来るのだが、いかんせん彼は若く、目の前で逃げ惑う敵を、ただがむしゃらに追いかけるだけだった。
（援護するか？）
敵機の注意がジノだけに向かっている以上、ゴルドに対しては完全に無防備、今なら難なく堕とす事が可能だった。しかし、それをやれば、ジノのプライドを害する事は確実だった。遠く離れた場所からこちらの様子を窺っているはずのリリアが援護をしないのはそういう事なのだろう。
ゴルドと彼らの間にはまだ信頼関係というものが完全に確立されているわけではない。些細なことでこじれればこの先の作戦においても支障をきたしかねない。鉄拳制裁などというものはせいぜい一度しか通用しないものだ。そして互いの信頼関係というものは長い時間と様々な経験を通じてしか成立しえない。かわりの効かない小規模集団内でのチームワークの不和は致命的である。
おそらくジノの腕なら眼前の獲物をしとめる事は可能であろう。しかし、残念ながら制限された時間内で、それを可能とするのはゴ

ルドの経験上不可能と感じられた。
（ぎりぎりまで、待つか……）
宙域のデータを横目で確認する。すでに異変を感じたのか、数機の機体がこちらに向かっているようだった。それを確認したゴルドは決断する。迷っている暇はない。いかに性能が優れていようとも所詮こちらは3機、今の自分達が確実に勝利するには奇襲と速攻で決着をつけ、援護が来る前に撤退する以外に方法がない。ゴルドは急ぎジノに命令を下した。
「時間だ！　撤退する！」
「まだだ！　堕ちないんだよ、こいつが……」
ジノの機体は両のマニュピレーターにヒート・ダガーをセットして、なりふり構わず逃げ惑うフェイカーの《Ｆ９１》を攻撃していた。ダガーの刃で削られるたびにボロボロになりつつある《Ｆ９１》の装甲から火花が散る。しかし、やはり致命傷にはなりえない。
こちらに近づきつつある敵機のスラスターノズルの数が増えはじめた。急がなければ手遅れになりかねない。いかに機体性能が高くとも、数というものが厄介なものであることに変わりはない。現時点において、《ゲオルグ》の存在が明らかになる事だけは絶対に避けねばならなかった。
意を決したゴルドはジノの機体をロックオンする。ビームライフルの銃口を向け、あからさまに攻撃の意思を示した。
「な、何の真似だ！　おっさん！」
攻撃の手を止め、動揺するジノにゴルドは答えない。ジノが追い詰めつつあったフェイカーの機体が這う這うの体でその場を離脱しようとする。と、同時にゴルドの機体が何者かにロックオンされた。コックピットに響き渡る警告音にゴルドの背筋がゾクリとする。おそらくリリアの仕業だろう。宙域からはるか離れた場所から二人の様子を見ていた彼女は、兄の危機に迷わずその脅威を排除する意思を示した。突き刺さるようなプレッシャーを背中に感じながらゴルドはジノに警告した。

「撤退する！　命令に従え！　上下関係は定めたはずだ！」
「ふざけんな！　味方をロックオンするなんて、あんた、何、考えてんだ！」
「甘えるな！　小僧！　お前の甘えで、艦に危険が及び妹が死ぬ事になるんだ！」
「なっ……！」
「お前は今、ただの傭兵じゃない。《ゲオルグ》のチームの一員だ。その機体を敵に引き　渡す事も俺達の正体を知られることも許されない。力を持った者には相応の義務が生じることを忘れるな！」
「でも、奴が……！」
すでに戦域を離脱しつつある取り逃がした獲物を未練がましく追い懸けようとする。
「奴の事は放っておけ、もう使い物にはならんはずだ。目的は十分に果たした！」
「……分かったよ」
その答えと共にゴルドはロックオンを解除する。直ぐにゴルドのコックピット内に響いていたロックオン警報も解除される。
背中に冷や汗をかきながらもゴルドは、それをジノに悟らせないように再度命令した。
「撤退だ！」
「……了解！」
２人の機体が一気にスラスターを煌かせ闇の中を駆けあがっていく。いかに数をそろえても《Ｆ９７》の加速力についてこれる追手など存在しない。二機は悠々と戦域を離脱し、帰還の途に就いた。
混沌とする戦域を離れ、無事追手から逃げ延びた事を確認したゴルドは、二機の寮機と共に《ゲオルグ》との合流ポイントに向かっていた。

静寂に包まれた宙域に悠然とたゆたうスペースコロニーの姿をモニターで眺めながら、ゴルドは物思いにふけっていた。

『力を持った者の相応の義務』――それはゴルドにとって嫌悪すべき思い出のこもった言葉の一つだった。そんな言葉を臆面もなく使って、自分より未熟な者を縛りつける――気付かないうちにゴルド自身もまた、かつて嫌悪し、反発した体制側の大人達と同じ事をしているのではないか――そして、その事を心のどこかであたりまえであると受け止めている事を認めていた。

世界の深みと複雑さを知るほどにのしかかってくる義務や責任という言葉――自身の器に不相応なその重さに必死に応えようとする者がいる一方で、そのような言葉を臆面もなく利用して、己の不作為や無責任を正当化し、『弱者』を踏みつけて生き残る『強者』や『勝者』と自称する者達。そんな彼らを軽蔑し、自身は決してそうはならないと盲目的に信じ込んでいたかつての若いだけの彼は、その若さ故に多くの過ちを犯していた。その苦い記憶が脳裏をかすめる。

『クソッ！　あと１０秒あれば堕とせたのに……』

無線を通して聞こえるジノの負け惜しみともいえる呟き。自身の感情のままに取り逃がした目先の獲物にこだわり続けるジノの姿にかつての自分の姿を重ねる、それなりに年齢と経験を重ねた今、あの頃と何が変わったのだろうかとゴルドはふと考え込む。

若者ならばおそらく誰もが一度は夢見るだろう時代を変革しようという野心、己の理想の世界の是非を仲間達と語り合い共に駆け抜けた戦場――だが華やかな祭りはいつしか終わりを迎え、その終焉と同時に退屈な現実の中に生きる圧倒的多数の日常に次々と皆呑みこまれていった。

裏切り、内紛、絶望……、共に夢を追った戦友たちが次々に消えていく中で、戦場という熱に浮かされてしまった自身は結局その場所から離れる事が出来ず、地球圏の様々な争いの場にその身をおい

てきた。
悪意、傲慢、猜疑、嫉妬……、およそ人の争いの中にあるあらゆる負の感情の中で、ただひたすらに生き残る事だけを考えて、戦ってきた。心の中にはどす黒い闇が長い時間をかけて澱のように溜まっていく。そんな生き方にいつしか疲れと限界を感じ始めた頃だった。彼にある変化が訪れたのは……。
「見えたぞ、おっさん」
ジノの言葉に我に返ったゴルドは合流ポイントであるコロニーの陰にひっそりと浮かぶ《ゲオルグ》の姿を確認する。隠密行動中であることが徹底されているようで、不用意な通信もビーコンによる派手な出迎えも行わず、ただ静かにその身を闇の中に潜めている。
「今はこれでいい。もう迷う必要はない……」
モニターの中央で先行する2機の寮機のスラスターの光を眺めながら、小さくつぶやいたゴルドはペダルを軽く踏み込むとすっかり見慣れてしまった母艦への着艦準備に入ることにした。

クラップ級巡洋艦《ブッシュ》ＭＳ隊ランサーズ小隊長レスリー・スナイプス中尉は閑散とした戦場跡に己の愛機《ジャベリン》を留めると、モニターの中央で力なく浮遊する《Ｆ９１》の残骸を横目に小さく溜息を吐いた。
いかに高性能機といえど、こうなってしまっては鉄屑同然だった。強襲者達の姿はとうに消えてしまい、そのスラスターの輝きすら漆黒の暗闇に見出す事は出来なかった。
（逃げ足の速い奴らだ……）
作戦の都合上臨時に編成され、わずか数時間前まで共に過ごしたパイロット達――《Ｆ９１》という高性能機を預かる故か、どこか

肩肘を張った二人の女性士官とヒヨッコを手荒なＭＳパイロットの流儀で歓迎した。決して笑みを見せようとしない３人の姿に一抹の不安を感じたものの、今作戦における自身の責任を全うする為の諸準備に追われ、いつの間にか新参者の動向など気にも留めなくなっていた。

「中尉、生存者です……」

「どうした？」

「それが、その……」

周囲を捜索していた部下の一人がどこかためらいがちに、搭乗しているはずのヒヨッコパイロットの応答がない事を報告する。部下から送られてきた映像には大破しかけた《Ｆ９１》が頼りなく浮かぶ様が映っていた。白を基調に朱でポイントされたその機体はあまりにも無残に傷つき汚れている。

機体識別信号から唯一生き残ったのがヒヨッコだったことにわずかばかり安堵したものの、その惨愴たる《Ｆ９１》の姿にスナイプスは眉をひそめた。急ぎ接近すると注意深く機体を接触させる。大破しかけた機体は、すでに戦闘は終了したものの未だにミノフスキー粒子を散布したまま沈黙を保っている。通信回路の一部が損傷しているのかコックピット内の様子をモニターでとらえる事は出来なかった。

頭部と両腕及び最強の威力を誇るヴェスバーは無残に損壊し、機体の随所がビーム兵器によって削りとられ、スクラップ同然という有り様だった。

「おい、生きているのか？」

接触回線を通したスナイプスの問いに返ってきたのはすすり泣く声だった。

「おい、生きているんだったら返事をしろ！　貴様それでも軍人か！」

スナイプスの恫喝にも返事はない。聞こえてくるのはわずかなすすり泣きの声ばかりだった。戦場にあるまじき場違いなその行為に

スナイプスは不快感を示した。
（まったく……これだから上層部の奴らの考える事は……）
戦場経験の浅いヒヨッコに分不相応な待遇を与えて増長させ、挙句の果てには無様な醜態をさらす。実戦が模擬戦とは異なるという事を無視して、高価な兵器（おもちゃ）を与えさえすれば、相応の結果が得られるなどと本気で考えているのだろうか。
連邦軍など地球圏の失業対策の一つであるなどと揶揄する無責任な世論に、なんら反論をしめさず、場当たり的な対応ばかりを行い、流動化する世界情勢の中で常に高度な判断を要求される現場の兵士たちの声を聞こうとしない上層部に対して、日頃から鬱積させていた不満が次々に浮かんでは消えていく。
損傷した《Ｆ９１》の核融合炉の出力が徐々に下がり始め、爆発の可能性が消えた事を確認したスナイプスは、コックピット内のヒヨッコに脱出を命じた。しかし、帰ってきたのは予期せぬ小さなつぶやきだった。
「イヤだ、もうイヤだ……ＭＳなんて、戦いなんて……たくさんだ……」
すすり泣きと共に聞こえる小さなヒヨッコの悲鳴のようなつぶやきにスナイプスはさらなる苛立ちを感じた。腹立たしげに接触回線を切ったスナイプスは損傷した機体から離れると、不機嫌な声で部下に回収を命じる。
モニターのはるか彼方には降伏を示す投降信号がわずかに輝き、本隊からなされた戦闘終了宣言を、巡洋艦《ブッシュ》の戦闘ブリッジに座るオペレーターから知らされたスナイプスは、彼の部下によって曳航されていく大破した《Ｆ９１》の姿を複雑な気持ちで見送ったのだった。

人工太陽の輝きがゆっくりと薄れ始め、コロニー内の空は夕方の色を一面に映し出している。屋敷の自室で一人きりになったカガチの元に、制圧された《ＡＳＳ》の本部から戦闘報告が届いていた。ＭＳと戦闘艦の半数を失い、多くの人員が死傷し、文字通り《ＡＳＳ》艦隊は壊滅といってもいい内容だった。報告された作戦概要から殲滅されてもおかしくはなかった所を見ると、この結果はおそらく連邦軍にとって予定通りの事なのだろう。

窓から入る夕方の色は傷付いた彼の心に深く染みる。しかし、不思議な事に彼の心には彼自身が積み上げたものを蹂躙されたことへの復讐心といったものは生まれなかった。人と世界の果てしない深み――自身はまだその表層で足をとられて転んだにすぎない。

死傷した人員および遺族への補償、失った戦力の回復、スポンサーである各コロニー政庁との折衝――眼前で問題が山積みとなっている彼だったが、暗闇のはるか奥底にほんのりと頼りなげに輝く小さな光を感じていた。アインラッドの言葉が何気なく脳裏に浮かび上がる。

理念と思想――多様な価値観を持つ人々を結びつけ、己のすべてを投げ出すだけの運命共同体ともいえる組織の確立。果てしなく遠い場所にある幻想ともいえるその言葉がカガチの心をとらえて離さなかった。

サイド2駐留艦隊及びサナリィ支社の接収、ガチ党とベスパの設立、マリア主義による救済とギロチンによる反乱分子の処刑――後の時代においてザンスカールの狂気と呼ばれることになる一連の出来事と共にフォンセ・カガチの名が歴史の表舞台に再び現れるのは……まだしばらく先の事である。

Ｃｈａｐｔｅｒ－？－了

（２０１０／０５／１６　Ａｒｃａｄｉａにて初稿）
（２０１１／０３／０６　本サイトにて初稿）

08（後書き）

Ｃｈａｐｔｅｒ一？掲載させていただきました。御精読ありがとうございます。

作中登場のフォンセ・カガチの経歴につきましては、著者の都合により脚色しております。『こんなの俺のカガチ様じゃねえ！』と思われました方、どうかご容赦頂ければ幸いです。

読んでいただいた多くの方々に心よりの感謝を……

01

滑らかな肌触りの湯面にうっすらと白い湯気が立ち上る。

香りづけのために浮かべられたいくつもの薔薇の花はその生命力をすべて湯の中に放出してしまったかのように力なく浮かび、数枚の花弁が大海に浮かぶ小舟のように頼りなげにゆらめいている。脱湯時に体に付着する感触がどうしても好きになれない彼女であったが、幼少時から彼女の身の周りの世話をする侍従たちの『高貴なる御方を彩るのには欠かせない花でございます』という奇妙なこだわりにすっかり慣らされてしまっていた。たしか旧世紀の時代から薔薇の花にまつわる高貴な女性の結末にはろくなエピソードがないはずなのだが、意固地な侍従達の耳には決して届く事はない。

「姫様、そろそろお時間になります」

すでに３０に手が届くかという年齢であるにもかかわらず未だに彼女の事を『姫様』と呼び続ける年長の侍従の言葉に従うかのように、彼女は華美な彫刻が施された大理石の湯船から立ちあがる。シミひとつない美しく磨かれた裸身から、その滑らかな曲線を伝って無数の水滴が名残惜しげにこぼれおちる。

湯船から離れるや否や、周囲に控えていた侍従達によって、即座に水分が拭きとられ、上質な天然繊維で作られた滑らかな肌触りのガウンが白い裸身を優しく包みこむ。用意されたリラックスチェアに彼女が優雅に腰掛けると頭部に巻かれていたタオルが取り払われ、先程侍従の一人によって丁寧に洗われた美しいプラチナブロンドの長い髪がはらりと解け落ちる。決してその行為を意識させることのない慣れた手付きの侍従に自身の髪の手入れを任せながら、彼女は傍らに置かれた薄めのコーヒーとともに、朝の日課に手をつける。

様々な方面から送られたメールや手紙――その大多数が大した内容の物ではなかったが――に次々に目を通した後で、昨日起きた地球圏の様々なニュースを一通りチェックする。政治、経済から様々な娯楽の方面まで、担当者によって手際よくまとめられた映像ファイルを脳裏に焼き付ける一方で、今日一日のスケジュールや会談相手の詳細を報告する侍従の声に耳を傾ける。

その間にも彼女の身支度は侍従達によって着々と行われ、控え目ではあるが上品な藍色のドレスにしっかりと結いあげられたプラチナブロンドの髪が美しく映える頃には、彼女――コスモ・クルス教団教主シェリンドン・ロナの慌ただしくも孤独な一日が始まることになる。

もしも人類が獣から人間たりうる存在となった時を問われたならば、それは彼らが神たる存在をはじめて創造、認識した時からだろう。そして、絶対者、あるいは創造主たる神による教えとされる宗教――それは様々な形で長い人の歴史に関わり続けていた。

時に――

長い歴史の中に連綿と語り継がれる普遍的な思想として――。

あるいは絶望的な現状からの魂の救済を目的として――。

あるいは個人の良心や規範の基準を指し示す規則・戒律として――。

あるいは多様な価値観をもつ人々をまとめるための血族や民族を超えた組織原理として――。

そして……血なまぐさい政争の道具として――。

数千年に及ぶ人の歴史の中で神と宗教は常に人の世にあり続けた。

宇宙世紀となった現代においてもそのあり方は変わらない。

連邦政府の棄民政策によって宇宙空間という過酷な環境に放りだされた人々の間に生まれたエレズムの思想は、やがてニュータイプ

主義へと昇華発展し、それを醜い政争の道具や戦意高揚のプロパガンダとして利用しようとする者たちの手によって変質させられ、世界は悲惨な戦争の道を歩んでいった。

コスモ・クルス教も又、そのような宇宙に住む人々の間から生まれた思想をもとに生まれたものの一つであった。際限なく進歩し続けるテクノロジーによって、地球すらも破壊してしまいかねない力を持ってしまった人類の存続には、高貴な精神性を持つ為政者による統治が必要不可欠である――というコスモ貴族主義思想により、彼らは新たな世界の秩序を見出そうとしていた。

同時に、違ったアプローチでのコスモ貴族主義の実現を目的としてフロンティア・サイドに理想国家コスモ・バビロニアが建設され、その軍事組織であるクロスボーン・バンガードは腐敗した連邦政府に代わって地球圏に新たな秩序を導こうという理想と野心にあふれる若者たちを原動力に華々しく宙域にその旗を立ち上げた。

――しかし、その壮大な試みは失敗に終わる。

いかに崇高な理想を以てしても、所詮人の強欲なサガと俗物的なエゴをひるがえす事など出来なかった。内紛に次ぐ内紛と裏切り――崇高な理想とはあまりにもかけ離れた人という動物の悲しい現実に、コスモ貴族主義という幻想は宗家であるロナ家の凋落とともに歴史の泡となって消えていった。

同様に、現在公的に確認されているロナ家唯一の血筋であるシェリンドン・ロナを教祖として傅(かしず)くコスモ・クルス教団もその規模を縮小させ、分裂に分裂を重ねてわずかに残ったクロスボーン軍の残党を彼女の親衛隊として受け入れることで、とあるコロニーの一勢力としてその存在をわずかに保っていた。

過去、連邦政府に公然と反旗を翻しながら、しぶとく生き残り続けた残党をとりこんだコスモ・クルス教団の存在は、連邦政府がコロ

ニーの世情に対して相変わらず関心が薄く、緩慢な統治の証しともいえた。

そんな環境にありながら、現在の教団はシェリンドン・ロナを教祖として傅きつつもその組織は日々弱体化の一途をたどっていた――。

『シャーリーの様子が妙だ……』

そんな相談をカークが受けたのは、溜まりまくった報告書や始末書の山との激しい攻防戦を終え、生ける屍と化して食堂の机に突っ伏し、現実逃避していた時の事だった。珍しく深刻な表情でそれを伝えにきたカークの機体を担当している整備兵のアイシャのただならぬ様子に、現実へと無理やり引き戻されたカークは相談を受けるや否や立ちあがる。

慣れない頭脳労働で溜まりまくったストレスの恰好のはけ口が見つかったのだ。いつも口やかましい部下の撹乱ぶりを眺めて、日頃の留飲を下げさせてもらおうとばかりに、カークはいそいそと彼女を探し始めた。鼻歌交じりに食堂を離れていくカークを見送りながら、アイシャが黒い微笑みを浮かべていた事をこの時のカークは知る由もなかった。

ラー・カイラム改級戦艦《エナド》の広い艦内には様々な施設が設置されている。

オートメーション化が進み旧世紀の空母のように、膨大な人員を必要とする事はないものの、それでも艦内には多くの人々が己の役割に従事している。ある程度行動に制限が加えられた作戦行動中、同じチームメートとして多くの時間を過ごしていれば、彼女が今ど

こにいるかはおおむね見当がつく。
心当たりの場所に向かいながらどうやって彼女をからかおうかと調子っぱずれの鼻歌と共に移動するカークの傍をすれ違った女性兵士が、奇妙な顔で見送った事に彼は気付かなかった。

心当たりの場所を幾つか覗いて、割合すんなりと発見できた目標は、キャットウォークの上でただ漠然と愛機の整備される様を眺めている。ただ、どこかいつもと違ってその姿に精彩はない。口さえ開かねば完璧な美貌は、いつになく憂いを帯び、その横顔に思わず魅入ってしまう。だが、そのまま観賞し続ける訳にもいかない。仮にも同じチームで背中を任せている以上、そのまま放置しておくわけにはいかないだろう。
つい先ほどまではからかってやろうなどと色々と悪だくみをしていたカークだったが、事態は彼が思っていたほど楽観的ではないらしい。
パイロットのメンタル面は生死に直結する重要な要素である。ここは日頃のお気楽上官ぶりを返上して、まともな助言で株をあげておくチャンスかもしれない。『よしっ』とばかりに気合を入れて、カークは彼女に声をかける。
「シャーリー」
だが、カークの呼びかけに彼女は気がつかないようだ。尤も彼らの周囲は機体や武装の整備の最中である。《Ｆ９１》の劣悪な整備性も手伝って、周囲には騒音と整備兵たちの怒号が飛び交っていた。
仕方なく、カークは彼女に近づきその肩を叩いた。
「なんだ、あんたか……」
気の抜けた顔でカークを確認すると再び整備中の愛機へと目をやる。
いつもなら、『気安く触らないで！』とか『セクハラよ！』などと飛んでくる暴言を覚悟していたのだが、そのあまりの手ごたえのなさにカーク自身が戸惑った。どうやらアイシャの言うように相当

の重症らしい。この手の案件の処理が苦手な自分よりも、隊長であるサカキに報告して、然るべき措置を取ったほうがいいだろうか…などという考えが一瞬カークの頭をよぎった。

「……で、何の用？」

隣で思案しているカークにシャーリーが気の抜けた声で尋ねる。

「いや、なんかお前の様子がおかしいからとアイシャに言われてな……」

「そう……」

再び気のない返事で黙りこむ。てっきり『よけいなお世話よ。ほっといて！』などという言葉が飛んでくる事をを予想していたが、その大きなギャップはカークの不安にますます拍車をかける。

「……で、何の用？」

「いや、だからお前の様子がおかしいからとアイシャに言われてな……」

「そう……」

――重症だ。どうやら事態は一刻の猶予を争う局面らしい。ただでさえ先日の作戦で三人のパイロットを失ってしまった《エナド》の艦内には微妙な空気が流れている。ここでシャーリーにまで問題が生じてしまっては《エナド》ＭＳ隊にとっては致命傷になりかねない。

「ちょっと、付き合え。……ここじゃ、うるさくて話もできねえ」

強引に彼女の左手を掴んだカークはキャットウォーク横のグリップを掴むとエレベーターに向かう。手を掴んだ瞬間、一瞬反射的に拒否の反応を示したものの直ぐに抵抗をやめ、シャーリーは黙ってカークにされるがままに付き従っていた。

人類が宇宙空間という環境を生活の場とするようになって一世紀以上がたつ。

すでにコロニーという人工の地で暮らす事が当たり前となり、地球という故郷に足を踏み入れる事が出来ない人間が地球圏の大多数を占める現代においても、人間がリラックスする為にはある程度の自然環境が必要である――そんなデータをもとに航宙戦闘艦の艦内には様々に工夫がなされたリラクゼーションルームの存在が欠かせない。尤も人の手の入らない生粋の自然はコロニーという人工の環境に育った人間にとっては過剰なストレスとなり害悪そのものでしかないという説も存在し、議論の分かれ目となっているところだが……。

旧世紀の潜水艦乗りの如く、特に低重力化で極度の緊張感を長期間強いられ続ける航宙戦闘艦の乗組員達にとって、高精度の立体映像技術や音響技術によってあたかもそこが別世界であるかのように錯覚させるこのリラクゼーションルームという設備は必要不可欠である。

低重力ブロックに位置するこの部屋にシャーリーを連れてきたカークは、いささか怪訝な様子でカークの様子を観察しているシャーリーの視線を無視して、彼女を室内のマッサージチェアの一つに座らせる。

以前にアイシャからシャーリーが海辺の景色が好きだという事を聞いていた事を思い出し、機器を操作して室内に南国の砂浜の景色を投影させる。

度重なる環境破壊で実在するはずのその場所ははるか昔に失われてしまい、今やデータ内にしか存在しない。宇宙育ちのカークには今一つそのリアルさが実感として感じ取れないが、ともかくその映像を眺めながら、士官任官時に半分居眠りしながら聞いたうろ覚えの特別講習の内容を記憶の底から必死に引っ張り出す。部下のメンタルケア時のマニュアル――ＭＳの事ならばいかにマニアックな事柄でもすらすらと出てくるのだが、不慣れなこのような問題に対してはカークの頭脳はからっきしである。

もっともこれはチームの明日のためであり、ひいては自分の為である。先日の戦闘よりもはるかに困難なミッションになるだろうことは当然の如く予想される。なれない事態に悪戦苦闘しながらも戦略を練り、戦術を構築し、破壊力不明の不発弾を無限に抱えた要塞に果敢にアタックを開始する。頼れるのは己一人、決して敗北は許されない。

様々な状況を考慮しながらも、最初のとっかかりにはきわめて無難な言葉がよいだろうと、カークはさりげない言葉でシャーリーの様子を窺った。

「アイシャからお前の様子がおかしいって相談されてな……。まあ、一応お前の上官であるし、問題解決できるとは思わんが話くらいは聞いてやれると……」

「悪いけどあんたとは付き合えないわよ……」

異なる状況を幾つもシミュレートしたにも関わらず、シャーリーの返答は予想外のものだった。

「は……？」

「いえ、さっきからあんたがいつになく、らしくない事ばかりしてるから、てっきり愛の告白でもしてくるのかと思って……」

さらなる予想外のシャーリーの言葉にカークは唖然とする。

「なにやら勝手に盛り上がって、正直こういう時の男には何を言っても無駄だとわかってるし……。落ち込んでいる女を励ませばおこぼれに預かれるなんて勘違いした男がここにもいたかと正直げんなりしてたんだけど……、かといって同じチーム内だから角を立てるのもどうかと……」

「お前ねえ……」

言われてみれば、確かにシャーリーが想定するような状況を誤解されても仕方がないともいえなくもない。なまじ見た目が類い稀な美人であるだけにこのような状況には心当たりがありすぎるのだろう。そして、哀れにも多くの間抜けな男たちが彼女の撃墜数として

マークされたに違いない。泥沼にはまっていきそうな自身の状況にカークは頭を抱え、抗議の声をあげる。

「あのなあ、お前の様子がおかしいから見てきてくれとアイシャに頼まれたって、さっきから何度も言ってるだろうが！　たまには上官らしく撹乱した可愛げのかけらもない部下のメンタルケアのために、ない知恵を振り絞ってるってのに、その言い草はないだろう……」

慣れない事をするものではないらしい。

最初からサカキに報告して、さっさと任せてしまえばよかったものを、誤解された上にハイスクールのガキどもと同列程度に看做されてしまい、すっかりカークは落胆してしまっていた。尤も上官として株をあげておこうなどと下心があった事は否めないのだから自業自得といえなくもないが――。

「とりあえず、今のお前の状態は俺から見ても異常にしか見えねえ。大尉に報告しとくからさっさとカウンセリングでも受けるんだな。戦場で後ろから撃たれて、『ごっめ～ん』なんて言われちゃ、こっちがたまらんからな」

多少の皮肉を交えて、カークは苛立たしげに立ちあがるとその場を立ち去ろうとした。

「悪かったわ……」

珍しく素直に己の非を認め、シャーリーが謝罪の意を示す。思いがけない彼女の謝罪の言葉にさすがにカークも、自身の態度が少々大人げなかった事を認め、その場に立ち止まり、再び彼女と向き合うことにした。

「……で、なんで落ち込んでんだ？」

口をついたあまりにも直球すぎる自身の言葉に思わず、自己嫌悪する。

そんなカークの内心を気にする様子もなく、シャーリーはわずかに視線をそらし溜息を一つつくとやがてぽつりとつぶやいた。

「さっきまで遺品整理に立ち合ってたの……」

「遺品整理？　……ああ、そういうことか」
　不利な戦況をものともせずに勝利をもぎ取った先日のサイド2宙域での戦闘の後、《エナド》に帰投したカーク達を待っていたのはレッドチーム壊滅という予期せぬ一報だった。どうやら、彼女は先日の戦いで戦死したレッドチームの二人のために、立会人を務めていたらしい。
　カークにも経験があるが、戦死した仲間の遺品が担当兵たちによって次々に手際よく片づけられ、まるで初めからそこには誰もいなかったかのように整頓されてしまった室内にぽつんと一人残されてしまうと、残された者は大きな孤独を感じてしまう。思い入れのある戦友であったならば、尚の事であろう。
「もしかして、仲間の戦死ってのは、初めてだったのか？」
「ええ、まあね……」
　曖昧な顔でシャーリーは微笑む。ただその微笑みはいつもより精彩を欠いていた。5年前の木星戦役以降、大規模戦闘の行われていない地球圏では、彼女のように仲間の戦死という経験をした事のないものも少なくない。
「気の合わない奴らが消えてくれてせいせいしてたのかと思ってたんだがな……」
　励ましの意味も込めて少々きつめの言葉でシャーリーを挑発してみるものの彼女は一向に乗ってくる様子がない。かわりにわずかに傷ついたような笑みを浮かべながら彼女はぽつりとつぶやいた。
「勝手な事をしたのは分かってるわ。それでも同じＭＳパイロット同士なんだからいつかは分かってくれるものだと思ってた。でも、もうそんな機会は永遠に訪れる事はないんだなって思うとね……」
「……」
　その言葉に様々な感情が含まれる事を理解したカークには、うまい返答が見つからなかった。

（２０１０／０６／１２　Ａｒｃａｄｉａにて初稿）
（２０１１／０３／２７　本サイトにて初稿）

02

およそ2か月前の部隊編成当初、彼女たちと同じ小隊だったシャーリーはレッドチームのフロントアタックを担当していた。同じポジションにいるカークやジュベールに比べ、個人の技量には弱冠見劣りがあったものの、『男なんかに負けてたまるか』という合言葉と共に、チームワークに難を抱えていたブルー及びパープル小隊と堂々と渡り合っていた。

そんなある日のことだった。

唐突にチームの再編成をシャーリーがコーナーに申し出た事により事態が大きく悪化した。青天の霹靂ともいえる彼女の申し出はあろうことかコーナーによって受け入れられてしまい、シャーリーとブルーチームのバックアップだったフェイカーの交代が決定されると《エナド》ＭＳ隊のメンバー達の間に動揺が走った。

この決定に最も影響を受けたのはレッドチームに残された二人だった。特にバックアップ担当だったセレンの動揺は激しく、度重なる口論の末に発展した二人のキャットファイトは艦内の誰もが知ることとなった。二人の三日間の独房入りで終結した一連の事態はその後も大きなしこりとなり、ＭＳ隊の誰もがその件には触れないようにすることで、セレンとエナが戦死する先日まで静かにくすぶり続ける火種となっていた。

際立った美貌と日頃のはっきりしすぎた言動に加えて、艦内には『彼女は身勝手である』と噂するものも多く、一部の心ないものによって『色仕掛けで上官に取り入った女』などというレッテルが彼女には張られてしまっていた。

そしてなによりも自身の提案が受け入れられた結果、起きてしま

った一連の事態と、レッドチームの二人の死にシャーリーは大きな責任を感じているようだった。
「あんたは意外と平静なのね……」
「ん？　ああ、フェイカーの事か？」
先日の戦いで唯一生き残ったレッドチームのロン・フェイカー准尉は大破しかけた機体と共に無事に母艦にたどりつく事は出来たものの、その錯乱ぶりは激しく、その日のうちに月の連邦軍の治療施設へと送られていた。平時から周囲に与えられ続けた過剰なプレッシャーで弱りかけていた精神が、極限状態にある実戦の狭いコックピット内で味わった死の恐怖により、大きく傷ついてしまったようだった。
「それでもあいつは生きているからな……」
戦場神経症――搬入されたその先で彼はそう診断されていた。彼の心の傷が癒されるには長い時間がかかるだろう。おそらくＭＳパイロットとして、いや軍人としてすら再起不能であろう。ただそれでも彼は生き残ることができた。世界中の誰もが混迷する戦争の行方に心を痛め、国家の不始末の為に愛する家族を奪いとられる時代とは違って、人の生き方など幾らでもあるのだから、生還できた彼の幸運を喜び、新しい門出を祝ってやることこそ、かつての仲間として出来ることであろう。
「優秀なパイロットというのは仲間の死に対しても、鈍感でいられるものなのかしら？」
わずかに皮肉を込めたつもりなのだろうが、その毒舌にはあいかわらずいつものキレがない。
「そんなものなのかもしれないな……」
相槌をうちながらもカークは、自身がレッドチームの二人の死を比較的冷静に受け止めている事に気付いていた。
戦死したレッドチームの二人とは部隊編成以来およそ2カ月の付き合いだったが、様々な成り行き上、同じ《エナド》ＭＳ隊の中でもわずかに距離があった。

その距離がシャーリーとは違って、カークに二人の死をどこか客観的に受け止めさせてしまっているのかもしれない。あるいは、大破しかけながらも無事に帰投したフェイカーの機体の戦闘データが運悪く破損し、彼女達二人を堕とした敵の正体が不明であることが、同僚の戦死に対する怒りの矛先を鈍らせてしまっているのかもしれない。

突き放したようなカークの言葉にシャーリーはわずかに怪訝な色を浮かべる。仲間の戦死という事実に衝撃を受けている彼女にカークの言葉は理解し難いものがあるのだろう。戦場において仲間という存在がかけがえのないものでありながらも、一方でその仲間の死に鈍感にならねばならない――それは生死というものが身近に存在する軍人にとって避けて通ることはできない。

「まあ、俺の場合は初陣の時から少々特殊な状況だったからな……。そういう事に慣れちまってるってのもあるんだろうが……」

「初陣？」

「俺の初陣は木星戦役の時でな……、士官学校を出て部隊に配属されてわずか2日後だった」

カークの言葉にわずかにシャーリーが息をのむ。

木星戦役――木星帝国と呼ばれる半自治組織からの外交使節団が突然のテロ部隊と化し、連邦政府に凶刃を向けた事件の事である。その戦力はジュピトリス級輸送艦一隻分であった為、大事に至る事はなかったが、そのあまりにも唐突な連邦に対する背信行為と、事件終了後の検証で明らかにされた核兵器の使用疑惑は、連邦政府や地球圏に住む人々に大きな衝撃を与えた。

「俺が配属された部隊は使節団の護衛艦隊に所属していて、やつらの最初の標的にされた」

クロスボーンの反乱以降数年の後、実戦経験を持たない将兵が増え、連邦宇宙軍の士気の衰えが問題になっていた頃、対応策として、新任士官達に重要な役割を担わせ、緩みがちだった軍の綱紀を引き

締めようとした一部の上層部の英断だった。その英断は見事に裏目に出てしまい発案した将官は更迭された上、反乱の責任を取らされそうになった者たちのスケープゴートとして木星帝国のスパイに仕立て上げられるという散々な結末をたどったらしい。

カークは記憶の底からあの日の事を引きずり出す。その出来事はまだ当時を懐かしめるほど劣化してはいない。どちらかといえば凄惨な記憶と呼べるものなのだろう。

「不幸な事に艦隊司令ってやつが任務に忠実な奴だったらしく、お陰で奇襲を受けた艦隊はあっという間に火だるまになっちまった」

「……」

「『安心しろ、お前らヒヨッコは俺達の後ろで適当にぶっ放しときゃいいんだ』なんて言って先に出ていった上官や先任達があっという間に堕とされちまった。結局、大隊規模で出撃したＭＳ隊の中で無事に帰還できたのはわずか3機だけだった」

彼の所属部隊の結末にシャーリーは言葉も出ない。ただ無言でカークの話を聞き入っていた。

「まったく、あれはとんでもない戦いだったな。いや、あれは戦いなんてもんじゃないな。勝つための戦術とかＭＳ戦の常識もへったくれもなく、一人一殺の覚悟で特攻してくるんだから……。もしかしたら本当の戦争ってのは、あんなのの事を言うのかもしれないな」

木星帝国に所属する兵士たちのメンタリティは、絶対民主義制度などと呼ばれる体制の地球圏に住む者達から見れば異様な物があった。支配者への絶対服従と人命の軽視――それは彼らの使用する兵器の設計思想にも如実に表れていた。搭乗者の安全性など全く無視し、ＭＳ本体そのものをビームサーベルに見立てて戦艦に特攻をかけるものなどは代表的な一例であろう。その簡便性ゆえに、戦後、鹵獲された帝国の機体がゲリラや海賊たちの手によって復元され、様々なテロ活動や犯罪に使用される例は各地で報告されている。

地球圏に比べてはるかに劣る技術力でありながらも、愚直なまでの全体主義思想に基づき目的の達成のためだけに徹底的に単純化さ

れたMSや兵器群とそれを操る低コストの兵士たちの存在は、たった一隻のジュピトリス級輸送艦に驚異的な力を与えていた。

「結局、俺の機体も行動不能になって漂流するはめになったしな……」

「よく生きて帰れたわね」

「運が良かっただけさ。ビーム兵器やミサイルが飛び交う中を必死に逃げ回ってようやく生き残れたって感じかな……」

あきれたようなシャーリーの感想にあるがままに応える。

「さすがにコントロール不能になって漂流する事になった時には焦ったし、それなりの覚悟をするはめになった。回収部隊の《ジェガン》に拾われた時には感激のあまりに思わず抱きついちまったな」

大袈裟な身振りで話すカークにシャーリーが小さく吹きだした。

彼女の心がわずかに開きつつあるのが感じられる半面、その言葉の本当の意味がまだよく理解できていないのは幸せな事なのだろう。

極限のストレス状況下にある戦場では、戦う力を失ってしまったものに対して、圧倒的優位な立場を誇りながら自身の負の感情をぶつけ嬲り殺す――心の弱さゆえにそんな事を行う下司な輩というものは敵味方問わず必ず存在する。仮にそんな輩に出会う事はなかったとしても、刻々と示される残量酸素の数値によって、暗い宇宙を漂流し続けるという事実と嫌でも向き合わされてしまう。

信頼できる友軍や仲間という言葉の本当の意味や自身の生命と引き換えにした任務の価値が、漂流する孤独なパイロットの心の中で試されてしまう。

「ところでさ……」

ふと思いついたカークは、この際とばかりにかねてから疑問に思っていた事をシャーリーに尋ねる事にする。

「お前が、チームの再編成を言いだした本当の理由ってなんだったんだ？」

カークの予期せぬ質問に一瞬キョトンとした表情を浮かべたシャ

ーリーだったが、暫しの間まじまじとカークの顔を見つめた後でぽつりと告げた。
「ノーコメントよ！」
その言葉に思わずズレ落ちる。
「いや、こういう時こそ『実はあの時は……』なんていって秘密を打ち明け合う事でチームの連帯感を高めるモンだろう？」
「人間、誰しも言いたくない事の一つや二つあるもの……。まったく、そんなだから女心がつかめないのよ！」
心底呆れた様子で立ちあがったシャーリーは大きく一つ伸びをする。久しぶりにキレのある毒舌を披露しつつ、伸びをするその躍動感を秘めた身体のラインに、思わず視線が奪われる。
「少しだけ、楽になったわ。一応、礼を言っとくわ……」
「おい、……らしくないな。何か企んでるんじゃないだろうな」
「さあ、どうかしらねえ？」
挑発的な笑みと共に立ちあがった彼女はリラクゼーションルームの扉に向かう。まだ多少頼りない部分はあるものの、ほぼいつも通りの姿を取り戻した彼女の姿が扉の向こうに消えていくのを見送ったカークは、室内の映像を消すと傍にあった座席に倒れ込むように腰掛ける。困難なミッションをやり抜いた達成感よりも疲労感のほうが大きかった。
やはり、この手の仕事は自身には向いてはいない。次からはサカキに丸投げしよう……などと考えながら、カークはリラクゼーションルームの天井を見上げる。天井のさらに向こうにある宇宙（そら）を思い描いたカークはあの日の漂流するコックピットの中で過ごした時間の事を思い出した。

生命維持と味方部隊への救難信号以外のすべての機能がカットされたコックピット内は暗く静かだった。迫りくる死の恐怖に発狂し

かける者も多いと言われる宇宙漂流の中でカークは妙に何かを悟った気分になっていた。

爆発排除されたコックピットハッチの向こうに広がる宇宙はただ静かに幻想的に蒼青く輝いて見える。それは訓練に追われる日々ですっかり忘れてしまっていた遠い昔に見た宇宙そのものだった。

『あの中に飛び込んでみようか?』

酸素の残量計が徐々に0に近づいていくうちに、ふと、そんな気分になる。それは子供じみた安直な死への憧れではない。広大な闇のはるか向こうに存在を感じられる何かを追いかけてみたい、そんな欲求をその時の宇宙はカークに感じさせた。

生じた欲求のままに彼がコックピットから飛び出す事がなかったのは心の片隅にわずかに残った生きることへの義務感からだった。カークの漂流癖がついてしまったのはおそらくあの時からなのだろう。回収部隊からの通信が入った時に感じた奇妙な寂寥感は、彼が軍人でなかったとしても決して人に言えるものではない。

『人間、誰しも言いたくない事の一つや二つあるもの』

ふと思い出したシャーリーの言葉に『まったくだ』と思わず納得する。

あの日感じた宇宙への憧れを人に話せば、単なる変人扱いどころか自殺志願者と言われかねない。『感激のあまりに回収部隊に抱きついた』という言葉は彼自身が無意識についたウソである事を彼は自覚していた。価値観の違う人間同士で誤解なく互いを分かりあうという事など、例えどんなに親しい間柄であっても所詮それは単なる夢物語である。

「ところでお前ら、いつまでそうしている気だ?」

遠い思い出から意識を引き戻したカークは、わずかに厳しい口調で先程から気になっていたリラクゼーションルームの機材の陰に潜

む何者かに声をかける。立体映像が消され、無骨な姿をさらす装置の陰からやがてごそごそと3つの黒い影が現れる。現れたのは《エナド》MSメカニック班に籍を置く3人であり、そのうちの一人はおなじみのアイシャ・マーディン曹長であった。

「たしかこの時間は貸し切りになっていたと思うんだが、お前らどこから忍び込んだ?」

リラクゼーションルームの使用にはプライバシーの問題も大きく関わるため厳重な管理がなされているはずなのだが、3人は複数ある入口のオートロックを一つ解除して中に忍び込んでいたようだった。

おそらくは質の悪い悪戯の好きなアイシャの発案なのだろう。溜息を一つつきながらもカークは二人の同僚の陰に隠れるように立っているアイシャのらしくない挙動に不信感を覚えた。

「アイシャ・マーディン曹長……後ろ手に隠し持っているものを出してくれないかな?」

先程から不自然に左手を背中の後ろに隠しているアイシャの正面に立ったカークは、作り笑いを浮かべながらアイシャに右手を差し出す。

「な、なんの事でしょうか?」

明後日の方向を向きながらとぼけるアイシャの様子にもう一度溜息をつくと再び彼は告げた。

「命令だ! マーディン曹長! 左手に隠し持っているものを出したまえ!」

MS中隊長であるコーナー少佐の口ぶりを真似して少々高圧的に命令する。上官としての権威を振り回すのはあまり好きではないカークだったが、さすがに今はそうも言ってはいられないだろう。

両隣りに立つ同僚たちと視線を合わせたアイシャは渋々と左手を前に出す。そこには小柄な彼女の手の平にぴったり収まる3Dカメラが乗っている。

外見こそつい先日発売されたアナハイム・エレクトロニクス製の民

生品であり、なんとかという美貌のＣＦモデルとそのスタイリッシュなデザインで、巷で一躍ブームとなり売り切れ続出となった代物であったが、中身は全くの別物である。

《エナド》ＭＳメカニックの立場を悪用して様々な試作兵装やＭＳ関連備品から調達した部品を使って非常識な改造を重ね、プログラムの書き換えまで行ってその性能を数倍に跳ね上げた、色々な意味で危険なアイシャ自慢の趣味炸裂の一品である。

カークは彼女の手から無造作にカメラを奪い取ると映像の中身を確認する。映像ファイルの中には案の定、先刻までのカークとシャーリーのやり取りが克明に記載されている。

すかさずカークはメモリーチップを引き抜くとわずかに指の力を込めて二つにへし折った。

「な、なんてことするんですか！　その中には貴重な整備資料も入ってるんですよ！」

慌てた様子のアイシャだったが、「バックアップはとっくに取ってるんだろう？」というカークの言葉に舌を出す。職務に対する彼女の慎重な性格など織り込み済みである。映像ファイルをマニュアル通りに消したところで彼女の手にかかれば、直ぐに復元されてしまう事は目に見えている。すべからく重要機密は物理的に葬るべしという最善策をすみやかに実行したカークはカメラをアイシャに手渡した。

流石の彼女も懲りたのだろう。手許に戻ってきたカメラをぐっと握りしめ、俯いている。

「悪いがこの件は整備班長に報告して、然るべき処分を下してもらうことにする」

「それが、その……」

俯くアイシャの隣りに控えていたメカニックの一人が弱冠言いにくそうに切り出した。

「実はこの件は班長からもＧＯサインが出てまして……」

「あ、あの人もグルか……」

意外な言葉にカークは思わず肩を落とす。頑固一徹のメカニック職人である一方で、実は意外とお祭り好きであるという彼の側面を思い出す。

「ま、まあ、いい。とにかく以後、このような事はないように……」

「は～い。了解しました。レイナード中尉……殿！」

貴重な映像ファイルの消失のショックからいつの間にか復活したアイシャは二人の同僚と共にカークに敬礼すると、いそいそと逃げ出すように部屋から去っていく。去り際の彼女の言葉に何か引っかかりを覚えながらも、カークはその後ろ姿を黙って見送った。

カークとシャーリーの二人のやり取りの編集映像に奇妙なアテレコが行われ、艦内に流されたのはそれから数時間後の事だった。メモリーチップを失ったものの本体側のメモリー容量を非常識なまでに増設し、バックアップをとっていたアイシャとその仲間達の仕業である。

さらに、上官としても男としてもすっかり株の下がったカークが頭を抱えて落胆しているところに、コーナーからの呼び出しがかかった事は言うまでもない。

（２０１０／０６／１２　Ａｒｃａｄｉａにて初稿）
（２０１１／０４／０３　本サイトにて初稿）

03

室内には耳触りのよいクラッシックが優しく流れ、そこかしこに飾られた上品なインテリアは、会員制高級ホテルのラウンジにふさわしいものだった。

五階建ての建物の最上階からは完ぺきなシンメトリーでデザインされた庭園が一望でき、実に美しい景観が保たれている。構造上、高層建築に不向きなコロニー内では建物の敷地面積の広さがそのステイタスを示す傾向にあり、このホテルも多聞にもれずやや無駄に広めな敷地とアンティークな外観によって、一般人を寄せ付けることはなかった。

サイド2・コロニー・バビロニア――かつてサイド4宙域に存在した4つのフロンティアコロニー群を占拠したクロスボーン・バンガードが、武装蜂起の際の不測の事態の避難場所として密かに準備を整えていた『5番目のフロンティア』ともいえるコロニーである。当時のサイド2はまだ辺境であった為、連邦政府の監視の目はそれほど厳しくなかったが故に可能であった措置であり、現在はコスモ・クルス教がその本部を置くと共に、コロニー守備隊の一部には、名を変えたクロスボーン軍の残党が公然と編成されている。

『コスモ・バビロニア』という言葉を連想させる物騒な名前を堂々とコロニー名として名乗っているあたり、コロニー政庁の上層部と連邦政府やコロニー公社との間の癒着ぶりが容易に想像された。

つい数時間前、宇宙港に小型貨物艇で入港したゴルドは、着慣れぬ背広とネクタイの感触と遠心力を利用した疑似重力に若干の不快感を示しながらも、この場所にやってきた。

ここしばらくの窮屈な戦闘艦暮らしで羽根の一つも伸ばしたいと

ころであったが、残念ながらしばしの休暇という訳にはいきそうにないようだ。

注文をとりに来た給仕にコーヒーをオーダーすると傍らの窓ガラスに何気なく意識をやる。

店内には相変わらず弦楽器の音色が切なく鳴り響き、会員制であるゆえか、午後のティータイム時であるにもかかわらず周囲の客の数は少ない。窓ガラス越しに店内にいる者たちの動向をさりげなく確認し、同時に複数存在する出入り口の場所にも素早くチェックを入れる。長い傭兵暮らしで身に付いた習慣だった。

周囲に危険な要素が存在しない事を確認したゴルドは、そのまま今度は窓の向こうへと意識を飛ばした。待ち合わせの時間までにはまだ少しの余裕があった。暇つぶしがてらにゴルドは自身がこの場所に至った経緯を再び思い出していた。

事の起こりは二日前、《ゲオルグ》の艦内で珍しく歯切れの悪い様子のネーナ・サリンジャーが彼の個室を訪れたことからだった。

『とある人物がゴルドとコンタクトをとりたがっている』――その相手の名前よりもそう告げた時のネーナの様子にゴルドはいささか驚いた。常日頃から即断即決が信条で、断定的な態度で発せられる彼女の言葉にしてはあまりにも歯切れが悪かった。契約上、現在のゴルドの行動は雇い主であるネーナに決定権があるのだが、まるでどちらでもよいと言わんばかりのあいまいな彼女の態度にゴルドは当惑した。

相手方がゴルドの旧知の人物であり、同時にネーナにゴルドを紹介した当の本人であることもあり、結局ネーナの申し出を受ける事にしたものの、相変わらず彼女の態度は曖昧で、まるでゴルドに断って欲しいと言いたげにも受け取れる。

おそらくネーナにはその依頼内容に心当たりがあり、そして、そ

の内容が現在の《ゲオルグ》の任務には好ましくない事態を招き寄せる可能性がある事を考慮しているのだろう。

日頃から艦長のヴォラスコフと何かと対立しながら《ゲオルグ》内を取り仕切っている彼女も、実のところ出向元のアナハイム・エレクトロニクス内では一介の社員にすぎない。彼女自身も又、常にミスの許されない立場にいる以上、普段ならば己の利益にならない事など即座に斬って捨てるはずなのだが、そんな性格の彼女が受けざるを得なかったところをみると、いろいろと複雑な堅気の世界の事情というものが絡んでいるようだった。

『いらっしゃいませ』

入口で客を迎える声で我に返ったゴルドは、現れた男が彼の待ち人である事をガラス越しに確認したものの、気付かないふりをしてそのまま窓の景色を眺めている。それなりの広さを持つラウンジ内で、ゴルド以外の客はわずかに一組であったためか、ガラスの中に映った男は店内を一瞥すると迷いなくこちらに向かって歩いてくる。

男がゴルドの座る席に近づくのを見計らってゴルドは振り向いた。

「久しぶりだな……ゴルド……」

「ああ……」

立ちあがると男を出迎える。すっと差し出された手を軽く握り返す。

エメリオ・ハウンゼン――ゴルドの同期でありかつての戦友である。現在の彼はコスモ・クルス教団教主の親衛隊隊長というポジションにいる。

共に戦場にあったころは決して好意的な関係とはいえなかった。ただやみくもに戦ってさえいればよかったゴルドに対し、ハウンゼンは組織の癖をうまく掴み、自身の手柄を数倍にして上層部にアピールする術を心得ていた。

上からの覚えめでたいハウンゼンに対して『立ち回りのうまいヤツ』と仲間達と陰口をたたく一方で、彼に取り入ろうと近づいていくそんな輩を何人も知っていた。そんな輩に利用されるふりをしな

がら逆にうまく利用し、自身の手柄に結び付ける、という自分には真似のできない器用な芸当を行うハウンゼンの事を当時のゴルドはあまり面白く思っていなかった。

標準的な身長であるゴルドよりもわずかに高く、蓄えた髭は年齢よりも彼を年長に見せ、一流ブランドのスーツをしっかりと着こなし、その袖口にはきらりと光るカフスが嫌みなくポイントされている。わずかに香る男物の香料はゴルドとは違う世界の日常に生きている事を感じさせる。

「同じものを……」

近づいてきた給仕にオーダーを終えると、ハウンゼンはゴルドの対面に座り、向き合うこととなった。

「少し痩せたか？」

ゴルドの対面に座りながらハウンゼンは彼に尋ねた。

「何かと心労の多い職場なものでね……」

ネーナに紹介状を渡したのがハウンゼン自身である事を遠回しに臭わせながら、それなりにやりがいのある仕事を廻してくれた旧知に感謝の言葉を述べる。

「いい女だろう？　もう寝たのか？」

「生憎と毎日が戦場でね……とてもじゃないがそんな気分にはなれんな」

「いい女と見れば見境のなかったお前にしては随分とおとなしいな。年か……？」

「お互い様だろう」

「まあな、近頃は仕事が恋人だ」

何気ない軽口をたたき合い、違う世界にいる互いの隙間を埋めていく。静かなラウンジの風景にそぐわない物騒な内容が会話の端々に交じってしまうのはご愛嬌というものだろう。午後のティータイムに時折物騒な空気を放ちながら窓際で語らう男たち……しっかり教育された給仕は自分の仕事をすみやかにこなすと、彼らの存在を完璧に無視して、周囲に飾られたインテリアの一つと化していた。

「ところで、俺に用事があったんだろう？」
「ああ、そうだ。お前に仕事を依頼したい」
暫しの雑談のあとに本題に切り込んだゴルドにあっさりと返事をしたハウンゼンは、懐の小さなケースからメモリーチップを取り出し、ゴルドの前に差し出した。
（随分と念の入った事だな）
差し出されたチップを携帯端末に差し込みながらゴルドはわずかに不審を抱いた。極力いかなる通信記録をも残さないために最も有効な手段を使った所を見ると事の次第が相当に大事であることが予想される。
データを読み出したゴルドは端末に映った画像に一瞬息をのむ。
「これは……」
「そうだ。彼女を消して欲しい……」
それまでの和やかな空気を一瞬で消し去ったハウンゼンの顔は冷たい。端末に映った女性の姿――シェリンドン・ロナ――コスモ・クルス教教主その人だった。
「お前たちの教主をか？」
「そうだ」
「理由を聞かせてくれ……」
この手の仕事に依頼者の背景事情を直接訪ねることなど本来タブーであるのだが、それでも聞かずにはいられない。コスモ・クルス教――いやクロスボーン・バンガードに関する事柄はゴルドにとっても決して他人事とはいえない。
「別にそれほど複雑な事ではないさ。有り体に言えば今のコスモ・クルス……いや、俺達には彼女の存在はもはや邪魔にしかならなくなった――ただそれだけの事だ」
「彼女は教団の、いや、今の貴族主義を支持するすべての者たちにとって象徴といえる存在だろう？」
ロナ家の総帥であったマイッツァー・ロナによって幼いころから教団の教主に祭り上げられた彼女はコスモ・クルスそのものといって

もいい。ロナ家の血縁者の大部分が行方不明である今、支持者を失いいつつあるコスモ貴族主義にしがみついて生きている者たちにとって彼女は唯一無二の存在のはずであった。

「飾りは飾りであるからこそ意味がある。知恵をつけた飾りは組織には不要なのさ」

吐き捨てるようにハウンゼンは呟いた。そんな彼の言葉をゴルドは冷静に受け止める。

「組織のトップはバカであればいい。周囲はそんなトップに安心し、自身の居場所を組織の中に見出してついていく。バカな神輿を下から互いに支え合い、同時に互いを牽制しあう事で組織は強固な力を維持できる。勿論、大きな変化は期待できないがな……。優秀な指導者などという概念は、所詮、責任逃れしたい奴らの幻想だ」

「……」

「だが彼女は聡明すぎた。鋭すぎると言ってもいい。そして混迷した現状に理解を示さずつまらぬ野心を抱いた身の程知らずが、そんな彼女に幻想を抱き利用しようと暗躍する事になる」

「結果、内紛が再燃するという訳か……」

「そういう事だ。お前もよく知っているだろう」

結末など理解できているだろうに、それでも同じ事を繰り返し続けるのは人間の業というものだろう。

「だが、彼女を消した後はどうする。彼女の存在は教団の唯一の拠り所だろう……」

「変わりなどいくらでも作れるさ。もともと作られた名門だ。でっちあげるのはいくらだってできる。ほどほどに知性を感じさせる器量を持つ小娘に血統をつけて祭り上げ、形さえ整えてやれば拠り所を失ったやつらが我先に飛びついてくる。真実がどっちを向いているかなんて事を気にする奴が大声を上げるのは、内紛が収まりそこに属する多くの者が何らかの共犯者となって教団が安定した後の事だ」

その言葉に思わず苦みを覚える。かつてのゴルドも又、そんな幻

想に夢を見た事のある一人だった。
「事後の処理はこちらの仕事だ。黒幕になって裏で暗躍したがる陰謀ごっこの好きな奴など幾らでもいるからな。必要な物があれば幾らでも言ってくれ。お前はただ黙って仕事を引き受けてくれればいい」
「……」
ハウンゼンの申し出に返答をせず、ゴルドはそのまま押し黙った。教主シェリンドン・ロナの暗殺――相手は腐ってもそれなりの勢力を誇る組織のトップである。当然周囲のガードは固く決して失敗は許されない。
おそらく彼女の周辺にはすでに様々な罠が張り巡らされ、周到に準備が進められているはずである。少なくともゴルドの知るハウンゼンという男はそういう人間だ。狙った機会は決して外さない。後はどういう形で引き金を引くかという事だろう。そして旧知であるゴルドに白羽の矢を立てたという訳だ。
「悪いが少し考えさせてくれるか？」
「ああ、当然の事だな。ただ返事は早いうちに欲しい。機会はそうそう訪れるものではないからな……」
ＭＳパイロットである自分を利用した教主暗殺の機会――ふとある可能性が思い浮かんだ。
（どうやら、やられたようだな……）
おそらくこの計画はずっと以前から考えられていたものだろう。ハウンゼンがネーナに紹介状を渡し、ゴルドを引っ張り出して《Ｆ９７》の性能共々利用する……そのあたりからすでに彼の計画は進んでいたに違いない。決して表沙汰には出来ない機体――その存在はそれを利用しようと考える者には実に便利であることこの上ない。いざという時にはアナハイムが総力をあげて情報を闇に葬るだろう。もちろん《Ｆ９７》に関わった者達全てを含めて……。
ふと、歯切れの悪い言葉で曖昧な態度をとり続けたネーナの姿が思い浮かんだ。勘のいい彼女の事である。おそらくかなり早い段階

でハウンゼンの企みには気付いていたはずだ。それでも乗らざるを得なかった所を見ると彼女にもそれなりの事情があるのだろう。

（危ない橋を渡ろうとしたものだ……）

ネーナにもハウンゼンにもそれは言える。盤石なはずのシステムに乗っかっているはずの彼女達も又、根無し草の自分と同様に、明日の不安がぬぐいきれない位置に常に立ち続けているのかも知れない。

尤も元来、慎重なハウンゼンの事である。ゴルドが断った場合の次善の策は考えているはずだ。あるいは複数の策を同時進行している可能性も捨てきれない。予測不能なゼロ・サムゲームに足を突っ込みかけている二人にとって、もしかしたらこの依頼を断る事が最善の策なのかもしれない。もちろんゴルド自身にとっても――。

「さてと……」

要件をすべて話し終えたのだろう。カップに残った冷めたコーヒーを一気に飲み干すとハウンゼンは立ちあがる。

「随分と忙しそうだな……」

「まあな。上に上がれば楽が出来ると思ってあちらこちらに媚を売って生きてきたが、残念な事に気の休まる時なんて一瞬たりとてないのが現実だ。時々、下でのんびりと上の奴らの無責任な悪口を言いふらしながら生きる方が楽だったんじゃないかと思っちまう」

ハウンゼンにしては珍しく自虐的な冗談だった。かつて彼の事を嫌っていたゴルドとしては、何気に皮肉交じりに聞こえなくもない。尤も、立場が違えば誤解が生じ、争いが生まれる――それが当たり前の事であると感じる事の出来る年齢に至った二人には大した問題ではない。

ふと、席を離れかけたハウンゼンが思い出したように振り向いた。

「ところでゴルド、この件が片付いたら、俺の所に来ないか？　お

前のキャリアなら幾らでも活躍の場は用意できる。なんなら若い奴らの指導をまかせてもいい。いつまでも戦場でＭＳに乗って駆け回ってる年でもないだろう」

ハウンゼンの言葉に一瞬ちりりと心の片隅が焼きついた。その小さな内心の焼きつきを悟られないようにポーカーフェースで覆いながら、ゴルドはハウンゼンに切り返す。

「何だ……だらしないな。もうパイロットは廃業か？」

「ああ、際限なく進化していくシステムには正直付き合いきれん。全く戦争ってのは機械の性能でやる物ではないだろうに……。最近の若い奴らはそれが分かってない。新しいシステムを使いこなしては得意になってるやつらの横面を張り倒せる人材ってのが必要なのさ。それに、教団内の椅子取りゲームはパイロットの片手間にできるほど容易いものではないからな」

最後の言葉こそが彼の本心だろう。自身とは全く違う世界に住む旧知の視点――戦場とは又違ったルールで行われる厳しい戦いがそこにはある。それこそがハウンゼンにとって彼の望む生きる場所なのだろう。

「いい返事を期待している」

わずかに手をあげて応えるゴルドの姿を確認すると、ハウンゼンは来た時と同じ順路を通って去っていく。旧知の背中が見えなくなるのを確かめると、ゴルドは再び席に着き窓の外を眺めた。ガラスの向こうの景色は先ほどと変わらずに午後の陽ざしに包まれている。遠い昔からそこにあり、そして未来永劫変わらぬかのような景色を眺めながら、ゴルドは流れた時間の重さに想いを馳せていた。

クロスボーン・バンガード――若き日のゴルドはその旗のもとに己の理想と野心を預け、腐敗し堕落しきった世界の浄化のためと信じて戦った。力を持つ者が自ら先頭に立って、民衆にあるべき姿を指し示す――本来高邁な理想と精神の気高さを基にしたコスモ貴族主義思想を、自分こそは特別な存在でありたいという若者にありが

ちな選民思想特有のロジックに変換し、ゴルド達のような情熱のある若者たちを軍隊という組織にのめりこませていった。

フロンティア・サイドに侵攻したクロスボーン・バンガードが己の旗を掲げ、コスモ・バビロニアの建国が宣言なされたあの日……。

軍楽隊がマーチを奏で、兵士とＭＳ隊による勇壮なるパレードが行われた中にゴルドの姿もあった。多くの観衆達に注目されながら、開かれた希望という名の扉に激しく高揚し、叫び出したい衝動に駆られる自分自身をコックピット内で抑えるのに苦労した事を思い出す。自身の人生にとって最良の日であり、そして同時にクロスボーン・バンガードにとっても最良の日だった。

――しかし、残念ながらコスモ・バビロニアという理想国家が歴史に名を残す事はなかった。

上層部内での戦略方針の対立、宗家であるロナ家の内紛、コスモ・バビロニア建国を陰で支えた企業群の離反、そしてなによりも、世直しという名の祭典に飽きてしまった民衆の不満の受け皿としてあまりにもぜい弱だった組織はあっという間に瓦解した。

内紛と裏切り――どこにでも転がっている三文芝居の筋書通りにクロスボーン・バンガードの結末は無残なものだった。当然そこに所属し己の野心と未来をかけて戦っていたゴルドの人生も大きく影響を受け、自身の所属していた派閥の敗北と解体が決まったその日、彼は絶望と共にクロスボーンを離れた。

そして、戦場という熱に浮かされてしまった彼は、やり場のない憤りを抱えた傭兵として地球圏で生きることとなった。かつての栄光を忘れ、もう一度新しい何かを見つけるために……。

（２０１０／０６／２６　Ａｒｃａｄｉａにて初稿）
（２０１１／０４／１０　本サイトにて初稿）

04

「お代わりはいかがですか？」
是というゴルドの答えに、コーヒーポットを丁寧に抱きかかえた給仕が、洗練された手つきで温かいコーヒーをカップに満たしていく。丁寧な一礼と共に下がっていく彼を見送ると、再びゴルドは物思いにふけった。

『俺の所にこないか？』
去り際のハウンゼンの言葉を思い出す。彼は『戻ってこい』とは言わなかった。その言葉は、もはやクロスボーンという組織がどこにも存在しないことを意味していた。例え、コスモ・クルスの親衛隊として組織された事実上の残党勢力ではあってもその精神は全くの別物である。激しい内紛の中で生き残ってきたハウンゼン達によって変質してしまった組織に対して、見切りをつけてそこから去ってしまったゴルドが彼らのあり方を批判する事は出来ない。
ふと思い立ったゴルドは端末の中のシェリンドン・ロナの映像を再び表示する。彼女の存在を知ったのは１０年以上前の事。かつて可憐ながらも知性を感じさせた少女の姿は、いまやすっかり大人びて美しい女性となっていた。かつての彼女は、ほんの一時の間、彗星の如く現れたロナ家の直系の娘よりもクロスボーンに関わる人々に支持され愛されていた。当時の彼女はコスモ・クルスの教祖であると同時にアイドルの役割を完璧に果たしていた。
職務上、女性に縁遠い若き兵士たちの中には彼女の存在に心の安

らぎを得る者も多く、同僚たちの間でひそかにとられたホログラフが高値で取引されていた事も知っていた。かつてのハウンゼンがそんな中の一人であった事に、去っていた歳月の残酷さを感じてしまうのはゴルドの気のせいという事だけではないだろう。

（この一件、断るべきか？）

その姿を眺めながら、ゴルドは思案する。

ゴルド個人としてはそれなりの報酬は得られるであろう。

しかし、今後の《ゲオルグ》の任務に大きな支障をきたす可能性というのは捨てきれない。《ゲオルグ》など所詮一時の仮の宿……よりよい待遇を求めて目移りしてしまうのはしっかり根付いてしまったフリーランスの傭兵ならではの悪い癖というものだろう。

だが、そんな風に割り切ってしまうにはいささかゴルドは今の環境に愛着を持ち始めていた。何よりも自身の愛機となった《Ｆ９７》の可能性にＭＳパイロットとして彼に残された時間のすべてをぶつけてみたい――そんな思いが今のゴルドを支えている。

その一方で自身の過去に完全に決別できる可能性にも心が揺れた。若き日の自身の理想と野心を利用され、見事に裏切られたその因縁に自身の手で決着をつける事が出来る――それはまだ心のどこかに未練を残したクロスボーン・バンガードの戦士としてのかつてのゴルドにとってとても魅力的な事だった。

しかし、危険もある。ハウンゼンがこのような重大な事案を突然依頼してきた真意をゴルドは測りかねていた。

過去との決別と決着――元来、ゴルドのそんな思いを見抜き利用しようとする計算高さをハウンゼンは持っている。そして、そんなハウンゼンの性格は、昔から周囲の者たちに心の底から信用されることのない一因となっていた。

おそらくそれは今の彼自身、変わる事はないだろう。

自身を大きく見せようとする振舞いの端々にその事が感じられる。

今の教団内で彼が孤立しかけている――その可能性も決して捨てき

れない。組織内での不利な立場を覆すためにゴルドを利用しようと彼が考えたとしても不思議ではない。

ふと、窓ガラスに映った自身の顔が厳しいものになっている事に気付く。

（いかんな……）

可能性を考えたとしても所詮はいたちごっこである。情報を集め、裏をとって事態を把握する事が先決であろう。幸いにもこちらには天下のアナハイム・グループがついている。尤も窓口であるネーナ自身が自分に有利な情報のみを渡す可能性も否定はできないが……。

疑問符だらけの人間関係に頭を悩ませる事をやめたゴルドは席を立った。時の止まったようなこの場所で思考の堂々巡りを繰り返す事よりも、久しぶりの陸を散歩することで気分の転換を図る事にした彼は、そのままラウンジを後にしたのだった。

無駄に広いとしか思えない敷地をのんびりと歩き、正門に面した大通りに出る。そこにはホテル内での静かな景観とは全く異なる人々のあわただしい日常があった。会員制のホテルで優雅に時を過ごす者たちがいる一方で、そんな場所に生涯訪れる事なく決して楽ではない生活を日々送り続ける人々がいる。それはスペースコロニーという閉じられた世界にも厳然とした貧富の差が存在する事を示していた。

「あの……」

気づけば一人の物売りの少女がゴルドに声をかけていた。年の頃は１２、３といったところだろうか？　縮れた赤毛の髪は決して見目が良い訳でなく、痩せた体に彼の胸にも満たない身長のその少女

は、体に似合わぬ大きなバスケットを抱えている。
（少し緩んでいるのか？）
以前のゴルドならばそんな少女に声をかけられることなどなかった。死と隣り合わせの世界に住む独特の緊張感をもつ者のみが放つ硬質の気迫が、彼女たちのような物売りを決して寄せ付ける事などなかった。油断していたとはいえ、そんなゴルドの懐にストンと入ってきた少女にゴルドはわずかに興味を覚えた。
「よ、よかったら一つ、お土産にどうですか？」
じろりと睨まれたゴルドの視線におどおどとしながらも、少女は交渉を始める。バスケットの中には女性物の装身具が十数点、ケースに詰められた見本の下には決して上質ではない包装紙に包まれた箱が幾つも入っている。それなりの重さがあろうバスケットを少女はしっかり抱えて立っている。
「中身は同じものなのか……」
ギラリと突きさすような視線で少女の目を射抜きながら、見本と包装紙の中身が本物である事を確認する。
「は、はい……」
ゴルドの視線に怯えながらも、少女は決して視線を外さない。
「見せてみろ」
バスケットの中の見本は、どれも精巧な作りではあるが明らかに有名ブランドの模造品である。腕はあるが時流に恵まれない――そんな職人が日々の糧を得るために作ったどこか魂のこもらぬイミテーション。ゴルドの心にそんな言葉が思い浮かんだ。
だがそんな模造品の中に一つだけ、きらりと光る一品にゴルドは目を奪われた。
昔の東洋で女性の黒髪を飾った装身具、たしか、カンザシという名前であっただろうか。
何年か前にスクリーンの女優がそれを外す際の髪のほどける仕草が話題になり、巷で一躍脚光を浴びることとなった。突然に訪れたブームの到来によって様々なデザインの物が生み出され、当時は髪

を長く伸ばそうとする女性たちが巷にあふれかえっていた。
しかし、多聞にもれず、それは売り手の側によってあからさまに仕掛けられたブームであり、あっという間に去ってしまった波と共に、機を見誤り多くの在庫を抱えた小売店が次々になぎ倒されていった事の方が、ゴルドの記憶に残っている。
控え目だが精巧な作りであり、流行を全く無視したその造形美は作り手のプライドを感じさせる。幾つもの見本の中でなぜかそれだけがゴルドの目を引いた。
「こいつはいくらだ?」
厳しい口調を変えることなく高圧的に見下ろしながら少女に尋ねる。そんなゴルドの態度に怯えながらも決して目をそらそうとしない少女はおそるおそるといった感じで相場の3倍の値段を吹っ掛ける。大の男でも逃げ出すゴルドの視線を真っ向からぶつけられ、本音を言えば、おそらく逃げ出したいに違いない。それでもその場に立ち止まってゴルドに売値の駆け引きの勝負を挑んだ少女の挑戦状にゴルドは内心にやりとする。
こんな道の往来で物売りをする幼い少女の生活は厳しいのだろう。よく見れば周囲には彼女と同じような境遇の者たちが道行く人々に声をかけている。だが、そんな事はゴルドにとってどうでもよかった。強い者が生き残り、弱い者は蹂躙される――それはいかなる世界でも変わる事はない。弱い立場にありながらも必死で抗おうとし、ゴルドに勝負を挑もうとするその少女の姿勢にゴルドは好意を覚えていた。
「相手に値段を吹っ掛けるときはもっと堂々とやるものだ」
彼女にそう告げると、懐から取り出した財布から少女の言い値をそのまま支払った。入港時に両替したばかりのまだ新しい札を受け取った少女はぽかんとしている。値切られる事を前提にしていたのだから当然といえば当然であろう。
「どうした? 品物を渡してくれないのか?」
「ちょっ、ちょっと待って……」

心持ち丸くなったゴルドの言葉に少女は慌ててバスケットの中を探る。底の方にあった比較的きれいな包みを取り出すとゴルドに手渡した。

「商談成立だな」

ゴルドの言葉に少女はぺこりと頭をさげる。

「ありがとうございました」

下心のない満面の笑みを浮かべてそう告げると少女は重いバスケットを抱えながらもパタパタと軽い足取りで去っていく。少し離れた場所で再び振り返るとぺこりと頭を下げ、そのまま去って行った。彼女の姿を見送ったゴルドは手の中の品物を内ポケットにしまおうしてふと思案する。カンザシの行方――何気なく衝動買いしてしまったこの品物の明確な行く先がない事に気付いた為だ。

ふと一人の女の姿が思い浮かぶ。

手の中のカンザシが彼女の金髪を飾る様子を想像しようとしたが、残念な事にその様子を思い浮かべる事は出来なかった。

常にブランド物のスーツを身にまとい、すべての物の価値を冷静に数字で判断する彼女が、こんな路地の上で買ったような無銘の職人の品を身につける事はないはずだ。

とはいえ、今のゴルドの周囲にはこの誇り高い品が似合いそうな女は、すぐに思い浮かばなかった。いっそのことリリアにでも渡してパイロット同士の親睦を図ろうかとも思ったが直ぐにその考えも打ち消した。そんな事をすればおそらくジノが黙っていないはずである。

ただでさえ《ゲオルグ》内でリリアに声をかける者たちを次々に殴りつけていく重度のシスコンぶりに火をつける行為は無謀である。最近になってようやく互いに信頼関係らしきものが芽生えてきたというのに、それを自分からぶち壊すような真似をするのは流石に愚か者の所業であろう。

結局、行くあてがどこにもない事が決まってしまった戦利品を懐

にしまったゴルドは、少女の幸運にあやかろうと近づいてきた物売り達を一睨みで追い散らし、再び一時の安らぎを求めて、陸（おか）の散歩に身を任せたのだった。

ラー・カイラム改級戦艦《エナド》のＭＳデッキ内は広大である。3日前からその一区画が分厚いシートで遮断され、中では《エナド》ＭＳメカニックチームによる突貫作業が昼夜を問わずに行われていた。

つい先ほどすべての作業が完了し、シートが取り払われたＭＳデッキ内で、一人のパイロットが変わり果てた愛機の姿に呆然と立ち尽くしていた。

「なんて事しやがるんだ！　お前ら……」

一言、大きな叫び声をあげ、そのまま絶望に打ちひしがれた哀れな男の名をカーク・レイナードという。

数日前、２０８特戦隊の指揮下から一時的に離れた《エナド》の姿は、サイド2・バビロニアコロニーの港にあった。バビロニアコロニーで年に一度行われるコスモ・クルスの祭典において警護と監視を兼ねた広報任務を月本部より命令された為である。

もっともバビロニア側に要請されたのは《エナド》に搭載されている《Ｆ９１》の参加であり、祭典会場であるコロッセウムに連邦軍の超高性能機を展示することで、コスモ・クルス教団が連邦政府に完全に服従し、今後も反逆の意思などないことを示すという極めて政治的な理由からであった。

数年前から毎年行われるコスモ・クルスの祭典は、実のところバビロニアコロニーにとって大きな収入源であり、ここ最近では宗教祭典という意味合いよりも周辺コロニーからの観光客や後援企業を巻き込んで行われる一大イベントと化していた。

『ホントは単なる客寄せパンダだろうが……』というのがカーク達《エナド》ＭＳ隊の一致した意見である。

くじ引きという名の神聖かつ平等な選抜作業の結果、《エナド》ＭＳ隊よりカークの０７号機とジュベールの０４号機がパイロット共々参加する事に決定した。

『祭典に参加させる機体の調整には十分な注意を……』という広報部からの要請により《エナド》ＭＳ隊のメカニックは総出で徹底的にメンテナンスが行われ、カークの愛機は新品同様になって生まれ変わる――だけのはずだった。

自身のくじ運の悪さを嘆いていたカークだったが、愛機が隅々まで整備される事を知り『広報任務参加も悪くはないか』などと思い始めた矢先、作業場がシートで仕切られ締め出されてしまった頃から徐々に暗雲が立ち込め始めた。

連日の突貫作業でメカニックチームの疲労はピークに達しつつあるはずなのだが、その顔は妙に生き生きと輝いている。

こういう時の彼らは大抵何かよからぬ事を企んでおり、その被害を受けるのはカーク自身であるという事は経験上学習しているのだが、かといって彼らの行動に制限を加える事ができる訳でもなく、時折上がるメカニック達の歓声に不安になりながらも、結局締め出されたシートの前でやきもきしながら結果を待つだけだった。

そしてつい先ほど作業が完了し、メカニック達の歓声とともに区画を仕切っていたすべてのシートが取り払われると全く予期しなかった現実がカークを襲った。

調整作業の終了した2機の《Ｆ９１》はその乗り手の間の激しいライバル意識に反し、仲良くハンガーに隣立している。

ヴェスバーを取り外されたその外装は全身を白一色に染め上げられ、さらにその上からしっかりとパールコートされており、装甲の縁は金色のエングレービングによって飾り立てられている。よく見ればそれは浮き上がって見えるかのように塗装された一種のトリックアートであり、《エナド》メカニックチームによるマニアックなまでの芸の細かさを披露している。極め付きはその左肩部に陰影を伴って浮かび上がった薔薇の花――カークの０７号機には青で、そしてジュベールの０４号機には紫でしっかりとペイントされ、パールコートされて輝く装甲の上にしっかりとその存在感を示している。

２機の機体は祭典を彩るにふさわしいオブジェとも言うべき逸品として仕上がっていた。

ＭＳデッキ内にはこの目新しいデザインの機体――《Ｆ９１式典仕様》を一目見ようと艦内全体から非番の乗組員たちが押し寄せ、やがて、二機の機体をバックに記念写真を撮ろうとする者達まで現れ、ＭＳデッキ内はさらなる喧噪に包まれていく。その最中、予期せぬ事態に今にも倒れ込みそうなカークの傍に３つの影が近づいた。

「おっ、なかなかの出来じゃないか」

「ほう、こんな機体に乗れるなんてパイロット冥利に尽きるってやつだな」

「それなら、ジャクソン大尉、俺の代わりに乗ってくださいよ……」

「謹んで辞退させてもらおう。めかしこんだ美女は眺めるほうが好きなのさ……」

カークの恨みがましい視線をジャクソンは軽くスルーすると、近くで写真をとろうとしていた女性クルーたちの一団に声をかけて、その輪に入っていく。

「まあ、たまにはこんなのもいいんじゃない。話のネタになるってもんでしょ！」

すっかり他人事であるシャーリーの言葉に、落ち込むカークは、

思わず魂の叫びをあげた。
「あのなあ、ＭＳってのは兵器なんだよ！　お前だってパイロットなんだから分かるだろう？　高機動戦闘の最中（さなか）で振り回された後を証明するかのようなバーニアの煤けぶりとか、爆光に焼かれ、細かい傷の付いた装甲にわずかに色あいの違うペイントが何度も乱暴に塗り重ねられたり……、そんな幾度もの修羅場をくぐりぬけた軌跡が勲章になって初めて兵器としての重みと存在感が現れるんだ！　それをどっかの少女漫画に出てくる騎士もどきみたく飾りたてやがって……」
「あんたのマニアックなこだわりなんか一般大衆は望んじゃいないわよ。御覧なさいな、中尉殿！　あんたの大好きな彼女も『カワイイ！』なんていって喜んでるじゃない。あれが一般人の反応ってやつよ！」
　悪魔の微笑みを浮かべながら彼のこだわりを一刀のもとに斬り伏せたシャーリーの言葉にカークは後ろを振り返る。彼らと少し離れたところで機体を眺めていたジュベールの左腕にしがみつき、『素敵！』などと歓声をあげているミリー・アーガスの姿にカークの心はさらに打ちのめされる。
　祭典の間だけの一時的な仕様とはいえ、この扱いはあんまりだ。徐々に不利になっていく己の立場と自身を支えるＭＳパイロットの誇り――とどのつまりはシャーリーの言葉通りのマニアックなこだわりであったのだが――を守るべく、カークは傍に立っていたサカキに訴えた。
「でも大尉、《Ｆ９１》には特殊な塗料だって使われてるんですよ。あいつら、たかが民間人のお祭り騒ぎに、一体どれだけ無駄なコストを費やすつもりなんだ！」
　搭乗機体にかかったコストはカークの査定にも影響する。高額のコストを食うＭＳを扱うパイロットと軍査察官との間で毎年行われる陰険なやり取りの材料が増えてしまった事に、カークはうんざりしていた。しかし、そんなカークの訴えにサカキは無情な事実を告げ

る。

「その心配はないと思うぞ。今回は教団（あちらさん）の要望だから、費用は向こう持ちらしい。これ幸いと主計課の奴らが総力をあげて艦内の消耗備品を請求リストに突っ込んでいるらしいぞ」

先程食堂内で泥のように突っ伏していた一団（みなさん）の様子を思い出す。彼らの涙ぐましい努力により、ミサイル一発分に相当する価格に跳ね上がった非常食や携帯用トイレパックなどがでっち上げられて、リストに載るわけである。

「どいつもこいつも分かってねえよ！　チクショウ！」

「まあ、そう言うな。カーク、お前だって今回の班長の意図ぐらい分かってるんだろう？」

「そりゃ……、そうですが……」

やり場のない怒りに震えるカークの横で、サカキが冷静にたしなめる。

先日のレッドチームの壊滅以来、微妙な空気が流れているのは《エナド》メカニックチームの面々も同じだった。撃墜された機体の大部分が回収されることなく未だにデブリとなって宇宙に漂っているという現実は、空っぽのＭＳハンガーの前で佇む彼らの心に暗くのしかかる。

――自分たちにミスがあったのではないか

――あの時もっと丁寧に作業していればパイロット達は死なずに済んだのではないか

例え彼らが完ぺきな整備をしていたとしても、人はそのように考え、自身を責めてしまうものだ。

先日のアイシャ達による極秘映像流出の一件はそんなメカニック達からパイロット達への一種の八つ当たりである一方で、帰ってくる事の出来なかった仲間達に代わり、生き残ったパイロットの側からのメカニック達へのケジメでもあった。同時に、アイシャにとっ

て身近な人間であるシャーリーやカークをアイシャ自身がやり玉にあげることで、次の戦闘でも生き残って欲しい、そして自分に憎まれ口の一つも叩いてほしい――そんな彼女のメッセージが込められていた事に二人は気付いていた。

今回の外装作業もそんなメカニックメンバーたちの士気をあげるための班長の思惑なのだろう。事実、ここ数日疲労の極みにありながらもメカニックチームは実に生き生きと目新しい作業に打ち込んでいた。壁の如く閉ざされたシートの向こうから聞こえてくる笑い声は、失われていた活気を取り戻しつつある事を示していた。

「へへっ、どうですか？　レイナード中尉」

ペイントに汚れ、疲労して隈の浮いた顔に満面の笑みを浮かべながらアイシャが近づいてくる。薔薇の意匠はアイシャの渾身の力作であり、度重なるリテイクに奮闘した事をペイントまみれの作業着が証明していた。

そんな彼女の様子に構わず抗議の声を向けようとしたカークだったが、彼女の後ろに立っている異様な空気を放つ一団に、思わずぎくりとする。

（アイシャと俺達の『アイ』の籠った力作に、テメエ、まさか文句をつける気じゃないだろうな！！）

連日の徹夜で異様にハイになった整備兵たちが、目をギラつかせ、腕まくりをして、ご満悦の様子のアイシャの後ろに控えている。流石のカークもこの状況で抗議の声をあげるほど愚かではない。長いものには巻かれろという言葉の如く、しぶしぶと返答をよこす。

「ま、まあ、いいんじゃないか？」

カークの返答にアイシャを含めた一団が喜びの声をあげる。外装デザインに口うるさいカークから出たＯＫによって、作業が完ぺきに終了した事が宣言されたからである。そんな彼らを眺めながら、心の中から何か大切な物が失われてしまった事をカークは実感した。

「いいじゃないの、ＭＳなんて乗ってしまえば中見は一緒よ！　ジュベール中尉を御覧なさいな！　文句の一つも言わずに現状を受け

入れてるじゃない」
　黒い微笑みを浮かべながらシャーリーがさらなるとどめをさす。カークの視線の先には、コックピットに乗り込もうとハッチに手をかけたジュベールとコックピット内を覗き込んでいるミリーの姿があった。
「もう、勝手にしてくれ……」
　人生は諦めが肝心である。さらなる盛り上がりを見せつつあるＭＳデッキ内で、カークは一人途方に暮れたのだった。

（２０１０／０６／２６　Ａｒｃａｄｉａにて初稿）
（２０１１／０４／１７　本サイトにて初稿）

05

祭典を明後日に控えたコスモ・クルス教団本部の会議室内では、切羽詰まった事務方同士の口論が周囲に刺々しい空気を振りまいていた。

「何故、今頃になって変更事由に関する採決が必要なのですか？」

「この件に関しましては、すでに事前に連絡がいっているはずですが……」

「事前？　祭典に関する一切の変更事由は五日前までに通知するという事が慣例ではありませんか！」

「毎年、状況の変わる事態にそんな紋切り型の対応で事が収まる訳がないでしょう……」

コロニー一基の経済に影響を与えかねない大規模なイベントの運営は教団の一大事である。弱体化しつつある組織力とは裏腹に、集客数に目を付けた後援企業のＰＲもあって、祭典の規模は年々拡大し、コロニー内の各種サービス業をも巻き込んで一種の商戦ともいえる様相を呈しつつあった。当然、拡大する規模に比例して、毎年のように多くの新しいトラブルが生まれ、事務方の面々は対応のために各方面との折衝に神経をすり減らしている。只でさえぎりぎりの状況にさらなる厄介事を抱えこみたくないという思いからか、彼らは互いに責任をなすりつけ合っていた。

どこの世界でも切羽つまった場面でよくある光景だが、それをわざわざ教主である自身がいるこの場でやる辺りが、彼らのあざといところである。次第に悪化していく議場内の空気に、上座に座っていたシェリンドン・ロナは辟易としていた。

口角に泡を浮かべて熱弁を振るう者――、
冷笑的な笑みを浮かべて皮肉たっぷりに反論を切り返す者――、
他者を批判する事のみに己の存在意義を見出す者――、
自身は決して表に出ずにそんな彼らを利用して策を巡らす者――、
無関心を装いながらもより優勢な陣営に恩を売るために画策する者――、
様々な思惑を胸に秘めた者たちが跳梁跋扈する議場内には、腐敗した瘴気ともよべる空気が充満しつつある。

――何故、彼らは争いたがるのだろう？

人が人である限りその行為はおそらく本能と呼ぶべきものであろう。

しかし、今の彼らには『祭典』という教団の明日をも左右しかねない一大事が迫っている。眼前に迫る困難に対し一致団結して事に挑む――それこそが人類が唯一獣と異なる理性的な生き物の証しのはずである。

だが、シェリンドンの前で争い続ける彼らには互いに歩み寄る余地を見つけて物事を解決しようという姿勢はない。対立する勢力のミスを暴き、詭弁すら駆使して徹底的に糾弾し、力関係をより有利に導こうという浅ましいまでの組織内闘争に明け暮れる姿ばかりがそこにあった。それは社会というシステムを構築した人類が何千年もの間繰り返し続けた逃れようのない宿痾ともいうべきものだろう。

そして、互いに材料を出しつくした時、事の次第の判断を教祖であるシェリンドンに委ね、その結果さらに互いの溝を深めあっていく――クロスボーンの崩壊以来、コスモ貴族主義を標榜する唯一の勢力となった教団において、過去何度も繰り返され続けたお決まりのパターンだった。

人類が宇宙という場所に生活の拠点を移してから百年以上が経ち、彼らの生活を支える科学技術は、かつて旧世紀と呼ばれた時代のそれに比べれば雲泥の差である。その技術革新の申し子ともいうべきスペースコロニー――巨大な第2の故郷――とも呼べる場所で暮らす人々は、彼ら自身のメンタリティーも又、戦争という愚かな行為に耽った先達に比べて、そのテクノロジーと同様により進化発展していると盲目的に信じていた。

しかし、気候や天候すらもほぼコントロールしてしまうスペースコロニーという環境が、果たして彼らに健全な精神活動を与えうるにふさわしいかどうかは実のところ怪しい。

人工の大地から上空を見上げれば、うっすらとかかった雲の向こうに、対面の大地に暮らす人々の存在を示す様々な輝きが見てとれる。巨大な円筒形の内壁に張り付いて暮らす人々が常に意識に置くのは、外壁の向こうの無限の虚空に広がる可能性ではなく、閉鎖された環境の中で自身の周囲や頭上で暮らす人々との際限のない競争だった。それはあたかも檻に入ったネズミが車輪の中でやみくもに走り続ける姿を連想させる。

『スペースコロニーという変化のない心地よい人工の環境は人々の精神を甘やかし、堕落させている』――コロニーのあり方に対し、辛口な批評を加える者たちもまた、テクノロジーという恩恵に預かり堕落した環境でぬくぬくと生を貪っていた。

持って生まれたその攻撃性を外側ではなく内側に向ける――彼らの行為はただいたずらに妄想を膨らませ、複雑化し続ける社会システムをやみくもに混乱させ不安と不信をあおるものである。結果、混乱しつつある社会に確固とした未来像を指し示す事の出来ない民主主義制度は、単なる数の暴力として、一部のエリート達のみが分不相応な利益を興じる現在の連邦の支配体制の原動力となっていた。

百年以上続く宇宙世紀において、そんな地球圏の現実に疑義を抱

き、様々な主張をするものが生まれるのは当然の帰結であろう。

『人類と世界を収める者は自らの血を流す事を厭わない高貴なるものが司るべきである』――それが地球連邦政府の絶対民主主義を否定するコスモ貴族主義の根本思想だった。そして高貴なるもの――貴族――とは血筋ではなく「高貴なる精神」や「高い能力」を持つ者の事を指し、その為の魂の修練の場が人生であると考えていた。

自らの努力により選ばれた存在になりうるというその思想は、連邦政府の愚策の元に閉塞した社会の中で行き詰っていた多くの若者たちに希望を与えた。この思想の元、ある者はクロスボーン・バンガードの一員として戦いの場に赴き、戦いを望まぬものはコスモ・クルス教団の一員として己が人生に修練を課した。

だが、時がたつにつれ大きな矛盾が生じ始める。戦場に赴く事や厳しい修練を己に課すことで『我こそは世界を収めるにふさわしい者である』と考え階級社会を肯定する者たちの間に、さらなる階級闘争が生まれるようになった。又、いかに個人の努力を重ねても望んだ結果を得ることのできない者たちの不満が、コスモ貴族主義の根本を揺さぶることとなった。

社会変革の為の闘争の手段は、やがて手を携えるべき同朋を攻撃しあうこととなり、絶えず不満と内紛の連鎖が組織を脅かしていた。

そんな争いを収めるためにシェリンドンはコスモ貴族主義を指示する多くの人々に新たな道を示した。

それが、『ニュータイプ思想』……半世紀以上も昔に主張された曖昧な概念として人々の記憶の中にわずかに残っていた思想である。『ニュータイプこそが争い合う人類を導くために神に力を与えられたものである』――そう喧伝した教団はその力を有するであろう人々の獲得に躍起になっていた。

ニュータイプ……その解釈は人により様々である。

曰く、認識能力の拡大により人並み外れた直感力と洞察力を身に

つけたもの――、
　曰く、宇宙時代に適応した人類の進化の形――、
曰く、ＭＳパイロット適性の高い人間――、
曰く、政治的イデオロギーの差異から生まれた単なるプロバガンダ――、
　曰く、厭戦気分に支配された民衆の間から生まれた幻想――、

ともあれ、『確固とした雛型を提示することのできないニュータイプ論は、結局のところ概念上の存在でしかありえない』という事実は、いつしか単なるオカルトまがいな幻想として歴史の中に埋もれつつあった。

　シェリンドンがその言葉に惹かれたのは、そう呼ばれるに値する力を持つ多くの人々を実際に知っていたからである。そして、おそらく彼女自身も又そう呼ばれるもののうちの一人であるだろうという自覚があったからでもある。
　それゆえに、かつての彼女は資質をもつ人々を見出し、手許に置き、協力者となってもらう事で、コスモ・クルスの描く理想の社会の礎を築こうとしていた。しかし、残念な事に彼女が見出し支えになってもらおうと考えた彼らは、一人又一人と彼女のもとを去って行った。
　その優れた能力ゆえに俗物的な嫉妬や憎悪、時として凡俗に決して理解されることのない異質な物への恐怖の対象ともなり、ある者は自身の才能を否定し世俗の中でひっそりと暮らす事を選び、又ある者は争いしか生み出さない現実に嫌気がさして、彼女の元を離れていったのである。
　結局、残ったのはコスモ・クルス教団教主の椅子に縛りつけられ、高邁な理念を忘れて組織の主導権争いに俗物的な情熱を燃やす者達に囲まれた孤独な女王としての彼女自身の姿だけだった。

皮肉な事に彼女の眼前で争い続ける者達は、決して悪意を以てその行為に耽っている訳ではない。むしろその主張の大部分が健全な社会的通念から生まれた個人の良心、正義、信念といったものを元にしている。

シェリンドンを支え、平和的思想の元、コスモ・クルス教団の永遠の発展を望む者――、

強き信念のもとに掲げられる旗をもって、かつてのクロスボーンの栄光を再び取り戻そうとする者――、

過去の組織や体裁にとらわれず、その組織力をバビロニア政庁に食い込ませ、コロニーの最大勢力として現実を生きようとする者――、

教団に所属する人々の多くが個人レベルでは皆、良心的な善人の顔を持っている。

だが、そんな人々が集まり派閥を作り自身の理想や目的を実現させようとすると、途端にそこには陰湿な探り合いや醜い闘争が生まれる。

そして、教祖という立場にあるシェリンドンを都合のよい神輿として担ぎ出そうとする。彼らは決して彼女自身の言葉など聴こうとはしない。例え聞いたとしても、それは彼らにとって都合よく捻じ曲げられたシェリンドンの意思とは全く異なる他人の言葉だった。

議場内では互いに攻撃の材料を出しつくし、ようやく事態に決着をつけるべく矛先がシェリンドンに向かいつつあるところだった。

常日頃は彼女の言葉に耳など貸さぬ癖に、このような会議の緊急動議という状況を利用し、シェリンドンに踏み絵を踏ませようとする者達の阿漕な遣り口に静かな怒りがこみ上げる。片方の言い分を聞けばもう片方から非難される事は目に見えている。連邦議会に巣

くう老獪な政治家たちのように玉虫色の決着を望めば、途端に全ての非難が彼女に集中する事になる。

彼女自身がいかに優れた洞察力を持ってその真意を見抜く事が出来たとしても、それだけでは、頑なな教団の者たちを納得させ己が意を示す方向へと導く事は出来ない。彼らの思い込みよりも自身の言葉が優れた物であることを自らの行動を以て証明し、彼女の存在に依存しようとする者達に対しては最後までその立場に理解を示し続けることで信頼を勝ち取らねば、教団という組織が動くことはない。

そして、年々教団に属する者たちの年齢が上がり、思考の柔軟さが失われていくにつれ、硬直化していく組織を束ねる苦労はより肥大化していく。

『今のままではコスモ・クルスに未来はない』

それがここ近年彼女の中で膨れ上がっていく確信に近い未来像であった。

しかし、そんな彼女の不吉な予感など気にすることもなく、周囲の者達は自身に最も有利な決定が教祖の口から引き出されることのみを期待しつつ、彼女を注視している。その周囲の無責任な期待に一つ溜息をつき、問題に処断を下すべく発言しようとした時だった。

「姫様」

控えの間から現れた初老の男が彼女に近づき小さく声をかける。彼女が生まれる前から生家であるロナ家に仕え、幼いころから彼女の身の回りの世話をし、時には若くして教主として祭り上げられたが故に気付くことなく犯してしまった自身の愚行をきちんと叱ることのできる信頼に値する数少ない者のうちの一人だった。

「少しお時間を頂きたいのですが……」

常と変らぬ物静かな態度で彼女に小さく耳打ちする。

初老の彼の立場は、彼女の家人でありながらも、教団内での地位はないといっても過言ではない。だが、彼は、育ちの良さ故に世俗の些事に疎い彼女の代わりにその目や耳となり、時には適切な助言

を分かりやすい比喩を用いて彼女に与えることで、身内で争い合う教団内で身勝手に己の正義を捏造する周囲に翻弄され偏った判断を下しがちな彼女を助けてきた。

そんな自身の分をわきまえた彼が、教主であるシェリンドンの立場を無視するかのような過ちを犯す事は断じてあり得ない。混乱する会議の席上、彼女に席を中座させるかのように促すという行為には何か意味があるのだろう。

常と変わらず物静かな態度で振る舞う彼の行動原理は常に主であるシェリンドンの利益が最優先であるという事を長年の経験から理解している彼女は、即座に会議の中断を命じた。

男に手をとられ退出する彼女の背に失望、嘲笑、侮蔑といった感情が向けられるのを感じながら、彼女は静かに別室に移動した。そこで男からもたらされた報告は今にも崩壊しそうな教団で一人奮闘する彼女にとってあまりにも辛い現実だった。

『コースクリア。Ｂ０７、発進どうぞ』

「了解。Ｂ０７、レイナード機、出る！」

職務上の営業スマイルを浮かべた管制オペレーターのミリー・アーガスの指示に応答したカークは、飾り立てられた愛機をカタパルトにセットする。

「もう少し愛想良くしないと嫌われ……はぅわっ」

パイロットシートの後部に臨時に増設された補助席から聞こえる雑音を無視したカークはペダルを踏み込み、愛機を港に停泊中の母艦から発進させた。

「黙ってないと舌噛むぞ！」

滑るように飛び出した機体の加速Ｇが収まった後で告げたカーク

の言葉に、座席の後ろからドスンと抗議の一撃が見舞われる。それを無視したカークは細かい操作を繰り返し、コロニー内部に通じるエアロックの巨大なハッチ前に《Ｆ９１》を着地させる。すかさず彼の機体の隣にジュベールが自身の機体を着地させた。相変わらず互いに言葉を交わす事はない。

突如、港湾口に現れた派手な外見の２機のＭＳに、作業員や港湾管理局員達から好奇の入り混じった視線とヤジが投げかけられるが、パイロット達は気にすることなく、黙々とコロニー内侵入のマニュアルに従って作業を行う。

二機の《Ｆ９１式典仕様》を収納した貨物用エアロックは巨大な稼動音と共に港湾側のハッチを閉じると内部に濃密な空気を充填させていく。エアロック内部がコロニー中心部と同じ気圧に調整されると、再び巨大な稼動音と共に今度はコロニー内壁側のハッチが開き始めた。

ハッチの向こう側には、人工物に占められたそれまでの景色とは全く異質な世界が現れる。巨大な円筒の内部に、人の住む緑の大地と解放型コロニー特有の光の河が交互に並んでいる。疑似重力を生み出す為の内壁の高速回転は、中心部に存在する大気にも影響を与え、地球上では決して見られないコロニー特有の円状の雲を形成している。

そのすべてが人工物の世界でありながらも、戦艦の艦内などとは全く異なる柔らかな光がモニターの前面を照らし出す。白色の大気と大地の緑が織りなす微妙なグラデーションとコントラストが、そこに確かな命の脈動を感じさせた。中心半径３キロの巨大な緑の万華鏡――それが、地球圏に暮らす者達の第２の故郷の姿だった。

ハッチの完全解放が表示されると同時に２機の《Ｆ９１》は、雲に遮られた曖昧な緑の人工世界に向かってダイブする。

大気が充満しながらも無重力状態のコロニー中心部は、地球上に

はないコロニー独自の環境である。高速回転する内壁によって生み出される大気の流れを装甲越しに感じ取りながら、2機の機体は無重力状態の雲のトンネルを通り、目的地に向かって一路飛行していた。

（さすがね……）

弱冠窮屈な乗り心地の補助席にグラマラスな身体を小さく押しこんでいたシャーリーはそんな感想を抱いていた。シビアなテクニックが要求されるコロニー内の飛行は真空の宇宙空間とはまったく異なる。装甲越しに感じられる大気の重さと粘り、およそ2分に一度のコロニー自身の回転によって生み出される風、そして、無重力状態の中心部から地表面に向かって徐々に変化する疑似重力、コンピューターによる補助があるとはいえ、真空の宇宙空間とは全く異なるその環境は熟練パイロットをも戸惑わせる。視界の全面に広がる大地と生み出された疑似重力の方向のギャップによってパイロットの視界はあてにならず、際立った空間把握能力が要求されることになる。

まして、今の彼らの機体――2機の《Ｆ９１式典仕様》の背部からはヴェスバーが取り外されている。圧倒的な攻撃力だけでなくＡＭＢＡＣとして機体に柔軟かつ繊細な運動性能を与えるこの武装に内蔵される大規模コンデンサーの構造は、実のところ軍の機密事項の一つである。祭典の会場で衆目にさらされることを考慮し、万が一の事態を想定して除外されたが故に、機体の操縦はいつもとはかなり勝手が違うはずだった。

しかし、彼女の眼前で操縦するカークからは微塵の迷いも感じられない。モニターの左後方部に移るジュベールの０４号機も同様で、ぴたりと一定の距離を保って無重力地帯を飛行している。

今回の祭典で予備パイロットとしてカークの機体に搭乗する事が決まったものの、今一つコロニー内での操縦に自信が持てなかった彼女は、何らかの参考になればと考え、彼の操縦する機体に無理やり同乗していた。しかし、困難なはずのコロニー内飛行を全く違和

感なく当たり前のようにやりとげてしまう軽く柔らかな彼の操作技術には、ただ脱帽するだけだった。

つい先刻まで変わり果てた愛機の姿にどっぷりと落ち込んでいた人間と同一人物とはとても思えない。

人間、何か一つぐらいとりえはあるもの――平時は変人以外の何者でもない上官の想像以上の技術に舌を巻く。いや、あるいは変人であるが故の特異な技術なのであろうか――そんな風に考えてしまうのは自身がＭＳパイロットとして劣っていることを素直に認めたくない為であろう。

尤もＭＳパイロット以外の人間からみればシャーリー自身も十分にそのカテゴリーに入っているのだが……。

突如、全天周モニターの一部に明滅表示が生まれる。それは雲の壁の向こうに広がる人工の大地の上にある祭典会場の位置を示す信号だった。

信号を確認したカークは速やかに地上の誘導員と交信を終えるとさらにジュベールとの交信を開始する。二人の仲の悪さを証明するかのような極めて事務的な会話に、狭い補助席の中でシャーリーは思わず苦笑する。

「降りるぞ！」

急激にかかるＧへの警告であろうカークの声に、狭い補助席の中でシャーリーはしっかりと身構えた。同時にカークの機体は、送られた信号を頼りに、曖昧な白い雲の壁を勢いよく突きぬけて、緑の大地に向かってさらにダイブする。わずかに遅れてジュベールの機体がそれに続く。上空３キロの無重力地帯から地表面に向かって２機の《Ｆ９１》が一気に駆け下りる。急速な早さで眼下に広がっていく人工の大地を目の当たりにしながら、シャーリーはのしかかってくるＧと、それをものともしないカークの柔らかな機体制御技術

をその五感に刻み込んでいた。

（２０１０／０７／１０　Ａｒｃａｄｉａにて初稿）
（２０１１／０４／２４　本サイトにて初稿）

06

アレキサンドリア級重巡洋艦《ゲオルグ》は現在、バビロニアコロニーに最も近いコロニーの港の片隅に停泊していた。

表向きは健全な民間軍事企業である《ＸＸＸ（トリプルエックス）》が所有する《ゲオルグ》の周辺ではしっかりとカモフラージュされた補給物資の積み込み作業が黙々と行われている。尤も祭典が明後日に迫ったバビロニアコロニー行きの物資輸送船や旅客船で港湾内はごった返しており、片隅でひっそりと積み込み作業を行っている《ゲオルグ》の動向を気にとめるものなどいない。

港湾管理局に提出した書類には、祭典当日のバビロニアコロニー周辺警備を業務委託されている事が記載されており、《ゲオルグ》を怪しむものは皆無だった。むしろ、ここ数年の間、年に一度は必ず起きる出入国ラッシュに殺気だった港湾管理局員達はてんてこ舞いの状態であり、トラブルさえ起こさねば何をしても怪しまれる事はないといった様相である。そんな《ゲオルグ》艦内のミーティングルームの一室でゴルドはヴォラスコフやネーナと共に今後の対策を練っていた。

「私怨だな……」

ネーナとゴルドが独自の情報源からそれぞれに集めてきた報告を聞いたヴォラスコフは一言そう呟いた。愛用の携帯ボトルを手の中で弄びながらも、一瞬見せた鋭い眼光とともに発せられたその一言にゴルドは思わずどきりとする。彼はゴルドの過去を知っているわけではない。おそらくはゴルドの意図とは別の点において気付いた事由に対して発せられた言葉であったようだが、この事案に関して様々な思いを抱えているゴルドにとって、その一言は鋭く心に突き刺さった。

《ゲオルグ》艦長ヴイットーリオ・ヴォラスコフ――元連邦軍人である彼はそれなりの地位にいた人物であろうと見受けられる。

乗組員の経歴に関して唯一全ての情報を握っているネーナは、このあたりの事はしっかりわきまえており、例え相手がゴルドであっても必要以上の事柄を知らせる事はない。そのような彼女の情報管理の徹底ぶりは様々な事情を抱えるであろう艦内乗組員たちにある種の安心感を与えている。

無精ひげを伸ばしたいささか頼りなげな外見と日頃からネーナにやり込められている姿から、ブリッジ内では噂好きのクルー達に『昼行燈（ひるあんどん）』などと呼ばれているが、ゴルドはそれは見せかけの姿であろうと見立てていた。合理的思考に基づいてぽつりと発せられる命令や迷いのない指揮、そして慎重な操艦ぶりはこれまで《ゲオルグ》を大きな危機に陥れた事は一度もない。

進宙後に巻き込まれた《ゲオルグ》の初実戦は、混乱する艦内を統制する為に、実はこの男がワザと仕掛けたものではないかと考えていたが、その真偽のほどは定かではない。結果として《ゲオルグ》が今日まで全く危機的な事態に陥っていないという現状はまぎれもない事実であった。

バビロニアコロニーを散歩がてらに歩き回ったゴルドは幾人かの旧知に出会い、教団の状況を何気なく聞いて回っていた。再会した旧知の多くは教団からもクロスボーンからも離れて一般市民として平穏な日々の生活を送っている。

経済だけでなくコロニー政庁にも強い影響力を持つ教団の動向は、バビロニアコロニー市民の大きな関心事の一つであり、確度の高い情報から信憑性の低い噂話まで様々であったが、それらの多くは組織内で対立する2派によって分裂の危機に瀕している事を示していた。

改革派に所属するハウンゼン達は教団内で多数を占めており、劣勢なのはむしろ教主に比較的信頼の厚い保守派のようだった。尤も改革派が多数であるといってもハウンゼン達強硬派は一部で疎まれ、その組織力は盤石であるとは言い難い。

かといって、距離の近い教主と保守派の間においても考え方の隔たりが大きく、一概に単純な2派の対立という図式が描けるという訳ではないようだった。

常に内紛の噂の絶えない組織を抱えて苦悩するシェリンドンの姿に同情的な市民が多いというのが実に印象的だった。

ネーナから得られた報告も似たようなものであり、ハウンゼンからの依頼をゴルドが引き受けることでもたらされる事態は今後の教団の動向にかなり決定的な事態を招く事が予想された。

《ゲオルグ》進宙以来、黙々と行われるデータ回収と十分な補給作業以外は一貫して静観の構えを崩さないアナハイム側からは何の要請も命令もなく、事態を決定するのは結局のところ《ゲオルグ》の事実上の意思決定機関となっているゴルド達3人次第だった。

ハウンゼンからの依頼の遂行を弱冠消極的ながらも肯定するゴルドに対して、最も反意を示すだろうと予想されたネーナは一貫してその曖昧な態度を崩さず、変わってヴォラスコフが辛うじて反意を示すくらいだった。その理由もゴルドが指し示した作戦内容についてというよりも、その為に必要とされる《ゲオルグ》の様々なカモフラージュ作業が面倒くさいからというものである。

結局、相応の報酬と引き換えにハウンゼンからの依頼を引き受けたゴルドにより、《ゲオルグ》の出航が決定したのだった。

作戦の実行を決定するや否や、ゴルドはすぐにＭＳデッキに向かい《Ｆ９７》のコックピットに入ると、ハウンゼンから引き渡され

たデータを元に予想されるミッションのシミュレーションプログラムを組んだ。
　間接照準によるロングレンジライフルでの超遠距離狙撃。本来近距離戦闘を想定して設計された《Ｆ９７》であるが、日頃からバックアップを担当するリリアの《Ｆ９７ＸＥ》の蓄積データをもとにミッションの成功率をあげていく。射出された実体弾に内蔵されたプログラムによって、ある程度弾道が補正されるとはいえ、一度のミスも許されない。出航後に安全宙域で実射テストを行って再調整を加えることを考慮して、今のうちに予想される問題点をすべて洗い出し、すべて解決しておくべきであろう。

　随分と長い間作業に没頭していた事に気付いたのは、《ゲオルグ》が出航準備を終えた事を知らせる艦内通達が流された時だった。
　一息つこうとコックピットハッチを開き外に出る。広いＭＳデッキ内では、メカニック達が搬入された物資の整理や無骨な輝きを見せるロングレンジライフルの調整を念入りに行う姿があった。
　ふと、一つの影が自身に向かって近づいてくるのをゴルドは感じた。
　振り返ると、ゴルドの感性ではまったく理解できない奇抜なデザインの私服を着たジノが、血相を変えてこちらに向かって宙空を泳いでくる。突然の《ゲオルグ》の出航決定によって休暇が取り消された事に対する不満でも言いに来たのだろうか？
　ともかく、彼の開口一番の第一声はいつも通りのケンカ腰である事は容易に想像がつく。
（のんきなものだ……）
　こちらがなれない腹の探り合いに神経をすり減らしているというのに、そんな事情を想像すらできずに一方的に不平不満を言う。もっともゴルドもジノの年頃には似たようなものだったのだから、それは若さゆえの無知という事なのだろう。『俺があのくらいの年頃はもっとましだった』などというのは、いつの時代も世界の広がり

を閉ざした年寄りの台詞である。
　宙空を弱冠早めの速度で泳いできたジノは、《Ｆ９７》の装甲を掴み、しっかりと慣性を殺して体勢を整えた。ゴルドがコックピット内でシミュレーションプログラムと格闘していた頃からずっと待っていたようで、近づくなり、待たされた時間分の怒りを吐き出すかのようにゴルドに詰め寄った。
「どういう事だ、おっさん！」
　コックピット内にいるゴルドをわざわざ呼び出さなかったところをみると、極度に神経を使う狙撃プログラムに集中していたゴルドに一応、ジノなりに気は使っているのだろう。近頃、ようやく直情的で不器用なジノの思考パターンが読めるようになったゴルドは、静かに答える。
「今度は何だ？」
「今回の仕事のことに決まってんだろう！　狙撃は本来リリアの担当だろうが！　俺達の腕がそんなに信用できねえのか？」
　狙撃を担当するゴルドの機体に随半するのはジノの機体のみ、リリアには万が一の場合に備えて、《ゲオルグ》を防衛する事が今回の作戦の方針だった。どうやらジノの怒りは休暇を潰されたなどというちっぽけな事に対してではなく、寮機に信頼されていないのではないかというプロのＭＳ乗りとしての誇りを傷つけられた事にあるらしい。
　相手をただ若いからといって見下ろし、安直な偏見でジノの内心を判断していた無意識な自身の傲慢さに嫌気する。これでは『おっさん』呼ばわりされても仕方がない。
「悪いな、ジノ。今回の件ばかりはどうしても他人には譲れんのだ」
　二重の意味を込めて率直に詫びる。ゴルドの言葉にジノは思わず黙り込んだ。言葉と共に一瞬見せたゴルドの表情はこれまでに見た事のない真剣で厳しいものだった。ゴルドの詫びの言葉よりも『他人には譲れん』――その言葉が奇妙な重さを伴ってジノの心に突き刺さる。

「ま、まあ、そう言う事なら仕方ないけどよ……」

怒りの矛先を突然失ってしまったジノは困惑している。このままでは、後でまた八つ当たりまがいに、艦内クルーとつまらぬトラブルを起こす事が予想される。トラブルの芽は早めに摘むに越したことはない。ゴルドはジノに言葉をかける。

「それで、お前は、どうする？　今回の件、背中を任せてもいいのか？」

全神経を使う狙撃の間、無防備になる自機のカバーに入る寮機の援護は必要不可欠である。人間的にはともかくパイロットとしての腕は十分に信頼していることを言外にちらつかせながらゴルドはジノに尋ねた。

「あっ、当たり前だろ！　仕事は完ぺきにやってやるよ。おっさんを守るのは趣味じゃねえけどよ！」

弱冠赤くなりながら、吐き捨てるように答えたジノは、決まり悪そうにゴルドの傍を離れ、《Ｆ９７》の装甲を足場にキャットウォークの方へと向かっていく。遠ざかって行くジノの背中を見ながらゴルドはぽつりとつぶやいた。

「仕事……か」

事情を知らぬ者、つまりゴルド以外の《ゲオルグ》の全クルーにとって、これはいつもと変わらぬ仕事でしかない。無意識に意気込みすぎてしまっている自身の姿にゴルドは気付いた。手元の飲料チューブを一息に飲み干す。のどを潤す冷えた水分が心身の熱を奪うとともに、思考が冷静になっていく。

（これはいつもの仕事なのだ……）

《Ｆ９７》を使いミッションをクリアしてデータをとる。迅速、かつ正確に目的を遂行し、極力リスクを負わずに戦域から離れる――いつも通り、プロとして完璧な仕事をすればよかった。

その対象がたまたまゴルドにとって因縁のある存在であり、その一点においてゴルドの中に眠る過去の自身が強くこだわっているだけの話である。

『私怨だな……』

先程のヴォラスコフのつぶやきが、再びゴルドの心に響いていた。

祭典を翌日に控えたコスモ・クルス教団の建物の一角では、モビルスーツハンガーを連想させるような広い室内を華やかに飾りつけ、シンプルかつ優美なデザインのシャンデリアが温かな光を室内に振りまきながら輝いていた。降り注ぐ光の下、色とりどりのパーティドレスを身にまとった淑女たちがタキシードに身を包んだ紳士たちにエスコートされ、華やかなレセプションパーティーの一幕を演出している。オーケストラの生伴奏が広い室内に心地よく鳴り響き、会場内の数百名に及ぶ人々の心の中にゆったりとした時の流れを育んでいる。

会場内では作業用ロボットなどという無粋な物は使われず、教育された給仕たちが深紅の絨毯の上を来賓達の間を縫うようにてきぱきと動く様は、このレセプションにしっかりと予算がかけられている事を示していた。

連邦軍政府高官や、コロニー政庁幹部、後援企業の取締役達が、今年のコスモ・クルスの祭典の開催に大いに貢献した来賓として紹介されていた。彼らをカモにしようと密かに暗躍する詐欺集団が正装して紛れている――などと想像するのはB級映画の見すぎというものだろう。

そんな上流階級の人々を集めて華やかに行われるレセプションパーティーに、カーク達《エナド》パイロットの一団の姿があった。明日の祭典に協力を仰いだすべての人々を招待するという名目であったが、はっきり言ってカークには場違いな所だった。

室内で談笑する誰もがその顔に作り物の笑顔を張り付けている。仮面を被りながら互いを値踏みしあい、自身にとっての利用価値の度合いを模索する――そこは戦場とは全く異なる戦いの場所ともいえた。

笑顔の下のどろどろとした欲望が透けて見えてしまうカークにはどうしてもその空気はなじめなかった。

故に、開催の宣言がなされると同時に、連邦軍の制服に物珍らしげに近づいてくる紳士淑女の群れの中に思慮深い部下（シャーリー）を放りこみ、様々な下心を名刺に込めて近づいてくる企業戦士たちの群れの中には心優しき上官（コーナー）を放りこんで、自身は会場の一角に避難していた。レセプションの開会時に姿の見えたジュベールはとっくに姿を消しており、その予備パイロットのバッジョはあたふたとしながら場違いな会場内をあてどなくさまよっているようだった。

立食コーナーで《エナド》内はおろか、平時でもめったに口にできない贅沢な品々を皿に山盛りにとりわけると、周囲の好奇の視線を無視して、カークはひたすらに詰め込んでいた。

（まったく……、やってらんねえよ……）

広報部からの事前の通達では祭典のクライマックスに行われるコロニー外での編隊飛行に、カーク達の2機の《Ｆ９１》が加わるはずであったが、先程のブリーフィングにおいて、教団側の都合で編隊飛行への参加が中止となったことが知らされ、カーク達の任務は単なる会場内の監視のみとなっていた。いかに連邦軍の誇る超高性能機とはいえ、動かなければ単なる鉄の塊である。

（《ジャベリン》にハリボテをかぶせて立たせてても、分からないんじゃないか？）

軍事マニア達が聞けば抗議の声をあげそうな暴言を呟きながら、カークは黙々と皿の上の料理を片づける。身についてしまった軍人特有の早食いの癖は一朝一夕に抜けるものではない。周囲の婦人達の顰蹙をかいながらも、カークは手早く食事を片づけた。

会場内の人ごみでカークの立っている場所からはやや低めの身長の

コーナーの姿はすでに見えず、シャーリーの方は見ず知らずの来賓達のとめどないおしゃべりに無理やり付き合わされているようだ。

心優しき上官と思慮深い部下の尊い犠牲の上に手に入れたわずかな隙を窺いながら、贅を尽くした料理の数々を十分に堪能したカークはそろそろ退出のタイミングを計り始める。

手に入れたチャンスは最大限に生かす――俗にいうトンズラの機会を窺いながら手早く食事を終えたカークは、空になった取り皿を給仕に手渡し、無神経な周囲に弱冠ひきつり気味の愛想笑いを振り撒いているシャーリーの為に、アルコールをオーダーする。

給仕からドリンクを手渡されて、一瞬目があったシャーリーがこちらを睨みつける。

『オ・ボ・エ・テ・ナ・サ・イ・ヨ』と大仰に口の形だけでそれを伝える彼女に対して、『ケ・ン・ト・ウ・ヲ・イ・ノ・ル』とばかりに満面の笑みで敬礼するとカークはその場を逃げ出すように退出した。

金銭欲と権力欲にとりつかれた亡者たちが互いに見栄を張りあうレセプション会場をどうにか抜け出し、明日に備えてゆっくりと心身を休めようと教団側の準備した宿舎に向かったはずのカークだったが、どこをどう間違えてしまったのか、すっかり見覚えのない場所に迷い込んでしまっていた。

（参ったな……）

辺りはすっかり夜の帳に覆われ、建物から漏れる光がぼんやりと周囲を照らしている。会場の入り口近くに陣取っていた政庁高官御一行様を避けるために裏口から出たのがまずかったのだろうか？

通りすがりの人間を捕まえて聞こうにも、だだっ広い教団の敷地内には人っ子一人通らない。レセプションと明日の祭典の準備に追われ、警護にさく最低限の人員すら確保できていないというのが実情だろう。

（まずいな……）

警護の人員すら配置されていない場所であるという事は重要度がかなり低い場所であるか、逆に絶対にそこに外部の人間が入る余地はあり得ないと考えられている場所であるということだろう。前者であれば問題ないが、後者であったとするなら大問題である。発見され次第迷わず射殺されても文句は言えない。しかもそれが連邦軍士官だったなら、下手をすれば大問題になりかねない。自身の予期せぬ行動が組織レベルでの火種になりうる事に気付いたカークは流石に青くなる。

かといって、現状をうまく切り抜ける妙案は見つからなかった。騒ぎを大きくする事を避けるために携帯端末を使って居場所を確認する訳にも行かず、結局のところ適当に歩き回って見覚えのある場所にたどりつくしか手はないようだ。

（まあ、どうにかなるさ……）

気をとり直して再び歩き出す。悩んでいても仕方がない……行き当たりばったりの境地で弱冠暗めの夜道を進み続ける。

（命をねらわれるかもしれないと怯えながら歩く現状と宇宙漂流とどちらが怖いだろう？）

ふと思いついた究極の選択にさらにブルーになりかけたカークは気分転換に夜空を見上げる。上空６キロ先の対面の大地に輝く建物の光が規則正しく並び、夜の闇の中で雲の隙間からちらちらと漏れる様が、彼の視界に広がった。コロニーに生まれ育った人間にとっては当たり前の夜の姿であり、生まれた時から見慣れた人工の星空である。

その人工の星々に彩られた夜空から視界を戻したカークは、さほど離れていない建物の２階のバルコニーに人影を見つけた。こちら

からは逆光となっているもののそのシルエットはおそらく女性のものであろう。カークは警戒されぬようにゆっくりと近づいていく。

バルコニーにぼんやりと佇む女性――背中の開いた露出度の高いオートクチュールのパーティドレスは、決して下品ではなく、それを着用するものの魅力を十二分に引き出している。しっかりと結いあげられた髪と凛然と整ったその横顔は、どこかまだ愛らしさを残しながらもしっかりと大人になった女性の表情（かお）だった。

（どこかで、見た顔だな……）

記憶を探るが答えはすぐに見つからない。とにかく今はすっかり迷子になってしまった現状をどうにかする事が先決である。

バルコニーの上の女性は先程のカークと同様に夜空を見上げている。小柄な肩幅と柔らかな肢体には、触れれば消えてしまいそうな繊細さとしなやかな芯の通った強さがが秘められているようだった。

「あの……すみませんが……」

顔がようやく判別できる距離に近づくと、カークは警戒されぬよう静かに彼女に呼びかける。控え目な彼の呼びかけにバルコニーの上の女性は、はたと気づいて彼の方に目をやった。

――互いの目が合ったその一瞬だった。

（えっ？）

突如二人の間に時間も空間も飛び越えた世界が広がった。例えて言うなら際限のない蒼青く輝く宇宙であろうか。その世界の中でカークの意識に彼女の全てが流れ込むような錯覚を覚えた。常識では考えられない異常な事態にも関わらず、彼の感性はどこかでそれを当然の事だと受け止めていた。

（この女性（ひと）は泣いていたのだ……）

眼前の女性の整った顔は涙一つこぼしていないにも関わらず、直感的にそう認識する。押し寄せる深い悲しみと孤独感。それが彼女の心を満たす全てだった。その苦しみを周囲にこぼす事も出来ずに、

彼女はただひたすらに自身の内面に封じ込んでいた。
その事を感じ取った瞬間、自身が見てはいけないものを見てしまった事に気付きカークは動揺する。その動揺が再び蒼青い世界を揺るがし、急速に元の世界での意識を覚醒させる。
「あちらへ……」
バルコニーの女性は何事もなかったかのように一言だけ告げると、一つ所を指差していた。彼女が自身の望む道を指していることに気付くのにカークは若干の時間を必要とした。
「す、すみません……」
ぺこりと頭を下げると逃げるように指し示された方向に向かって歩を進める。そのあまりにも軍人らしからぬ自身の醜態に気付かぬほどに動揺したカークが、礼すら述べずに彼女の元を立ち去ってしまった事に気付いたのは、彼女の視線を感じぬほどに遠く離れた場所に辿り着いた後だった。
（何だったんだ……今のは……）
じっとりと浮かんだ手のひらの汗をぬぐいながら、カークは手近な壁面に身を寄せる。ひんやりとしたその感触が熱く火照っていたカークの体温を吸い取っていく。そのままぐったりと壁面に身を預け、精神と肉体の火照りを醒ましながら、カークは答えの出ない思考の堂々巡りを繰り返し続けるのだった。

立ち去っていく青年士官の後ろ姿を眺めながら彼女はぽつりとつぶやいた。
「いるところにはいるものなのですね……」
それは過去に彼女が追い求めた幻想だった。そして今の彼女にとって、もはや必要のないはずの幻想だった。

自身の導きのままに夜の帳の中に消えていく青年士官の背中を黙って見送ると、再び彼女はぽつりとつぶやいた。

「わたくしの存在も又、揺れ動く世界のほんの一部にすぎないということでしょうか……」

受け止める者のいないその呟きは、先程の青年士官の背中と同様に闇の中へと消えていく。周囲にどんなに担ぎあげられ特別な存在として位置づけられていても、やはり自身もまた世界の理の一つでしかない。人の世の理よりもはるかに大きな世界の理の中では、自身も先程の青年士官も所詮同じものである。そして、時として生まれも地位も名誉も飛び越えた出会いの中に、真実を見出す事すらできる人の可能性というものを彼女は再認識していた。

もはや二度と会う事もないであろう名も知らぬ青年とのただ一度の邂逅に感謝しながら、人の世の理に絶望しかけていた彼女はある一つの決断を下していた……。

（２０１０／０７／１０　Ａｒｃａｄｉａにて初稿）
（２０１１／０４／２９　本サイトにて初稿）

07

「退屈だ……」

今日この言葉を呟くのは何度目だろうか？

狭いコックピット内で全天周モニターに表示されるコロッセウム内の映像を眺めながら、カークはすでにその回数を数える事を放棄していた。

コスモ・クルス教団による式典会場であるバビロニアコロニー内のコロッセウム。プチモビによる競技会の開催すら想定して建設されたその施設は、古代帝国の競技場を模した外観とは裏腹に、旧世紀のあらゆる競技施設をはるかに上回る広さを誇り、解放されたトラック内の中央部には8体のＭＳが楕円形に配置されている。カーク達2機の《Ｆ９１式典仕様》を除いた6機のＭＳはすべてコロニー守備隊に所属する《デナン？》だった。《Ｆ９１》と同様に祭典用にデコレーションされた機体は、その元々のコンセプトデザインも手伝って『帝国を守護する騎士』を彷彿とさせる。

つい先日に近隣宙域で命のやり取りをした機体と肩を並べて平和を演出するという事態に複雑な思いを抱えるカークだったが、祭典に訪れた人々にとってはそのような些事は関心事ではない。コロニー内に１０メートル以上の体躯を誇る軍用ＭＳを侵入させるという事がある種のタブーとなりつつある世情において、コロニーに住む人々が間近で軍用ＭＳを見るという機会は意外に少ない。物珍しさも手伝って訪れた多くの人々が足元から見上げる愛機のコックピット内でカークは際限なく訪れる退屈という名の強敵と戦っていた。

早朝の会場開放前に愛機のコックピットに乗り込んだカークは、予備パイロットのシャーリーと交代しながら場内の監視任務につい

ていた。
　１５分間隔で一斉に行われる会場内のＭＳの姿勢の変更は、すべてあらかじめセットされたプログラムによって自動的に行われる。パイロットの仕事は万が一の非常時にプログラムを停止させ即座に事態に対応する事だけである。
　尤も教団側から支給された装飾用のランスとシールドしか持たない現在の《Ｆ９１》に予め与えられた命令は即時退去のみである。
『お前らは単なる宣伝材料だ！　万が一の場合はとっとと失せろ！』としか理解できない教団とコロニー守備隊の対応に、八つ当たり気味の怒りを覚えてしまっても決して責められる事はないだろう。
　式典用に装飾され、会場内に配置された《Ｆ９１》をはじめとするＭＳ群は単なるオブジェとしてそこにあるわけではない。過酷な宇宙空間内でも使用可能な高精度のセンサー類をフルに利用して、場内の観客達の動向は逐一モニターされている。場内の群衆の映像から、あらかじめプログラムされた危険な行動パターンをとる人物を即座に割り出し、集積された情報はタイムラグなしに施設内にひそかに配置された狙撃部隊や警備部隊、そして場内で迷子の案内からごみ収集まで縦横無尽に活躍する円柱型の作業ロボットに適宜リンクされ、あらゆる非常事態に即座に対応可能となっていた。しかし、これらの一切も又、すべてコンピューターによって自動的に処理されるためＭＳパイロットの仕事は皆無である。
「人間なんて、いらねえんじゃねえか……」
　自動化という言葉によりあらゆる雑務から解放されることで訪れた退屈を持て余すカークは一人毒づいた。
　備える側より仕掛ける側が圧倒的に有利であるテロというのは恐ろしい。その事は初陣において嫌というほど身にしみているカークだったが、そんな彼を以てしてもあらゆる機能がシステム化され、それを扱う人間はただ指を加えて眺めているだけという現状には耐えがたい苦痛を伴った。
　だが、いかに万能なシステムとはいえ、想定外の事態というのは

常におこりうるものである。故にカーク達が控えている訳であるが、本来、人間を補助するはずの優秀なシステムによって与えられる怠惰という名の悦楽が任務に生真面目な軍人達を苦しめている、というのは皮肉なものである。そして連綿と続く退屈の中、突如訪れた非常事態にミスを犯すのはシステムの運営を任された機械ではなくそれを扱う人間であるという事も又真実であった。

解放された施設内には多くの人々が押し寄せ様々な催しが行われている。コスモ・クルスの祭典という事もあり、会場内のいたるところで辻説法やセミナーが開かれているが、大部分の観衆達の関心はさほど高くない。

後援企業のデモンストレーションや訪れた子供達向けのアトラクション、競技施設内の壁際には様々な屋台が立ちならび、群衆の欲望を満足させることで得られる利益の争奪戦に余念がない。屋台の陳列棚の一角に展示された球形のマスコットロボットをねだる小さな子供が親達を困らせる姿というのはこのような場面においてよくある光景のひとつであろう。

そんな騒がしげな光景をモニターで眺めながらも、何の代わり映えのしない自身の任務にカークは一つ溜息をついた。尤も彼が退屈であるという事は祭典の行事が滞りなく進んでいる事を意味し、大部分の人々がこのイベントを楽しんでいるという事なのである。

『そんなに暇でしたら代わって差し上げましょうか、中尉殿?』

機体の近くに仮設されたテント内で休憩に入っていたシャーリーから通信が入った。周囲の人目を気にしてすっかり猫を被った彼女がモニターの向こうで艶やかに笑っている。もはや手遅れだろうに、と心の中で突っ込みながら、部下の親切な申し出にカークは丁重に断りの応答をした。

「申し出はありがたいんだが、カワイイ部下を大量虐殺犯にしたくはないんでね……」

カークの言葉にモニターの向こうの笑顔のシャーリーは一瞬絶句

する。その整った顔が微妙に歪んだのは、気のせいというわけではないようだ。退屈しのぎの部下弄りを楽しみながらもカークは、つい先刻おきた珍騒動を思い出していた。

事の次第はシャーリーとの交代時に遡る。

広報部による連邦軍のイメージアップ戦略というお題目の為、カークと交代して機体から降りた彼女に対して『一緒に写真に入ってほしい』と申し出た親子連れの見物客の願いに快く応じたシャーリーだったが、事態はあらぬ方向に発展する。

女性パイロットの珍しさもあってか、我も我もと見物客が押し寄せ始め、中には彼女をコスプレしたイベントコンパニオンと勘違いし、ポーズを要求する者までが現れた。混沌の兆しを見せ始めた事態に、始めのうちはやんわりと拒絶の意を示していた彼女だったが、『姉ちゃん、サービスが悪いぞ!』などと飛んできたヤジについに堪忍袋の緒が切れてしまい、マナーの悪い観客達との間で一触即発の事態へと発展した。

幸い、カークの知らせを受けて駆け付けた警備隊と教団関係者のとりなしにより、事無きを得たが、シャーリーの怒りは収まらなかったらしく、仮設テント内の備品の一部が大きな被害を受けてしまった。

時間がたって冷静になるにつれ、流石に居心地が悪くなったのであろう。

下心ある善意の提案をカークに申し出てきたようだが、そうは問屋が卸さない。同情すべき点は多々あれども迷惑をかけた教団関係者の手前、反省を促す意味も込めて仮設テント内での放置プレイの継続を上官の権限で決定した。

日頃からチームに迷惑をかけっぱなしの自身の姿を棚に上げ、「世間の風は冷たいのだよ」とうそぶくカークの言葉に、唇の端を歪めたシャーリーはむっとした様子で通信を切る。

そんな彼女との会話のお陰で若干の退屈を紛らわせる事が出来た

カークだったが、彼女の申し出を断ったが故に、再び代わり映えのしないコックピット内で退屈という名の連帯責任を自分から被ってしまったことに気付いたのは、それから数分後の事だった。

コロニー内の空に夕方の色が混じり始めると場内は一層慌ただしくなる。

祭典を楽しんでいた観衆が、牧羊犬に追い立てられる羊達の如く場外へと誘導されていくと、清掃作業用ロボットが慌ただしく走り回り、場内のごみを一掃する。

続いて現れた多数の作業用プチモビによって仮設物の撤去作業が速やかに行われ、中央の奈落からは巨大な仮設ステージが現れた。

わずか二時間弱で会場内は整頓され、それまでのにぎやかな祭り気分から一転して、厳かな空気が漂い始める。

場内の中央に楕円陣を敷いて会場内を監視していたＭＳ群は、巨大な駆動音を響かせながら観客席側へと場所を変え、仮設ステージ上では着々とセレモニーの準備が行われる。解放されたままの２階観客席では観衆達がセレモニーの開始をいまかいまかと待ちわび、そんな彼らを相手に飲食物や土産物の販売に励む売り子たちの声が勢いよく木霊した。

養鶏場のブロイラーの如く２階観客席に詰め込まれた観客達の間にフラストレーションが充満し始めた頃、突如、熱核エンジンの轟音とともに３機のＭＳが飛来した。

会場上空で一度制止したそれらは、一機ずつ順に静かに場内に着地した。教団親衛隊を示す外装もさることながら、そのうちの一機に注目が集まった。

《ビギナ・ロナ》――ブッホ・エアロダイナミックス社が数年前に開発したコンセプトデザイン・モデルである。当時の技術の粋を結

集した高スペックを誇る機体ではあるが、ブッホ社のＭＳデザインにありがちな西洋甲冑のイメージをさらに強調したデザインはどちらかと云えば非実用的であり、軍用ＭＳとしてはいささか疑問の余地があるものの、このような祭典の一幕を彩る小道具としては十分にその役割を演じていた。

共に飛来した親衛隊仕様の2機の《デナン？》を従え、全高１５mにおよぶその体躯を低い駆動音とともに会場の一角に移動する様は、圧巻であり、場内の観客達は突如現れた勇壮な鋼鉄の騎士たちのパフォーマンスに歓声をあげている。

飛来した3機がカーク達と同様に会場内を飾るオブジェの一つとなって停止し、会場内を走り回っていた作業用ロボットや撤去作業に奮闘するプチモビがすべて撤収すると無人になった巨大な会場内は不気味に静まり返り、直にはじまるであろうセレモニーの華々しさを予感させた。

コロニーの空がすっかり宵闇に染まり、上空に人工の星空がちらちらと輝き始める頃『コスモ・クルスの祭典』は最高潮を迎える。

周辺区画を規制し、一時的な停電にすることで生まれる暗闇の大地の中に鮮やかな光にあふれたコロッセウムが浮かび上がった。四方から伸びた幾筋ものライトが上方を照らし出し、上空の一点で交わって、結界状の光のピラミッドを生み出している。

鮮やかな光に彩られた場内では開幕のセレモニーが行われる。

数百に及ぶダンサーたちが幾色もの原色の布を纏い、場内を所狭しと舞い踊る。彼らの足元にはスモークが焚かれ、あたかもそれは雲の上を舞う天使のようだった。

やがて、コロッセウムの四方から立体映像が投影される。すでに失われてしまったかつての緑豊かで生命力あふれる地上の楽園の様

子が幻想的に投影される。客席の観客達は場内や宙空に浮かんだその幻想的な理想郷の姿に溜息をついた。

暫くすると焚き占められたスモークの上に浮かび上がった中央仮設ステージの上で、幾人かのダンサーが物語を演じる。

地上の楽園に暮らしていた人類が、集落を形成し富の蓄財を覚え、互いにいがみ合い争っていく。文明の発展と共にその手段のみが次々にエスカレートし、やがては自分達、そして地上の自然すらも焼きつくしていく。度重なる争いにも関わらず地上にあふれかえった人類はやがてその英知と共に宇宙へと旅立っていく——そんな物語が演じられていた。

弱冠、宗教色の強い物語が最高潮に達した瞬間、突如全てのライトと映像が消され、場内は闇へと包まれる。突如訪れた暗闇に場内からは小さな悲鳴が上がった。

暗闇の中、突然ライトアップされたステージに一人の女性の姿が現れた。ステージとははるかに距離を隔てる観客達の前には同時に幾つもの拡大された立体映像が投影される。コスモ・クルス教団教主シェリンドン・ロナ——厳かに彼女の名を告げる場内のアナウンスと共に客席からは万雷の拍手が送られる。

パイロットスーツを連想させる身体のラインにぴたりとフィットした純白の装束には金字の刺繍が施され、さらにその上から純白のマントを羽織っている。しっかりと編み込まれたプラチナブロンドの髪は、彼女の顔から愛らしさを消し、彼女が教団に君臨する教主である事を観衆に認識させた。

暫しの間の拍手の波に静かに身を預けていた壇上の彼女だったが、やがて、小さく左手をあげたのを合図に、会場内に沈黙が訪れた。それを見計らった彼女は静かに口を開く。

「親愛なるコスモ・クルス教徒の皆様、バビロニアコロニー市民の

皆様。そして本日この祭典に訪れて下さった多くの皆様。今年もこのような喜びの一時を皆様の笑顔と共に過ごす事が出来る事を心からお慶び申し上げます」

知性を感じさせる澄んだ声が厳かに周囲に響き渡る。傅（かしず）かれる者のみが纏う事のできる女王の威厳を以て、彼女は朗々と言葉を綴る。

「そして、この度のコスモ・クルスの祭典を開催するにあたって、様々な協力を頂いた、地球連邦政府及び連邦軍の皆様、そしてバビロニアコロニーを始め周辺コロニー政庁、各後援企業、さらには、今、この瞬間も裏方としてこの場を支えて下さっておられるスタッフの皆様の一方ならぬご苦労に、わたくしは誠に感謝の念に堪えません。

このような場に置かれて初めて、わたくし達コスモ・クルス教団は多くの人々の有形無形の支援があってはじめて存在を許されている……わたくしにはそう思えてなりません」

壇上から示された女王の謝意に呼応するかのように、ぱらぱらと小さな拍手が場内に生まれた。

「かつて我が祖父マイッツァー・ロナはこう申しました。『人は平等ではない』と。

生まれ持った資質や環境によって、いかに人が努力を積み重ねたとしても、決して越える事の出来ぬ壁というものが人の世には存在する事は認めざるを得ない事実であります。

だからこそわたくし達コスモ・クルスは『人類と世界を収める者は自らの血を流す事を厭わない高貴なるものが司るべきである』というコスモ貴族主義を主張して参りました。

わたくしは今でもこの主張が間違っているとは決して思ってはおりません。しかしながら、コスモ貴族主義を主張する者たちがその思想にふさわしい行動を伴っていたかどうかは……、歴史が示す通りであります」

場内にどよめきが生じる。教主自らが教団のあり方を否定したともとれる発言に観客席からざわめきの波が生まれた。だが、客席に

生まれた動揺の波に全く動じることもなく、シェリンドンは目をつぶって静かにそれをやり過ごす。

ざわめきの大波がやがて小さなさざ波のようになって収まると、再び観客達が彼女の次の言葉に注目した。一体彼女は何を言わんとしているのか――そんな観客席の期待と不安を感じ取ったシェリンドンは再び語り始めた。

「さて、皆様は『ニュータイプ』という言葉をご存知でしょうか？かつてジオン・ダイクンによって提唱され、宇宙に暮らす人々の希望とされたこの言葉は、残念ながら不幸な歴史と共に時代の闇の中に沈んでいきました。

これまで、わたくしはこの言葉にこそコスモ・クルスの真実と未来があるのではないかと考え、行動して参りました。

『ニュータイプ』――それは、宇宙時代に適応した人類の進化の姿であり、認識能力の拡大により人並み外れた直感力と洞察力を身につけたもの達の総称であります」

彼女はわずかに言葉に区切りをつける。突如飛び出した聞き慣れぬ言葉に観客達は互いに顔を見合わせる。時代の中に埋もれ、ちょっとしたインテリでなければ知らないであろうその概念をはたして、彼らはどう受け止めるのだろうか。

「そんな彼らこそが、わたくし達コスモ・クルスの意図するところの人類と世界を収めるべき高貴なるものにふさわしい――わたくしはそう考えておりました。

たしかにそのような能力を持ち、あるいは、実際に顕現した多くの人々をわたくしは知っております。

しかし、残念ながらそのような人々の力を以てしても、コスモ貴族主義が主張する未来が訪れる事はありませんでした。人の本能ともいうべき闘争の精神はどこまでも強欲なサガと俗物的なエゴを刺激し続け、世界は際限のない争いと絶望的な滅亡の未来に向かって邁進している有様です。疲弊しきった私達の故郷である地球という惑星（ほし）の姿こそ、その証しと言えるでしょう」

世の有り方に不満を持つ者達の叫びであろうか、観客席から小さなヤジが飛ぶ。水面に浮かんだ波紋のように幾つかのヤジが呼応し、やがて再び沈黙へと吸い込まれていく。

「では、わたくし達人類はその愚かさ故にこのまま自身の力の使い道を誤り続け、愛すべき故郷である地球という惑星とともに滅ぶべき運命なのでしょうか？

わたくしはそうは思いません。かつて崩壊寸前の地球環境の中でバラバラであった人類が、様々な犠牲を払って成立させた連邦政府の指導の下、宇宙という新たなフロンティアに飛び出し、今日まで生きのびてきた事こそがその証左ではありませんか！

わたくし達は決して愚かな生き物ではないのです。優れた理想の下、生存しようという意思を以て自身で定めた目標に向かってがむしゃらに突き進み、未来を切り開く力をわたくし達人類は持っているのです」

『そうだ』と再び小さな賛同のヤジが飛ぶ。しかし、先程のものよりも小さなそれは、すぐに客席の沈黙に吸収されていく。多くの観客達が無言で彼女の言葉に聞き入り始めていた。

「ですが優れた理想というのは何なのでしょう？　人の理想というものは様々であり、おそらく、その数は人類と同じ数だけ存在するはずです。そしてその優劣を定める事は本来ナンセンスな事なのです。

それぞれがそれぞれの信じる理想を主張し続ければ、やはりその先にはこれまでと同じ、愚かな失敗を塗り重ねる未来しかありません。人が一人では決して生きられない以上、わたくし達はどこかで自身のエゴと向き合い、それを抑える術を持たねばならないのです」

客席は沈黙を保っている。みな静かにシェリンドンの言葉に聞き入っていた。

「人の業を抑え、理想の世界を実現する手段は長い人類の歴史の中に様々に存在します。しかし、わたくしは今、混沌とするこの時代に置いて、『人は平等ではない』という考え方に基づいて生まれた

コスモ貴族主義思想こそが最も優れた物であると確信を持っております」

ふと小さなどよめきが生じる。それは彼女の言葉の矛盾に対するものであった。しかし、客席から生まれた疑問にさも当然に答えるかのように演台の上のシェリンドンは言葉を続けた。

「皆様の中には、先程、わたくし自身がそれを否定したのではないか……そう考えられ、不思議に思われる方もおられるでしょう。全くその通りであります。かつてのコスモ貴族主義思想には大きな欠陥がありました。

それは誰もが導く側に立つことばかりを考え、導かれるもの達も又、人類という種の営みを支える者であるという事を忘れてしまっていたからです。

人類という種の発展において大衆という導かれる側に立つ者たちにも又、果たすべき義務と誇りが存在するのです。そして、人を導く者と導かれる者――両者が互いを信じ合い、その課せられた義務を果たし、協力し合い、自分たちが人類の未来を切り開く礎となっているという誇りを持つことで初めて、わたくし達人類の輝かしい未来が開けるのではないでしょうか」

言葉を区切る。

ともすれば感情的になってしまいかねない自身を律するかのように……。

「どうか、ご自身の周囲を見回して下さい。いかなる生まれであれ、同じ人間は決して二人としていないはずであり、その能力も決して同じものではないはずです。今、その皆様の周囲におられる方々一人一人の肩にこそ、素晴らしい未来を切り開く可能性が存在するのです。皆様ご自身が周囲の方々と手を携え、互いを認め合うことでその可能性は力となり、その力が合わさる事によってやがて大きな波が生まれるのです。世界をよりよい姿に変え、人類の未来に希望を見出そうという強い波が……。

わたくしは今日、この場にて皆様に一つの可能性を提示いたしま

した。これは小さな一歩に他なりません。長い人の歴史に比べればとるに足りないほんの些細な事柄でしかありません。そして、わたくし一人の力ではこれが限界なのです。

ここから先はここにおられる皆様の力が必要なのです。一人ではちっぽけな存在でしかないわたくし達が、互いを信頼し合い共に手を携え、背伸びすることなく己の器に見合った役割を果たすことで新たな希望の扉が開かれるのです」

「すべての皆様に申し上げます。ほんのわずかでよいのです。皆様の周囲を見回して互いの存在を認め合い、傍にいる人々と手を携えては頂けないでしょうか。

そして、このわたくしの目に……無限の可能性を開こうとする人類の未来の姿を……見せては頂けないでしょうか。

これこそが……コスモ・クルス教団教主であるシェリンドン・ロナの……只一つの願いであります」

エコーのかかった彼女の言葉が水を打ったかのように沈黙する客席に吸い込まれていく。それは彼女の叫びだった。自身の辛い孤独の苦しみの中から生まれた真実の言葉だった。観客達にその身を投げ出すかのように両腕を大きく開いた彼女は、自身の魂の叫びを率直に綴っていた。

――わずかな沈黙の後で、客席の中に小さな一つの拍手が生まれた。

小さく控え目で、それでいて確かな意思の下に生まれたその拍手は周囲に広がり、静まり返った水面のような客席を揺らすさざなみとなっていく。やがて、会場の端々で生まれたその小さなさざなみが連鎖するように重なっていき、ついには怒涛の喝采へと変化した。

万雷の拍手と観客達の興奮がコロッセウムを埋め尽くし、壇上のシェリンドンの名を呼ぶシュプレヒコールが木霊した。興奮状態に陥った一部の観客達は涙を流している。観客達からの熱気を壇上で感じながらシェリンドンはただ静かに目を閉じていた。それは、自

身の全てを出し切って、判断を天に委ねる聖者の姿を彷彿とさせた。
そんな彼女に向かって、先程コロッセウムに飛来した3機のＭＳが巨大な駆動音と共に歩み寄った。場内の喝采の中に一瞬悲鳴が混じる。
闘争を目的として創造された全高１５ｍを誇る堂々たる体躯とその巨大な駆動音がコロッセウム中央の壇上のシェリンドンに近づいていく様は、観客達に何か良からぬ想像をさせた。
だが、その予想に反して、親衛隊仕様の3機の機体は壇上の彼女の前で主に忠誠を尽くす騎士の如く、片膝をつく。そのうちの1機――中央の《ビギナ・ロナ》が、恭しく片側のマニュピレータを差し出した。差し出されたマニュピレータの上に場所を移動したシェリンドンは、観客達に手を振る。それを合図に音楽が鳴り始め、静止しかけた場内が再び動き出した。
シェリンドンが立っていたステージが奈落へと消えていくと、《ビギナ・ロナ》は両のマニュピレータにしっかりとシェリンドンを抱え込み、巨大な噴射音と共に夜空へとゆっくり舞い上がった。続いて、傍らに控えていた2機の《デナン？》がそれに続く。場内のライトが夜空を舞う3つの機体を一斉に追った。両翼の《デナン？》がビーム・フラッグを輝かせ、先程までシェリンドンが身に着けていた純白のマントがひらひらと夜空に舞う。教主の華々しい退場に、再び観客達は興奮と熱狂を以て彼女を送りだしたのだった。

（２０１０／０７／３０　Ａｒｃａｄｉａにて初稿）
（２０１１／０５／０３　本サイトにて初稿）

08

「シェリンドン・ロナ……か」

ライトアップされた壇上に現れて教主と紹介された女性が、バルコニーの上で自身に道を示した彼女だったことにカークが気付いたのは、その登場後間もなくしてからだった。昨夜のはかなげな女性らしさや彼女自身から伝わってきた内面と、コスモ・クルス教団の教主として立つ壇上の凛々しさに若干のギャップを感じながらも、カークはその言葉に静かに耳を傾けていた。

一昨日、このコロニーに着任して以来、言葉の端々に弱冠思想的な偏りを感じさせる教団関係者達の振舞いに、正直あまりよい感情を抱いていなかったカークだが、教主である彼女の言葉は一人の人間としてその心に深く染み入っていた。その彼女の演説の中でカークには一つの言葉が奇妙に心に残った。

『ニュータイプ』――パイロットの間では『エース』などといった撃墜王を示す言葉と同義であるが、時折冷やかし半分に使われ、どちらかといえば蔑称として使用されることが多い。

チーム戦術が基本である現代ＭＳ戦において、自身は生き残りそれなりのポイントを稼ぎだすものの、その戦術になじめず周囲に損害を与えるパイロットに対して同僚達から与えられる不名誉な称号である。演習や訓練が任務の大多数を占め、大戦時のような死傷者をめったに出す事のない現在の連邦軍において、『死神』と呼ばれるようなものであろう。

その否定的な意味合いの強い言葉に深い意味が存在した事を示したシェリンドンの言葉は、カークの心に深く突き刺さった。昨夜バルコニーの上で指し示した彼女の指先には何か別の意図があったのではないだろうか――そんなとりとめもない疑問がふとカークの心

に浮かんだ。そして同時に昨夜見たあの奇妙な世界――その中で感じられた彼女自身の本質ともいえる孤独感と深い悲しみが再び思い出された。

その彼女を抱え、上空に消えていく3機のスラスターの光をモニター越しに捕えながら、カークはその行方に一抹の胸騒ぎを覚えていた。

3機のMSを収めたエアロックの巨大なハッチが閉まり、減圧が開始されたのを確認すると、エメリオ・ハウンゼンは《ビギナ・ロナ》のコックピット内で一息ついた。彼の座るパイロットシートの後ろの補助席には教主のシェリンドンの姿がある。狭いコックピット内で二人は終始無言だった。

（冷や冷やとさせてくれる……）

彼をそうさせるのは久方ぶりのコロニー内飛行のせいだけではなかった。

熱狂する会場とは裏腹に、準備された原稿とは全く異なったシェリンドンの演説に、一部の事務方は蜂の巣をつついたように大騒ぎをしていた。

だが、大部分の教団関係者達が黙って聞き入った彼女の演説は、祭典を盛り上げるという点においては十分に成功だった。

狭いコックピット内に充満しつつある彼女から発せられる香りは、嫌が応でも背部の補助席の彼女の存在を意識させる。

シェリンドン・ロナ――ハウンゼンが彼女を知ったのは、まだクロスボーンが蜂起する以前の頃だった。当時のまだ幼い彼女は軍隊としては組織力の脆弱なクロスボーンに所属する兵士たちのアイドルともいえる存在だった。

そんな兵士たちの一人だったハウンゼンが、度重なる内紛の果てに今の地位に昇りつめ、ようやく彼女にその名を覚えられる立場に立ってからまだ十年と経過してはいない。決して手の届く存在ではなかった彼女に自身の名を覚えられ必要とされる――それは、組織の中を駆けあがってきた男の虚栄心を十分に満足させるものだった。

しかし、彼女の身近に立って実際に言葉を交わし、その本来の姿に触れたハウンゼンは自身の認識の甘さを痛感することとなった。

いささか夢見がちなところはあれど、けっして本質を外さぬその視点と鋭い洞察力は、お姫様然としたイメージとは大きくかけ離れ、彼女が意思を持った一人の生身の女性である事を認識させた。ともすればお飾り程度にしか考えていない者達の間に置かれながら、彼女は誰よりも教団の未来に心を痛めていたことを知った。

そんな彼女の人柄を知ったハウンゼンは、恋慕というには未熟なかつての小さな憧憬の情を心の中に封じ込め、親衛隊隊長として教主の片腕となり沈みゆく教団の立て直しに全力を尽くしていた。

だが、その目的こそ同じ二人であったが、教団の全てを抱え導こうとする理想主義的な彼女と、悪しきものを切り捨て、生き残りを模索する現実主義的なハウンゼンの手法には大きな隔たりがあった。

改革を望まぬ者達によって流された悪意ある風聞と、シェリンドンを取り巻いて教主の威厳にしがみつくだけの周囲によって互いの心に誤解を生じさせられ、その隔たりを失くし真意を理解しようと言葉を尽くせば尽くすほど、さらにそれらは大きくなっていった。

教主とその親衛隊隊長という立場でありながら、その関係は長い葛藤の末に冷え切り、いつしか、心の片隅にあった小さな恋慕の情は憎悪へと変化していた。そして、彼が描く教団の未来像から彼女の姿が消えたのは当然の成り行きだった。

減圧終了の合図とともに港湾側のハッチが開くと3機のＭＳは港

湾部へと侵入し、停留するランチに近づいた。背部の補助席に座る彼女をそこへ移し、いよいよ祭典のクライマックスとなる宙域での航宙セレモニーが始まることになる。親衛隊の全機が彼女の座上するランチを中心に編隊を組み、港湾外に停泊する多数の遊覧船の前で行われる編隊飛行は、かつてのクロスボーンの栄光を彷彿とさせる。

そして、それはハウンゼンにとって、もう一つのクライマックスだった。

ランチの傍で機体を停止させ先にコックピットから降りたハウンゼンは、一足先にコックピットを離れ、彼女の登場を待つ者達の列に入って膝をつくと、シェリンドンがそこから現れるのを待った。

先程の演説に感化されたのだろうか？

《ビギナ・ロナ》のコックピットハッチから現れたシェリンドンを、共にランチに乗る予定の保守派の重鎮たちが競って出迎える。そんな彼らと二言三言言葉を交わすと、彼女はランチへと向かおうとする。

……と、彼女の足が傍に控えていたハウンゼンの前で止まった。

「ハウンゼン隊長」

恭しげに膝をつき頭を垂れるハウンゼンの眼前に立った彼女は、涼やかな声で彼の名を呼ぶ。珍しい事もあるものだと内心で呟きながら、ハウンゼンは静かに彼女の言葉を待った。

「ご苦労様でした。事後の件、くれぐれもよろしくお願いします……」

予期せぬ言葉に、ハウンゼンは思わず顔をあげた。

だが、彼の視界に映ったのは彼の前から立ち去るシェリンドンの小さな背中だけだった。かわりに、彼女の周囲の者たちが彼を睨みつける。

『又、何か教主様を困らせるような難題を吹っ掛けたのか……』とでも言いたげな悪意ある視線をやり過ごしながら、ハウンゼンは大

きく動揺していた。
突如自身に投げかけられたまるで別れの言葉ともとれるその言葉。長い間近くにあって、様々な葛藤を経験したからこそ分かる重みがあった。
（彼女は識っているのだ……）
それは確信に近い認識だった。
身近にあったからこそ分かる彼女の能力の特異性を彼はよく理解している。彼女は凡俗である自分とは違う世界の住人である――出会った当初は不思議な魅力だった彼女の能力は、時が経つにつれ、いつしか恐怖の対象となっていた。
彼女はその力で自身の秘めた企みを見抜いた上で、あえて、それを黙認したのである。

――手の震えが収まらない。

その震えは自身の身体のより奥深いところから生じている事にハウンゼンは気付いた。
（死ぬつもりなのか……）
自身の身を人身御供に捧げる事で、その最後の言葉を生かし、混迷する教団に英知を授け、その永遠の守護者となる――その彼女の選択と決断にハウンゼンは慄然とした。
「隊長、お顔の色が優れないようですが、どうかなさいましたか？」
部下の一人が顔色の悪いハウンゼンを気遣う。
「……いや、大丈夫だ。なんでもない」
弱冠震え気味の声を押さえつけながら返答した彼は、自身の乗機である《ビギナ・ロナ》のコックピットハッチへと移動した。逃げ込むように潜り込んだコックピット内で震える心を抑え、ハウンゼンは冷静さを取り戻すように努めた。
「好都合ではないか……」
小さく響く呟き。

目の前に思わぬチャンスが転がり込んできた。事さえ完遂されれば後の処理は容易い。その御膳立てをシェリンドン自らが演出してくれたのだから……。

これは自身の野心を叶えるための第一歩である。震える心を押さえつけるように自身を鼓舞し、やがて手に入れることとなる理想の未来を思い描き、そのイメージで自身を自縛する。

多くの者に陰口をたたかれながらも混沌とする組織の中で巧みに生き残ってきた己こそが最後の勝者と呼ばれるにふさわしい――シェリンドンの犠牲の上に成り立つであろう自身の生き方を正当化しようとするハウンゼンが、心の片隅にちらりと残った小さな痛みに気付く事はなかった。

月と地球の宙域の周辺にいくつか存在するラグランジュ・ポイントには、コロニーだけでなく大小様々なデブリが無数に存在する。

ほんの小石ほどの大きさのものからコロニーの破片クラスまで、人類が宇宙で生活を営む以前から存在したそれらは、前世紀末の戦乱によって爆発的に増加し、回収技術の発展にも関わらず一向にその数を減らす様子がない。コロニーや付近を航行する艦船の外装を傷つけることもあるそれらは、宇宙で生活し、経済活動を営む人々にとって、頭痛の種になりがちなものである。

だが、そんな厄介事の種も、戦場という場では時として有用なものとなりうる。

ＭＳ一機が十分に隠れる事のできる手頃なデブリにとりつくと、防御用のダミーバルーンを機体の周辺に展開し、狙撃の準備に入った。寮機のジノも同様に身を隠しており、すでに気配すら感じさせない。時折、ダミーを突き抜けて機体の外装に衝突する小破片の音

がコックピット内に響きわたるものの、動ずることなく手筈通りに作業を進めていく。

祭典の影響故か、昼間に溜めておいた無限ともいえる太陽光を変換した電力により、地球の夜の側に存在し、闇に包まれているはずのバビロニアコロニーの外観はひときわ明るく輝き、その周辺には停泊する船舶群の無数の航宙灯が彩りを添えている。

現在のゴルド達の位置はバビロニアコロニーから百キロ以上離れており、ミノフスキー粒子の妨害が全くないとはいえ、高性能を誇るＭＳの各センサーでもその詳細なコロニー周辺の状況をモニターすることはできない。

幸いな事に祭典の一部始終はサイド2全域に生中継されており、それらの映像を拾う事で作戦開始のタイミングを読み取ればよかった。

祭典のクライマックスであるコロニー周辺で行われる航宙パレードにおいてターゲットの乗るランチに一定の距離を保って追従し、編隊の基点となっているハウンゼンの機体から送られてくる情報を基に狙撃を実行するのがゴルドの仕事だった。

送信される位置情報を基に、三次元面にターゲットがゆっくりと描く移動予測ラインと自身の機体から射出される弾道が描きだすラインをぶつける作業というのは、狙撃というよりはどちらかといえばシミュレーション・ゲーム感覚に近い。事前の綿密な調整作業によって成功率の大部分が影響されるとはいえ、デブリや民間航行船等の幾つかの不確定要素が存在する以上、決して楽観はできない。

考え得る限りの万全な準備を整えたゴルドは、その瞬間に向けて自身の緊張感と集中力をゆっくりと高めていく。

――ここまではすべて順調だった。たった一つの誤算を除いては……。

祭典の模様をモニターで拾い上げていたゴルドは、シェリンドンの登場と同時に映像をカットし、音声のみに切り替えた。これから狙撃するターゲットの姿を視認するのは流石に抵抗がある。自身の手のひらにその運命が委ねられていることに優越感と興奮を覚えるなどという行為は性格破綻者の所業であろう。

暗く狭いコックピット内に彼女の涼やかな声が響き渡る。その言葉の一つ一つにやがて魂の熱が籠り始め、聴衆達が徐々に魅了されていく様がはるか離れた場所に位置するゴルドの心にも捕えられた。

そして、その演説が最高潮に達した瞬間、思わぬ動揺がゴルドを襲った。

胸の鼓動が早まり手の震えが止まらない。

それは新兵の頃に感じた戦いに対する恐怖や、より強い敵に挑む時の武者ぶるいといったものではない。『魂が震えている』――言葉にすればそういった類いのものである。

それまでの自身の価値観を根底から揺さぶられた時におきる現象――それは未熟な若者がみる錯覚である――少なくともゴルドはそう考えていた。それなりの修羅場をくぐり、些細な事柄では動揺する事のなくなった自身にまさかそのような事が起きるなど、夢にも思っていなかった。

だが現実に、シェリンドンの言葉はゴルドの魂を揺さぶっていた。彼の人生に置いて幾度か経験した様々な興奮に匹敵するかのように。

（違う、これは錯覚なのだ……）

冷静な判断を放棄し、感情の赴くままに行動し、失敗を重ねる。例え一時の満足感を得られたとしても、長い時間が過ぎ去れば、大抵その判断が大きな過ちであったことに気付くものだ。

どんなに美辞麗句をならべ上げても現実は変わらない。

人の世界は争いを重ね、強い者が弱い者を虐げる――それがゴルドの見た人の世の真実であった。シェリンドンの言葉は所詮、高み

に座って見下ろしている者の綺麗事にすぎない。
クロスボーン・バンガードを離れ、フリーランスの傭兵として自己の責任において戦う――言葉としては綺麗に聞こえても、その実は醜い現実と向き合う事ばかりだった。
傭兵を単なる捨て駒として扱う雇い人、この稼業は信頼が大事などと言いながら、いざという時には容易く裏切り逃げ出す同僚、わずかな金で人は人を裏切り、弱者が虐げられていく。それが大規模な争いのない一見平和な地球圏で約束された明日を生きる人々の現実だった。
そして、そこで生き抜くために必要なのは協調の精神などではなく、闘争の手段だけである。明日が当然にやってくるからこそ、そこで生きるために、時として限られたパイの上で醜く争い合って自身の権益を守る――それが日常を生きるという事の意味だった。

ゴルドの動揺をよそに、モニターからは華々しい音楽が流れ始め、それを合図に航宙ショーが開始される。ビーム・フラッグをその背に輝かせた数十機のＭＳが幾つかの小隊に分かれ、様々に編隊を組み変えながら宙域を曲芸飛行する。時折宙域に映し出される立体映像と小気味のよいリズムで演出される音楽が、遊覧船の観客達を興奮させる。だが、その姿を代弁しようと安価な言葉を連発する耳障りなアナウンスがゴルドの集中力を阻害した。小さな舌打ちとともに音量設定を下方向に修正したゴルドだったが、彼の集中力を乱す原因となっているものがそれだけではない事は自覚出来ていなかった。

色つきのスモークを焚いた編隊が宙域を飛び交い、派手な演出のプロローグが終わりを告げると、いよいよターゲットの乗ったランチが登場する。

コロニー港湾外に停泊する遊覧船の間をゆったりと飛行した後で、ライトアップされた教団所有の大型船《エオス・ニュクス》に収容されるまでのおよそ二十分足らずがゴルドに与えられた時間だった。

――自身の心に湧いた動揺という名の獣を無理やり押さえつけ、最初のタイミングを計る。

――コンソールパネルとモニター上で刻々と変化していく数値を睨みながら、自身の呼吸を合わせる。

後はただその一瞬をとらえて、トリガーを押すだけだった。

だが、彼の呼吸はすぐに乱れた。自身の仕事を完遂させるための重要な要素――《ゲオルグ》から発進して以来、ゆっくりと高めてきた集中力が完全に欠如している事に気付いた。

ふと、一人の少女の笑顔がゴルドの脳裏に浮かんだ。バビロニアコロニーでゴルドにカンザシを売った少女。厳しい生活環境の中で、それでもめげずにたくましく生きる意思を持っていた彼女も、今の自分と同じくシェリンドンの言葉を聞き、魂を震わせ、明日に夢を見ているのだろうか？

自身がこれから放とうとしている一撃はそんな彼女の希望を断ち切ってしまうのかもしれない。明日を夢見てどんなに努力をしても、たった一度の悪意の一撃はすべてを霧散させてしまう――その現実に幼い彼女はどう向き合うのだろう。

壊されたのなら又積み上げればいい――無責任な言葉である者は人生と世界を騙る。

だが、はたして人とはそれほどまでに強いものであろうか？　一度壊れてしまったものを再び元に戻す事は本当に可能なのであろうか？

人は綺麗事では生きていけない。だが綺麗事という光がなければ生きていけないのも真実である。

光があるからこそ闇の中にすむ人々は明日に希望を見出し、そこを目指して生きる事が出来る。

（違う、これはやはり錯覚なのだ……）

否定の言葉で己の甘さを再び打ち消した。例えここでゴルドが狙撃を中止しても、やはりいつかは誰かがそれを実行する。わずかなパンの為に互いに殺し合う事に比べれば、例え動機がどうであれ、より多くの権益を守るためのハウンゼンの行為は至極当たり前の事なのだ。そして、世界もそれを当たり前のように受け入れてしまう。真実に悲劇という名の覆いをかぶせて、日常という温かな自身の環境を崩さぬために。

今、ゴルドに必要とされるのは与えられた役割を完璧にこなす事――ただそれだけである。人は万能ではない。個人の意思が世界の先行きを決めることなど、所詮、子供の幻想にすぎない。その為にもたらされる犠牲など見ぬふりをして……。

（本当にそれでいいのか？）

再び疑問が湧きあがった。頭脳で導き出した解答と魂で感じとった何かが異なる結論を生み出した。自身の内面に生じた不協和音が《Ｆ９７》のコックピット内のゴルドを大きく苦しめる。

ふと、震えを抑えようと無意識に左胸に宛てられた己の拳に気付いた。パイロットスーツ越しに感じられる己の鼓動。誕生の瞬間から身体の深部にて刻まれるそのリズムは常に感情と共に変化し、生涯、その者の生とともに在り続けている。

（そうだったな……）

多くの者たちが年と共に日常へと埋没し、平和な社会の礎として生きる中で、愚直に戦いの世界にこだわり続けた自身につきつけられたどうしようもなく残酷な真実――彼はそれと真正面から向き合うために現在（いま）を選択した事を思い出した。

例えそれが愚かで無責任な判断であると他者から罵られようとも、

己が最も良しとするものを選び取ること――それが全てを犠牲にして勝ち得た今のゴルドの特権だった。

その事を思い出したゴルドは一つ大きく深呼吸する。

それまでの動揺が嘘のように消え、ゴルドの心に再び宇宙（そら）の静寂が戻った。乱れ気味だった呼吸が正常に戻り、全身に力が満ち溢れ、先程まで全くと言っていいほど消えていた集中力が回復している。

モニターに送られてくる中継映像には、数十機のＭＳ群が様々な編隊を組みビーム・フラッグを漆黒の宇宙に輝かせながら、悠然と飛び交う様が映っている。かつて彼自身も同じように宙域にクロスボーンの旗を輝かせ、未来を信じていた。それはすでに失くしてしまったはずの栄光という名の幻想だった。

――心に宿る感傷と共にゴルドはその映像をカットする。

コックピット内は完全な静寂に包まれた。モニターにはハウンゼンの機体から送られてくるデータのみが自動処理され、視覚化された数値と宙域に存在する艦船や機体を指し示す点のみがただ無機質に輝いていた。

ここからはゴルドの仕事だった。

モニターに映る幾つかの点から二つの輝きを抽出する。それはターゲットであるシェリンドンのランチと、弱冠離れて一定の距離を追従する旧知の機体だった。　その一方に速やかにターゲットを再設定し、狙撃のタイミングを計る。己の選択にもはや迷いはなかった。

――再びタイミングを計る。

――コンソールパネルとモニター上で刻々と変化していく数値を睨みながら、自身の呼吸を合わせる。

全く乱れなくなった呼吸を止め、極限まで高めた集中力でタイミングをとらえた瞬間、迷わずトリガーを押した。
《Ｆ９７》のロングレンジライフルから放たれた一撃は、プラズマの輝きを伴って漆黒の闇の中を駆け抜ける。
そして――小さな輝きがはるか離れた目標宙域に一つ生まれた。
一つの魂が消えていく小さな輝きを確認すると同時に、即座にあらぬ方向に複数のダミーを流し、機体を隠していたデブリの質量を足場にして宙域を離脱する。
ゴルドの機体からわずかに離れた場所に潜んでいたジノの機体の追随を感じながら、ゴルドはダミーの爆発と同時にその輝きに紛れるように一瞬加速をかけると、あとは慣性に任せて宙域を逃走した。
突然の凶弾によって生じたコロニー周辺の大混乱は、もはやゴルドにとって、関心外の出来事だった。

数時間の後、《ゲオルグ》による回収を待ちながら、安全宙域を漂っていたゴルドの機体にジノが自身の機体を接触させた。
「おっさん」
直接回線で表示されるジノは、珍しく神妙な様子でゴルドに尋ねた。
「あれで、よかったのかよ？」
その質問にゴルドは静かに笑みを浮かべた。
「ああ、そうだ。これでこの仕事は……完了だ」
どこか晴れ晴れとしたゴルドの様子を訝しげに眺めていたジノだったが、やがて「分かったよ」という言葉と共に通信を切る。再び

静寂の戻ったコックピットに一人とり残されたゴルドは、去来する様々な感傷に浸りながら、自身の身体が強いアルコールを求めている事に気付いた。

（後で、キャプテンに自慢のコレクションを分けてもらうか……）

その提案におそらくは渋面を浮かべるであろう男の髭面を思い浮かべたゴルドは、《Ｆ９７》のコックピット内で声をあげて笑った。

それは彼にとってクロスボーン崩壊以来、おそらく初めてとなるであろう、心からの笑顔だった。

Ｃｈａｐｔｅｒ―？―了

（２０１０／０７／３０　Ａｒｃａｄｉａにて初稿）

（２０１１／０５／０８　本サイトにて初稿）

08（後書き）

Ｃｈａｐｔｅｒ一？掲載させていただきました。御精読ありがとうございます。

作中登場のシェリンドン・ロナの年齢につきましては、原作者が関わった作品の中でも諸説存在します。

当作品におきましてはおそらく最もメジャー（？）であろう作品中の設定である『ベラ・ロナ（セシリー・フェアチャイルド）の従妹』という説を基にして、設定してあります。ご了承ください。

読んでいただいた多くの方々に心よりの感謝を……

01

モニターに広がる光景は地獄だった。

老若男女を問わずおびただしい量の血を流しながら人間が溶けていく――その光景を眺めながら笑っている同僚達の声が耳の奥に高らかに響く。理解不能な現状に混乱した彼は、部隊長を呼び出した。だが、帰ってきた答えは自身の良心の範疇を全く超えた世界に住むものの言葉だった。

『奴らは連邦政府に税を納める事すらない只の難民だ。そんなやつらを野放しにしておけば、テロリスト共と結託してろくでもない事をやらかすに決まっているだろう。これは健全な連邦市民の生活を守る上での予防的措置というものなのだよ、新入り』

返す言葉を失い、ゆっくりと暗転していく視界の中で、理解不能な言語で語る部隊長とそれに同調するかのような同僚達の笑い声が自身の中に木霊する。救いようのない場所に立たされた事をようやく自覚した彼の足元は崩れ落ち、その身体は闇の中へと堕ちていった……。

息苦しさと共にジュベールは目覚めた。じっとりと身体を濡らす汗が不快感を倍増させる。

（またあの夢か……）

まだ醒めきっていない頭でそれが夢だった事を理解した彼は、近頃ようやく慣れてきた自室の寝具の匂いにわずかに安堵を覚えた。連邦軍人としてのキャリアの中でも最悪の経験――それは時折夢に

現れ、彼を悩ましていた。あの時感じた絶望感はけっして忘れることなどできない。おそらく生涯引きずって生きていくのだろう。

ＭＳという道具と自身の相性が良いという事に気付いたのは訓練兵として初めて搭乗してからしばらくたっての事だった。誕生から半世紀の時を経て、過去の数多のパイロット達によって蓄積されたデータは宇宙空間という場所で必要とされる全ての行動パターンを網羅し、現代においてＭＳという道具はほぼ完成の域に達している、といっても過言ではない。人の身では何かと不自由な宇宙空間において、自身に無限の力と可能性を与えるそれを巧みに操る事の楽しさに目覚めた彼は、ＭＳパイロットとしてめきめきと頭角を現していた。

だが、そんな彼の突出した能力は現在の停滞しつつある連邦軍という組織の中で評価される事はなかった。

ＭＳのセンサーの性能がいかに優れようともそれを操るパイロットが人間である以上、必ずと言っていいほど意識の死角というものは存在する。それを補うために現代のＭＳ戦ではチーム戦術が基本となっている。互いの死角をフォローしあい、それぞれの役割を果たすことで実数以上の力を発揮させる――それがＭＳ戦の常識だった。

しかし、模擬戦や演習レベルにおいて、他者のフォローなど必要としない彼の突出した才能は上官や同僚達の妬みの対象となり、部隊内で冷遇されることとなった。当初は自身の才能を抑え周囲の者に合わせようとした彼だったが、常識の壁を軽く凌駕してしまう彼の才能はそんな中途半端な状況を受け入れさせなかった。結局、周囲との軋轢は日に日に大きくなっていき、彼のフラストレーションは溜まる一方だった。

そんなある日、必要以上に彼に冷たく当たる一人の上官の言動についに激昂したジュベールは、模擬戦においてそのプライドをズタズタに引き裂き、再起不能に追い込んだ。

当然、彼に与えられたのは厳しい処罰と報復としての部隊転属、そして『上官潰し』の異名だった。その異名故にどこへ行っても受け入れられなかった彼は、戦時でないにも関わらず部隊を転々とすることとなった。そして、数々の転属の後に行き着いた先で起きたのがあの日の出来事だった。

のどの渇きを覚え、起き上がるためにエアベルトを緩めようとしたジュベールは、ふと自身の隣に眠る就寝時にはいなかったはずの人影に気付いた。ミリー・アーガス――《エナド》ブリッジ内でMS管制を担当している彼女は、無重力状態でも寝具に身体を固定するエアベルトを器用に緩め、相手に気取られることなく潜り込むという奇妙な特技を持っている。子猫のように丸まって安らかな寝息を立てている彼女の無防備な横顔にじっと見入る。

正確かつ端的な情報処理能力が必要とされる彼女の仕事にはかなりの緊張が強いられる。自分をはじめとした灰汁の強いMSパイロット達とブリッジとの橋渡しをしながらも、セクハラまがいの言動や同性からの嫉妬に可憐な笑顔で立ち向かう――時折本気に聞こえる冗談で愚痴る彼女も今は自身の隣で安らかに眠る夢の中の住人である。

愛らしい顔立ちの寝顔にそっと触れる。みずみずしい肌の感触とそのぬくもりは人の存在の重さを感じさせる。しかし、ジュベールにはそれはどこか遠くにあるもののように感じられた。数え切れないほどにその髪に、横顔に触れ、その肉体を何度も抱いて自身の存在を刻み込んだはずだったが、いっこうにその感覚は消えなかった。限りなく薄く決して破れることのない被膜が二人の間をさえぎっている――その印象はジュベールの中からどうしても消え去ることはなかった。

自身と彼女とは何か決定的なものが違っている――それが何である

かという事を感性では認識できるものの、具体的な言葉で示す事は出来なかった。否、それは彼女に対してだけでなく、自分以外の全ての他人に対して感じている事を彼は自覚していた。

日々、同僚達をはじめ多くの人々と関わり続ける日常の中で、どこか現実感を持てないでいる自身が原因である事は何となく、理解できている。そしてそんな自身が唯一、あるがままの己を強く感じる事が出来るのは戦闘中のＭＳのコックピットの中だけだった。だが、その場所で感じる事のできる己のあり方を彼は心のどこかで否定していた。そこでの自身もやはり嘘まみれである――それが彼、マクシミラン・ジュベールの自己認識だった。

突然、枕元でインターホンがけたたましく鳴り響く。室内の心地よい沈黙を守ろうとジュベールは反射的に手を伸ばした。モニターに映っていたのは彼のチームメートであるジェラルド・バッジョ少尉の姿だった。

「何だ？」

音声のみで返答する。スピーカーの向こうからは、バッジョの弱冠緊張気味の声が返ってきた。

「お、お休み中のところ、誠に申し訳ございません。そ、その、よろしければシミュレーション訓練について一言助言していただきたく……」

声と同様にインターホンのモニターに映るバッジョの表情にも緊張の色が窺える。

（熱心な事だ……）

彼のＭＳパイロットとしての素養は高い。現状のまま《エナド》ＭＳ隊に所属してそれなりの場数を踏めば、放っておいてもいずれジャクソンやサカキなみの一流と呼ばれるパイロットにはなれるはずだ。しかし、その程度の事で彼は満足することはないだろう。彼の望むものはさらにその先の高みにあった。自分やレイナードがいる世界の住人になる事――彼が望むものはそこにある。

だからこそ、彼は自分とチームの小隊長であるジャクソンの間にわずかな不協和音が生じる事を知った上で、自分に近づくのだろう。

しかし、その望みをかなえる事はおそらく不可能だろう。そうするには彼は常識的過ぎた。俗物的であると言ってよいかもしれない。

常日頃からジュベールを崇拝するかのような言動をとる彼だったが、その心の奥には、秘められた野心が見え隠れし、ジュベールの傍に身を置く事で何かを掴もうとする打算的な計算が働いていることを彼は直感的に感じ取っていた。

人の世に生きると言う事は、そんな打算を嘘というオブラートで覆いながらうまく渡っていく事なのだろう。だが、そんな人間では決して掴むことのできないものもこの世には存在する。彼が欲する世界とはそういう場所だった。

手に入れるためには自分やレイナードのように、何かが欠けていたり、人間としての何かを捨てて、常識という範疇を逸脱しなければならない。自分たちと彼らの差とはそういうものである――そうジュベールは考えていた。

「あ、あの……」

ジュベールからの返事がない事にモニターの中のバッジョは不安気な様子を見せる。心のどこかで面倒臭さを感じながらも、人の世の理に習い嘘を重ねる。

「わかった。直ぐに行く。ハンガーで待て」

返答と同時にインターホンを置く。枕元の照明を薄めに設定すると、デジタル表示の時計を確認する。集合２０分前、軽くシャワーを浴びて身支度をすませても幾分か余裕のできる時間だった。彼のリズムを十分に把握したバッジョの周到さにジュベールは苦笑する。

「ん……」

傍らで丸くなっていたミリーが身動きをする。薄暗がりの中、幾分焦点の合わぬ瞳が、彼女の愛らしさを強調する。

「出るの？」

どこかまだ醒めやらない瞳でジュベールを見つめながら、呂律怪

しく、ぽつりとつぶやいた。
「ああ、そろそろ時間だ」
「もう少し……」
どこか甘えるかのような態度で彼女は身を寄せる。
「悪いな……」
その言葉にぷくりと膨れる頬に軽く接吻するとジュベールは寝台から抜け出した。だが、その接吻も口から出る言葉もやはりどこか嘘にまみれていた。

サイド４――かつて、クロスボーンの反乱と呼ばれる事件の起きた別名フロンティア・サイドとも呼ばれるＬ１宙域に存在するコロニー群である。
およそ半世紀前の大戦による大規模破壊以降、発生した無数のデブリにより、その復興は他のサイドに比較して著しく遅滞していた。
しかし、デブリの回収及び再利用技術が加速度的に発展したことで、およそ１０年前、連邦政府はあるプロジェクトを立ち上げた。一般には通称プルリヤシュ計画と呼ばれ、政府および連邦軍主導の下、地球圏屈指の学識者や民間企業を巻き込んで建造された人工要塞である。単なる軍の基地施設にとどまらず、要塞内には来るべき大宇宙進出時代に備えて、実験施設や研究機関が誘致される予定であり、その占有権をめぐって様々な機関からの売り込みが後をたたない。
巨額の資金をもとにたちあげられたプルリヤシュ計画の効果は、当初は懐疑的であったものの、この１０年近くの間に多くの産業に影響を与え、巨大な労働者市場を生み出した。特にプルリヤシュ要塞に最も近い宙域に存在するフロンティア・サイドの各コロニーは

その多大な恩恵を受けており、コロニーから出発する要塞見学ツアーは地球圏屈指の観光スポットとなっていた。

その一方でこの種のプロジェクトにありがちな黒い噂も多く、プロジェクトを巡った様々な贈収賄や談合などは言うに及ばず、要塞内には政府機関や一部特権階級の者たちのみが使用可能な保養施設が存在するという突飛なものや、月に移転する政府の介入を嫌った連邦宇宙軍が新たな本部としての使用を模索しているという真実味を帯びたもの、さらにはプルリヤシュ要塞そのものがソーラーシステムに代わる新たな大量破壊兵器の実験施設であるなどという的外れなものまで様々である。

幾つもの巨大な外周リングの中にある要塞本体は、周囲を球状に覆った小惑星を核にして、横倒しになった巨大な八面体が構成され、その質量はコロニーをはるかに凌いでいる。人類史上空前の巨大建築物は、およそ9割方までが完成しており、迫る竣工期日を睨みながら内部施設の完成にいそしむ労働者や資材を運ぶ定期便がひっきりなしに港湾部を出入りしている。

プロジェクトの効果故か周辺宙域のデブリは数年前に比べて格段に減少したものの、まだまだ油断はならず、時折ＭＳを接舷させたパトロール艇が定期的に見回りを行っている。

その宙域の片隅で行われていた演習エリアにおいて、２機のＭＳのスラスター光がひときわ激しく輝いていた。

熱核エンジンの騒音と振動に震えるコックピット内で捕えられるのは自身の激しい呼吸の音だけだった。全天周モニターの表示はめまぐるしく変わり続け、漆黒の闇の中に輝く目標の光跡をトレースする。だが追跡者の意識はさらにその先にあった。優秀なシステムによって捕捉されロックオンと同時に発砲する――その一連の動作では決して堕とすことのできない相手である事は何度も辛酸を舐めさせられた経験から十分に理解していた。射撃管制をオートからマ

ニュアルに変更し、高G下の世界の中で自身の身体を押し潰すような衝撃と戦いながら、獲物と自機を一瞬つなぐ射線の模索に全力を注ぐ。

航空機の格闘戦を思わせる追跡劇から一転して、ＡＭＢＡＣを駆使した接近戦へと発展し、さらに隙をついて互いに距離をとった両機は中遠距離での華麗な射撃戦を展開する。

トリガーを押した瞬間、否、その一瞬前に自身の放つビーム光が目標を捕える事が出来ない事を察知し、直ぐに次の行動へと移る。急加速と急制動によって叩きつけるように襲ってくるGに歯を食いしばりながらも、目標から意識を外す事はない。

『今日こそは堕としてやる』

ただその一念で追跡者――カーク・レイナードはモニターの向こうで自在に逃げ回る獲物――マクシミリアン・ジュベールの機体に毒づいた。

「いい加減に堕ちやがれ！　このネクラ野郎！」

ほんの一瞬生まれた空白の時間の合間に、叩きつけるような言葉と共に肺に残った全ての空気を吐き出す。短く太くコックピット内の空気を飲み込むと再び深海の中にダイブするかのように高G下の世界へと飛び込んでいく。失神を防止する為に締め付ける高機能のパイロットスーツの束縛が生む苦痛が、なかなか捕える事の出来ない獲物への怒りへと変わる。

模擬戦用に出力を落としたビーム光が飛び交い、両機のスラスター光が、縦横無尽に乱舞する。色違いの２機の《Ｆ９１》の機体は複雑な軌跡を描き、搭乗するパイロット同士の互いの殺気が漆黒の宙域を交差する。

傍から見れば両者の実力は拮抗し、ほとんど差はない。しかし、これまでに幾度も行われた二人の対決の結果はカークの全戦全敗だった。そして、整備兵達の賭けのネタにすらならなくなってしまった二人の対決に周囲の者達はうんざりとした様子だった。

例え軍に所属していてもめったにお目にかかる事のできないハイレベルなパイロット達による《Ｆ９１》同士の一騎打ちだったが、全く予定外のタイミングで始まったこの対決から得られるものは何もなく、二人の戦いは過剰なまでのライバル意識が生み出した暴走の果てに起きたものであり、とどのつまり――単なる命令違反だった。

「あいつら……又、おっ始めやがった……」

「……」

あきれた様子のパープルチームリーダーのテッド・ジャクソンの声にブルーチームリーダーのジル・サカキは沈黙で答えた。もはや語るにあたわずという心境である。

予感がなかった訳ではない。部隊編成以来何度も繰り返され続けた二人の暴走はすでに両手の指で数えられないほどになっている。今行われている二人のデッドヒートも、いつもの二人にしては随分と我慢したほうであろう。

いつもならば、コックピットを揺るがす雷のようなコーナーの怒声も今日はとある事情により降ってくることはない。そして、格闘戦に没頭する二人には、サカキとジャクソンの制止など聞くはおろか、耳に入る事すらないだろう。

要塞近辺のデブリ帯から突如現れた仮想テロリストによる３０機近いＭＳでの襲撃――仮想統合戦術プログラムによって行われる宙域でのシミュレーションにおいて、設定された模擬演習内容を《エナド》ＭＳ隊のブルー・パープル両チームの６機の《Ｆ９１》は損害なしに完璧にやり遂げようとしていた。

噛ませ犬にされた２０８特戦隊のアグレッサーチームの恨みをまた買う事になるのだろうと思いながらも、難易度の高い設定を少ない戦力で完遂させる《Ｆ９１》の性能と自身のチームメート達をリーダーであるサカキは誇らしく思っていた。だが、そんなサカキの心情とは裏腹に、フロント・アタックのカークは、終盤に近付くに

つれどんどんとフラストレーションが溜まっていた。
カークがターゲットに設定した敵機をジュベールが横合いからかっさらうように堕としていく。それが偶然ではなく意図的である事を承知してからは、今度は逆にそれをやり返すようになった。当然の如く二人の行為はエスカレートし始め、想定外の動きをする両機に戸惑うのは仮想敵の方であり、プログラムの難易度は駄々下がりになっていく。
何も知らない他者が傍から見ると2機のフロント・アタックがお互いを補い合うかのように次々と鮮やかに敵機を堕としているかのように見えるのだから始末が悪い。
やがて、暴走するライバル意識が宙域を交錯し、そんな両機を中心にして、模擬演習は終幕へと怒涛の勢いでなだれ込んでいく。そして演習終了と同時に臨界点を超えた両者のバトルが始まった……という訳である。
「……ったく、なんだってあの二人は、いつもあんなになるのよ！」
内情をよく知るチームメートであるシャーリーが呆れ果てている。今日に限って言えばジュベールの方に原因があるようだったが、基本的に二人の諍いはどちらが悪いという事はない。犬猿の仲、という言葉をこれ以上にはないというほどに具体的に示しているような二人の対立は《エナド》艦内において知らぬものなどいない。そして、そんな二人の対立から生じる一連の暴走行為は高価なＭＳという玩具を使った子供のケンカだった。
「結局のところ、似た者同士なのさ……」
力なくつぶやくサカキの声が空しくコックピットに響き渡る。一度頭に血が上ると上官の制止など耳には入らぬことは、十二分に理解している。そしてそんな部下を命令で束縛することがチームにとってよい結果にならぬ事に気付いてからは、頭痛の種となっていた。
レイナード及びジュベールの両パイロットの技量は実に得難いものであり、おそらく現在の連邦宇宙軍のパイロットの中でもトップクラスだろう。敵陣に切り込んでいくフロント・アタックとしての

適性も全く問題はない。敵編隊の戦術を時として強引に切り崩すフロント・アタックの恐るべき攻撃力に委縮した敵が、その攻勢を緩める事ではじめて、様々に複雑なフォーメーションやチーム戦術が可能となるのである。

だが、その攻撃性に比例して、暴走度も加速するようで、子供じみた感情をお互いにぶつけあう事が部隊編成以来の二人の慣例となっていた。

この二人の暴走に最も頭を痛めているのは《エナド》ＭＳ中隊責任者のアレン・コーナーも同じだった。

暴走する二人に向けて発せられる彼のかすれた怒鳴り声が宙域を空しく駆けるのは演習終了後の慣例であり、いつしか始末書をはじめとした様々なペナルティが、チームメート達にまで飛び火するようになった。だが、一向にその効果がない事を悟ってからは別の対策を考るものの、その結果が芳しくないだろうことは容易く予想される。

コーナー自身がなまじパイロット上がりであるが故に、二人の類い稀な才能を理解し、彼らに期待もするのだろう。もう少し、軍人としての節度や常識というものを身につけさえすればどこへ出しても恥ずかしくないのだが、天は二物を与えぬものらしい。きっと今頃慣れぬ場所で歯ぎしりしながら痛む胃を抑えているはずだ。

上官であるコーナーの現状と後々行われるであろう八つ当たりまがいの説教に頭を悩ませる生真面目なサカキの機体の傍らで、二人の格闘戦をモニターで眺めていたジャクソンがぽつりとつぶやいた

「だが、決定的な部分で違うがな……」

「決定的？」

ジャクソンの言葉に思わず反応してしまったシャーリーは、直ぐに「しまった」という表情を浮かべる。

「なんだ？　気になるのか？」

悪戯っぽくにやりと笑うモニターの中のジャクソンにシャーリー

はすぐにポーカーフェースを取り戻す。
「いえ、そのような事はありません」
しかし、そんな言葉もジャクソンには通じない。なぜかシャーリーが苦手としてしまうこのドレッドヘアの男は『しめた！』とばかりに追撃を開始する。
「今度の休暇にデートに付き合ってくれたら、懇切丁寧に説明してやるぞ？」
ジャクソンの言葉にシャーリーは表情を変えずに反撃する。
「ジャクソン大尉……、メガランチャーの熱い一撃とガトリングの激しい一撃どちらがお好みでしょうか？」
「そうだな、どちらかといえば俺は汗にまみれた格闘戦（ドッグ・ファイト）の方が……」
繰り出されるジャクソンの軽口にしっかりと食いついてしまうシャーリーの様子にサカキはコックピット内で頭を抱える。
「ジャクソン……他人の部下で遊ばんでくれ……」
生まれてくる子にはまず節度というものを身に着けさせよう……
数ヵ月後に父親となるサカキは心の中で固くそう誓ったのだった。

（２０１０／０９／０４　Ａｒｃａｄｉａにて初稿）
（２０１１／０６／１９　本サイトにて初稿）

02

ぎりりと奥歯を噛みしめる――。

『このままでは奥歯がなくなってしまいますよ』と健康診断のたびに飛ばされる軍医のジョークに一時は本気で悩んだこともあったが、結果としてそれは杞憂に終わった。彼のその悩みを杞憂に終わらせたのは新たな別の要因であり、それは彼の人生に一つの選択の機会を与えることとなった。

目の前で堂々と繰り広げられる部下達の暴走劇に、いつものように大声をあげて制止する訳にも行かず、《エナド》ＭＳ隊中隊長アレン・コーナー少佐は再び奥歯を噛みしめる。もう何度も《エナド》のモニターで見た事のある光景だったが、こんな日にまでやらなくともよかろうにという怒りがひしひしと彼の奥歯に圧力をかける。２カ月強の付き合いでそれがコーナーに対する悪意から起きている訳ではない事は十分に承知している。むしろ二人の行為は自然の流れの中で当然に起こるべくして起きているということは長いＭＳパイロットの経験から理解も出来る。頭では……。

コーナー自身、現役として第一線に立っていた頃はどちらかといえば向う見ずなやんちゃに耽ることが多かった。推進剤という制約はあるものの無限の広さを誇る宇宙空間を、ＭＳを駆って自由に飛び回る快感は、そうそう他で得られるものではない。アドレナリンの導くままに闘争本能を全開にして飛び込んでいく高Ｇ下の世界は、一度味わえば止みつきになってしまう。勿論、ただ徒に粗暴な振る舞いをしている訳ではない。極限に近い環境に機体と自身の身を置く事でそれらの限界値を正確に知り、実戦時のアドバンテージにす

る――死の不安と隣り合わせのＭＳパイロットならば当然の行為だった。

押し寄せるＧの衝撃に奥歯が摩耗するほどに食いしばり続けた顔はいつしかすっかり四角くなり、酒場の女たちに「カワイイ」と言われて撫でられてしまうのは部下達には決して知られたくない秘密である。だが、そんな彼のバイロット生命を絶ったのは意外な伏兵だった。

十年以上のパイロット生活の中で、絶え間なく押し寄せるＧの衝撃に彼の眼と視神経が悲鳴をあげたのである。いかに高度な医療処置を加えても、ＭＳパイロットとしては致命的な生来の欠点を根本的に克服する術はなく、それ以外の点ではまだまだ現役として十分にやっていけるはずだった彼に、引退の道を選択させることとなった。そして、健康のために控えていた高濃度のアルコールの摂取という悪癖と引き換えに、彼は第一線を退き、部隊指揮官としての道を歩むことを決めた。

指揮官の立場に立ち、問題児だらけの部隊を率いる事となってはじめて、彼は当時の自身の上官たちの苦労を、身を以て理解していた。

命令で部下を縛りつける事は一時的には可能かもしれない。しかし、兵士とは生身の感情を持つ人間である。そして、生身の感情があるからこそ、時として人は思いもよらぬ力を発揮し、困難な事態や圧倒的に不利な戦況を打開していく。士気という決して数字では測りえない要素との闘いは遠い昔から指揮官の立場にある者の宿命であるといってもよい。

無限に広がる宇宙（そら）の中で自身が最も優れた存在でありたい、そしてそれを侵す者は何人たりとも許せない……ＭＳパイロットであったからこそ分かってしまうその本能のままに自由に振る舞う部下達

の姿に、かつての自身の姿を重ねる。もはやその世界に身を置く事はできないだろうという僅かな嫉妬と羨望を心の片隅に押しやり、彼らを宥めたり怒鳴りつけたりを繰り返す日々は、新たな道を踏み出したコーナーが失くした物を十分に補わせていた。

だが、そんなコーナーも所詮は一組織人であり、時としてその対面を保つために部下達の惜しみない協力を望むのは人として決して誤った事ではないはずである。特に自身の指揮官としての適性が問われる可能性があり、下手をすれば去就問題に発展することすら疑いかねない状況ならば……。

そんな状況に現在のコーナーは立たされていた。

2機のMSの格闘戦が予想通りの結末を迎えると、室内の床面中心部に設置されているホログラムが途切れ、暗い室内に一斉に照明が灯り、同時に室内の無数の気配が動き始める。

地球連邦宇宙軍最高戦略会議――人工要塞プルリヤシュ内において機密レベルが最高クラスに設定されている一区画に存在する会議場内には連邦宇宙軍の将官クラスのそうそうたるメンバーが顔ぶれを揃えていた。参謀部を初め、各サイドに駐留する艦隊司令クラスの数十名の将官たちが半円状に並べられた議席に着座し、物々しい空気を周囲にふりまいている。若干の年齢差はあるものの、誰もが腹に一物を抱えているかのようであり、決してその本心をみせぬ表情を読み取る事は至難の技であった。

かなり広めの室内には最新鋭の設備が取り揃えられ、議場内の各席には高精度のホログラムィー装置が設置されている。年に数度も使われることのない会議室に法外な予算をかけるぐらいならもっと別の場所にまわして欲しいと思うのは、現場士官の誰もが考えるところであろう。遠隔地においても会議に参加が可能なこの設備を使用しているものの多くは、地球上の各任地におかれている陸海空軍

の将官達だった。

連邦政府の月遷都が実現しつつある現在、連邦軍内における宇宙軍の比重はますます増加し、規模が縮小されがちな陸海空軍の将官達がこのような会議に出席するのは、ここ一、二年で当然のようになっていた。

１００億以上の市民を束ねる連邦政府を後ろ楯にもつ連邦軍の頂点に近い場所にたつ彼らは、誰もが旧世紀の国家元首クラスの強大な権限を以てその支配化部隊を率いていた。

議場内の最も中央の席は空席になっている。連邦政府大統領によって指名される元帥席が空席となることで、この最高戦略会議で討議される議題は連邦議会の影響を受ける事のない、あくまでも軍内部のみの意思であるという事を表向き示していた。

そんな仰々しい会議の末席に《エナド》ＭＳ隊中隊長アレン・コーナー少佐は二人の同伴者とともに、この会議に報告者という立場で参加していた。

「ふむ、実に見事なＭＳ戦であったな……」

「流石に高額の予算をかけているだけのことはありますな……」

一連の演習内容の全てを中継したホログラムが消され、議場内での発言が許可されると、そこかしこから自由な感想が発せられる。それを聞きながら報告者席に座っていたコーナーの額には脂汗が浮いていた。

演習後に行われたカークとジュベールによる一騎打ちは当初の予定にはまったくなく、それが二人の暴走行為によってもたらされたという事実を室内の誰もが理解している事は明白であった。

だが、その事実をわざわざ指摘する者など皆無である。軍のトップに位置する彼らにとって末端の兵士の暴走など単なる些事だった。仮にコーナー達の責任を問うものがいたとすれば、それは会議場内の彼らよりもずっと下っ端の者たちの仕事である。これから行われ

る混沌とした成り行きが予想されるであろう会議の前菜として、二人の暴走は意図的に見逃されていた。

「さて、以上が《Ｐ２》計画の概念実証部隊である２０８特戦隊の中核となる《エナド》ＭＳ隊の全容である。部隊に関する一連のデータはすでに諸君の手許に届いていよう。異論がなければ、今後も引き続きこれまでと同様に計画の推移を見守ることとなるが、如何なものか？」

中央の空席に比較的近い席に座っていた中将位をしめす階級章が物々しく制服を飾る一人の壮年の男が発言する。

テオドア・レンブラント中将――白人特有の大柄な体躯にやや面長で理知的な顔立ちは周囲の者に安心感を与える。だが、前線に立つものの目から見れば、戦場の匂いを感じさせない官僚臭さがどこか鼻についた。近い将来、連邦議会に政治家として転身するつもりらしく、様々な面において何かと話題に事欠かない人物であり、彼が連邦大統領の地位をも視野に入れているであろうという憶測から様々な勢力と密接な関わりを持っているというのは公然の秘密だった。

レンブラントの発言に続いて、一人の男が２０８特戦隊によって行われた2度の実戦におけるデータを読み上げる。彼がレンブラントの子飼いであることは疑う余地もない。室内の者は皆、手許に表示されるモニターを眺めながら沈黙を保っている。だが、さらに別の男が手をあげた。

「私は反対ですな。特にこの2度目の実戦においては虎の子ともいえる《Ｆ９１》を3機も失っている。議会から軍に対する予算削減の圧力が日に日に増しているという中で、この金食い虫をたった一度の実戦で3機も失い、《エナド》の損失は総戦力の3分の1に達している。これでは《Ｐ２》計画の当初の趣旨に著しく反しているとはいえませんか？」

「私も同意しかねますな」

その発言を皮切りに室内から一斉に反対意見に同調する意見が次

々に述べられる。静かだった室内は一転して舌戦の様相を呈し始めていた。

「一度の作戦において損害が発生する事はつきもの……いかに優れた性能の機体を以てしても、本格的な実戦において、全く損害なしに目的を達成しようなどと考える事こそ机上の空論というのではないのですかな？」

「私は損害が発生した事を問題にしているのではなく、その中に《Ｆ９１》が含まれている事を問題にしているのです」

「しかし、《エナド》ＭＳ隊の実力は先程の演習で証明されたように比肩するもののないほどに圧倒的であるといえよう。特に２度目の実戦においての敵部隊の切り崩しには目を見張るものがあるではないか」

「それもこれも《Ｆ９１》という圧倒的に高性能な機体があってこその事実でしょう。高額の予算をかけさえすればそれなりの結果が得られる――これでは現在の連邦議会や政府の要求に対して全く答えになっていないではありませんか？」

「《Ｐ２》計画における《Ｆ９１》の使用というのはあくまでも試験的なものであったはず……本命は計画の次段階における《Ｆ８Ｘ》計画において量産されるシリーズに引き継がれるはずですが……」

「それは聞き捨てなりませんな。いったいそれはどの時点での決定事項なのですかな？　十年も前に一度廃案になった計画が当会議や該当委員会の議事録に記載されているなどという事実は記憶にありませんが……」

一人の男が声を荒げて立ちあがった。

「もともと《Ｆ９１》を始めとしたＦ計画（フォーミュラ）は運用コストが大きくなりすぎるという点ですでに軍の基本戦略からは外れていたはずだ。《Ｐ２》計画に採用されたのは代替的なあくまでも一時的な措置である、ということは以前の会議で予め確認された事項だ！　各作戦において必要とされるＭＳの性能強化は既存の量産機をもとにハードポイントシステムやサブフライトシステム、そして、将来的には

セパレート・パーツ・システムによって補完され、最小限度のコストで技術革新と時代の変化に対応させていくという事は今や常識のはずだ！」

「どさくさにまぎれて貴官の独自理論をいかにも既成事実であるかのように語るのはやめて頂きたい。それともそれは何処かの社内においての決定事項なのですかな？」

痛烈な皮肉とともに激論を交わしていた将官たちが睨みあう。支配下部隊において装備兵装の採用決定権を持っている彼らには様々な後ろ盾が存在する。それはあたかも連邦軍に寄生する軍需企業同士の代理戦争のようだった。

だが、紛糾する議論にさらに意外な横やりが入る。

「さすがは、今や飛ぶ鳥を落とす勢いの宇宙軍の戦略会議だ。同じ連邦軍でありながら、縮小される一方で演習の弾薬にすら事欠く有り様の我ら海軍にはうらやましい限りの議論ですな」

発言の主は自席にてホログラムで表示される連邦海軍大将だった。含みのあるその発言にヒートアップしていた諸将はわずかに冷静さを取り戻す。

近年、連邦政府の月移転が決定されるや否や、その影響は連邦各軍の編成にも大きな影響を与えることとなった。政府機能が月に移転することで、テロやゲリラの標的もそれに伴って移動する事は当然の如く予想され、連邦宇宙軍の重要度は大幅に増した。部隊の再編や人材の育成には相応の予算が必要とされる。しかし、政府の軍に対する財源そのものが大きく変わるわけでもなく、宇宙軍の強化と引き換えに大きな割を食ったのは陸海空の各軍だった。自身の権力を大幅に縮小されることもあり、陸海空各将の反発は大きく、宇宙軍最高戦略会議に彼らが顔を出すようになったのにはこのような背景があった。

現場レベルにおいても、長い間重力下の環境で様々な任務をこなしてきた多くの兵士たちが、突然無重力下に放り出されて、十分に

その力を発揮できようもなく、又、政府が描いた通りの青写真が即座に民間に浸透する訳もなく、定時任務に加えて地球上で起きるゲリラ相手の散発的な戦闘や災害復興活動において駆り出されるのは、人手不足とコストカットの波に追われ、青息吐息の将兵たちだった。

このような現状において政府と軍の間に小さな軋轢が生じつつある事は、現在の連邦議会および政府において周知の事実だった。

「し、しかし……、政府機関の移転と共に様々なリスクを背追う事になるのは我々宇宙軍であって……」

「ふん、ネットワークの中で自らの組織名を公募するかのような稚拙な自称テロ組織や軍事同盟を騙る者たちが、一体なんの脅威になるというのかね？」

「宇宙空間内においてのテロ行為は例え爆発物一つによってでも、地球上とはまったく被害規模が異なるという事はすでに周知の事実ではないか！　いざ被害が出た時にメディアや大衆に叩かれるのは我々宇宙軍なのだよ。地球上でのんびりとリゾート気分に浸りながら、無責任なニュースを聞き流しているのを軍務と呼びはしないと思うがね……」

「宙域でおこる事柄の全てを自分達宇宙軍が背負っているなどと考えるのは貴官たちの悪い癖だな……。そもそもテロとは犯罪なのであって、その管轄は警察権を持つ者たちの仕事であり、その裁量は連邦政府やコロニー政庁に委ねられているはずだ。『テロとの戦争』などというタチの悪いジョークは旧世紀の遺物にしてほしいものだな」

まるで示し合わせたかのように不満を口にする三軍の代表者達のお陰で、会議場内はいつしか論点のずれた議論で紛糾していた。そのように迷走しつつある会議で紛糾する議論に水をさすかの如く、さらに一人の男が挙手と共に発言を求めた。

「いつの間にか議論の矛先が全く違う方向にむかっているようだが、そろそろ本来の論点に立ちかえってはどうなのかね？　もっとも意

図的にそうしているというのならば、話はまた違ってくるのだろうが……。年をとると気が短くなってくるもので、出来れば長い会議などというのは御免こうむりたいのだがね……」

発言の主は初老の東洋系の男だった。太く特徴的な眉毛に東洋人特有の切れ長の細い眼は隠れ、その表情を読み取る事は出来ない。一見好々爺という風情だが、それはあくまでも表向きなものである。

ルオ・ウースィー宇宙軍大将――地球圏において、長い間財界で大きな力を持ってきたルオ家の出身であり、現在の連邦宇宙軍の実質的な最高責任者だった。

近年、存在感を増しつつある多数派の雄の言葉に暴走気味の議論がぴたりと止んだ。それを合図にルオの子飼いと目される人物によってさらなる発言が加えられた。

「そもそも、３機の《Ｆ９１》の損失は単なる作戦立案段階でのミスによるものといえるのではないでしょうか？　撃墜地点も作戦概要報告書によれば主戦域とは全く異なる場所となっています。総じて単なる現場の判断ミスによるものというのが正しい見解とは言えませんかね？」

（やはり、そう来るか……）

その発言を聞きながらコーナーは心の中で舌打ちをする。戦略そのものには問題はなく、ミスは戦術レベルでの現場の落ち度にある――上層部の保身のために最終的な責任論は常に末端におしつける会議の定形パターンである。

いかにうまく弁解をしようとしても、所詮、組織内での力関係では叶うべくもない。上層部が報告者として彼らを場違いな会議の席に呼び出したところの真の意図は、態のいい単なる弾よけにも思われる。

コーナーの左隣りには《エナド》艦長ウォルフ・レイノルズ中佐の姿があった。本来ならばその席には２０８特戦隊の旗艦《マーセナス》に座上する司令官もしくは作戦を立案した作戦参謀が座るはずであった。

（逃げたな……）

会議の直前に彼らの代わりにレイノルズが参加する事を知らされたコーナーはそう直感した。

レッドチーム撃墜における責任問題の所在について問われるであろう事は当然に予想された。批判の矢面に立たされる事を嫌った彼らはその役割をレイノルズに押し付けたのだろう。

報告者席の中央で当のレイノルズは目を閉じて腕組みをしたまま沈黙を保っている。予め想定される質問に対して用意してきた解答を読み上げるのはコーナーの役割だった。

意図的に穴だらけのコーナーの弁解に対し、その批判は黙ってレイノルズが引き受ける。なまじ作戦立案の責任がない事を武器に、責任の所在をかわして、うまくやり過ごす――それが決して勝ち目のない議論の矢面に立たされた彼らの防御戦術だった。

３機の《Ｆ９１》を失い二人の搭乗者が戦死、そして一名が入院――部下を失った苦しみや同僚を失くした悲しみ、あるいは遺族の怒りといった生々しい現実も、室内に座る諸将にとっては単なる書面の一文に過ぎない。そしてその事実を互いの勢力を牽制しあうカードの一つにしてしまう目の前の現実に、コーナーは再び奥歯を食いしばる。死んでいった部下達の無念に対し何の餞もできないどころか、自身の保身に手一杯であるという己の無力さに激しい怒りを覚える。そして、それらをどこにもぶつけることのできない自身の常識というものが恨めしかった。

だが、コーナーの苦悩とは裏腹にそんな劣勢な立場から意外な反撃を加える者がいた。報告者席に座る３人目の男――サナリィ社より出向中のガーディ・ブライアン技術顧問だった。

（２０１０／０９／０４　Ａｒｃａｄｉａにて初稿）
（２０１１／０６／２６　本サイトにて初稿）

03

矢継ぎ早に繰り出される諸将の質問に、再び用意された解答で対処しようとしたコーナーを差し置いて、立ちあがったブライアンは発言する。

「えー、随分と撃墜された機体についての議論に熱中しているようですが、そもそもあれらにそんな価値があったんですか？」

相手が誰彼あろうと構わず、相変わらずいつもの調子で話すブライアンにコーナーは肝を冷やす。室内の諸将からもブライアンの態度に不快感を示す空気が漂うものの当の本人は一向に気にする様子もない。

「我々が軍の予算について議会から何度も突き上げを喰らう中で、貴様は《Ｆ９１》という高価な機体に価値がないとでもいうのか」

「はあ、そのことなんですが……」

一回り以上年の離れた相手に対して、どこか小馬鹿にした様子を崩さずブライアンは言葉を続ける。

「もともと《Ｐ２》の初期立案段階においてこちらが提案した部隊規模は巡洋艦一隻とＭＳ《Ｆ９１》２個小隊だったはずと記憶しているんですがね……」

「……」

「予算規模や必要人員の人選など全てが決まっていよいよ計画開始という段階において、突然、妙な横やりを入れてきたのはどなただったでしょうか？」

その言葉と同時にブライアンは室内の諸将をぐるりと見回した。

「初めはたしか女性パイロットにも平等な機会を……という事でしたか？　そのせいで今回問題になっている無様に撃墜されたレッド

チームの追加編成が決まったんでしたよね。おかげで随分と面倒くさい仕事が増えて往生しましたよ……。軍の特殊計画だというのにまさか男女平等論が飛び出してくるなんて正直驚きましたねえ」

こういうのを政治っていうんですか、という的外れなブライアンのボヤキに周囲はさらに不快感を示す。

「予想外の徹夜続きでようやく期日に何とか間に合わせられるかと思えば、今度は部隊規模そのものを拡大すべきだとか言いだしたんですよねえ。事の詳細は確か議事録とやらのどこかに書いてあったと思うんですが……」

最近の年寄りってのは我儘なうえに若い者の迷惑ってのを全く考えないですよねえ、というブライアンのさらなるボヤキに室内の諸将はさらに絶句する。

「き、貴様、何が言いたいんだ？」

ややあって、動揺を抑えきれない者のうちの一人の問いに、ブライアンは平然と答えた。

「要するに、堕とされた奴らは初めから数に入ってないという事ですよ……。そして《エナド》の現有戦力の実力は先程のおまけつきの演習が示す通り……、全く問題はありません。よけいな無駄が省かれて、《Ｐ２》はようやく本領発揮というところでしょうか」

室内の誰もがブライアンの発言に唖然としている。それは報告者席に座るコーナーも同様だった。いかに高額とはいえ、戦死したパイロットの事など眼中になく、失った機体のコストばかりを気にする諸将達の発言にも呆れていたが、ブライアンの言動はそんな彼らの振舞いのはるか上をいくものだった。

ガーディ・ブライアン――サナリィ社から出向中のこの技師は《エナド》内にて《Ｆ９１》のバイオ・コンピュータのメンテナンスが表向きの仕事だった。幾つかの工学系及び医学系の博士号をもつ天才肌の人物であるが、その言動及び人間性を示すには『クレイジー』という言葉がふさわしい。

一民間人でしかない彼であったが、コーナーには彼が《Ｐ２》の立案者という以上に深い点において計画に関わっているように感じられた。規律の厳しい組織内において、彼の気ままな言動や艦内での立場について疑問を持ったコーナーは、一度レイノルズに問い正した事があったが、当のレイノルズは沈黙をもって答えた。Ｎｅｄ　ｔｏ　ｋｎｏｗ――貴官が知る必要はないことである、というレイノルズの無言の忠告にコーナーはその不満を無理やり自身の心の中に押さえつけることしかできなかった。

そのようなコーナーの彼に対する不信になど全く気づきもせぬように、ブライアンはねちねちと口撃を加える緒将を向こうに回し、堂々と論戦を張っていた。

「貴様は戦死したパイロット達の遺族の感情を逆なでするような発言が許されると思っているのか？」

「おや、随分と感情論的な発言ですねえ。先程から皆様お金の事ばかりおっしゃられるようなので、てっきり、パイロットの育成コストの心配ばかりをなさっているものと思っていたのですが……」

心にもない言葉で非を責める年長の将官達を痛烈に皮肉る。

「と、ともかく、この度のレッドチームの全滅は現場の作戦ミスである事は明らかだ……。この結果に対し、断固たる処置をとり、責任の所在をはっきりさせねば、前線で戦う兵士たちにも示しがつかんであろうが」

「なるほど確かに一理ありますな……。どうしても現場の責任を問われるというのならば仕方ありませんねえ。なぜか多数のバックアップごと戦闘データが破損したにも関わらず本部に回収された大破した機体をもう一度再調査して、彼らを襲ったのが一体何者なのかという事を徹底的に検証する必要があるでしょうねえ。もはや廃棄したなどとおっしゃられるのなら、２０８特戦隊の次の任務は回収されていないデブリを探して、だだっ広い宇宙（そら）のゴミ漁りに行こう……ということになるのでしょうか？」

ブライアンのとどめの一言に室内の空気が凍った。軍の内部、否、

この会議の席上に計画の妨害者が存在することをほのめかしたその発言に不用意に答えを返せるものなどいなかった。誰もが彼の言葉になんらかの心当たりがありすぎる故に、不用意な一言で、攻撃の焦点が自身に移ることを恐れた。保身に長けた彼らである。次の一手は決まっていた。当たりさわりのない話題で巧みに論点をずらし、議論の焦点を別の場所に移し始めた。

「……では、次の議題である2ヶ月後に迫った観艦式及び大演習についてですが……」

そんな彼らの様子を鼻でせせら笑うと、ブライアンは着席する。自身の役割は終わったとばかりに携帯端末をとりだし、イヤホンをセットすると堂々と居眠りを始める。そして、議題が代わりお役御免になった報告者席の3人に注目する者などもはや存在しなかった……。

数時間後、ようやく会議が終わりがらんとした室内に残っていたのは、報告者席に座っていた《エナド》の3人とテオドア・レンブラント中将の姿だった。

「ご苦労だった」

少しずつ熱気が薄れつつあるものの先程まで白熱した議論の余韻がまだ残っている室内は、4人の人間には広すぎる。妙に大きく響くレンブラントの声を聞きながらコーナーは同行していたレイノルズと共に背筋を伸ばした。

眼前のレンブラントの表情が弱冠厳しく見えるのは、先程の会議が自身の思惑通りに進まなかった苛立ちから来るものであろう。中盤からはその存在を忘れ去られ、すっかり傍観者に徹していたコーナー達だったが、彼らを退出させなかったところを見ると、《P2》計画に対する現状の厳しさを見せつけ、遠回しのプレッシャーをかけてきたのだろうかと邪推させられても仕方がない。

近年、軍の各所で密かに囁かれる内部対立は、先程まで行われた最高戦略会議の内容にもちらちらと影響を与えたようで、会議終了後のレンブラントを始めとした参謀部付の高級将校達の苦虫をかみつぶしたような表情は、前途多難な連邦宇宙軍の未来を連想させた。

宇宙移民の始まりを以て移行されたU．C．元年の頃、連邦政府の意思は先進国と呼ばれた白人国家や一部有色人種を中心に決定がなされ、後進国や発展途上国の大部分を占める有色人種にとって不利な政策が次々に打ち出されることとなり、彼らの不満を力づくで押さえつけながら連邦政府の宇宙移民計画は強引な形で進められた。だが、爆発的な人口の増加とテクノロジーの発展は、国家という枠が取り外された世界において、いずれは白人社会の論理を中心とする現行政府に有利な政治状況を覆すことになるであろうという事は容易く予想された。

しかし、地球圏の総人口の約半数を死に至らしめることとなったU．C．００７９年におきた一年戦争とその後２０年近くにわたって続いたジオン戦役はその傾向に待ったをかけることとなった。

U．C．０１００年、ジオン共和国の自治権放棄をもって戦乱の消滅の宣言が政府によってなされると、地球圏は再び緩やかな発展の時代を迎えることとなった。宇宙で暮らす事が当たり前になった人々の高い生活水準とそれを裏付ける科学技術は安定した食料供給と工業施設を備えさせることで月やコロニーの発展を促し、地球側の産業の空洞化を招くこととなった。

U．C．０１３７年、連邦中央議会において、月面都市フォン・ブラウンへの議会および首都機能の移転計画が可決されたことは連邦市民に驚きを与えるとともに、政界、財界、各種産業界など多方面にわたって大きな影響を与えることとなった。

もはや地球という巨大な球っころには何の希望も未来もない……そう考えた一部資本家達は我先に宇宙での開発利権を巡って策謀を巡らすこととなった。

そのような世情の中で、かねてから連邦議会では一部議員によって軍に対する予算の縮小が強く訴えられ続け、軍内部でも軍備縮小に賛成する軍縮派と逆に軍備を拡大しようとする軍拡派の二つの派閥に分かれてイニシアティブを争っていた。

軍備拡大路線を主張する軍拡派は多数派とも呼ばれ、その多くは宇宙移民時代初期より宇宙に放逐され冷遇されてきた存在だった。

緩やかな発展の時代に経済力を持ち始めた彼らは、新興勢力として今や政治、経済の世界でも無視できない存在となりつつある。だが、すべてのコロニーが発展の恩恵を受ける訳ではない故に、その結束力は脆く、連邦議会の主導権を握るにはまだまだ未熟だった。一部利権を独占しようとする旧態派のエリート官僚たちに対抗する為に彼らは唯一優勢な数に物を言わせて自分たちの主張を通す事が必要だった。

この考え方は軍内部にも浸透し、一部勢力が巨大な軍事力を保持しないよう、新興勢力同士互いにけん制し合いながらも、旧態勢力が独占する人事権や予算決定権を削り取る為に圧倒的な戦力の保持と数が必要であると主張した。近年では再編成のあおりを受けて不満をため込んだ陸海空軍の将兵もこれに加わり始め、その存在はもはや連邦軍全体においても無視できない。しかし、多数派でありながらもその結束力は脆いという要素は、旧態派勢力に対して潜在的な脅威になっているとは必ずしもいい切れなかった。

これに対し軍備縮小路線を主張する軍縮派は、宇宙移民開始以前から長らくの間、政治および軍事の世界においてイニシアティブを独占してきた勢力であり、今や少数派となりつつも、未だに主流派として種々の決定権を握っていた。

拡大発展していく月都市やコロニーに対し、かつてのように力づくで押さえつけるのではなく、あらゆる分野である程度の弱い自治権を持たせ、新興勢力を互いに競わせると同時に、軍事力の面においてもコロニー守備隊や民間軍事企業の力を利用することで、地球圏全体を掌握してきた軍にかかる負担を軽減させようと考えていた。同時に組織を少数精鋭化し、軍事技術開発の面においてキックバックされる重要度の高いテクノロジーやシステム化した利権を独占し、独自の財源を確保することで、新興勢力や反政府組織を抑えようと目論んでいた。

戦乱の時代の消滅が宣言なされて以降、炭火のように長い時間をかけて燻り続けてきた両勢力の対立であったが、かつてのエゥーゴとティターンズの轍を踏むことを恐れた議会や軍上層部のコントロールにより辛うじて拮抗を保っていた。だが、いずれその均衡は破れ、どちらかに天秤が大きく傾くであろう事は時間の問題であるというのが多くの識者の一致した意見であった。

「中将、先日から上申している戦力の補充についてですが……」

３人の中央に立つレイノルズがレンブラントに申し出た。

「先程の会議の流れからも流石に《エナド》に戦力の補充をすることは現時点では難しいだろう」

当然、そのレンブラントの言葉はレイノルズの隣に立つブライアンに対する軽い当てこすりである。

「代替措置と言ってはなんだが、《エナド》以外の２０８特戦隊の各艦には先日の作戦で失った機体および人員が最優先で補充されているはずだ。各部隊で連携してうまくやりくりしてくれ給え」

（簡単に言ってくれる……）

幾ら同じ戦隊に所属しているとはいえ、元来ＭＳパイロットというものはプライドが高いものであり、明確な仮想敵が想定しにくい現在の連邦軍においてパイロット同士が互いに燃やす敵愾心の扱いに苦労する現場指揮官はコーナーだけではない。同じ部隊内という

だけでも苦労しているのに、所属艦が違ってしまえばなおさらである。

部隊がそれなりに機能するようになるまでいったいどれだけかかることになるのか……兵力を単なる駒の数としてしか考えられないレンブラントのような高官達にはおそらく理解することはできないだろう。内心で溜息をつきながらコーナーはその決定を黙って受け止める。

「さて、今後の《エナド》及び２０８特戦隊の任務についてなのだが……」

レンブラントは一つ咳払いをして僅かに間をおいた。

「２週間の休暇の後、当初の予定では２ヶ月後に当宙域で行われる観艦式及びその後行われるグリーン・ワイアット大演習時の手薄になった月及び各サイドの非常事態に備えて、遊撃部隊として月軌道上に待機という事であったはずだ。だが、それらの予定は一切白紙に戻し、２０８特戦隊には大演習に参加してもらうこととなる」

「大演習に……ですか？」

レンブラントの言葉に普段物静かなレイノルズが驚きの声をあげた。レイノルズの様子に弱冠苦笑いの様相を浮かべながらレンブラントは話しを続けた。

「知ってのとおり、この度の観艦式はプルリヤシュ要塞の完成披露式も兼ねており、観艦式自体も木星戦役以降初めて行われるという事もあって、連邦市民の関心は並々ならぬものがある。いや、正確には政府機関と一部大手メディアといったところか……。式典の直後に行われる大演習も同様に注目度は高い。お陰で宇宙軍の諸将もすっかり逸ってしまっているのは貴官らにも分かるだろう。特に攻撃側の艦隊司令官であるルオ大将の意気込みには並々ならぬものがあってな……」

レンブラントの最後の言葉にコーナーはおおよそを理解した。要するに今回の大演習は、攻撃側と守備側に分かれて行われる多数派と少数派の軍内部の主導権争いにいつの間にかすり替わっているよ

うだった。

「演習の性格上、ある程度筋書きが決まっているとはいえ、こちら側にも面子というものがあってな……不足艦艇数を補うためにコロニー守備隊や各民間軍事企業からも戦力を徴収しているのが現状だ」

少数派がそのような動きを見せれば多数派の方も黙ってはいないだろう。演習の体裁を崩さずに両者の戦力に恰好をつけるための鍔迫り合いの結果が、先程行われた会議だったようだ。

そしてその決定に振り回されるのは現場の兵士たちである。戦力の徴収などといっても、もともと指揮命令系統の異なる部隊を無理やり組み込むのだから、様々な齟齬が生まれる事は当然に予測される。徴収される側のコロニー守備隊や民間軍事企業としてもそれなりの対面や思惑があるだろうから、その調整には並々ならぬものがあろう。僅か2カ月弱の間に、通常任務に加えて、それらの問題の解決の一切に振り回される事となるだろう現場レベルの苦労を考えると頭が痛くなる。

いずれは、コーナーやレイノルズに被さってくるであろう問題など我関せずの様子で、レンブラントは話を続ける。

「ある程度筋書の決まった演習とはいえ、その注目度は高い。軍の粗を器用に見つけ出してはそれみた事かと足を引っ張りたがる連中はごまんといる。何よりも、ルオの奴にこれ以上大きな顔をさせる訳にはいかんのだよ」

最後の言葉に個人的な怨念が込められているのをコーナーは敏感に感じ取った。レイノルズの向こうで終始無言だったブライアンが小さく舌打ちしたのも同様だろう。官吏の本能ともいえる組織内での出世と権力争いという遥か昔から行われてきたバカ騒ぎに巻き込まれるのだから、たまったものではない。

「さて、最後に確認するまでもないだろうが、貴官たち２０８特戦隊はあくまでも《Ｐ２》計画においての概念実証部隊であるという事をくれぐれも忘れぬように……。貴官たち現行の部隊にその適性が認められねば、計画は即座に副次案に移行、あるいは廃止、部隊

解散もありうるという事を肝に銘じておくように……。」
　その言葉が自身に向けられている事を感じ取ったのか、最も右端に立っていたブライアンの呼吸の僅かな乱れを室内の沈黙が微妙に揺れることでコーナーに伝えた。内心の動揺を隠す為かブライアンはそっぽを向き、我関せずという態を装っている。そんな彼の姿を視界の片隅でとらえながらも、気にする様子もなくレンブラントは話を終えた。
「諸君らの健闘に期待している」
　どうにも実感が伝わってこない紋切り型の常套句を残して退出するレンブラントの背中を敬礼で見送りながら、コーナーは一つ溜息をつく。レンブラントを敬礼で送るコーナー達二人の隣で、相変わらずブライアンはそっぽを向いたままだった。

（２０１０／０９／３０　Ａｒｃａｄｉａにて初稿）
（２０１１／０７／０３　本サイトにて初稿）

04

《ラヴィアンローズ?》――あらゆる船の修理から改修までを一挙にこなすことのできるアナハイム・エレクトロニクスが誇るドッグ艦である。その巨躯を生かして建設されている居住ブロックはコロニーに近い疑似重力を発生させることが可能であり、様々なレクリエーション施設も併設されている。アレキサンドリア級《ゲオルグ》は現在このドッグ艦に接舷し、補給と修理を行っていた。《ゲオルグ》の乗員たちは《ラヴィアンローズ?》の居住ブロックに移り、一時の休暇を楽しんでいた。

乗員たちが全てドッグ艦に出払い、無人のはずの《ゲオルグ》のMSデッキ内の空気を機体洗浄用のコンプレッサーの低い振動音が揺らし、エアを吹き出す音が断続的に響いている。

着古された作業着に赤いバンダナを額に巻き、防塵マスクを被って一心腐乱に愛機の清掃を行っているジノ・ヴァレンタインの姿がそこにあった。

彼の行為は愛機のメンテナンスというほど大袈裟な物ではない。例えて言うなら、せいぜい一般市民が自家用車を磨く程度のものだった。上陸前に整備スタッフたちが十分にメンテナンスを行っているため、ジノの行為に正直なところあまり意味はない。

上陸して2日が経ち、物見がてらに巨大さを誇るドッグ艦内のあちらこちらを見てまわったものの、レクリエーション施設にも新し物好きの彼の興味を引くような目新しいものは見当たらず、直ぐに飽きてしまった。アナハイム・ブルーの制服に身を包んだ名も知らぬ美女との出会いも所詮は妄想の産物であり、艦内ですれ　違う仕事にきりきりと追われる現実の人々の姿を目の当たりにすると、の

んびりと休暇を過ごすなどというような気分には到底なれなかった。
結局退屈を持て余したジノは、ここ2カ月近く慣れ親しんだ《ゲオルグ》のMSデッキにふらりと立ち戻り、ふと思いついて愛機の洗浄作業を始めていた。
フレームの隙間や装甲にエアを吹き付け、溜まった塵芥を噴きとばす。MCA構造の採用の結果、メンテナンスはある程度楽になったものの、それでも乱暴に扱えば、途端に気難しいメカニック達から苦情の嵐と鉄拳が降ってくることになる。それなりに注意を払いながら作業を続けるジノは、いつしか時間を忘れていた。

ジノ・ヴァレンタイン――二つ違いの妹のリリアと父親を異にする彼は実の父親の顔を知らない。うろ覚えにしか思い出せない母親は二人の兄妹を、姉夫婦に預けて家を出たらしい。
『科学者としては優秀なのかもしれないが、人の親としては最低の人間さ』
一切音信のない二人の母親に対する愚痴を事あるごとに告げる育ての親たちの言葉にいつしか耳を閉じ、『俺達の両親は幼いころに死んだんだ』――それが二人の兄妹が信じることにした真実という名のウソだった。

育った家庭内の腐臭のような暗い空気は思春期に入った敏感な感性の兄妹たちには苦痛であり、借り物の家族との溝は日に日に大きくなっていった。そして積み重なった不満の爆発をきっかけに二人は家を飛び出した。
家出をした自分たちの事を探してくれることを心のどこかで僅かに期待したものの、一向に捜索願いすら出されない現実は、自分たちが彼らにとって単なる厄介者であった事を強く思い知らせた。

妹のリリアを守るという目的がなければ、今頃彼の人生はおそらくどこかのチンピラかマフィアの鉄砲玉くらいで終わっていただろう。

リリアを一人にする訳にも行かなかった彼にとって、てっとり早く稼ぐにはジャンク屋が一番だった。漂う獲物を求めてかなりのリスクを背負いながら作業用ＭＳで宙域を泳ぎ、二人で力を合わせて不安定ながらもそこそこの収入を得る事が出来た。

宙域でのＭＳの操作にはずば抜けたセンスがあったようで、彼らの腕を見込んだ知人の紹介により、やがて二人は小さな護衛会社に雇われることとなった。軍から払い下げられた型遅れの軍用ＭＳを操って、かなり危険な場面に何度か遭遇しながらも二人は何とか生き残り、ＭＳの操作にもそれなりの自信を持ち始めていた。

しかし、それなりに割の良いめぼしい仕事は、軍や政庁にコネをもつ者たちに優先的に廻され、大した実績もない弱小会社では割に合わない危険な仕事ばかりが回ってくる。才能や可能性などという不確かなものよりも人と金のつながりに信をおく実社会のルールが彼らの前に立ち塞がった。

学もコネもない、そんなジノ達が自身の未来に行き詰まりの危機を感じ始めていた頃、思いもかけない幸運が二人に舞い込んだ。ジノ達の所属していた護衛会社が何者かによって買い取られることとなったのである。そして、いくらかの退職金が支払われた上で、ジノとリリアの兄妹はさらに破格の待遇で新たな会社に雇われた。うますぎる話に最初は警戒したものの、他に行くあてのなかった二人はその話を受けることにした。

新しい会社がそれまでのオンボロ会社と全く異なった物であるという事は、提供される装備や雇われた人材の質によって理解できた。妙に厳しくなった社内規定や機密保持に関しては正直閉口したものの、それでも生活に弱冠のゆとりが生まれた事に比べれば耐えられない事ではなかった。『ここはアナハイムの息のかかった会社であ

る』――社内の人間の密かな噂話もジノにとっては歓迎すべきことだった。アナハイム・グループ――地球圏で知らぬもののないこの名が後ろ楯になっているのなら会社も仕事も順調に違いない――まだ社会の仕組みをよく理解できていないジノは単純に喜んだ。結局のところ、自分がやるべき事はさほど変わらない……それが新会社における当初の彼の認識だった。

自身の機体《Ｆ９７ＸＥ》の機体洗浄を一通り終えたジノは隣立するゴルドの機体に目をやった。額部のブレードアンテナと強化された可変スラスター、そして数日前まで存在した胸部の髑髏の意匠以外はジノ達の機体と外見的に大差はない。

先日の狙撃任務を終えた後、ゴルドの希望で機体の胸部を飾っていた髑髏の意匠は削り落されることとなった。性能に関わらない部分では全く無頓着なゴルドの珍しい要望にメカニック達は弱冠怪訝な顔をしたものの、その要望はすんなりと受け入れられ、この度のドッグ入りと同時に《Ｆ９７》の機体から髑髏の意匠は消えることとなった。

ゴルドの機体に対抗して自身の機体の胸部に双翼のエンブレムを描きこんだジノとしては「カッコイイのに、もったいねえことしやがる」などと思ったりしたものだが、すっきりした愛機の姿を眺めて満足げなゴルドの横顔に、あえて何も言う事はなかった。先日の一件以来、何かをふっきったかのようなゴルドの姿にわざわざ言葉をかける必要は感じられなかった。

《Ｆ９７》シリーズ――ジノとリリアの運命を大きく変えることになったこのＭＳに二人が関わることになったのは、新会社に雇われることになってから暫くたっての事だった。

月の実験施設でこの機体に引き合わされた二人は社から《Ｆ９７

ＸＥ》のテストパイロットを命じられる事となった。いつも通り新型試作機輸送護衛のつもりだったジノはその決定に驚いた。もっともその仕事内容に不満などなかった。軍人ですら乗ったことのない最新鋭の機体に乗ってもよいというのだからそんな機会を棒に振るのは愚か者の所業であろう。開発担当者に与えられたやや退屈なプログラムを、飽きっぽいジノにしては珍しく順当にクリアしながら、与えられた機体をモノにすることに腐心した。

本来ＭＳのテストパイロットとは、何年もの間様々な機体を乗りこなしＭＳというものに精通した熟練パイロット達が事故の危険と隣り合わせで従事する仕事である。数字に表れることのないメカニックの未知の能力を巧みに引き出しながら、ぎりぎりの限界性能を見極めるには熟練の技術が必要だった。現にそのうちの一機については、ジノよりもはるかに年の離れたむさ苦しい男たちが入れ替わって、運用実験を繰り返していた。

だが、しばらくして試作機の運用実験は大きな壁にぶつかることとなった。数人のメインパイロット候補がいたにも関わらず、特殊チューニングされた《Ｆ９７》のメインパイロットは一向に決まる様子はなかった。

熟練したパイロット達がぐったりしてコックピットから引っ張り出される様子を何度か目のあたりにしながら、ジノはあの機体はいずれ自分が乗ることになるのだ――などと根拠もない妄想に浸っていた。

しかし、そんな彼の前にある日一人の男が現れた。ジノの眼前で多くの熟練パイロット達が匙を投げたその機体をあっさりと操り、メインパイロットの座を鮮やかにかっさらって行った。

「お前にあの機体は乗りこなせんよ……」

初めて顔を合わせた時、悔しさのあまり無礼な態度をとるジノに対して男は一言、そう告げた。それを受け入れることの出来なかっ

たジノは当然の如く男に反発した。
だが、《ゲオルグ》就航後に宙域で行われたテストでは、同じ条件の機体で勝負を挑み完膚なきまでに叩き潰された。若気の至りか、素直に己の負けを認めることのできないジノは男に対して実力行使に及び、無様に床にはいつくばることになった。
完膚なきまで敗北という味を味わいつくしたジノだったが、その心の中にはこれまで味わったことのない別の感情が生まれ始めていた。
行き詰りかけていた自身の世界に越えるべき明確な目標を定め、それを乗り越える……自身の最も得意とする分野でさらなる高みに立つものに向かって全力を尽くし、追い越す事の出来る喜びはジノの心を震わせた。
そして、目的を果たす為に必要不可欠な相棒である《Ｆ９７ＸＥ》――生活の糧を得るための単なる道具の一つでしかなかったＭＳというものに、かつてこれほど愛着を感じた事はなかった。事あるごとに「機体をよこせ」と男に食ってかかるものの、実のところ、彼は自身の愛機を十分に気に入っていた。
決して表にでることはないものの《Ｆ９７》シリーズの性能の高さには疑う余地もない。恵まれた環境で育ったエリートとはまったく違う自分がそんな彼らと堂々と渡り合う事すら夢ではない……想像しただけで自身をわくわくさせるその愛機の潜在力を引き出すことにこれまで彼は全力を傾けてきた。

「ここに居たんだ……兄さん」
突然、透き通るような声で呼ばれ、振り向いたジノの視界に妹のリリアの姿が映った。細身の肢体がふわりと宙空に浮かびジノに向かって近づいてくる。その様子にジノは眉根をよせた。
「何やってんだ、お前。他の奴らと遊びに行ったんじゃなかったの

かよ……」

「うん、そのつもりだったんだけどね……。なんだか面白くないから抜けてきちゃった……」

育った家を飛び出して以来、苦労のかけどおしだったが、変に世間ずれせず、どこか浮世離れした空気を保ち続ける妹の姿がこちらにむかって流れてくる様子を目の当たりしながら、僅かな溜息をつく。同世代の女の子たちとショッピングやファッションに夢中になりたい年ごろだろうに、こんな油臭い危険な場所で生きさせねばならない現実に己の非力さを痛感する。

長い間、妹を守るという事を第一の行動原理としてきたジノにとって、ほんのわずかな時間とはいえ自身の手元から彼女を手放すということは随分と苦痛を伴う決断だった。彼女の事が原因で周囲とトラブルを起こしたことなど数え切れない。ジノ自身、多くの他人と触れ合う中で、実は彼女に依存しているのは自分のほうであるという事に、うっすらと気づいている。いつかは互いに離れねばならない時が来る事は頭では分かっているのだが、その大きなきっかけもつかめないまま、ずるずると時を過ごしてきた。今回の休暇でジノなりに考えた上で、彼女が自身の目の届かないところで他のクルー達と遊ぶことを許可したのだが、そんなジノの苦渋の決断を当の妹は理解してくれなかったらしい。

「仕方ねえなあ……」

彼女に対し、むすりと不貞腐れる風を装ってはいるが、その内心が表情通りとは限らない。多くの機密を伴う特殊な職務上、希薄になりがちな人間関係の中で自分とのつながりを大切にしてくれる肉親の存在が彼には愛おしかった。長い付き合いである。ジノのそんな胸中など十分に理解しているかのようにリリアはニコニコと彼の傍に漂っている。

「じゃあ、手伝え、これからこいつらの大掃除だ」

スプレーガンを隣立する3機の機体に向けながらのジノの言葉に「え〜、メンドクサイよ〜」と笑みを浮かべながら作業着をとりに

行くリリアの姿を見送りながら、ジノはわずかにほっと胸を撫で下ろしたのだった。

彼の目を覚まさせたのは、ドッグ船の居住区に臨時に宛てがわれた自室に備え付けられたユニットバスの床面を叩くシャワーの音だった。

軽いまどろみの海から意識を取り戻したゴルドは、寝具の中の香水に交じった彼女の残り香を嗅ぎ取りながら、まどろみにおちるまでの経緯を思い出す。

ベッドの端に無造作に重ねられたアナハイム・ブルーの制服からは、先程ゴルドが弱冠強引にはぎ取った彼女の魅力的な肢体を飾っていた下着が丁寧に丸められて僅かにはみ出している。

ユニットバスから聞こえるシャワー音の途切れる様子はない。その事を確認したゴルドは傍らのサイドテーブルに手を伸ばす。テーブルの片隅にまとめられた彼女のアクセサリーに触れないようにしながら、ゴルドは自身のピルケースを手に取り、錠剤を一粒とりだすと、無造作に呑みこんだ。近頃めっきり減りの早くなったピルケースを手のひらで弄ぶ。

（あと、どのぐらい……）

極力目をそらし続けてきた焦りの元凶のことを思い浮かべて思わず強く握りしめたケースが、鈍い痛みを手の平に伝える。ごまかすかのように、2度、3度と空中に放り投げては受け止めるが、その行為も直ぐに飽きてしまい傍らのサイドテーブルに向かって無造作に放り投げる。《ゲオルグ》内とは異なる疑似重力の所為か、目測を見誤り、ゴルドの意図したものとは異なる放物線を描いてそれは

床に落ちた。さほど質の高くない絨毯に柔らかく受け止められ、僅かな音を響かせて転がったケースを拾い上げようと腕を伸ばすが、一度起き上がらねばならない億劫さ故に直ぐにあきらめ、そのまま味気ない天井を見上げた。

途切れずに響き続ける浴室のシャワー音を耳にしながら、つい先程までこのベッドの上で共に激しく睦み合った浴室の主――ネーナ・サリンジャーの豊満な裸身とその痴態を思い浮かべる。なぜそうなったかなどという事は些事であった。男と女の関係などというものはなるべくしてなるものだろう。

ほんの数時間前、ゴルドの部屋を訪れたネーナは珍しく酒に酔った風だった。男の視線をとらえて離さない彼女の美貌を決まりきった枠にはめ込もうとする初めて見るアナハイム・ブルーの制服姿に、男心を刺激されたと言えなくもない。らしくない様子でゴルドの部屋に押し掛けてきた彼女は、酔った勢いで、とりとめもない愚痴をこぼしていた。

日頃は《ゲオルグ》内で女王様然とした風を装う彼女だったが、その心の内は孤独であり、酒の力を借りなければ自身の弱さすらさらけだせないのだろう。その愚痴を聞きながら、こんな顔も持っていたのかと妙に新鮮だったことも記憶に残っている。時間が経つにつれ、決して結論に至ろうとしない女性特有の際限のない彼女の愚痴に、どこか面倒臭くなって、強引にその蠱惑的な口を無理やり封じたのがきっかけといえばきっかけだった。こらえ性のない自身の短気さに呆れながらも事に及ぼうとするゴルドに、初めは若干の抵抗を示したもののすぐにそれも止み、積極的に彼女は彼の愛撫を受け入れ始めた。ベッドの上で初めて見るその淫らな姿は、ゴルドが予感していたよりもずっと妖艶で激しく、どこか哀しかった。いずれ全てを失うであろう自分の事を憐れんでいるのだろうか――ゴルドの導くままに快楽の海へと漕ぎ出していくネーナの艶姿を存分に

堪能しながら、彼は、ふとそう感じた。

地球圏最大の企業体であるアナハイム・グループの中核に位置するアナハイム・エレクトロニクス社――その取締役会直下に戦略企画室という名の聞き慣れぬ部署が存在する。この部署にネーナ・サリンジャーはその本来の籍を置いていた。

一見、エリート中のエリートともとれる地位に位置しているようだったが、その実態は大きく異なる。軍の機密にも関わり、決して表には出せない様々な厄介事の処理を一手に引き受ける事を目的に創設されたこの部署は、巨大な組織構造故に身動きの取りにくい意思決定機関に代わって、社会の暗部と関わり表立って処理できない様々な問題を、迅速な機動力と遊撃性を発揮させて処理していた。

幾人もの優秀な同僚たちが消耗品の如く次々に使い潰されていく様子を目の当たりにしながら、組織の中で生き残りをかけて戦い続ける彼女の苦労は、フリーランスとして生きてきたゴルドのそれとは全く異なるものである。人払いのなされた《ゲオルグ》内の通信室で室長と呼ばれる直属の上司と激しくやり取りする様子を、かつて目撃したことのあるゴルドはその苦労の一端を垣間見たような気がした。

先日の狙撃作戦において、自身の独断で当初の予定とは全く別の結論を出したゴルドに対して、ネーナは表立ってその非を責める事はなかった。後始末に随分と奔走させられたはずのネーナがそれをしなかったのは、ゴルドの導いた結末が、彼女自身が密かに望んでいた結末に一致していた故であろう。決してその本心を明かそうとしないネーナを追求することもなく、自身が体験した人の世の様々な不条理を思い浮かべながら、ゴルドは一連の事態に自分なりの区切りをつけていた。

シャワーの音は相変わらず途切れる様子はない。つい先ほどまで

自身の腕の中にあったその豊満な肢体が湯滴に打たれる様子を思い浮かべながら、ゴルドはネーナとの会話を反芻していた。

『仕事が完璧すぎて、どこがいけないってのよ！』

強いアルコールにそのなめらかな白磁の肌をほんのりと赤く染めながら、いつもの優雅な姿からは想像もできない強い口調で、彼女は自身の上司を詰っていた。らしくない言動と裏腹に年齢不相応の可愛らしさを感じさせる彼女にわずかに戸惑う風を見せながらも、その言葉の端々から《ＸＸＸ》のパトロンであるアナハイム・エレクトロニクスの組織としての冷徹な計算が窺えた。

『無駄を省いてもっと安価なコストで運航させてくれ給え』

現状にてほとんど損害を出すこともなく着実に結果を出している《ゲオルグ》が批判される要素は全くない。アナハイム側の責任者であるネーナの仕事にやっかみと焦りを感じた彼女の上司が無理難題を吹きかけている――そんな図式すら浮かべられる。そして、一連の言葉からはゴルド達雇われる側への配慮は全くない事が容易に想像できた。

最も危険な実戦の場に直接身を置くことになる実戦運用試験も兼ねたＭＳパイロットに、ジノとリリアという二人の若者を当てていることからもそれらは窺い知れる。ＭＳパイロットとして優秀な資質をもつ故に見逃されやすい要素であるが、彼らの若さとキャリアの未熟さはその世界を知り尽くした者の目から見ればある意味常軌を逸しているといってよい。

例え堕とされ命を失う事になったとしても、身寄りのない若い彼らに対して支払われる遺族への補償は実質ない。堕とされる事を前提として、初めから使い捨てやすい人材をピックアップしている――自身と立場の違う者の思惑に気付く視点さえ持ち合わせれば、それは決して穿った物の見方ではないはずである。明日の『生』をそれほど重視することのないゴルドもある意味彼らと同じ立場であるからこそ、その事に思い至れるのだろう。

そしてその事に気付いた時、《ゲオルグ》に乗艦する者達の多くも又、同じ立場にあるのではないかという事が予想された。艦の実質的な責任者であるヴォラスコフでさえも……。浴室でシャワーに打たれ続けているネーナはその全てを知っているのだろう。寝物語にそんな事情を秘密と共に共有する事もまた男女の理を深める媚薬になるのかもしれない。

だが、その選択肢をゴルドは進んで選び取るつもりはなかった。そして、ネーナも又、自身の口から進んで吐露することは決してないだろう。それが、つい先ほどまでこの場所で共に激しく睦み合ったゴルドがネーナの胎内の熱さから感じ取った、彼女との間に引くべき一線だった。

ヴイットーリオ・ヴォラスコフ――酒をこよなく愛し、休暇中の今この時もその丸みを帯びたなまめかしい瓶を傍らに、夢幻の一時を楽しんでいるのだろうと思われる――彼もこの事には当然気付いているのだろう。所詮一ＭＳパイロットでしかないゴルドに比べて、はるかに広い戦略眼を必要とされる艦長席に座る彼が、ゴルドですら考えつく事に気付かぬはずはない。

生活の為ならばちょっとした航宙輸送船の船長でも十分以上にやっていけるはずの能力をもつ彼が、このような様々な思惑の上に存在する《ゲオルグ》の艦長をやっているのは高額のギャラの為だけとは思えない。

劇的な変化など決して訪れようのない明日に何の希望も期待もせず、ただ着実に刻まれる今だけを見て、刹那的に時を重ねて生きる者の匂いの奥に、先日までの自身と同じく、過去に縛られ、繰り返され続ける堂々巡りにもがく迷い人の僅かな匂いを、ゴルドは彼から感じとっていた。

もっと違う出会い方をすればそれなりによい飲み仲間になれたかもしれないのだろうが、互いの立場の違いや背負っているものの重

さがそれらを邪魔していた。おそらくは彼の因縁の決着にゴルド自身が力を貸す事は出来ないだろう。結局のところ漢というものは、自分一人で己の困難な現実と向き合い決断しなわなければならないのである。酒も女も所詮、ほんのひと時の現実逃避の手段にすぎない。

ふと気付けばいつしかシャワーの音は止んでいた。直にその味気ない色あいのユニットバスの扉を開けて、しっとりと濡れた肌を暖かな湯で上気させた豊満な肢体の美女があらわれるのだろう。その姿態をもっと存分に堪能してやろうなどと考えている自身の貪欲な雄の本能に弱冠呆れながらも、ゴルドは彼女の優雅な再登場を無関心を装いながら待っていた。

（２０１０／０９／３０　Ａｒｃａｄｉａにて初稿）
（２０１１／０７／１０　本サイトにて初稿）

05

独特な消毒臭の充満する廊下をひたひたと歩く医師や看護師たちの気配が、仕切られたカーテン越しに伝わってくる。傍らの窓側のスクリーンにはのどかな庭園の風景が投影され、時折どこからともなく小鳥のさえずりが響いてくる。

鎮静剤の影響で弱冠朦朧とする頭でそれを眺めながら、病室の主――ロン・フェイカーはあてどなく流れる時を徒に彷徨っていた。

入院しておよそ半月、投薬とカウンセリングの効果で近頃はようやく人並みに眠る事が出来るようになっていた。彼に対する処置は過剰すぎるきらいがあるが、それは彼が所属していた部隊の特殊性故である。この部屋が緊急の事態を想定して常時モニターされている事は、彼自身には直接知らされていない。緊張感ばかりを強いられ続けてきた日々とは全く異なる時間の流れを感じさせるこの場所で、彼は未だに死の恐怖に直面させられたコックピット内での出来事と向き合う事は出来ずにいた。ただ漠然と、この場所で身体と精神の傷をいやし、暫く時が経てば、もう一度あの場所に立って任務を行うことになるのだろう……という未来に対して義務感と拒絶感の板挟みで苦悩していた――その日の朝食が終わるまでは……。

病院の特質上、これまでめったに外部の者の来訪はなかったのだが、その日の朝、突然聞き慣れぬ革靴の足音とともに一人の男が彼の病室を訪れた。形式ばった事務的な挨拶と共にその男は自身が連邦宇宙軍人事局の所属であることを名乗った。

投薬と弱冠乱れがちな生活リズムの影響でどこか朦朧とした頭の

彼に対して切り出された男の話は、フェイカーの軍からの除隊を促すものだった。新兵の除隊としては破格の傷痍年金待遇などをちらつかせる一方で、機密事項に対する黙秘誓約、あるいは除隊後暫くの間の彼の行動に対して監視と制限がつく事等を、丁寧ではあるが全く誠実さの感じられない極めて事務的な口調で説明を終えると、除隊手続きに関する一切のデータを収めたデータパッドと一枚の紙片をおいて足早に去っていった。ぽつりと一人取り残された部屋で事態をようやく理解し終えたのは、昼時近くに患者達の昼食を収めたカートの音が廊下に響く頃になっての事だった。

味気ない昼食にほとんど手をつけず、午後の回診時にも担当医の言葉に反応を示さなかったフェイカーはただ呆然とスクリーンの景色を眺めていた。彼の手元には先程形だけのねぎらいの言葉と共に男が残していった一枚の紙片――除隊申請書があった。ほとんど全てのやり取りが電子データでやりとりされるにも関わらず、この申請書だけは当人の意思を確認する為に本人の肉筆でのサインが必要とされる――そんな説明をした男の顔をフェイカーはもはや思い出せなかった。

『連邦軍という巨大な組織に貴様のような役立たずは不要である』とばかりに押し付けられた最後通牒を受け取った彼は心の中でふつふつと煮えたぎる自身の感情をうまく処理できずにいた。

彼によってサインを加筆され提出された紙切れは無造作に検印を押され、その他大勢の書類と同じ紙束にとじ込まれ、やがて暗い倉庫の中へと放りこまれることになるのだろう。思い描いていた理想の自身と現実のあり方の差異に彼はただ打ちのめされていた。

彼の病室に再び訪問者が訪れたのはそれからしばらく経っての事だった。聞き慣れぬヒールの音が甲高く廊下に響き渡り、彼の病室

の前で止まった。開け放たれた扉を無造作にノックして自身の来訪を室内の住人に知らせた彼女は、閉じられたカーテンを勢いよく開け放った。

「ロン・フェイカー准尉でいらっしゃいますね？」

「誰だ？　あんた？」

不遇さを呪う感情から無意識に生じた怒りが口をついたかのように、自信の口調が少しばかり殺気立っていることにも気づかずにフェイカーは突然現れた女に警戒の意を示した。

年の頃は四十過ぎといったところだろうか？　それなりに整っている顔立ちを濃いメイクで彩っているその顔だったが、そこに浮いていたどこか野心家然とした表情のほうが印象深い。おそらくはその野心が核となっているのだろう。身体から放たれる精気が年齢よりもずっと若く女の出立ちを飾っている。地味な色合いではあるが上質の生地をふんだんに使ったと一目でわかるスーツを無造作に着こなした女は、ずかずかと病室に入ると彼の傍らに立った。

「失礼……、わたくし、こういうものです」

その言葉とともに差し出されたのは時代に似つかわしくない紙製の名刺だった。ビジネスマンたちがオフィシャルデータの大概を携帯端末でやり取りするこの時代において、恐ろしくアナクロなその行為は彼女の強烈な自己顕示欲を示しているようだった。

だが、フェイカーの注意を最も引いたのは差し出された名刺の中央に記された彼女の姓でもなければ、幾つかの博士号とともにその優秀性を主張する経歴でもなく、名刺の片隅に控え目に描かれた記号『ＡＥ』の二文字だった。

『ＡＥ』――その記号が意味する者を知らぬものなど地球圏には存在しない。軍病院の特別病棟にすんなりと彼女が入ってくる事ができたのもその力のお陰だった。人の世のいかなる法則をも捻じ曲げてしまうその力の前には、あらゆる個人が無力だった。

「お加減はいかがでしょうか？」

丁寧な口調でフェイカーに見舞いの言葉をかける彼女だったが、

その眼は冷たく彼の様子を冷静に観察しているように思えた。自身をまるで標本か何かを眺めるかのようなその冷たい視線にフェイカーは思わず身震いをした。

「加減なんざいいわけないだろう！」

一瞬感じた自身の怯えを振り払うかのようにフェイカーは挑発的に返答する。しかし、そんなフェイカーの態度に女は動ずる事はなかった。

「人殺しの道具で金儲けする企業の手先が俺に何の用だ！」

「初対面の相手に向かって随分と辛辣なお言葉ですね。単刀直入に申し上げさせていただければ、貴方の身柄を引き取りにまいりました」

「……」

女は変わらず冷静だった。そしてその女の意外な言葉にフェイカーは一瞬言葉を失くした。

「しかし、思った以上に重症のようですね。担当医の報告ではまだ改善の余地があるようでしたが……」

「あんた達に何が分かるってんだ！　命の危険なんて全く感じる事のない場所でのうのうと平和をむさぼっている――そんなあんた達に！」

一度吐き出された感情は留まる事を知らなかった。目の前の冷たい微笑を浮かべる女を恰好の標的とばかりにフェイカーは胸の中に溜めこんでいた言葉を吐き続けた。

「この手を見てみろ！　あの日の出来事を少しでも思い出すだけで手の震えがとまらない！　吐き気もすれば気だって遠くなりそうになる！　見ず知らずの人間に悪意と殺意をぶつけられる……そんな場所にいるのはもう御免なんだ。間違ってんだよ、戦いも軍隊も！　宇宙で暮らすのが当たり前の人類にはそれにふさわしい生き方ってのがあるはずなんだ！」

「それはあなたの本音ではないでしょう？　自信のみじめな敗北を認めることのできない負け犬が必死に自己正当化しているだけでし

ょう?」
「なっ!」
「軍というものに入隊した時から分かっていたのではないのですか? 被害者ぶるのはおよしなさいな。あなたは戦場で自分にぶつけられた悪意に勝つ事が出来なかった……。どんなピンチも乗り越えられる戯曲に出てくるような格好いいヒーローになれなかった……。あろうことか、その場所から逃げ出そうとし、無様に生き延びている……自分がいくらでも代わりの効く存在でしかないということを思い知らされて。そんなみっともない己の姿から目をそむけるために、人類だの平和だのとおめでたい幻想の中に逃げ込んでいるだけでしょう?」
「あっ、あんたに何が……」
「わたくしにはあなたの言葉は負け犬の甘えた寝言にしか受け取れません。例え殺し合いの世界でなくとも争いは存在します。直接命のやり取りがないだけ、むしろ陰険な生存競争になることだってあるでしょう。命の危険なんて全く感じる事のない場所でのうのうと平和をむさぼっている――先程あなたはそう仰っしゃられましたが、この世界に果たしてそんな楽な場所があるだなどと、本当に思っているのですか?」
彼女の言葉にフェイカーは押し黙った。
「このまま一生負け犬のままで終わってよろしいのですか? 軍の息のかかった新しい職場で監視を受けながら、生きているのか死んでいるのか分からないような人生を本当に送りたいのですか?」
「だからって俺に何が出来る! コックピットに入る事すらできない今の俺なんてもうMSパイロットとしては単なる役立たずだ! だからこそ軍だってあんな物を俺によこしたんだ……敗者なんて不要だってな!」
傍らにおかれた除隊申請書を指差し、フェイカーは叫んだ。だが、彼の叫びを女は静かに受け止めた。
「訓練兵時代も含めて私どもは貴方についての経歴などはすべて存

じあげております。《エナド》内で貴方がどのような扱いを受けていたのかも……。同情すべき点は多々ある――貴方は周囲に恵まれていなかった……私はそう考えております」

彼女の意外な言葉にフェイカーは息をのんだ。

「《Ｐ２》という言葉を御存知ですか？」

「知らないな」

「では、一つ特別に教えて差し上げましょう。先ごろから軍内部では密かに《Ｐ２》と呼ばれるあるプロジェクトが密かに進められてきました。貴方の所属していた《エナド》ＭＳ隊および２０８特殊任務戦隊はその概念実証部隊として特別に編成されたものだったのです。」

「……」

「分かりやすくいうと、多少言葉は悪いですが、実験用モルモットとでも言えばよいのでしょうか？　特別に選抜されたエリート部隊などとおだてられていたのかもしれませんが、貴方のような士官学校出たての全く戦場経験のない新兵が抜擢されたのにはそのような理由があったということです」

「なんで俺でなければならなかったんだ？」

その質問に女は答えなかった。

「教えて差し上げるのは一つだけと申し上げたはずです。ここから先を知りたければそれ相応の覚悟をなさって頂かねばなりません」

「相応の覚悟？」

「はい、相応の覚悟をなさり、相応の立場に立たなければ全てを知る権利など与えられはしません」

「つまり、あんたの駒になれってことか……」

「駒だなんて、そんな……。わたくしはただ、貴方に新しい可能性の扉を指し示すだけです。その扉を開いて、次世代のさきがけともいうべき存在になれるかどうかを決めるのはすべて貴方次第だということです」

「新しい可能性？」

フェイカーのその疑問に答えるべく女は傍らの荷物から携帯端末をとりだした。素早く端末を起動させて、必要なデータを読み出すと、女はそれを彼に差し出した。

端末を受け取ったフェイカーは読み出された画面をおもむろに眺め、目を見張った。そこに映し出された初めて見るグラフィックと淡々と表示される数字で示されるスペック値に彼は釘づけになった。新兵は愚かおそらくベテランのパイロット達でも見た事はないであろう常識を超えたそのフォルムはフェイカーの心をとらえて離さなかった。入力キーに触れるたびに次々に表示されるデータの内容を食い入るように見つめているフェイカーの姿を傍らで眺めていた女は、密かに笑みを浮かべた。

「こんなものを……俺に？」

「残念ながらこれはまだ完成段階には至っておりません。何よりも最大の懸案事項はこれを十分に操る事のできる資質を備えたものが未だに見つかっていない事です」

「特別なものにしか操れないってのか？」

そんなものは兵器ではない――少なくとも戦場というものを知る軍人ならば誰もが口をそろえて言うはずである。

「先入観の問題ですね。その世界の常識に反するものの存在が疎まれるのは世の常というものでございましょう？　これが実戦に投入され期待される結果を出すことができれば状況は変わります。制式化され量産される事になれば、必要とされる資質を持つ者の選抜だって容易になるでしょう。なんといっても人類は百億以上いるのですから……」

「俺がその先駆けに……」

「はい」

女はにこりと笑みを浮かべてフェイカーの瞳を覗き込む。その眼には絶対的な自信を持つ者のみが放つ逆らい難い魅力が込められていた。

手の震えが収まらない。それはあの日以来、恐怖と共に彼を苦し

めてきた震えとは全く違う性質のものだった。歓喜――初めて味わうその感情がなんと呼ばれるものかを知らないフェイカーは、身体と心の奥底から湧いて出てくる云いようのない衝動を思いつく限りの方法で表現したいという欲望にかられた。そんなフェイカーの背中を押すように女は言葉を続けた。

「いかがですか、ミスター・フェイカー。これは貴方の興味と好奇心を十分に刺激したはずです。それを以て、貴方の価値を理解できずにバカにしてきた連中を見返してやりたくはありませんか？」

「俺の価値を理解できなかったものを見返す……」

「貴方は今、その圧倒的な力を手に入れうるチャンスを与えられているのです。もちろんメリットばかりではありません。それなりのリスクと代償は背負う事になるでしょう」

「リスクと代償……」

「ええ、しかし、あなたはいずれそんなものなど消し飛んでしまうかのような名誉を手に入れることになるはずです。わたくし共の元へいらっしゃってさえ下されば、最高のスタッフと環境を提供いたしましょう。《エナド》での汚点など、直ぐに霞んで消えてしまい、悪い夢だったのだと後々笑って語れるほどに……」

女の言葉が麻薬のようにフェイカーの心にじわじわと浸透していく。否、それは長い間、周囲に冷遇され、心のどこかで臨んでいた彼を肯定する言葉そのものだった。

「では、これはもう貴方には必要のない物ですね」

いつのまにか女の手にはサイドテーブルに無造作に放りだされていた紙片――除隊申請書があった。フェイカーの返事を待つまでもなく女はその紙片を勢いよく引き裂く。２つに引き裂かれた紙片はひらひらと力なくフェイカーの眼前に落ちた。

僅かに震える手で２つに引き裂かれた紙片を取り上げたフェイカーは、忘れていた感情をぶつけるかのように夢中で何度もそれを細かく引き裂いた。

「はっ、ははっ……」

手にした紙片を細かく引き裂きながら自然とこぼれ出た彼の笑い声が静かに病室に響く。そんなフェイカーの狂気の混じった笑いを女はただ黙って眺めていた。やがてその行為に疲れ、息をついたフェイカーの眼前に女の白い手が静かに差し出された。

「それでは参りましょうか、ミスター・フェイカー」

「ああ、よろしく……お世話になります。ミズ・――」

差し出された手を握ったフェイカーはしっかりと女の名を呼んだ。にこやかな笑みと共に握手を返した女は振り返ると指を鳴らす。即座に二人の男たちが現れ、フェイカーの退院の準備に取り掛かる。

ここは自分に似つかわしい場所ではない――フェイカーは寝台から抜け出し、自身の足で立ちあがった。彼の居るべき本当の場所に向かうために……。

Ｃｈａｐｔｅｒ―？―了

（２０１０／１０／２５　Ａｒｃａｄｉａにて初稿）
（２０１１／０７／１８　本サイトにて初稿）

05（後書き）

読んでいただいた多くの方々に心よりの感謝を……

01

修羅場という名すら生温い修羅場がある。

ようやく得られたほんの僅かな休憩時間を消費するために、彼は殺気だった作業場から朦朧とする頭で抜け出すとなじみの休憩スペースへとむかっていた。備えつけの販売機から眠気覚ましのカフェインや健康によいと名のある成分をこれでもかといわんばかりにぶち込んだ怪しげな栄養剤を購入し、一息に飲み干す。数多の仕事中毒者達の睡眠不足の脳をシェイクし続ける後味の悪さも今一つ期待外れで、仕方なく彼は飲み干したチューブと共に己の身体を無重量空間に放り出す。

ここ数カ月缶詰め状態の続いていた船内では、すでに宙域でのシミュレーションとしては一般的である仮想統合戦術プログラムをさらに大規模に発展させた演習プログラムの完成が急がれていた。少々乱暴に言えば数個艦隊レベルの艦船が集まって行う大規模ネットワークゲームのようなものであろう。一月後にプルリヤシュ要塞周辺宙域で行われる、グリーン・ワイアット大演習に使用するために軍から発注された無茶な要求に応えるために多くの技術者達が集められ、作業を行っていた。

だが、彼らが作っていたプログラムは連邦軍に要求されたものとは弱冠仕様が異なっていた。

彼らが作っているのは、刻々と変化していく作戦状況に臨機応変に対応するものではなく、予め決定された作戦内容に応じて実際の部隊が行動し、生じる誤差を部隊の側で調整していく――つまり、

要求されたものとは正反対の性格のものといえる。

軍の要求通りの物を十分に信頼に値する精度で完成させるにはあまりにも時間もデータも足りなかった。

ネットワークやソフトウェア関連の分野で比較的力の弱いアナハイム・グループからシェアを死守するために、プルリヤシュ要塞での観艦式典における大演習に使用されたという名目のみを先に手に入れることで、後々完成した製品をカネとコネを使って納入し、事無きを得ようという、社の上層部が考え出した苦肉の策だった。もっとも連邦軍側の複雑な事情もあり、両者の間でこの方針は暗黙の了解が成立していた。

とはいえ、演習に使用される莫大な量のＭＳや艦船及び人員のデータを取り扱う事もあって、作業の難航は必至だった。過去に何度か行われた艦隊戦レベルの演習データをもとに、ネットワークやプログラムを構築し、発生するバグを取り除いていくこの作業も、軍の分厚い機密を保持する為に各部署で独立して作業が行われるため、その膨大な作業の総括が難航するのは当然のことだった。

本番はまだ一カ月先とはいえ、諸準備や予行演習のスケジュールに関わる問題もあり、目前に迫った納期について軍からの催促はひっきりなしである。迫りつつある納期と作業の高速化を必要以上に迫る上からの圧力に、只でさえ狭苦しい船内の作業場は妖気渦巻く万魔殿と化しつつあった。機密保持のために絶海の孤島ともいうべき作業船に隔離され、缶詰状態が数カ月にわたって続いている。

この仕事さえうまくいけば当分の間社は安泰であろう、という平時なら誰もが直ぐに偽りに気づく上層部が演出した幻想をすっかり盲信して、彼と同僚らは自身を作業プログラムと化して日々を過ごしていた。

すでに何人もの同僚達が脱落していた。血走った眼で奇声を発しながら画面と格闘している間はまだいい。突然静かになって、周囲

の注意が外れた後、休息をとりに行ったその先で物言わぬ躯となって無重量空間にふわふわと浮いていたという笑えない状況に遭遇することもある。ブログラムの欄外に技術者同士でしか分からない隠語で書きこまれた同業者達の不平不満に同調しながら、彼と同僚たちは終わりの見えない作業に取り組んでいた。

作業の終了が早いか、あるいは肥大しきった不平と不満が爆発し、監督官たちへのリンチに発展するのが早いか、状況は一刻を争っている。

身に迫りかけている危機にかなりピリピリした監督官たちの標的になっていらぬ災いが身にふりかからぬよう、弱冠早めに休憩を打ち切って彼は自身の作業場に戻った。

エアコンの換気能力では追い付かない人いきれや体臭に交じって室内に充満する陰気な空気にのみ込まれないよう、下腹に気合を入れると自身の席に着座する。だが、ほんの僅かな休息時間はやはり十分ではなかったのだろう。プログラムの欄外に書きこまれた見慣れぬ形式の隠語に気付くことなく、彼は果てしなく続く己の作業に再び没頭し始めた。

アレキサンドリア級航宙重巡洋艦《ゲオルグ》のＭＳデッキには搭載能力ぎりぎりのＭＳが搭載され、いわゆるＭＳ母艦としての機能を十分に発揮しうる初めての機会を得ていた。

だが、本来なら喜ぶべきであろう艦の事情とは裏腹に艦内の空気は重く、搬入作業を行う乗組員たちの顔に笑顔はなかった。

搭載されたＭＳ群によって弱冠窮屈目のデッキ内を、艦内作業用の重機の音が低く震わせる中で、ネーナ・サリンジャーは補充された物資とその他もろもろの連絡事項を巡って彼女の前に現れた一人

の男と荷受けの確認作業を行っていた。
　クウォ・クウェッソン――偽名である事が明白なその名を悪びれもせずに名乗ったその男は、一癖も二癖もあるいわくありげな補充物資の一団とともにあらわれ、彼女とともに飄々と積み込まれた物資の確認作業を行っている。
　およそ人というものはある程度外見でその者が送ってきた人生や職業観などが見えてくるものだが、目の前のこの正体不明の男には彼女がこれまで出会ってきたどの人間の姿も当てはまらなかった。
　端末に表示される一覧のとある項目に吐き気を覚えながらも、彼女はクウェッソンと共に黙々と作業を続ける。社会や技術の発展に伴って生まれる負の側面――仕事上何度も遭遇してきたその現実を胎の中に呑み込んで彼女は黙々と組織の歯車になることに徹していた。一刻も早くこの胸糞悪い作業から解放されて、湯の一つも浴びてみたいと密かに願う彼女だったが、そんな彼女の思い等知る由もない頑固者が、強烈な頭痛の元になりそうなトラブル臭を漂わせながら近づいてきた。
「おい、ネーナさんよ！」
　怒りの色と共に威嚇的に彼女に声をかけてきたのは《Ｆ９７》機体担当の整備員の一人であるアロルド・マコーミックだった。自身の作業を中断させることのないまま、ネーナはやれやれ又かとため息をつく。
　ここ数日、彼女と《ゲオルグ》乗員達の間には若干不穏な空気が流れていた。その原因は《ＸＸＸ（トリプル・エックス）》の影の出資者であるアナハイムによって数日前に伝えられたとある決定によるものだった。
『《ゲオルグ》艦内のアナハイムより出向中の乗組員は一部を除いてすべて引き揚げよ』――艦の最低稼働限界人員数を僅かに切ってしまう無茶な削減案に残留が決定したフリーランスの乗組員たちからの反発は当然の事だった。しかも、その後に予定されている作戦行動はどうにもキナ臭い不穏な空気がつきまとっている。アナハイム側の最高責任者であるネーナの残留がなければ間違いなく艦内組

織は崩壊していたであろう。
　航海終了後の身分の保障と十分な報酬、それでも乗艦を拒否する者には一般人ならばとても払いきれない高額の違約金が発生する事をちらつかせながら、ネーナは混乱する乗組員たちを必死で取りまとめていた。
　しかし、世の中には言葉の通じない頑固者は必ず存在する。その代表格とも言うべきマコーミックの登場にネーナは心底うんざりしていた。
「今度はなんの用かしら？」
　残留する乗員達の待遇について切れるカードはすべて切っている。これ以上、問題を蒸し返すならば、もはや放り出すしかないだろう。いかに腕の良い技術者であっても、内部統制を乱すものは邪魔者でしかない。不安定な組織にとって獅子身中の虫ほどタチの悪いものはない。そう腹をくくったネーナは振り返ってマコーミックを見据えた。だがマコーミックが取り上げた問題は想定外の別件であった。
「何の用かしらじゃねえ、一体ありゃあ、何のつもりだ？」
「何の事を言ってるの？」
「しらばっくれんな、俺が頭に来てんのは補充された人員の事だ！」
　その言葉に一瞬呼吸が止まった。
　それは先ほどから確認作業の間ネーナに渋面を浮かべさせていたリストの項目の事だった。
　内心の動揺を悟られぬように一息つくとネーナはマコーミックに静かに返答する。
「補充された物資に大きな問題でも？」
　ネーナの返答に今度はマコーミックが絶句する。ポーカーフェイスを通す彼女をにらみつけ、震える肉厚のこぶしと共に怒りを抑えつけながら怒鳴りつける。
「『物資』だと！　ふざけんじゃねえ！　やってきたのはまだシニア・ハイにも満たない、うちのとほとんどかわらない年頃のガキどもじゃねえか！　しかもそんなガキどもに妙な細工をして、あんな

ふざけた機体に放り込みやがって！　あんたたちアナハイムは金さえ出せば何をやっても許されると思ってんのか！」

マコーミックの怒声が広大なＭＳハンガーを震わせた。その声にハンガー内で作業を行っていた者たちが自身の作業の手を止め、固唾をのんで二人のやり取りを見守った。だが、激昂するマコーミックに対しネーナは至って冷静だった。

「あなたが妄想たくましくどんな陰謀を想像したのか知らないけれど、この件にアナハイムは一切関わりないわ。これは《ＸＸＸ》が独自に引き受けた依頼よ……」

「ふざけんな！　そんな言い訳が通用するとでも思ってんのか？」

《ゲオルグ》を所有する民間軍事会社《ＸＸＸ》がアナハイムの子会社であり、その思惑に従って行動していることは艦内では周知の事実である。只ですら、人員不足の状態で艦内にフラストレーションが充満しつつある中で、補充人員として改めてやってきたのはマコーミックの言うようにまだ幼さの抜けきらない少年少女達だった。しかも彼らの虚ろな表情はいわゆる子供らしさとはかけ離れており、こめかみに電極らしきものを張り付けた異様な風体は《ゲオルグ》艦内で作業に従事する人々の間に違和感を生んだ。

彼らは搬入された曰くありげな機体群の操縦者として《ゲオルグ》に送り込まれ、彼らと共にやってきたクウェッソンはどうやらその管理者の立場を兼ねているようだった。

明らかに非合法な空気が付きまとう彼らの姿に、フリーランスとはいえ、堅気の人間であるマコーミック達が怒りを覚えるのは無理のないことだった。事の詳細を質そうとするマコーミックにネーナは努めて冷静に事実を告げた。

「何度も言うけどこの件にアナハイムは一切関わりないわ。彼らを送り込んできたのは社とは縁もゆかりもない下衆な連中よ。これはあくまでもビジネスの一環であって、非合法な事に手を染めるのは連邦政府や一部の大企業のような権力をかさに着たやつらだけだ――なんて考え方、いまどき三文小説のネタにもならないわ」

突っぱねるようなネーナの言葉にマコーミックは怒気を含んだ表情を隠すことなく彼女をにらみつける。だがそんなマコーミックの様子に臆する事もなくネーナは淡々と言葉を続けた。

「これからはコロニーの時代だ……なんて連邦政府の方策に媚をうった無責任な大メディアが煽る期待感の裏側で何が行われているか、あなた知っているの？」

「……なっ、何のことだ？」

突然投げかけられたネーナの問いにマコーミックは言葉に詰まる。そんな彼の様子にネーナにしては珍しく冷たい表情を浮かべると彼女は事実を淡々と語る。

「確かに大きな争いの生じない地球圏においてコロニーの存在は大きいといえるわ。でも、その発展の恩恵にあずかっているのはごく一部の者たちだけだって事をあなたは知ってて？　経済が破たん寸前のギリギリのところでなんとか踏みとどまっているコロニーだって多くあるわ。富むものがあれば必ず貧するものが生まれる。それは人の歴史の中では当然の事よ！」

ネーナはわずかに息をつく。

「そして収奪ばかりされてギリギリの状態のコロニーで、自分の生活のために子供を売ったり捨てたりする親たちは今の地球圏にごろごろしているわ。愛情や信頼……およそ人間の社会の中で美徳とされることが目先の僅かな金の前にはこれっぽちの価値もない――そんな現実の中に放り出される子供たちの結末をあなたは知ってるの？」

「……」

「悪いのは特権の上に胡坐をかいた連中や政治家達であって、大衆という弱者には罪はない――あの子たちはそんな無責任と矛盾を生みだした社会の犠牲者達よ！　そんなあの子達の姿は親に守ってもらえてるあなたの子供に比べれば、不幸に見えるんでしょうね？　でもあの子たち自身が自分たちの事を本当に不幸だと感じてるかどうかは別問題よ！」

「あんたはあの姿が幸せだっていうのかよ？」

連れてこられた彼らの虚ろな表情には子供らしさと呼べるものは存在しない。薬物の使用すら疑われる彼らの姿に艦内の多くの者が嫌悪感を生じさせると同時に同情していた。

「あの子たちが訓練を受け商品として存在価値がある間は、少なくとも飢えることはない。そして自分達に与えられた役割を果たすことで動く資金が、また次の子供達を育て、ほんの一時でも生かすことになる。富める者から見れば非人道的で絶望的な負のスパイラルであったとしても、その中で確実に生きる事のできる子達は存在する……。口先ばかりの同情を並べ立てて弱者の不幸を政治の道具にしかできない偽善者達のシステムよりもよっぽど確実に人を活かしてるわ！」

「結局、テロリストの道具になって不幸を振りまいてんじゃねえか！」

「生まれてきて己の役割を見出すこともなく、下衆な大人たちの犠牲になって死んでいく事に比べれば、それがたとえテロリストの道具になるのであっても、僅かでも生きる意味を見出すことのできるあの子たちは幸せではないと誰が言いきれるの？　自分達を必要としない世界のために無力なままで死んでいけと言われるよりも、例え歪んでいても生きる意味を与えてくれるものにすがる――それが人間が生きるということではなくて？」

ネーナとマコーミックのやり取りをいつしかハンガー内にいる全ての人間が固唾をのんで見守っていた。先ほどまでネーナと共に確認作業を行っていたクウェッソンは我関せずの様子で彼女達から少し離れて明後日の方向を向いてはいるものの、その議論の行く先に聞き耳をたてているようだった。

はじめは冷静を保っていたネーナも言葉を重ねるにつれ、いつしか怒気が混じるようになっている。ネーナの気迫に気勢を削がれかけながらもマコーミックは己の感情を絞り出した。

「ふざけんな、それでも俺は……こんなこと認めねえ……」

そんなマコーミックに冷笑を浮かべてネーナは詰問する。
「それで……事実を知ったあなたはどうするの？　まさかあの子たちを救ってやろうなどと馬鹿な事を言い出すのではないでしょうね？」
「馬鹿な事……だと！」
「いかなる理由があれ、これは《ゲオルグ》が受けた仕事――妨害しようとするのなら絶対に許さないわ。邪魔をするならばここで実力行使してでもあなたを排除する。もしもあなたがあの子達を助けたいのなら、私を殺した上であの子達を助ければいい。例えそうしたとしても問題は生じる……助けた子達をあなたは庇護し続けなければならない。仕事を妨害した事に対して莫大な違約金を払い、さらにはあの子達の精神のケアから今後の身の振り方、……まさか、役割を奪っただけで彼らを助ける事が出来たなんておめでたいことを言い出すんじゃないでしょうね？」
「……」
「今の貴方の力でそんな事ができるのかしら？　無理よね。その上、組織の決定に従えなかったあなたは、おそらく消されることになる。そして……貴方は貴方という庇護者を亡くした自分の子供をあの子達と同じようにしてしまう――そんな貴方は……、貴方は単なる偽善者よ！」
「てめえ、言いたい放題言いやがって……」
大柄なマコーミックが自身よりもはるかに小柄なネーナの襟元をつかんだ。ネーナは抵抗する事もなく、なされるがままの様子で、マコーミックの瞳を怒気のこもった表情で、無言のままま睨み据えていた。
いつもの余裕のある優雅な様子とは全くうって代わったネーナの姿とその言葉に周囲の者たちは圧倒されていた。マコーミックも同じで、勢いのままに彼女の胸倉をつかんだもののこの状況を打開する知恵などどこにもなかった。
「もう、いいだろう、よさないか」

騒ぎを聞きつけ、やってきたゴルドが見かねて二人の間に割って入った。その行動にハンガー内の空気がほんのわずかだけ緩む。

「ゴルドさん……」

感情をぶつけ合い互いに引っ込みがつかなくなった二人の間に割って入ったゴルドに向かって、マコーミックは問いかけた。

「あんたも同じなんですか？　こんなことが許されていいなんて」

見たくもない現実を突き付けられて、それを受け入れられない者が同調を求めている――そんなマコーミックにゴルドは静かに告げる。

「お前の感情はおそらく間違っていないんだろう……。だが、やつらの犠牲なしに俺達が生き残ることができないのも残念ながら事実だ」

「そんな……」

「仕事に戻れ。ここでつまらん正義感や人道主義を振り回してもどうにもならないということくらい、分かってるだろう？」

それはマコーミックに対してのみ向けられた言葉ではなかった。補充人員としてやってきた子供達の姿に驚きと戸惑いを覚えたのはゴルドも同じだった。彼らの事をネーナから聞くや否や、直ちにジノとリリアには彼らと決して関わらないように警告を与えたのは年長者としての配慮というよりは、戦場に立ったものとしての経験ゆえであろう。下手な同情は自分達の首を絞めかねない――《ゲオルグ》の利益のみを最善とする自身の打算的な思考に弱冠嫌気しながらも、ゴルドは己の役割に徹していた。否、ジノたちに警告を与えることで同時に自身の心に楔を打ち込もうとするゴルドの中の大人としての狡さともいえた。

「俺は、俺は……こんなこと……絶対に認めねえ……」

絞り出すような叫びと共に震えるこぶしを抑えつけながらマコーミックは二人の元から去っていく。怒りに震える彼の大柄なはずの背中は妙に小さかった。

「彼は危険よ、排除するべきだわ」

マコーミックに捕まれて乱れた胸元を直しながら、ネーナも又、震える声を抑えつけるようにしてゴルドに訴えた。
「その必要はない」
僅かに顔を赤く染め、感情的になっているネーナに対してゴルドは努めて冷静だった。
「あいつは人の親であるという事がどういうことなのかを分かっている人間だ。俺達と違ってな……。そして、哀しいことに今、何が優先されるべきことなのかということもきちんと理解できる人間だ。だからこれ以上、あいつを追い詰める必要はない」
「私は彼を追い詰めたい訳じゃないわ……ただ……」
「そうだったな、すまん……」
ゴルドの詫びの言葉にネーナは押し黙る。もっとヒステリックに自身の怒りを吐露できるような女ならば、可愛らしさも感じられるのだろうが、彼女の肩にかかる大きな責任が、そんな彼女から女らしさを奪いつつあるということぐらいはゴルドも理解している。
「そっちの仕事の続きは俺がやっておいてやる。気分転換でもしてきたらどうだ？」
「いいわ、このぐらい大した事じゃないから……」
予想通りの意固地な態度と共に、彼女はゴルドに背を向けた。その整った形の尻をポンと一つ軽く叩くと、ゴルドは彼女のそばを離れることにした。去り際に彼女のそばに立つクウェッソンの姿を目の端に捕えながら、ゴルドはデッキを後にした。

（２０１０／１２／０５　Ａｒｃａｄｉａにて初稿）
（２０１１／０８／１３　本サイトにて初稿）

02

『はぁ』と一つため息をつく。

「男のため息は鬱陶しいから止めてよね」という容赦のない同僚のつっこみに脱力モードで応対しつつ、船窓の外に広がる無数の艦船の航宙灯の輝きに恨みがましく目をやる。定時哨戒任務を終え、軽いミーティングを兼ねて、ＭＳハンガー付近のレストルームになだれ込んだブルー・チームの面々の中にカーク・レイナードの姿はあった。

「いったい、いつになったら終わるんだ……」

周辺宙域に集まった多くの連邦将兵達の気持をこれ以上はないというくらいに代弁したそのつぶやきに、やさしく同調してくれるものなどいない。かわりに返ってきたのは「二日後よ！」という実に端的かつ身も蓋もない心温まる一言だった。仕方なく艦内と宙域を仕切る冷たい耐圧ガラスにペタリと額を張り付けて、風に吹かれる枝葉の如くふわふわと力なく宙空を漂う彼の様を見る者があればおそらくは多くの哀愁を誘ったことだろう。

「だいたい、こんな大騒ぎをやらかして一体誰が得するってんだ！」

「連邦政府にすがりついてる利権団体から、軍需企業、ニュースのネタに困った大手メディアや大きなイベントでひと儲けしようと企む芸能関係者――そんなのいくらでもいるに決まってるじゃない」

「お前、妙に現実的だな……」

「女なんてそんなもんよ。だいたい一般市民の中にだってそれなりに楽しみにしてる人たちもいるのだから……。連邦市民の税金で運営されてる軍に所属している以上、市民への奉仕は当然の義務でしょ？」

「楽しみにしてるのは一部のマニアックな方々だけだと思うのは俺の気のせいか？」

「艦船同士の砲撃戦やＭＳ同士の格闘戦なんて、大手メディアが配信する映像よりもアマチュア動画マン達があれこれ手を加えたやつのほうが刺激的ってのが皮肉よねえ。アイシャなんて大喜びしそうだわ」

「あいつは連邦軍人だろうが……」

やっぱりＢＧＭはデスメタルよねえ、と勝手に盛り上がっているシャーリーにカークはあきらめモードで気のない相槌を打ちながらも、華やかな表舞台を支える裏方の苦労をしみじみと味わっていた。

観艦式を二日後に控え、プルリヤシュ要塞周辺には多くの艦艇と兵員が集まっていた。連邦宇宙軍のおよそ半分に匹敵する規模の艦艇が一堂に会して行われる要塞落成式と観艦式およびその後におこなわれる大演習の準備に多くの時間と労力が費やされていた。

渦中におかれたカーク達２０８特戦隊も多聞に洩れず、艦内のあらゆる部署で、繰り返し行われる事前準備や予行演習の為の対応にひっきりなしに追われていた。

本番に備えて、図上演習が行われる要塞と艦艇の間を行き交う幹部将校の護衛から始まって、新たに組み込まれた演習システムの調整とテストをかねた模擬演習、臨時編成された艦隊内で行われるＭＳパイロットの為の様々な打ち合わせなど、やるべき仕事には事欠かない。

只ですらオーバーワーク気味の将兵達をさらに悩ませたのが今回の演習において各コロニーから抽出され、臨時編成されることとなった連邦軍以外の部隊の存在だった。

『現場レベルでの軍事交流』などという意味不明なスローガンの元、コロニー守備隊や民間軍事企業から集められ、臨時編成された部隊はあくまでも数合わせが目的であり、式典および演習では当該宙域

で航宙灯を輝かせながら定められた単純な艦隊行動を行うだけの存在である。

己の立場と役割をわきまえているたいていの者たちはカーク達連邦軍人に対して紳士的に対応し、祭典の成功に尽力しようとするものだが、時として勘違いした困ったはねっ返りに遭遇してしまうという不幸に遭遇する事もある。彼らとて己のプライドや組織のメンツを以て職務に励んでいるのだろうが、根本的な方向性の誤りが周囲を混乱させていることには得てして気づかないものらしい。

「大体、あんたには辛抱ってものが足りないのよ！」

予行訓練の真っ最中にわざわざ秘匿回線を使って『元何某部隊に所属の……』と聞きたくもない過ぎ去った過去の実績をひけらかす退役将校殿の自慢話に業を煮やして、メガランチャーの照準を味方部隊の艦艇艦橋に合わせた物騒な女がそう忠告する。

「軍人としての責任感にいささか欠けるきらいのあるＭＳパイロットに言われたくはないな！」

《Ｆ９１》という高性能機に対して、装備兵装の違いに劣等感を抱いたとあるコロニー守備隊のＭＳパイロットに『兵器の性能で戦闘の優劣が決まるのではない』という言葉と共にドッグ・ファイトを挑まれ、あらぬ方向にヴェスバーを最大威力でぶっ放した大人げない男が反論する。

「お前らなあ……」

部下たちの暴挙にチームリーダーとしての責任を問われ、平謝りと後始末に追われることとなったサカキが絶句する。自らの姿を棚に上げ、好き放題に言い合っている部下たちの姿を目の当たりにして、サカキは思わず己の人生観について自問自答した。

複雑な人間模様の中では生真面目である事だけでは乗り切れない事も多々あるようだ。人生の荒波を乗り越えるには、時として他者に責任を転嫁する図々しさというものも必要なのだろう。これからは勘違いしたはねっ返りや暴走する部下達をビームサーベルで優しく一撫でして迅速かつ平穏に説得するという選択肢をとる必要もあ

るのかもしれない。

そんな彼らの眼前をブルー・チームに代わって哨戒任務に就いたパープル・チームの3機の《Ｆ９１》がスラスターを輝かせながら通過した。僅かに先行気味のジュベールの4号機の後を追って、ジャクソンの5号機とバッジョの6号機が追随する。

見慣れてしまった超高性能機のシルエットが漆黒の闇を切り裂いて疾駆する姿は、いつ見ても圧巻だった。だが、僅かに乱れたパープル・チームのフォーメーションにＭＳパイロットだからこそ感じるチーム内の微妙な温度差を感じとる。ＭＳパイロットとして格段の腕を持つが故か決して仲間に心を開こうとしないジュベールが生み出す不協和音は、チームリーダーのジャクソンの努力により表面的には目立たないものであるが、その歪みはいずれチーム内になんらかの影響を及ぼしかねなかった。

（それでも自分はいい仲間に恵まれているのだろう）

部下であるジュベールとの関係に時折僅かに困惑の色を見せるジャクソンの姿を思い出しながら、ふとサカキはそんなことを考えていた。

初めから全てがうまくいっていた訳ではない。部隊編成の当初は力量の劣るフェイカーの扱いをめぐってカークと軋轢が生じることも度々であった。価値観の違いすぎる二人の衝突は、結成当時のブルー・チームのチームワークの不和に繋がった。

サカキ自身、この部隊に配属される事を上層部に打診された時には大きく悩むこととなった。特務部隊に配属される以上、おそらくは実戦を伴う困難な作戦に従事させられることは当然の如く予想された。妻との間に新たな命を授かることとなった彼には配属を拒否する自由もあった。いくら保障があるとはいえ、愛する家族を路頭に迷わせるというのは守るべきものを持った男としては無責任であろう。

だが、サカキとてＭＳパイロットとして第一線で活躍してきた自

負と誇りがある。それは男としての野心と言い換えてよいかもしれない。相反する2つの要素を天秤にかけて現状を選択したのは、まだ彼の中に残っている若さや青臭さといったものゆえだった。

身重の妻に不安を与えぬために不都合なことはひた隠しにして、サカキは己の選択が正しかったことを証明すべく、チームリーダーとして自身のチームをとりまとめる事に腐心した。

結局、彼にとって懸念事項になりつつあったチーム内の不和はシャーリーとフェイカーの交代というチームの再編成によって解消されることとなった。MSチーム内外で多くの反発を生んだこの決定もサカキにとっては渡りに船であり、快活な性格のシャーリーの加入は閉塞しかけたチーム内の空気を一掃し、チームの総合力を飛躍的に向上させた。《エナド》MSチームの不安要素となりつつあるフェイカーをレッド・チームに押し付けてしまったことに僅かばかりの躊躇いを覚えながらも、それでも彼は新たなチームの戦力をとりまとめた。

灰汁の強いメンバーの個性ゆえに時折行き違いが生じるものの、それでもサカキはいつしか彼の部下達に信頼を置くようになっていた。彼らと共にあればいかなる困難な状況も打破できるであろう――同じ時を過ごし、互いの感情の動きと思考を理解できるようになるほどそれは漠然とした願望から確信へと代わっていった。背中を任せられる仲間を得る――それはとても幸せなことなのだ――自身の眼前でとりとめもない雑談に耽っている二人の姿を眺めながら、サカキはそんな風に考えていた。

「……だから、あいつはなんか胡散臭いのよ」

「お前ねえ、思っていても口にしちゃいけないことってあるだろうが……」

「私の上官の頭は軽いけど口の軽い人間じゃないと信用してるつもりだけど……」

「甘いな、昔から言うだろうが、『壁に耳あり』って……ちょっと待て、『頭は軽い』ってどういう意味だ？」

「え……？　そんなこと言ったかしら？　気のせいよ、気のせい、きっと疲れてるのよ……」

サカキが物思いに耽っている間に二人の話題は、いつしか別の人物の評価に移っているようだった。その対象の名はガーディ・ブライアン――サナリィ社から出向中の曰くありげな男である。《Ｆ９１》のバイオ・コンピュータの調整を主な仕事にしているが、職務上、パイロットたちのメンタルデータなども取り扱うため、決してないがしろにしてよい人物ではない。

これまでは事の一切をＭＳ隊責任者であるコーナー少佐に任せ、ひたすら傍観者の立場でＭＳ隊のメンバーと距離をおいていたようだったが、先日の休暇明け以降、彼のメンバーに対する方針は大きく変わったようで、日増しに干渉の度合いが増えつつあった。特に部外者の介入を極端に嫌うカークやジュベール、もともと彼の事を嫌っているシャーリーの反発は大きく、チームリーダーであるサカキやジャクソンの心労の度合いは大きかった。

事態を好転させようにも、噂にたがわぬブライアンの問題だらけの性格とトラブルの種になりがちなその言動は、どう控え目に見ても褒める要素など微塵もなく、正直関わりたくはないというのが本音であった。

できればこれからも何事もなく無事に過ぎてほしいものだと密かに願うものの、そんなサカキのささやかな願いに気づくことなどあろうはずもない目の前の問題児達の姿を目の当たりにすれば、前途多難であることは疑うべくもない。

当の問題児達はそろそろ雑談のネタが尽き始めたのか、レストルーム内には徐々に沈黙が生じ始めている。曇りがちな室内の空気を一掃するために、サカキは傍らの販売機から飲料チューブを取り出すと彼らに向かってふわりと放った。サカキの参戦によってブルー・チームの面々がとめどない四方山話に再び花が咲かせ、レストルームが活気づいたのは直ぐの事だった。

プルリヤシュ要塞――明日、落成式を迎えるもののまだまだ内部は完成には程遠く資材がむき出しの場所も多い。要塞が完全に稼働し、かけられた膨大な費用を十分に回収するだけの機能を発揮するようになるまでには、まだ時間が十分に必要なのは明白である。老齢の目には弱冠刺激の強い照明の光に目をしばたたかせながら、防弾使用の展望窓から眼下の光景を見下ろし、豆粒のような作業員達の姿がひっきりなしに行き交う様をぼんやりと眺める。公開に不都合な場所は完全に封鎖され、明日の式典において公開される映像には、華々しく装飾された会場に連邦大統領や閣僚達をはじめとした数多の著名人達が出席する姿が映し出され、市民の元へと届けられることとなる。

「首尾はどうか？」

「はっ、万事恙無く……」

「恙無く……か」

「なにぶん、大がかりなものでありますので多少の手違いなど生じることは予想されますが……全て想定の範囲内で収まるよう目下全力で調整中であります」

「そうか」

彼の頷く様を確認すると報告者である側近はすみやかに退出する。どこに監視の目があるかは分からない。必要最低限の言葉で意思を確認し合うと、平時と変わらぬふるまいを心がける。

高級将校専用の瀟洒な内装の喫煙ルームで一人になった彼――ルオ・ウースィー宇宙軍大将は懐から高級葉巻を取り出し、火をつける。ゆったりと煙を燻らせながらのその味は格別であり、分刻みのスケジュールに追われ多忙という言葉では足りぬ身である彼にとっ

て、その時間はひと時の安らぎである。そのことを心得ている彼の側近たちは、誤って部屋に入る不埒者が現れぬよう室外で待機している。

連邦宇宙軍大将ともいう立場になれば、高級官僚や様々な企業人達との会食や遊興すら仕事のうちであり、その身は公人であるといっても差し支えない。彼の年齢にしては珍しく贅肉の少ないその体躯は日々の激務と軍人としての鍛錬のたまものであり、その精神は軍内外の多くの批判者からぶつけられる憎悪や怨念を十分に受け止めるだけの余裕があった。彼の発言は時として議会に影響を与えることもあり、その発する一言一句を歪曲し利用しようとする輩に足を取られぬよう、細心の注意を払わねばならない。

壮年期を終え、すでに人生の結末が見え始めている身ではあるが、まだまだやり足らぬ事も多い。いや人生の結末が見えているからこそ焦りが生まれるのだろう。

喫煙ルームの巨大な展望窓から眼下に広がる光景はあたかもビルの高層階から見下ろす光景そのものであり、巨大な吹き抜け構造になっている作業ブロックでは、多くの作業員やプチモビが作業時間の締め切りに追いたてられてひっきりなしに行き交っている。

ジオン独立戦争に端を発した多くの戦乱の渦中、人が死ぬことが当たり前だった時代に多感な少年期を過ごした彼にとって、今の平穏な時代はあたかも夢のようなものである。時折、いくつかの内紛や紛争は生じるものの、それがかつてのように人類の存亡に影響するものにまで発展することなどは現在の連邦政府のシステム上まずあり得ない。

多くの犠牲を伴って得たはずの緩やかな発展を享受する時代であるにもかかわらず、人類の業は深いようで、より多くの己が利益と際限のない競争の果てに得られる僅かばかりの優越感という幻想を享受したいがために、様々な策謀が連邦という組織の中で日々渦巻いていた。今、彼の立っているプルリヤシュ要塞もそんな地球連邦

政府の実態を示す象徴の一つであり、多くの集団の欲望と策謀を呑み込みながら建造され、漆黒の空間に煌びやかな人工の輝きを放っていた。

実家の家業に関心を持たず商売人の生き方よりも軍人である事を選んだ彼だったが、ルオ家という名門に生まれ育った彼には、名門ゆえに生じる名家の影に付きまとう様々な策謀は身近な事であり、そのような彼の育ちが連邦軍という組織の中での出世競争に勝ち残るために役立つこととなったのは皮肉だった。

多数派の雄と呼ばれ、新興勢力に多くの影響力を持つ彼であったが、その足元は実に不安定であり、巨大な組織や体制の維持のためには時として己が意思とは正反対の行動をとり、大いに憎まれ役を演じねばならぬことも多々ある。組織の長として当然の決断が他の者には老獪な策謀と捕えられ、あらぬ恨みを買うことすらままある。

軍内部に雨後の筍のように生まれる不満分子を時として生家の財力を背景に老獪な手腕で葬りながら、いつしか彼は今の地位に立つこととなっていた。組織の維持を優先するがために時として優秀な部下を切り捨て、信頼する同志とも袂を分かってきた自身のキャリアを振り返った時、『現在より優れた未来』という理想など、所詮人が生きるという現実の前にははかない幻想である事を痛感する。人類という枠で物事を眺めた時、代わりのきかぬものなど存在しない――それがルオの哲学だった。

「閣下……」

まだわずかに時間に余裕はあるはずだったが、室外に待機していた将校の一人が入室し、敬礼とともにルオに声をかけた。仏頂面を向けながらのルオの無言の抗議に申し訳なさそうな表情を浮かべながらも、彼は必要事項を手短に報告する。

「申し訳ございません、閣下。レンブラント中将がお見えになっておられます」

その報告に僅かばかり息を吐く。テオドア・レンブラント――軍内部の少数派の筆頭であり、ルオにとって目の上のタンコブともい

える存在である。
　正反対の立場に立つ二人は何かと対立を重ね、プルリヤシュ計画においても民間人の介入の度合いに積極策を以て推し進めるレンブラントに対して、ルオは批判的な立場をとり続けていた。宇宙軍大将という立場でありながらも要塞内にはルオが干渉することのできない区画も多数存在し、軍内部でのレンブラントの存在が並々ならぬ影響力を与えていることはうかがい知れない。
　会議の場においても野心的かつ精力的に持論を展開し何かとルオをやりこめることのあるレンブラントに対し、ルオは彼が持論の長所のみを前面に押し出すことに過度の危うさを感じていた。論理的な思考によりいかに緻密な戦略を立てようとも、所詮人間の集団の中では感情論が優先される――その人間組織論の本質を無視したレンブラントの若さとそれに同調しようとする多くの者たちの無能ぶりに憤慨した事も一度や二度ではない。目先の派手さにばかり気を奪われ、本質を見失った方策論が行きつく先の惨めな結果など人類の歴史の中にはいくらでも存在する。華やかな表舞台はそれを支える膨大な裏方達の苦労と苦悩があってこそ成り立つものであり、頭で考えたことだけで世界が動くのならばいかなる策謀も謀略も必要はない。いや、それは感情で動く人間を不要とし、機械の思考のみで連邦という巨大な組織を運営するという事にほかならない。
　彼の登場と同時に互いの内心をけん制しながらの心理戦が始まるであろうことは容易く予想される。現段階で切るべきカードの確認と心の準備をする時間は必要だった。ルオの不興を買うことを承知の上での彼の側近の判断は正しいと言えた。
「そうか、御苦労だが、いつもどおり適当にあしらってから通してくれ」
「はっ！」
　再び敬礼とともに彼の側近は退出する。しばらくの後で、扉の向こうで意図的に仕掛けられた押し問答を終えて、憮然とした表情と共に現れるであろうレンブラントの姿を眼前の展望窓の向こうに思

い浮かべながら、ルオのひと時の休息時間は終わりを告げるのだった。

（２０１０／１２／０５　Ａｒｃａｄｉａにて初稿）
（２０１１／０８／１４　本サイトにて初稿）

03

「あれ？　コンテナの数が合いませんね？」
搬入された補給物資の整頓作業を行っていた輜重兵の一人が疑問を呈した。
「いくつ足りないんだ？」
「いえ、逆です。数が多いんです」
「多いのか？　だったらいいだろう……」
決して良いわけではないが、状況が状況である。
観艦式を明日に控え、周辺宙域に展開する多数の艦艇に運び込まれる多彩な物資の数は通常の倍近くに上る。式典当日に政府の上級官僚が乗艦予定の艦に至っては、彼らを迎える準備で艦内が右往左往し、いつもとは異なる物資の搬入は担当兵たちの手間を大きく増やすこととなる。正規のルートで補給部隊から送り込まれたリストとは別に、担当兵間のコネでやり取りされる臨時物資リストのために無用な仕事が増えて、搬入現場は殺気立っていた。

とりわけ厄介なのは新たな演習システムの調整のために艦に乗り込んできた技術者たちが発注した特殊機材の扱いであり、艦ごとの優先順位をめぐって艦隊のあちこちでトラブルが起きている。必要とされる機材が届かぬがために作業が滞り、周辺の艦船から不要になった機材を借りるためにコンテナをかかえたＭＳが発艦する事態にまで至っていた。
完全にオーバーワーク気味の将兵達をねぎらい士気を維持しようと、嗜好品や生鮮食料品を満載した物資コンテナが各艦に届けられるものの、そのやり取りをめぐってまたひと悶着が生まれるという、

少々笑えない事態も発生していた。宣伝も兼ねてコンテナに描かれた複数の後援企業のロゴマークも反って逆効果であるのだが、事実が上層部に届くことはおそらくないだろう。『こんなバカ騒ぎ、さっさと終わっちまえ』というのがトラブルに振り回される現場の将兵達の総意であることは疑う余地もない。

そのような状況の中で再び起きたトラブルである。すでに物資コンテナの半数以上は分類されて艦内各倉庫へと運び込まれており、いまさら確認に走って重複分を補給部隊へと返納するなどという面倒くさい手続きなど御免だというのが輜重兵たちの本音だった。

「余ったのは適当にあいてる倉庫に放り込んどけ。クソッたれ共のバカ騒ぎが終わった後で手が空いてからどうにかすればいい。役に立ちそうならもらっとけ！　不用品ならたっぷりと皮肉をこめたメッセージでも張りつけて突っ返してやりゃあいい」

倉庫に放り込まれた時点で忘れ去られるパターンであるのは明白なのだが、切迫した目先の事態をどうにかすることで手一杯な彼らにとっては最善策である。無責任という言葉にも置き換えられそうな迅速かつ合理的思考の名のもとに発せられた責任者の迷案に従って、彼らは厄介事の火種を倉庫の片隅に放り込んで次なる作業へと移っていった。

「全地球圏に住む連邦市民の皆さん、私達は今日、人類の輝かしい歴史にまた新たな一ページを追加することができる幸せを共に享受できることを、心からお喜び申し上げます」

華々しいファンファーレとともに開始されたプルリヤシュ要塞内

に設置された式典会場において、地球圏最高権力者である連邦政府大統領が演台に立ち、力強い身振りと言葉で演説を開始していた。

礼服や高価なドレスに身を包んだ高級官僚や企業人達、仰々しい階級章が胸を飾る軍服に身を包んだ将官をはじめとする軍人達、式典の様子を市民達の茶の間へ届ける報道陣など、多くの関係者が集まった会場内で、漆黒の闇の中に鮮やかな碧い色と共に浮かび上がった地球の姿を背景に、大統領は言葉を綴る。

変革という言葉に絶望的に疎い連邦議会に巣食う議員達（古ダヌキ）をその政治的手腕で巧みにまとめ上げ、政府機能の月移転を実質的に指導し、おそらくは地球出身の最後の大統領になるのではないか、と噂される彼の功績は大きい。いずれは記憶と記録の双方に残る人物となりうるだろうというのがもっぱらの評価である。

「プルリヤシュ――この人類の輝かしき英知を結集した巨大な建造物は単なる勢威発揚のためのハコモノではありません。私達人類がいずれ迎えるであろう、来るべき外宇宙進出の時代を見すえ、プルリヤシュには多くの希望と可能性が籠められているのです」

税金の無駄遣いなどと何かと揶揄されがちなプロジェクトに対する批判をけん制するつもりではないのだろうが、彼はプルリヤシュに籠められた様々な可能性を列挙していく。その彼の言葉を裏付けるかの如く、式場内の大プロジェクタには様々なホログラフが煌々と浮かび上がり、観衆達のため息が場内の各所から次々に漏れる。予め入念に計算され尽くした巧みな演出により場内は大いに盛り上がり、その中継映像を見ることとなる大衆たちは日々の生活の労苦を忘れ、人類と自身の未来像についての一時の夢を様々に思い描くのだろう。

「今地球圏は大いなる変革の時に置かれています。多くの市民達が平和と繁栄を謳歌する一方で、社会そのものが閉塞の兆しを見せ始め、次代を担う若者たちが進むべき未来を見失い、より高い目標を目指す事が出来ずになりつつあります。

かつて、まだ国家と云う垣根が存在し、母なる碧い地球に目に見

えない国境線が描かれていた時代において、一部の者達の貪欲で無責任な行動の結果、多くの国が疲弊しかけ、人類そのものがその存在の危機に瀕しました。

先人達は様々な犠牲を伴いながらも、その難題に立ち向かい、高い地位に立つ人々の優れた手腕で新たなビジョンを描き、名もなき多くの人々がその理想を忠実に実行することで、我々人類はこの宇宙での新たな生活圏を獲得したのです。

宇宙世紀開始以来１４０年近くに及ぶ現在に至るまで、それは決して平たんな道であったとは言えません。むしろ茨の道であったと言えるでしょう。先人たちの多くの犠牲があったからこそ今の我々は存在するのです。

大いなる発展のもと、誰もが幸せを享受する権利を持つ世界の創造は決して夢物語ではありません。重力の井戸の底から飛び出した私達は宇宙というこの無限に広がるフロンティアで、新たな可能性を模索し続けることができるのです。

時には困難が立ちふさがり、その視界には果てのない暗雲が立ち込め、吹き荒れる嵐に絶望し涙する事もあるでしょう。しかしながら、我々には百億以上の同胞たちがいるのです。地球圏に住む同胞たちが一丸となってぶつかれば、乗り越えられぬ困難など存在する訳がありません。それは多くの不幸をその叡智と共に乗り越えてきた人類の歴史が証明しているではありませんか！

――全地球圏に住む連邦市民の皆さん、今日このめでたき新たな人類の門出を、大いに祝おうではないですか！」

長舌すぎるという悪癖で有名な彼にしては珍しく短めの演説の終了と共に、軽く片手をあげながら、多くの歓声と拍手をもって迎えられる。軍楽隊が興奮する会場をさらに盛り上げ、その様子を中継すべく能弁なレポーター達が流れるような弁舌をカメラに向かって披露し、その興奮を中継映像として眺めている市民達の下へ届けようとしている。

式典はさらなる来賓たちへの挨拶へと移り、順調に目録を消化しつつあった。

プルリヤシュ要塞周辺宙域に展開する艦隊群の中に組み込まれたアレキサンドリア級重巡洋艦《ゲオルグ》のＭＳデッキ内でゴルド・ガーラントは機体の最終チェックに余念がなかった。要塞落成式典後に行われる観艦式、さらにしばらくの時間をおいて行われる大演習とまだまだ時間に余裕は十分にあったが、使いなれぬ装備に対する不信感はぬぐえない。特に《Ｆ９７》に新たに装備されることとなったＩフィールド・システムの調整は最重要課題であり、担当整備員と共に入念なチェックを再度繰り返していた。

「繰り返しますがＩフィールドは絶対的な盾ではありません。ビーム兵器使用時には同じ側のシステムは自動的にカットされる事を忘れないで下さい」

機体担当者のアロルド・マコーミックは狭いコックピットハッチから体を中途半端に捻じ込み、《Ｆ９７》の両肩に装着された４基のＩフィールド発生装置を内蔵したショルダーアーマーから送られてくる情報をモニターしながら、機体の状態を確認している。

今回の作戦では相当な乱戦になることが予想される。マコーミックをはじめとした整備員達の奮闘努力にもかかわらずバイオ・コンピュータの搭載は間に合うことなく、代替案として、ゴルド達はＩフィールド・システムで防御力をあげる事を選択した。

ＭＳ用のＩフィールド・システムはまだ技術的にもコスト的にも試行錯誤の段階であり、決して標準的な兵装ではない。Ｉフィールド・システムは至近距離でなければ最大威力のヴェスバーすらも完

全に封じ、ビーム・シールドと違って光源を発する事もなく隠密性も高い。だが、ビーム兵器に対しては絶対的な盾になる一方で、実弾兵器に対しての効果は低く、その防御力はビーム・シールドをはるかに下回る。その使用に膨大な余剰電力が必要なこともあり、現在の連邦軍の主力量産機は戦闘だけでなくスペースデブリへの対応にまで考慮に入れ、より柔軟に状況に対応できるビーム・シールドを標準兵装として採用していた。

ＩフィールドシステムとＡＢＣマントで防御力を高めたゴルドの《Ｆ９７》は、攻撃兵装として旧式の実弾兵器であるショットランサーを主兵装に選択し、オプションとして以前に取り外したアンカー・システムを再び装備した。

戦場とは不思議なものである。技術の発展に伴い、より先鋭的な武装や兵器システムが開発される一方で、実際に戦闘の場面において重宝するのは、時として旧式で単純なものであったりすることがままある。そしていついかなる時代においても変わらぬ不動の真理が『数の優位性』だった。

表向き穏やかな平穏に包まれている地球圏において、戦闘や戦争の実態が一般市民の常識とかけはなれていく中で、現状を知らぬ政治家や政府高官たちの不安を必要以上に煽って、より新しい装備や実態にそぐわない空想的なシステムに大金を投じさせようと暗躍する――そんな軍需企業の在り方が地球圏の経済に与える影響は決して無視できないことも、厳然たる事実であった。尤もそんな者達の片棒を担ぐ事で生きてきたゴルドにも決して彼らを批判することなどできないが……。

「ゴルドさん？」

物思いにふけっていたゴルドは、不意にマコーミックと目が合っていることに気づいた。

しばらくの無言の後、マコーミックは目をそらし、コックピット内のゴルドに背を向けるとぽつりとつぶやいた。

「本当は俺も分かってるんですよ。自分達がやろうとしてる事がどういう事なのかって……」

突然のマコーミックの言葉にゴルドは内心面食らった。少し考えた後で、その言葉が昨日のネーナとのやり取りの事だったのだ、と直ぐに気付く。

「納得のいかない現実に対して単にネーナさんに八つ当たりしてるだけだって事もね……分かってるんですよ」

昨日のやり取りの事などすっかり忘れてしまっていたゴルドだったが、マコーミックには思うところがあったようだ。大柄な体躯の頑固者だが、隠れた繊細な部分も時折顔をのぞかせる。いや、そのような繊細な面を持っているからこそ、腕のよいメカニックたりえるのだろう。

「仕事も安定せず、女房には逃げられ自分の子供すら親に預けっぱなしで家庭も守れない。何もかも中途半端な情けない男なんですよ、俺は……。だから、きっと、あの子達の姿を見て安っぽい同情をして、八つ当たりの道具にしちまったんです。ネーナさんに言われた『偽善者』ってのは、きっと本当の事なんですよ」

終始、無言でマコーミックの告解を聞いていたゴルドだったが、やがてぽつりとマコーミックに声をかけた。

「この仕事が終わったら、子供と一緒に暮らすのが夢なんだろう？」

「ええ……」

「だったら、今できる最大限の事をして胸を張ってその夢をかなえればいい。お前らが十分に面倒を見てくれた《Ｆ９７（こいつ）》で戦うのは俺の役目だ。お前らが十分に調整してくれるからこそ俺は安心して戦えるんだ。全てが終われば、堂々と勝者の報酬を受け取ればいい。たとえどんなに地位が高くとも、真実の姿から目をそらし薄っぺらい常識で物事を図るやつらの評価など風向き次第でどうとでも変わるものだ。一人の人間が得られる幸せなんて、所詮目先の事だけにしか見出せないものさ」

「そうですね……」

本音を吐きだすことで多少の照れくささもあったのだろう。
マコーミックは振り返ることなくそのままコックピットハッチから離れていく。その背を見送りながらゴルドは一つため息をつく。
（偽善者……か）
ふとその言葉を思い浮かべた。
それは去っていくマコーミックにではなく自分自身に向けた言葉だった。ゴルドの目的は彼とは全く違う。否、マコーミックだけでなくこの艦の全ての乗組員たちとも異なっている。彼の真実を知っているのはおそらくネーナだけであり、悪く言えば彼は艦内の全ての乗員達を騙し、利用して己の望みをかなえようとしているともいえた。
だが、その事にいまさら後悔はない。人は自身の望みをかなえるためにのみ生きるべきだ――例えそれが他人の為であったとしても結局は自身が満足するかどうかが大事なのだ。
「本当に偽善者だな……」
胸の奥の鈍痛を、手をあててやり過ごしながら発せられたゴルドの小さな呟きは、誰に聞かれる事もなく《Ｆ９７》のコックピットに静かに吸い込まれていった。

観艦式――まだ人類の歴史に機械文明が存在しない時代に母なる海の上で創められたこの儀礼は、宇宙に進出したこの時代においても未だにその無限に広がる海を航る宇宙船乗り（ふなのり）たちによって連綿と受け継がれている。儀式や祭典といった定型が人心の掌握に欠かせないという事実は、宇宙生活が当たり前の時代になっても人の在り方は変わらぬものだという事を如実に示していた。

地球連邦軍――地球圏において絶対的統治者たる連邦政府の剣であるこの軍隊の存在感は依然として大きい。

仮想敵対勢力というものが存在しないこの時代における連邦軍の役割は、警察権では対応しきれない連邦市民の平和な日常を脅かす不法集団に対する絶対的な抑止力である。

人種、民族、信条、宗教などあらゆるものの壁を乗り越えて成立してしまう悪意と暴力のネットワークの前には、全地球的規模で機動力を発揮できる組織の力は必要不可欠である。曖昧な自治力を持たされたコロニー同士の利益の衝突やその合間を縫って海賊行為を行う不法集団の存在は、連邦市民の安全を脅かし、ひいては連邦政府の統治能力への疑念にも発展しかねないため、宇宙軍の重要性は殊のほか大きい。

平和の時代が長く続き、戦争という破壊行為が人々の日常から遠のけば遠のくほど、軍隊というものの存在意義は人々の意識から忘れ去られ、公権力に飼われた暴力装置などと得てして煙たがられるものである。

自分達が守っているものがどんなものであるかという事を軍人の側が正しく認識し、同時に自分達を守っているものがどんなものであるかという事を市民の側が正しく認識することで、互いを理解し合う事が必要だった。

平和への侵略と不法行為を未然に防ぎ、有事の際の即応性を地球圏に住む全ての者達に指し示す――それが観艦式の本来の目的である。

近年、連邦政府および連邦軍の様々な不祥事が明るみに出て、市民間に蔓延しつつある不信感を一掃するためにも決して失敗は許されない、などと鼻息も荒く号令をかける上層部ではあったが、当たり前の事を当たり前にこなす事すら出来なくなりつつある肥大化しきった組織の怠慢癖を一掃する事など、所詮、夢のまた夢であり、

軍内部でも大きなずれが生じ始めている事を認めようとすらできないのが実情であった。

兎にも角にも、多くの将兵達の様々な苦悩と苦労の下、なんとか開催にこぎつける事のできた観艦式は、プルリヤシュ要塞記念式典に引き続き、盛大に幕を切って落とされた。

通常、連邦宇宙軍の観艦式は参加艦艇の数が多く、大規模なものになりがちであるため、受閲艦隊を整列させて停泊させ、それを観閲部隊が移動して観閲を行う停泊式が主流である。

しかし、このたびの観艦式においては、受閲艦隊の一部を移動させる変則的な移動式を採用し、観閲部隊の観閲と同時にプルリヤシュ要塞展望デッキ前を受閲部隊の一部が通過する様を来賓たちが観閲するという極めて変則的な方式で行われることとなった。

宇宙軍の慣例を無視することになるこの決定に、軍内部では当然多くの反発が生まれることとなった。慣例を無視する事は連邦軍に対する侮辱であるという前例主義に縛られた実に官僚的な発想に基づいた理由からであったが、現場士官達の反対には更なる別の理由がある。

設計に始まって、全備重量、エンジン出力など様々な違いのある艦艇を同一の間隔を保って運行させるには相当の技量が要求される。ブリッジメンバー達から見張り員や機関士まで、艦船を動かすには緻密なチームワークが必要であり、艦隊行動ともなればさらに難しい。

幸運な事に、つい先ごろ採用された大規模演習プログラムを応用させることで、精度の高い艦隊行動がある程度可能となったため、このプログラムを下に、錬度の高い艦艇を抽出し、事前に綿密な演習を行う事でどうにかこの問題を乗り切ることとなった。

このような反発があるにもかかわらず無茶な決定を押し通そうとする側にも相応の事情があった。

プルリヤシュ要塞記念式典に来訪した数多くの来賓たちの中には地球出身者達が多数を占め、無重力空間下での行動に不慣れな者達も多い。狭い艦内で万が一にも来賓たちの間にトラブルが起きようものならば目も当てられない。

かといって、そのような事情を理由に観閲艦隊への乗艦希望者を拒否してしまっては、面子をつぶされることとなった彼らの間に様々な憶測を働かせることとなり、更なる政治的問題に発展しかねない。

多くの者達の苦労のおかげでようやく人類全体の目が宇宙へと向き始めているこの時代に、些細なことで有力者達に恥をかかせ、再び地球に引きこもろうなどと空気が生まれようものならば、大問題である。来賓者達の動向に神経を尖らせる大統領をはじめとした政府関係者たちの思惑もあって、結局このような決定がなされたのであった。

こうして、大統領や一部高級官僚のみを観閲艦に乗せ、大部分の来賓たちがプルリヤシュ要塞に留まることで、無事に登舷礼が開始されることとなった。

（２０１０／１２／２５　Ａｒｃａｄｉａにて初稿）
（２０１１／０８／１５　本サイトにて初稿）

04

スケジュール通りに観艦式が無事に予定を終えた事も相まって、宙域は奇妙な静けさに包まれていた。だがプルリヤシュ要塞宙域に集まった艦隊の将兵達は、このあとわずかに時間をおいて行われる大演習に向け、張りつめた緊迫感に支配されつつあった。

故グリーン・ワイアット大将――かつての大戦で圧倒的不利な戦局の打開に尽力した智将の名である。もっともその事実に異を唱え、ねつ造を主張する者も存在するが、真実がどのようなものであったかという事は歴史の闇の中である。ともかくそのような曰くある名を贈られることとなった大演習は、今静かに幕を開けようとしていた。

かつての国家という垣根が存在した時代と同様に、この演習にはいくつかの軍事的意図が上層部によって籠められている。

プルリヤシュ要塞制圧を目的とした攻撃側艦隊に対して守備側艦隊が応戦しこれを退ける、というのがこの演習の具体的な筋書きであった。

かつてのソロモン戦やア・バオア・クー戦を彷彿とさせる作戦内容であるが、現代の戦術事情に深い識者が見れば、単なる軍事的パフォーマンスであると一刀の下に切り伏せることだろう。

すでに連邦政府の力が地球圏のほぼ全域にわたって及んでおり、宙域に浮かぶ全ての要塞規模の石っころには連邦部隊が駐留しており、それよりも小規模なものにも何らかの形で部隊が派遣されている。さらにサイド主義を捨て、コロニー主義へと陥りつつあるスペ

ース・コロニー同士が結託する事は難しく、かつてのジオンのような強大な戦力の保持は困難であるという事は常識だった。

一基のコロニーが反乱を起こしたとしても、サイド駐留軍が即座に航路を封鎖し、リサイクルでは補いきれない資源の供給を封じこんでしまえば、コロニーの経済はたちまち干上がることになる。反乱組織の内部崩壊など自明の理であり、圧倒的な戦力を保持する連邦軍の前にはたかがコロニー一基の戦力など蟷螂の斧といえた。

コスト面からみてもこのような大規模戦闘は極めて不合理であり、仮に成立したとしても、高額化したＭＳや高度な技能を持つ戦闘員を湯水のごとく消費すれば、結果の如何に関わらず、その後の地球圏の混乱は目も当てられないこととなるであろう。

ＲＢ（ボール）型や突撃艇等の現代からみればあまりにも非人道的ともいえる低コストの兵器を大量に投入できたからこそ、かつてのソロモン戦やア・バオア・クー戦が成り立つのであり、いかに連邦軍といえどもこの時代においてそのような暴挙を犯す事は議会を始めとした世上の目が決して許すことはない。そのような現状を踏まえながらもこのように実情の伴わない演習を華々しく行うのには相応の意図があった。

大演習を成功させることで連邦軍の威容を内外に示すのは勿論であるが、不自然とも言えるほどの光や音で演出されたその演習画像を連邦市民にさらして歪な戦争観を与え、さらにメディアに寄生する御用アナリストたちが戦争の無意味さを高らかに唱える事で、市民の間には極度の反戦思想を植え付けられていた。

地球上と異なり常に緻密な計算の上に成り立っている宇宙空間において人類が生存していくには、経済の安定は絶対条件である。戦争という名の破壊行為が生み出す様々な負の側面はあまりにも代償が大きいと言えよう。

又、連邦軍の支配下にないコロニー守備隊や民間軍事企業の部隊を演習に参加させることにより彼らの実力と実態をつかむこともこ

の目的の一つであった。彼らを艦隊に組み込むことにより、現場レベルにおいて実態の掴みにくいその存在と実力を把握することで有事の際の判断材料とする――ここしばらくの現場の混乱を差し引いても得られる物は大きいと考える参謀部の判断であった。

様々な思惑の元、華々しく演習が行われようとしているプルリヤシュ要塞発令所の司令官席に座るテオドア・レンブラント中将は彼付きの当直兵の入れた紅茶の味に舌鼓をうちながら、その開始の時刻が訪れる時を待っていた。

彼の眼下では多くの通信士官たちが関係各所と伝令のやり取りを忙しなく行っており、彼の周囲には眉間に縦皺を浮かべた作戦参謀たちが最終作戦要綱の確認に余念がなかった。

本来ならば最も忙しい立場にあるはずの彼だったが、現時点の彼がすべき事は何一つとしてない。すでに筋書きの決まった演習において、部隊編成や作戦概要などの事前の段取りを全て終えてしまえば、後は下の者に任せて状況を見守ることだけが彼の仕事だった。

何かと現場の実情というものに首をつっこみたがる大統領側近や政府の高級官僚たちを、軍規を理由に丁重に発令所から追い出し、ある者は要塞内に設置された見学スペースへ、それでもしつこく食い下がるならば、たっぷりと恩義をかけた上で守備側艦隊の艦船に放り込むことで事なきを得た。いずれ彼自身が政界に打って出た時にでも貸しを回収できるよう、側近たちには十分に言い含めてある。

眼前に広がる机上のホログラフモニターにはプルリヤシュ要塞とその周辺に位置する艦隊が初期配置に着きつつある様子が光点となって浮かび上がり、刻々とモニターされている。レンブラントはそのうちの一つ――攻撃側艦隊旗艦《アルハンヴラ》を示す光点に注目していた。否、彼の意識はその艦に座乗しているはずのルオ・ウースィー宇宙軍大将に向かっていた。

時代の変化に疎く、現状維持という名の後退を良として変革というものを極端に嫌い、未来に踏み出そうとする下の世代の行動には

大義名分を振りかざしながら何かと干渉し、時に阿漕な手段で妨害を図る――苦汁をなめさせられた事は一度や二度ではない。自身の老いに背中を向けるかの如く時として無責任な思いつきで周囲を混乱させ、その後始末を次の世代に押し付ける――老害という言葉をこれ以上はないというぐらいに端的に示す彼の存在はレンブラントにとって腹立たしさ以外の何者でもない。

思い返せば的外れな批評と批判しかされた覚えのないプルリヤシュ計画の節目とも言うべき完成披露式において華を持たせても尚、それ以上を求めようとする老人の図々しさはレンブラントを始めとした周囲の失笑を買っている。

「年寄りはネコでも抱いて日向ぼっこでもしてればよいものを……」

レンブラントの冷ややかな呟きは周囲をぎょっとさせるものの、皆何事もなかったかのようにそれを聞き流している。いかに彼の側近とはいえ、不用意な相槌は自身の首を絞めかねない。すっかり組織人として去勢されてしまった彼らは皆一様に押し黙り、自身の作業に没頭することで眼前の事態から逃避していた。うっすらと漂う発令室の苦々しさをまろやかな紅茶の風味とともに呑み込みながら、レンブラントはただ静かに演習開始の合図を待っていた。

演習開始の合図として恒例の照明弾が煌々と宙域を照らすと同時に、グリーン・ワイアット大演習は定刻通りに開始された。

砲撃有効射程距離からはるかに離れた距離でにらみ合っていた双方は次第に距離を詰めるにつれて、その艦隊陣形を変化させる。半球の底面を互いに向け合ったオーソドックスな半球陣形から数に勝る攻撃側艦隊はその陣形を十字陣に変化させたのに対し、同じく半球陣で対峙していた防御側艦隊は横列陣にその陣形をシフトさせた。

宇宙世紀のあらゆる戦術に影響を及ぼすこととなったミノフスキー粒子を散布しつつ、両艦隊のスラスター光からはさらに小さな光が生み出される。先発のＭＳ隊の発艦を示すその輝きは、やがて数か所に集まって編隊を組むと直ぐにその輝きを消し虚空の闇に同化した。

その間にも攻撃側艦隊群は着々と距離を詰め、陣形を整える。優秀なシステムに補助された操舵士達がいかんなくその腕を発揮することで、艦隊群は指示された陣形を漆黒の闇の中に体現させつつある。横長の十字陣形が十分に確認できるようになると同時に攻撃側艦隊からは演習用弾頭を搭載したミサイルが次々に発射され、防衛側艦隊もそれに応戦する。ミサイル射出時の衝撃が艦体を揺らし、各艦内はもはや実戦さながらの緊張感に包まれつつあった。

新型統合戦術プログラムはこのあたりからその本領を発揮することとなる。

演習参加中の各艦のあらゆるデータが、攻撃防御両艦隊旗艦およびそれに従属する情報処理艦に送られ、さらにそれらのデータがプルリヤシュ要塞に送信され統合される。統合されたデータから仮想演習画面が構築され、再びそれが各艦隊へと送られることになり、艦船およびＭＳ隊はその仮想演習画面の表示を元に作戦行動を行うのである。

ＭＳ発艦時のミノフスキー粒子拡散もあくまで仮想データ上の事であり、実際にミノフスキー粒子の阻害を受ける事のない宙域では暗号化された大量のデータが要塞周辺宙域を行き交っていた。ほぼタイムラグなしでこれらの膨大な処理を行う事が出来るのは、ひとえに宇宙時代に暮らす人類の驚異的な科学技術があってこそだった。

射出されたミサイル群が生み出す無数の光跡を狙って漆黒の闇の中に姿を隠していたＭＳ群が一斉に砲撃を開始する。

演習出力にまで落とされたビーム光を受け、撃墜判定された演習

用ミサイルが次々に自爆し、宙域に光の華を咲かせる。ビーム光のシャワーをくぐりぬけ、熱源追尾システムを発動させて迫ってゆく僅かな弾頭群も待ち構える守備側艦隊によって全て撃墜される。

ミサイル群の掃討を終え、その位置を互いに把握し合ったＭＳ隊同士が小競り合いを始め、ビーム光が宙域を行き交う。中遠距離での砲撃戦がメインであるものの、演習開始早々の撃墜判定によるリタイアという不名誉は避けたいのか、ＭＳ隊の動きは実に手堅い。もっとも一度火が付いてしまえばとたんに乱戦になりかねない事もあり、コックピット内のパイロット達は決して油断できなかった。

その間にも着々と前進していた攻撃側艦隊がついに主砲の有効射程圏にたどりつくと、控えめに動いていた演習空域の時計は一気に加速する。

露払い役のＭＳ隊に撤退命令をだすと同時に攻撃側のメガ粒子砲の一斉砲撃が始まる。ビーム・シールドやかく乱幕で第一波をしのいだ防御側艦隊は、対艦ミサイルで応戦し、撹乱幕の散逸と同時にメガ粒子砲でさらに応戦した。戦闘に熱くなりすぎて撤退命令を無視して宙域に残っていた数機のＭＳが巻き込まれ、撃墜判定を受ける。

仮想演習画面内の戦闘はいよいよ熱くなり、行き交うエネルギー光や艦隊各所で生じる爆光を目の当たりにした多くの者たちの闘争本能を刺激しながら、演習はいよいよ佳境へと移りゆくのだった。

エアロック解放の警告表示がＭＳハンガー内に明滅し、同時にサイレンが無線を通してけたたましくヘルメット内に響き渡る。

第一波として出撃したブルー・チームの3機が撃墜判定されることなく皆無事に帰投し、所定のガントリーに固定された。まだ、機体のそこかしこが熱を持っている事を十分に注意しながら、《エナド》ＭＳメカニックのアイシャ・マーディン曹長は自身の担当機体である０７号機のコックピットハッチに近づいていく。

機体状況はすでに端末でチェックしてはいるものの、宙空を泳ぎながらも目視での確認は決して怠らない。機械の判断が絶対的に正しいならば彼女達の存在は必要ない。同僚達も彼女と同様に機体にとりつくと即座に点検を開始する。異常がなければ直ぐに推進剤の補給をするように指示を出すと、彼女はコックピットハッチを開いて、見慣れたノーマルスーツ姿が現れるのを待った。

真空状態のハンガー内で音もなく開くハッチの中から現れたノーマルスーツ姿に手を貸しつつ、彼女はこつんと僅かに音を立ててヘルメットを合わせた。

「調子はどうですか？　中尉」

「ダメだな、下手くそばかりだ……」

まだ彼の意識はつい先ほどまでいた演習空域にあるのだろう。

バイザーの奥にやや憮然とした表情を浮かべてカーク・レイナードは不満を口にする。その言葉が愛機に対してではなく、先ほどの戦闘に対してである事くらいは十分に承知している。

いつもはお気楽上官などと何かと話題に事欠かない彼ではあるが、ＭＳの整備に対する注文は殊更に厳しい。優れたセンスをもつ乗り手である故か、《Ｆ９１》の能力を十分に引き出そうと様々な要求を行ってくる。同僚達と連携し合ってその要求に十分にこたえるべく試行錯誤する毎日はメカニック冥利につきるというものだろう。そんな彼を以てしても、未だに機体の限界能力を引き出すことができないのだから、この《Ｆ９１》という機体の潜在能力が時として空恐ろしくなる。

カークが第一声で先ほどの戦闘内容に不満を口にするという事は

機体には何の問題もないといえた。凹凸に乏しい胸をわずかに撫で下ろしながらも彼女は彼に話を合わせる事にする。

「仕方がないでしょう、正規の部隊ではない連中も混ざってるんですから。実戦経験だってあるかどうか怪しいもんですよ」

「そうは言うけどなあ……」

ＭＳを扱う以上、それなりに厳しい訓練は積んでいるのであろうが、このような大規模演習においては勝手が違う。広大な演習領域と大規模な戦闘に呑まれ、立ち位置を見失い、すっかり舞い上がってしまった者達も少なくない。

単調な動きのままに不用意に接近してくる機体群をカモ打ちの要領でブルー・チームの３機で交互に撃墜判定を与えていくのは、もはやコンビネーションやチーム戦術以前の問題だった。いくら実戦の場ではないとはいえ、あまりにも力量差がある相手を圧倒するというのはあまり気持ちのよいものではない。

舞い上がっているのは味方も同じで、後ろから誤射されるのではないかと冷や汗ものである。演習をゲーム感覚で楽しんでいるわけではないが、どうにもいつもと勝手の違う状況に戸惑っているのはカークだけではないようだ。

フラストレーションが抜けきれない様子のまま機体の調整をアイシャに任せ、レストルームへと向かっていくカークの後ろ姿を、彼女は肩をすくめて見送るのだった。

つい先ほど無事に帰投したカークとすれ違いざまにハイタッチを交わした《エナド》ＭＳ隊パープル・チームリーダーであるテッド・ジャクソン大尉は、そのまま自身の機体に向かっていた。

「ご武運を」という言葉と共に彼を敬礼で迎えるメカニックに親指

をあげて返答したジャクソンは、乗りなれた愛機のコックピットに潜り込む。彼の着座と同時にシステムがスリープモードから一斉に目を覚ます。コックピット・ハッチを閉じると同時に内部にエアが供給され、次々に各部の状態がモニター上に映しだされる。その全てをさらりと見渡し異常がない事を確認した彼の耳に、艦内無線の音声がけたたましく響き渡る。

「ヴェスバーの照準が甘いわ！　調整し直して！」

「メガランチャーに比べれば照準が甘くなる事は仕方ないんですよ、少尉！」

「右と左で命中率が違うってのも、あたしの腕のせいだっての？」

「すみません、直ぐに確認します！」

聞きなれた気の強い女の声が心地よく耳朶を打つ。

後ろ向きの姿が全く想像できない同僚の姿を探して、ジャクソンの目はコックピット内の全天周モニターを追った。

目指す姿は直ぐに見つかった。

真空のハンガー内において、ノーマルスーツ姿でも、そのグラマラスな身体のラインは一目瞭然である。「口さえ開かねば……」という評価の通りの彼女は先ほどの戦闘で気が立っているのだろう。いつもよりさらに強い口調で機体への不満を口にしている。もっとも機体の不備はパイロットの生死に直結する問題であるから彼女の要求は当然であるといえた。

「向いてないんだよ……お前は」

何気なくぽつりとつぶやきが漏れる。

それはすでに何度も呑み込んできた決して彼女に伝えることのできない言葉である。面と向かって言えば、間違いなく次の瞬間には、強烈な右ストレートが飛んでくるだろう。

技術もあるし、度胸もいい。女にしておくのはもったいないなどと言えば数多の男女平等主義者達から袋だたきにされかねない。

だが、そんな彼女の事をジャクソンはＭＳパイロット、いや軍人には向いていない――心の中でそう評していた。

軍人とは結局のところ人殺しが商売である。
強力なビーム兵器を扱い、敵対する者に対して時としてその自身の判断において命を奪い取ることとなるＭＳパイロットは、自身の行為に対して大きな責任がつきまとう。ゆえに連邦軍内では他の兵科の者に比べてＭＳパイロットたちはよりよい待遇を与えられている。
彼女とて《エナド》ＭＳ隊の一員であり、すでに幾度もの実戦をくぐりぬけ、敵対したパイロットの命も奪っている。だが、パイロットとして常に高みを目指す彼女には、まだその本当の重さが実感できていないのだろう。その事に気づく前にＭＳから離れ、もっと平和な場所で違った人生を謳歌する姿を見てみたいものだ、などと思うのは男の傲慢というものであろうか？　軍人という因果な商売にどっぷりとつかって、その美貌を曇らせる前に、願わくば……。
「向いてないんだよ……お前は」
流れてゆく彼女の姿を目で追い続けながら、再びぽつりと呟いた。
同じＭＳパイロットであるジャクソンがその言葉を告げれば、例えそれが真実であったとしても決してまっすぐに伝わることはないだろう。いやむしろそれを侮辱と捕えるに違いない。直属の部下でないという適度の距離を置く事が出来る現状は、ある意味では幸運なことなのかもしれない。
自身がたぐいまれな美貌の持ち主である事を指摘されれば嫌な表情を浮かべずにはいられない少々ひねくれた性格の彼女が、レストルームに消えていくのを見送ったジャクソンは、決して口にはできない言葉をしっかりと腹の中に呑み込んで発艦準備に入っていた。

（２０１０／１２／２５　Ａｒｃａｄｉａにて初稿）
（２０１１／０８／２１　本サイトにて初稿）

05

演習はいよいよ佳境へと達しつつあった。

ビーム・シールドや撹乱幕の効果ゆえに双方にさほどの損害は生じないまま、艦隊同士の激しい砲撃戦が終わり、攻撃側艦隊は後退し、同時にＭＳ隊が再び発艦する。

ミノフスキー粒子の発見を機に誕生し、驚異的な進化を遂げてきたＭＳ同士の戦闘が演習宙域のそこかしこで展開し、無数のスラスター光が宙域を乱舞する。その機動力と驚異的な運動性能、そして時代と共に着々と威力を増してきた強大な攻撃兵装によって、宙域の覇者として半世紀以上君臨し続ける最強の兵器がその真価を発揮し始める。

時に規則正しく、時に無秩序に――いくつもの光が様々に交錯しては漆黒の宇宙（そら）に流星群の如く舞い踊る。

己の技術に絶対の自信を持つ者、厳しい訓練によって培われたチームワークで仲間と共に状況を乗り越えようとする者、それぞれが信じるものを胸に己が誇りをかけてパイロット達は闘争本能の赴くまま、目の前に立ちふさがる敵に挑んでいく。

無数の輝きが激しく交錯しては離散し、再び敵を求めて交錯と離散を繰り返す。闘争本能の充満する宙域はやがて、勝者と敗者という二者を生み出し、撃墜判定を受けた敗者の機体がすごすごと自艦隊へと向かって帰投する様子を尻目に、宙域に留まり続ける勝者の機体は更なる敵を求めてそのテールノズルを激しく輝かせる。

漆黒の空間に激しく明滅するその無数の光はあたかも命の光のようであり、対立する他者を排除してでも生存し続けようとより強く輝く様は、強い種へと生き残りをかけて闘争を繰り返してきた生命

の歴史を物語っているようだった。
戦域制圧を目的としたＭＳ同士の激しい攻防戦は当初の予想に僅かに反して、防衛側に有利に傾いていた。
数に劣るものの緊密な連携と質の高い戦力を中心に布陣した防衛側ＭＳ隊に対して、攻撃側ＭＳ隊の戦力数は圧倒的優位にはなりえなかった――演習終了後の戦況評価ではそのような報告がなされるのであろう。
僅少な誤差を生じつつも、全体の流れ自体にさほどの影響を与えることもなく、大演習はプログラムの規定通りの指示に従って順当に経過を推移させていた。
華々しいＭＳ戦も勝敗という絶対的な結果を以てやがて終焉を迎え、僅かに劣勢な色を生じ始めた攻撃側艦隊がさらなる艦隊行動に出ようとしたその時――異変が生じた。

横長の十字陣内に位置する攻撃側左翼艦隊――その一角にアレキサンドリア級《ゲオルグ》は周囲の艦船と共に静かに身を潜めていた。
やがて、指揮艦船の指示により艦隊全体が前進を始める。
艦船の心臓部である強力な動力炉が生み出す振動と共に徐々に大きくかかり始める荷重を、愛機の暗いコックピット内で軽快なリズムで心地よい韻を踏みながら飛び跳ねるラップのリズムに心を預けていたジノ・ヴァレンタインは、敏感に感じ取っていた。
（出番だな……）
システムを起動させると同時に周囲のモニターが煌々と輝き始め、直ぐにデッキ内の様子へと変わる。
デッキ内に人の気配はない。代わりにあるのはアイドリング状態で待機する物々しいシルエットの機体群だった。

自身の眼前にあるその一つを注視する。

ＲＧＭ－１０９《ヘビーガン》――まだジノが《ＸＸＸ》の前身だったオンボロ警備会社に所属していた頃に乗っていた機体である。旧式化し軍より払い下げられた故障がちな機体を操って、何度も危ない橋を渡っていた頃が、さほど時がたっていないにも拘らず、懐かしく思い出される。だが、今、彼の眼前の機体にはそんな見慣れた機体のラインは僅かに残るだけで、そのフォルムは異彩を放っていた。

軽量化を目的として肩部から脚部まで背面の装甲は全て取り払われ、代わりに、通常の倍近くあるバックパックを背負っている。本体のジェネレーターの出力不足を外付けのシステムで補っているのだろうが、その独特な形状はさらに別の用途がある。

『あんなのは人の乗る機体じゃねえ……』

補充された機体に手出しすることを禁じられた《ゲオルグ》メカニック達の陰口を耳にしながら、ジノはその機体に乗ることとなる少年達の姿に思いを馳せていた。

『奴らには近づくな！』

補給物資と共にやってきた補充人員の面子を拝んでやろう、といきり立つジノにかけられたゴルドの忠告は、右から左へと当然の如く聞き流される。

ゴルドのようにそれなりの年齢と経験を積めば、相手も相応の態度を取るのであろうが、自分達のような若造にまで礼を尽くすような物好きはそうそういない。腕が物を云うこの稼業、ナメられたら終わりなのである。自分よりも年長であろう胡散臭いＭＳ乗りたちに、挨拶代わりの先制攻撃をかまして、上下関係をはっきりさせておいてやろう――そんな思惑を胸にゴルド達の目を盗んで、ジノは補充人員の見物に行った。

だが、そこで彼が見たのは、自身の常識でまったく図ることのできず、おそらくは一生理解できないであろう世界だった。

汚い者、卑怯な者、弱者を平気で嬲り利用しようとする者――社

会の底辺近くにいればそういった輩とは嫌でも知りあうことになるし、争う事にもなる。だが、それでも彼らはまだ『人間である』と言えた。『人間である』からこそ争い、蔑み、醜くも必死に生きようとする。

しかし、《ゲオルグ》にやってきた彼らは違った。どこか焦点の定まらぬ瞳とこめかみに電極を張り付けたその異様な出で立ちは、彼らが自分達と同じ人間であるという事を放棄していると感じられた。彼らの付き添いの男に睨まれつつ追い返されることとなったジノは、ようやくゴルドの忠告の意味を理解した。

そんな彼らの姿を『可哀そうだ』などとは決して考えない。それは現実を知らぬ者の戯言であり、そんな同情をするほど自身に余裕があるわけではない。いかなる理由があるにせよ、彼らも又、違う世界のルールによって生かされ死んでいくこととなる。たまたま同じ船に居合わせ、ほんの一時すれ違うだけの関係――それが正しい判断なのだろう。

「大きなお世話なんだよ、おっさん！」

この程度で動揺されては困る――そう考えていらぬ忠告をしたのだろう。ここ暫くその顔に幾分精彩を欠いた様子を時折浮かべる男の背を思い浮かべ、中空に向かって中指を立てる。その原因はきっとネーナとの関係であろうなどと、勝手に憶測するジノだったがその事を軽々しく口外するつもりもない。尤もその事実に先に気づいたのは妹のリリアの方であったが……。

（あんたが思ってる以上に、こっちは大人なんだ！）

すでに愛機のコックピットに乗り込んでいるゴルドに内心で不満をぶつけながらも、ジノは自身が見た事実を妹のリリアにだけは決して告げまいと心の中で誓っていた。

プルリヤシュ要塞防衛側艦隊司令官、テオドア・レンブラント中将が異変の知らせを受けたのは、小用を済ませ自身の席に再び着座しようとしたときだった。ここ数日、様々な準備に追われ睡眠不足気味のせいか、思っていた以上に疲労している事に鏡の前でようやく気づき、事が全て終わった暁にはなんとか休暇の一つもとりたいものだ、などと考えながらの矢先に訪れた青天の霹靂ともいえる事態だった。

攻撃側左翼艦隊の突出――それは全く予定外の艦隊行動だった。

僅かに優勢、もしくは引き分けであろうと予想された第2波のMS戦において、数に勝りながらも戦局に決定打を与える事が出来なかった攻撃側艦隊は艦隊陣形を十字陣から円錐陣へとシフトさせ、艦隊を護衛するMS隊と共に守備側艦隊の中央一点突破を図ることとなっていた。これに対して防御側艦隊は横列陣から鶴翼陣へとシフトさせ、攻撃側艦隊を懐深く呼び込んで、最奥部に位置するプルリヤシュ要塞の火力をも合わせて一気にせん滅し勝利宣言を行う――これが当初の演習の筋書きだった。数個艦隊規模の戦力を以てしても連邦軍の牙城は崩れ落ちる事はないという厳然たる事実を示すことで、地球圏全域に潜む不法集団に恫喝を加えることがこの演習の目的の一つだった。

決して失敗は許されないが故、演習内容についてはその工程の確認に事前に多くの時間が割かれていた。統合戦術プログラムの絶対遵守、それが最優先事項として全ての艦隊責任者達に厳命されていた。人が機械に使われる――そんな命令に多くの者達が内心苦笑しながらも、過去に前例のない規模の演習を成功させる為に合理的であろう、と予想される最上の選択肢に従う事に軍人らしく忠誠を誓っていた。

その上でのこの事態である。これまで事あるごとに何度も苦汁を舐めさせられ、おそらくはこの事態にも一役買っているに違いないと予想される人物の姿がレンブラントの脳裏をよぎった。

「あのヒヒ爺ィめ……」

この期に及んでも自分に恥をかかせ、あわよくば失脚させようとする腹積もりである事は目に見えている。だが、人目をはびこる事もなく発せられるレンブラントの毒舌も悪化の一途をたどりつつある周囲の喧騒にかき消されていく。

想定外の攻撃側左翼艦隊の行動により、一部のプログラムがエラーを表示させ始め、事態に対処しようと優秀な技術士官達が対応に追われていた。だが、皮肉なことに優秀な彼らの迅速な対応が更なる事態の悪化を招くことになるという事を、この時、誰も夢にも思わなかった。

次々に起こるトラブルに対処しようとする責任者達の怒号と事態を正確に伝えようとする通信士達の緊張したやり取りがプルリヤシュ要塞発令所を喧騒に陥れ、レンブラント達の眼前に表示されるホログラフには様々な色彩に彩られた図形や数字を用いて示される戦域情報がめまぐるしく表示を変える。

だが、想定外の事態が引き起こす混乱も、優秀な技術者や現場士官達の能力の前では、演習そのものを根本的にゆるがせる脅威となりえなかった。次々に打たれる的確な指示によって、仮想演習画面上のエラー表示は次々に消滅していく。事態の鎮静化は時間の問題となりつつあった。

攻撃側艦隊と連絡を取ればなんとか事態を打開する事は可能であるという側近たちの言葉に胸をなでおろしつつあったレンブラントだったが、再び彼の心を逆撫でする間の悪い提案が舞い込んだ。

「中将、攻撃側艦隊司令官より演習中止の要請がきております」

「ふざけるな！　何を今更！」

周囲の者達が一瞬その作業を止めるほどの剣幕で、その報告にレンブラントは激昂した。

時を同じくして――。

攻撃側艦隊でも想定外の異常事態に混乱の様相を呈しつつあった。

攻撃側艦隊旗艦《アルハンヴラ》――かつてのドゴス・ギア級を彷彿とさせる巨大さを誇る艦体からは強力な攻撃兵装は極力排除され、戦場の主力であるＭＳの搭載もない。代わりに通信、索敵、および情報処理能力を徹底的に強化し、防御兵装として、自動防衛システムによってコントロールされた機銃座が多数設置され、ビーム・シールドシステムだけでなく、艦船には珍しいＩフィールド・システムが防御兵装として搭載されている。推進システムも強化されその船脚は実質地球圏に存在するどの艦船にも劣ることはない。もっとも常に艦隊行動の中心に位置する事を前提に設計されたこの艦がその推進能力を全開させることがあるとすれば作戦に失敗し撤退する時のみであろうから、その能力を十全に発揮することは実質的にありえないといえよう。

従来の戦闘ブリッジ形式をさらに発展させ、艦の指揮発令所は完全に内部ブロックへと移行しており、いわゆる艦橋部というものは存在せず、従来型とは弱冠異なる設計思想によって造艦されていた。

連邦政府が月へと移転することで人類の視点が完全に宇宙へと向けられ、生まれてから死ぬまで本物の海というものをおそらくは見るだろう事のない技術者たちによって、これからの時代はこのような設計の航宙艦船が次々に生み出されていくことになるのだろう。

そのような時代の最先端ともいうべき技術の結晶に囲まれた司令官席に座っていた攻撃側艦隊司令官ルオ・ウースィー大将の下に、次々に異変の知らせが緊張した部下達の声によって届けられていた。

統合演習プログラムの指示を無視した左翼側艦隊の突出――それが異変の先ぶれだった。

ルオの眼前には攻撃側艦隊の全艦艇の行動の様子を逐一モニターしているホログラフ・モニターが煌々と輝いている。だが、そこに淡々と表示されていく戦域情報の詳細を把握するにはルオはあまりに年をとりすぎている。

そんな彼に代わり周囲の側近たちが彼の目や耳となって、情報を収集分析し分かりやすく事態を報告する。組織とは結局は人間の集団であり、誰もがそこに必要とされたいと願う心を巧みに利用することで、個人でできうる仕事よりもはるかに大きな事をやり遂げればよいのである。技術の革新に置いてけぼりにされた自身を徒に蔑むのではなく、それを補う方法を見つければいい――それがルオのやり方である。

「件の艦隊の責任者は誰か？」

その問いに一人の側近が速やかに返答をよこす。その名を聞いたルオは渋い顔で一つ舌打ちをする。同じ多数派内の将官でありながらも何かと野心と猜疑心が強く、事あるごとに策謀を展開させ、密かにルオの座を狙っている事で有名な男だった。軍内部だけでなく彼の個人的なコネクションの力も後ろ盾となっており、烏合の衆的な多数派を取りまとめる為、時として互いに融通し合う事もあって、決して軽く扱える者ではない。

「艦隊突出の理由は何か？」

「はっ、当該艦隊側が申しますには、演習プログラムの指示通りに動いていると……」

「指示通りだと？」

ルオの眼前のホログラフには当初の予定通りの艦隊行動が支持されている。彼らの主張を信じるならば彼らの側にはこれと異なった指示がなされている事になる。

「プログラム側の不備であるなら、なぜ是正しない？」

「現在本艦、情報処理艦、およびプルリヤシュ要塞側も含めて、目下原因を究明中でありますが……、なにぶん想定外の事態であり、演習プログラム自体も真新しいものであるためその対応に四苦八苦しているのが現状で……」

「便利なものに直ぐに飛びつくからだ……」

吐き捨てるようにルオは呟いた。その言葉は今頃プルリヤシュ要塞内の発令所で顔色を変えているであろう男への当てつけであった。とはいえ、彼の招いた失策を嘲笑っている場合ではない。宇宙軍大将という自身の立場に飛び火しかねない混乱しつつある事態の打開は最優先事項だった。

「後退命令は出しているのだろう？　なぜ、こちらの命令に従わない？」

「最優先命令である演習時のプログラムの絶対遵守の解除用件には閣下だけでなく、防衛側艦隊責任者の許可が必要であるとの一点張りで……」

その言葉にルオは渋面を浮かべた。

両艦隊の司令官による合意の下での一部命令の撤回、それが最も合理的な解決手段であるはずなのだが、その合意を速やかに導き出すにはルオとレンブラントの間はあまりに遠かった。組織人としての二人の隔たりとこれまでに培ってきた不信と憎しみの関係は、混乱しつつある現状の打開をさらに悪化させるに十分な触媒であった。ルオ自身、この事態を招いた遠因が決して自分ではないとは言い切れない為、思い切った手段に打って出る事は難しい。

グリーン・ワイアット大演習――歴史的事実を知る者にはこれ以上はないと言うほどに不吉な名を与えられた当該演習において、レンブラントがその指導力を発揮し、軍内外にその存在と実力をアピールしようとするのをみすみす指を加えて眺めているほどルオとて愚かではない。

おそらくは長く記録に残るであろう大演習を利用し、その名を刻

みこみたいがために様々な裏工作を行って故人の名誉回復を図ろうとした遺族達には悪いが、それなりのトラブルを起こしてレンブラントに汚点を残させんが為の意思を事前に側近の一人に匂わせていた。

（これは貴様が仕掛けた事か？）

そんな意図を込めたルオの視線に彼の側近は顔色を変えたまま首を振る。その反応はルオの想像通りのものだった。黙示的に与えられた指示に対し、自身やルオの立場をも危うくしかねないような愚かな行為に及ぶほど無能な者を側に置いたつもりはない。彼の仕掛けはもっと小規模かつ巧妙なもののはずである。

「閣下、演習の中止を打診しては如何かと？」

別の側近がルオに具申する。

だが、現状を打開するために最も消極的ではあるが、おそらくは最も無難なその提案を巡って、側近間で口論が始まった。演習の中止が受け入れられる事で誰がその責任をとるのか、別の善後策の可能性も検討せずそもそもその提案自体があまりに尚早ではないのか、あるいはこれは少数派の側が仕掛けた謀略ではないのか――ホログラフで状況の推移を注視するルオの眼前で、彼らは結論の出そうにない議論に紛糾していた。

しばらく静かにその議論に耳を傾けていたルオはやがて決断を下し、レンブラントに対して演習中止の要請を打診した。しかし、時すでに遅く、間の悪いタイミングで彼の下に届いたその提案は更なるレンブラントの怒りと共に一蹴されることとなった。

（２０１１／０１／２２　Ａｒｃａｄｉａにて初稿）
（２０１１／０８／２８　本サイトにて初稿）

06

僅かに時を遡る――。

戦域の制圧と支配権をかけて争われた第2波のＭＳ戦において、《エナド》ＭＳ隊パープルチーム・リーダーのテッド・ジャクソンは予想よりも圧力の小さな敵部隊との戦闘に僅かに戸惑いの色を見せていた。

《エナド》をはじめとした２０８特戦隊の４隻の艦は守備側艦隊の右翼側に組み込まれ、最も翼端側に近い位置に配置されていた。周辺の宙域には数隻の連邦艦艇が２０８特戦隊の艦艇と同様に配置され、さらに臨時編成されたコロニー守備隊や、民間軍事企業の艦艇が仰々しく轡を並べている。統合演習プログラムの下でさほど大きな艦隊行動を必要としない宙域に配置された彼らを指揮及び監視するのが《エナド》を始めとした連邦艦艇の任務だった。

ＭＳ隊も同様で、数こそそれなりにあるものの、寄せ集めの集団色は隠しきれず、戦域制圧を巡って華々しく宙域を踊る他の部隊の活躍を尻目にジャクソン達パープル・チームのメンバーは後方に下がり、彼らのカバーを行っていた。

第1陣をブルーチームに譲り、おそらくはＭＳパイロットの腕の見せ所となる戦域制圧の第2陣を受け持つ――たかだか2個小隊のＭＳチームをわざわざ分けて出撃させるのは、実のところ件の二人の暴走を恐れてのコーナーの思案の結果なのではないか、というのは思いすごしというものだろうか？

いかに高性能機とはいえ、2機の《Ｆ９１》の暴走が、数個艦隊規模の戦力同士がぶつかる演習において及ぼす結果など、たかが知れ

ているというのがまともな判断であろうが、それでもあの二人のやることである。何度も二人の衝突を目の当たりにしていると、もしかしたらという微妙な期待感を抱かされてしまう。チームリーダーとしてはともかく、一人のＭＳパイロットとして幾度も二人の激突をはらはらしながらも楽しんできた身としては物足りなく思うが、さすがにそろそろ実現化の影がちらちらと見えてきた滅俸処分に巻き込まれる事だけは免れねばなるまい。

そのような実情の中で出撃した演習宙域において、ジャクソンは奇妙な違和感を抱き続けていた。

明らかに数の勝る攻撃側艦隊の搭載ＭＳ数は当然、防衛側を大きく上回る。こちらにもそれなりに手錬れのパイロットがいるものの、所詮、寄せ集め部隊である。演習前のシミュレーションや予行訓練においても苦戦させられており、この問題に対して周辺の連邦艦艇に所属するＭＳ隊の中で何度も議論されてきた事だった。

いかに戦力差に開きがあり、筋書きが決まった演習とはいえ、やられっぱなしというのは気に入らない――ＭＳ乗りの誇りを胸に多くのパイロット達が様々な策を練り、効果的な連携を模索した。

はじめはそんな自分達の努力が実を結んだのだ、などと思ったものだが、戦況分析データは残念ながら彼の予測とは異なる結論を出しており、こちら側に攻撃を行っている敵ＭＳ隊の総数が想定数よりも少ないようだった。演習の筋書きがある程度決まっている以上、相手を出し抜くような戦術は禁じられており、何らかのトラブルでもあったのだろうかなどと思っていた矢先のことだった。

モニター内の左翼艦隊を示す表示が一瞬すべて消える。故障かと思い、幾度かのリンクを試みた後で再表示された艦隊の位置にジャクソンは眉をひそめた。十字陣形を崩した左翼艦隊のみが、突出し始めている。双方の艦隊の主砲有効射程距離内に入るのは時間の問題だった。

（何やってんだ、あいつら？）

明らかにミスとしか思えない行動をとる左翼艦隊に不信感をあらわにする。このままいけば防衛側艦隊との砲撃戦が始まる事になるだろう。いかに数に劣るとはいえ防衛側艦隊は突出する艦隊に対して圧倒的多数である。強大な威力を誇るメガ粒子砲の一斉砲撃を受ければいかに防御兵器を展開したとしても、全滅判定は免れないだろう。一ＭＳパイロットですら分かってしまうこの失策は後々、様々な議論を呼ぶことになるのは間違いない。

「何人のクビが飛ぶことになるかな？」

今一つ信頼がおけなくなりつつあるモニターやコンソールの表示に注意を払いながら、ジャクソンは皮肉気な笑みをこぼす。

責任をなすりつけあうお偉いさん達の椅子取りゲームは、総体的に保守的な戦略に凝り固まった連邦軍の方向性そのものに影響を大きく与える事は出来ないであろうが、軍内部にはびこりつつある不信と不和を助長する一要因にはなるだろう。

直接的ではないにせよ予算を始めとした様々な方面で影響を与えかねない上層部人事の臨時異動は、自分達のような末端にも確実に影響を与えることになるだろう。特に２０８特戦隊のように上層部の肝いりによって設立されたものならばなおさらである。

そんなジャクソンの想いをよそに、左翼側の突出により取り残された形の攻撃側艦隊の本隊は、当初の予定通りに円錐陣にその陣形を再びシフトし、突出艦隊に遅れて前進しつつある。突出艦隊の修正はもはや不可能だと判断されたのだろう。

突出艦隊が補うはずの宙域はそのまま空白化し、残存艦隊の航宙灯やスラスターの輝きによって、歪に欠けた円錐が形成されつつあった。

後方艦隊からの指示に従ってＭＳ部隊が上下に分散し、艦隊間を隔てる宙域がクリアになると同時に艦砲射撃が開始される。演習出力で発射された圧倒的多数のメガ粒子の光軸が突出した艦隊群を捕

え、次々に撃墜判定が下っていく。
多くの将兵を抱えた艦船が次々に消滅し、仮想演習画面から消えていく様はあまりに滑稽で、実戦ならば明らかな犬死にだった。
戦場の主役であるＭＳに比べれば、皆無と言ってよいほどの運動性能と一つの操艦に莫大な推進剤の消費を伴う艦船による艦隊行動は、臨機応変という言葉とは程遠い。
演習のつじつま合わせの為に最も合理的な結論――異常分子の消去という発想に至った事は明白だった。
勝利という目的の為に多数の生存を優先し、捨て駒にされる――任務とはいえ、いざそんな役割を与えられてしまった将兵達の心中はいかほどのものだろう。不名誉極まりない無駄な撃墜役をさせられた彼らに僅かに同情を覚える。

ジャクソンをはじめとする多くの現場の兵士達の想いをよそに、演習は着々とその結末に向けて機械的にスケジュールを進行させていく。
後方艦隊より一時撤退命令を受け、戦場を勝ち残ったＭＳ群が次々に所属艦にむけて宙域を後にする中、ジャクソンは僅かに戦域を外れた場所で動きを止めているジュベールの０４号機の様子に気づいた。
「どうした？　故障か？」
「敵の動きが妙だ、なんらかの奇妙な作為を感じる」
ジャクソンの問いかけに相変わらず愛想のかけらもない様子でジュベールは淡々と言葉を綴る。だが、彼の言葉は先刻からジャクソンの心中で漠然と浮かびあがる疑問を少しずつ氷解して行くように感じられた。

カークとジュベールの二人には自分のような凡人には見えぬ何かが見えている。彼らと接しているうちにジャクソンは時折、そんな感覚に襲われる事がある。「そんなのは錯覚だ」というのがジャク

ソンの意見に対する同僚のサカキの感想だが、ジャクソンは己の感覚はおそらく間違ってはいないだろうと考えていた。

『特別な人間』などとまるで思春期の少年少女が夢見る幻想のようではあるが、そんな人間ばかりでは軍隊という組織は成立しない。目的の達成のために個性を否定し、自身をいくらでも換えのきく駒と化す一方で、いざ戦いの場においては個人の能力をいかんなく発揮させ任務に従事する――相反する矛盾を抱えて軍人は己の務めを果たす。

いかに特別な感性を持つ人間であろうとも、様々な意思が錯綜し、生身の人間の力ではどうする事も出来ない圧倒的な破壊力をもつ兵器が乱舞する戦場でできることなど、個人の力ではたかが知れている。そんな彼らをカバーし、支えることこそ凡人である自分の仕事である、と己を位置づけているが、当のジュベールはなかなか心を開こうとはしない。心を閉じた者にいかなる他者の言葉も通用する事はなく、必要なのは彼自身が己の価値観に疑問を呈する事になるようなきっかけを与えられることだろう。まあゆっくり口説いていくさ――などと事あるごとに自身に云って聞かせるものの、チーム内の微妙な食い違いが一向に修正できる気配はなかった。

だが、いかに可愛げのない部下であれ、ジャクソンはジュベールの感性に一目置いている。その彼が異常を感じるというのだから、予測できない何かが起きつつあるというのは間違いないはずである。

僅かにためらった後でジャクソンは戦闘プログラムの一部を通常モードで起動する。演習予定にないパイロットの行動には後でしかるべき報告書が義務付けられ、その事務的作業はパイロットにとって苦痛でしかないが、事態は急を要するとジャクソンの勘は告げていた。

プログラムの起動に要する僅かな時間が奇妙に長く感じられる。いらつきを覚えながらようやく表示されたその画面内のデータにジャクソンは眉をひそめた。

演習画面上では撃墜判定を受け、消滅したはずの艦隊の一部が、撤退することなく更なる加速をかけて前進を続けていた。本来ならば撃墜判定と共に機関を停止させ、折を見て、後方に下がり終了の時まで指定宙域にて待機する定めである。数にして十数隻――突出艦隊のごく一部ではあるがその行動には何か不気味な意図が込められているように思える。その状況をジャクソンは即座に《エナド》へと報告した。

緊急回線によってもたらされたジャクソンの独断的な行動といささか突飛な内容と思えるその報告にコーナーは眉をひそめたものの、それを傍らで聞いていたレイノルズは即座にジャクソンに命令を下した。レイノルズの命令にジャクソンだけでなく戦闘ブリッジ内の全ての人間が緊張する。つい二月前に味わったばかりの実戦のキナ臭い匂いを多くの者達が想い起こしていた。そんな彼らの尻を蹴飛ばすかのようにレイノルズは次々に指示を下していく。過去幾度もの実戦を経験した彼の勘も又、ジャクソンと同様に危機を感じ取っていた。そしてこのような緊急事態において連邦軍という組織の鈍重さと脆さを知り尽くしているレイノルズは、その背にゾクリとする悪寒を感じ始めていた。

眼下を黙々と前進しつつある謎の行動をとる艦隊を、ジャクソンは忸怩たる思いで見送りながら、戦闘システムの完全再機動の終了を待ちわびていた。がっちりとリンクしている統合演習プログラムを切り離すには一度システムを完全に再起動させる必要があった。演習上は撃墜判定されることとなるのだが、今はそのようなのんきな事を言っている時ではない。すでにレイノルズからの許可も得ており、ジャクソン以下3機のパープル・チームの《Ｆ９１》は慣性航行を行いながら、システムが僅かな眠りから覚めるのを待っていた。

時間にしてほんの一時の事ではあるが、その間にも着々と艦隊間の相対距離は詰まりつつある。その距離が詰まれば詰まるほど打てる手はどんどん少なくなっていく。そんな焦りが苛立ちに代わり、如何ともしがたい不自由なシステムの動作に理不尽な毒舌をぶつけることとなる。

やがて、システムの再起動が終了を告げると同時に溜まりに溜まった鬱憤を晴らすかの如く力任せにペダルを踏みつける。大出力のエンジンが咆哮をあげ、戦いの予感と共に全身をわななかせるのを感じながら、３機の《Ｆ９１》は追撃を開始した。

前進を続ける艦隊群に接近するほどにその異様さはくっきりと浮き彫りになりつつあった。

攻撃型陣形をとるわけでもなく無造作に十数隻の艦船が黙々と前進を続ける。そのうちの数隻は異様に熱反応が小さい。巡洋艦クラスから駆逐パトロール艇まで、まとまりのない艦種で明らかに連邦艦艇とは異なる外装の艦船が一斉に進行している。少数ながらも攻撃側艦隊にもこちらと同様にコロニー守備隊や民間軍事企業の艦船が組み込まれていることからおそらくはそういった類の連中なのだろう。このまま前進を続ければおそらく守備側艦隊の右翼端部――《エナド》の位置する宙域に侵入が予想される。

現在、演習宙域内の全艦艇及びＭＳ隊は新型統合戦術プログラムの支配下にある。一部では欠陥品などと密かに揶揄されるこのプログラムが全システムを掌握している以上、ジャクソン達と同様にシステムを再起動して戦闘プログラムを切り離さない限り、こちらの状況を各艦艇がモニターする事はおそらく不可能であろう。完全な盲目状態から不意打ちを食らえばその無残な結果は火を見るより明らかである。そんな危機を迎えているとも知らずに、演習プログラムの指示を遵守し続ける守備側艦隊の呑気さに見当外れの苛立ちを

覚える。すでにレイノルズが何らかの手を打つように動いているはずではあるが、末端の報告を速やかに取り上げて万全の対応策が打たれるほど連邦軍という組織に機動力と柔軟性はない。

旗艦と思しき艦を特定する事も出来ず、ジャクソン達は全周波数を使って当該全艦艇に接触を試みる。だが、いずれの艦もジャクソンの呼びかけに応答するかのようなそぶりは一切示さなかった。通信システムなど載せてないのではないかなどと思えるほどの完全な沈黙で応える彼らに警戒感をあらわにする。相手の意思が明確でない以上、不必要に接近はできない。行動レベルをさらに一段階上げるように部下達に指示を与えると、ジャクソンは威嚇射撃の準備に入った。

最も先頭に立つ大型艦艇に照準をつけると再度の警告を与える。沈黙で以て応える目標に対して、《エナド》から発砲の許可を得ると同時にジャクソンはライフルを斉射した。実戦出力の光弾がライフルの先端部から輝きを生み出し、光軸が艦の装甲すれすれを焼きながら漆黒の宙域に一本のラインを作る。長い時間をかけて熟成されたシステムに補助された精密な射撃は間違いなく艦全体に小さな衝撃を与え、乗組員に何らかの動揺を確実に与えたはずだった。

射撃と同時に即座に反撃を警戒する。手を出した以上、もはや戦闘は開始したも同然だった。

しかし、事態はジャクソンの予想外の出来事を生じさせた。致命傷とは程遠いはずのジャクソンの威嚇射撃に、目標はその巨体を僅かに歪めると爆散――否、破裂した。

破裂と同時に船体内に充満していたガスがスモーク上になって周囲へと広がっていく。あたかもそれが合図であったかのようにさらに先頭近くの艦船が破裂し、同様にスモークを発生させる。と同時に、残りの艦船は再度の加速の為にスラスターを全開にしてスモークの中へと突入した。さらに、ミノフスキー粒子が散布された事を裏付けるかのようにレーダーからもその痕跡を消していった。

予想外の事態にジャクソンの思考は一瞬停止する。
「ダミーだ！」
耳朶を叩きつけるようなジュベールの叫びに直ぐに思考を取り戻し、事態を把握する。すぐさま《エナド》に回線を開いたジャクソンは、怒鳴りつけるように事の顛末を報告した。
「《エナド》、聞こえるか、これはアクシデントなんかじゃない！　テロリストによる攻撃だ！　速やかな対応と指示を頼む！」
――それが、プルリヤシュ要塞宙域で起きた異変を最も正確に把握した者の第一声だった。

同刻――。
プルリヤシュ要塞内発令所において、苦虫をかみつぶすかのような表情で事態の推移をうかがっていたテオドア・レンブラント中将は好転し始めた演習状況にようやく表情を緩めていた。
懸念の原因だった攻撃側左翼艦隊が撃墜され、その存在が仮想演習画面上から消えることでプログラムへの負荷が減り、当初の予定通りの局面へと移行しつつあった。
事態の解決に奔走した技師たちと、攻撃側艦隊と折衝し、左翼艦隊を切り捨てることで、演習の最低限の体裁を保たせながらもその続行に尽力した諸将達の努力のたまものである。
弱冠の誤差はあるものの、当初の予定通りに再度移行した演習状況に発令所内からは安堵のため息が漏れ始めていた。
その空気はやがてレンブラントの周辺にも伝染し、彼の側近たちの表情も僅かに緩んでいく事にようやく気付き始めた。
ふと気づけば握りしめた手のひらは汗だくである。おそらく顔つ

きも厳しいものとなっていたのだろう。指揮官は常に冷静かつ優雅たれ、という自身の信条を思い出す。いよいよ最終局面に入ろうとしている今、まだ全てが終わった訳ではない。自身と共に周囲の気も引き締めるべく、発令所内の全ての人員に向かって檄を飛ばした。

「予定外の混乱の収拾、ご苦労だった、諸君。君達の有能さに心から感謝する。だが、まだ演習の最終局面はこれからである。気を緩める事なく最後まで己の役割を全うしてくれ給え」

当番兵に紅茶をオーダーすると再びどっかりと自身の席に腰を落ち着け、眼前のホログラフを注視する。演習は歪に欠けた円錐陣にシフトした攻撃側艦隊が艦砲射撃を行いながらＭＳ隊とともに突撃をかける最終局面に移行するところであった。

無様な円錐陣を敷いた攻撃側艦隊指揮官の顔を思い浮かべ、鼻で笑う。

（ただで済むと思うなよ……。責任はきっちりと取らせてやる）

目障りな老人の転落の様を思い浮かべながら、いかに彼を追い詰めていくか――そこに至るまでの過程をいくつも脳裏に思い描く。自然と浮かび上がる薄ら笑いを抑える事もなく、殺気立った周囲の空気をほのかに和ませるかのような香りを放つ傍らに置かれた暖かな紅茶のカップに手を伸ばそうとしたその瞬間――カタカタと音を立ててカップが鳴り、湯面が波立った。

（何事だ？）

視線を上げると彼の側近たちも又、不安げに周囲を見回している。地上ならば『地震か？』などと言いそうなところだが、あいにくここは厳密な計算の世界の上に成り立つ宇宙である。

即座に眼前のホログラフ・モニター上の要塞内の詳細データを呼び出す。

次々におこる予想外の事態にいら立ちを隠せぬかのようにキーを叩くレンブラントの操作によって、切り替わっていく表示はやがて、低レベルの危険指数と共に『火災発生』という文字とその区画を映し出す。

現場レベルで収拾がつく事態である事を示す危険度に僅かに胸をなでおろす。何が原因かなど言う事の詳細はいずれ報告が上がるであろう。とにかく目先の演習が無事完遂される事が最優先される現状において、それを妨害する要素とはなりえなかった事を確認したレンブラントは安堵しかけた。しかし、異常はそれだけには　留まらなかった。

「恐れながら……」

敬礼と共に発令所内に入ってきた情報統括責任者がレンブラント達の席に近づいた。

先ほどまでの混乱の収拾に右往左往した為か、その顔に疲労の色をにじませながら、僅かに腑におちぬ表情と共に彼は報告を行った。

「防衛側中央艦隊の艦船のうちの数隻に損害が発生しております」

「？　何を言っている。今は演習の最終局面だ。味方側戦力に被害が出ることなど当然であろう」

周囲の側近の一人がバカな報告をするなとばかりに一蹴しようとしたが、彼は食い下がる。

「いえ、そうではなく……データ上の事ではありません。攻撃側艦隊からの砲撃と共に実際に損害が発生しているようなのです」

「発生しているようだ、だと？　貴様！　何年軍人をやっている。そんなあいまいな情報で何を評価せよというのだ！」

「申し訳ありません、ただ……」

言葉を切り、緊張の度合いをさらに増した表情で彼は報告を続けた。

「先ほどの混乱の折にシステムを修正、エラーの原因であろうと予想されるものを排除及びそれに伴いシステムを再強化したため、変更の余裕がなく、現在当要塞及び全ての艦艇が統合戦術プログラムの仮想データの完全支配下にあります。正確な情報を把握するには一度、全てのシステムを再起動させて統合戦術プログラムを切り離さねばなりません。よって、現状把握は全て手作業となりまして情報の確認に手間取っている次第であります」

責任者の言葉に一瞬発令所内は沈黙する。だがその沈黙を破るかのようにさらに一人の士官が現れ、将官達のそばで直立している責任者に一枚の報告書を渡す。手書きで荒々しく書きなぐられたその紙面に目を通した責任者はさらに表情を曇らせた。

『間違いないのか』『今、確認中でありますが、おそらくは……』

という小声の二人のやり取りにいら立った一人の側近が声を荒げる。

「今度は何だ、さっさと報告しろ！」

あまりにも突飛な内容のその報告に戸惑いの表情を浮かべていた彼は、その言葉にようやく意を決したのか、居住まいを正し、迷いのない表情で淡々と告げた。

「申し上げます。およそ3分前、防御側右翼艦隊においてテロリストが確認されたとのことです。現在戦力及びその規模は裏付けが取れておらず、現場指揮官より本部に対し適切な指示を求めております」

「何だと！」

あまりにも突拍子もない報告に、レンブラントを始めとした周囲の者達は皆絶句する。彼らの眼前では煌々と輝きを放つホログラフが、定められた演習状況の推移を淡々と機械的に表示し続けている。

裏付けのとれぬ報告に発令室周辺が再び議論の場と化そうとしていた頃、当該宙域における事態は更なる悪化の一途を辿り始めていた。

（２０１１／０１／２２　Ａｒｃａｄｉａにて初稿）
（２０１１／０９／０４　本サイトにて初稿）

07

ガス状のスモーク雲の中からは次々に小さな光が生まれていた。所属不明艦艇――否、敵艦艇に搭載されていたＭＳの出撃を示す輝きだった。

その小さな輝きを追うかのようにして、艦隊群のさらに大きなスラスター光がスモーク雲の中から現れる。

（無茶な事をする……）

戦闘速度に達しつつある艦船の移動速度を利用してのカタパルトからの射出。敵の目標が防衛側艦隊であるならば、目標の攻撃の為には相当の減速が必要となる。そのための十分な距離というものは両艦隊間にはない。必然的に加減速時に操縦者の身体にかかる負担は強烈なものとなるだろう。

（これがテロリストのやる事、か……）

勝利とは別の目的で動く彼らの行動はこちらの常識では測れない。小さく舌打ちをするとジャクソンは目標をＭＳ群に再設定し、部下達に指示を与えた。

さらなる加速をかけて艦隊群の頭上を追い越し、小さくなりつつある輝きを追随する。味方艦隊はまだ十分な対策を取れていないはずである。命令の遵守こそ絶対とする軍において、緊急時の臨機応変な対応を望むのは酷な事と言えよう。

仮想演習画面上のデータを基に展開する統合戦術プログラムの切り離しさえ行われているか怪しく、全く暗闇の中から突然襲われるようなものである。そして、ＭＳに対する艦船の相性の悪さはすでに宇宙世紀の常識といえる。少しでも敵部隊に打撃を与えて損害を生じさせねばならない。

だがその彼の意図を阻むべく、新たな動きが敵艦隊より生まれた。
前進する艦隊群のうちの一隻からさらに3つのスラスター光が生まれ、ジャクソン達の機体に接近する。その光跡にジャクソンはさらに舌打ちを重ねた。
（こいつらは厄介だ……）
ジャクソンの勘がそう告げる。
一見、ばらばらの動きの中に確かな一つの意思が見える。互いの役割が分かっており、それを引き出すための十分な信頼関係を備えた、実数の何倍もの戦闘力を持つ部隊の動きだった。
「任せろ！」
ジャクソンに要求するモニターの向こうのジュベールの表情はいつもと変わらない。その言葉にどこか安堵感を覚えると同時に、彼の要求にゴーサインを出す事が当然であると考えている自分に気づく。
チーム戦術が基本である事が前提の戦場で、その常識を覆してしまいかねない彼の力量と才能に多くの彼の元上官たちは複雑な思いを抱えたに違いない。公開されている彼の経歴からうかがえるその事実は、ジャクソンに様々な憶測を与えた。
部下を死地となるかも知れぬ場所に只一人残すということへの責任、圧倒的なＭＳパイロットとしての力量差、不器用な人柄が生み出す歪な人間関係、戦闘という非日常の世界で敵を撃破する事こそ、その存在意義が問われる軍人にとって、平和な世界でただ牙を研ぎ続けるだけの日常は、時として自身の力の矛先を誤ったものに向ける事もある。仲間や部下という誤った方向に向かった理不尽な力が生み出す矛盾はやがて集団や組織を腐らせる事もままある。
だが、今は頼もしい。この瞬間、俺はお前の力を必要としているのだ――その想いをこめてただ一言、ジャクソンは彼に命令した。
「任せる。やつらを堕とせ！」
言葉と同時に意識を前方のＭＳ群に切り替える。もはや背中の心

配は必要ない。随伴するバッジョ機と共にジャクソンは追撃を再開する。

並走するように飛んでいたパープル・チームの3つのスラスター光が2つに分かれ、互いの標的へと向かっていく。漆黒の宇宙（そら）に星々よりも激しく輝くその光が流星のように弧を描く様はどこか儚く、同時にそれは彼らの人生の大きな分岐点であった。

「舐められたものだ……」

自分達に向かって何の迷いもなく一目散に接近する一つの輝きをモニターで捕えたゴルドはそう呟いた。直に後続の艦隊群が彼らに追いつき、艦隊の発するミノフスキー粒子と互いの機体が放つそれによってレーダーは完全に役に立たなくなる。

予定と異なる出撃のタイミングは艦長のヴォラスコフの指示によるものだった。

目標に接近してから脱出までの《ゲオルグ》の援護が本来の彼らの役割であったが、想定外の事態というものはどんな時でも起こりうるものである。迂闊さが売りの連邦軍とはいえ、優れた才覚を持つ人材は必ずいるものだ。

異常事態をいち早く察知し、事態に対応する――だが、こちらの戦力を侮っているのはいただけない。そんな傲慢な鼻っ柱を叩き折ってあの世で後悔してもらおうとジノとリリアにフォーメーションの指示を出す。

敵機の予想有効射程距離に入ると同時に回避行動を取ったその時だった。自身の機体に大きな衝撃が走る。強力なエネルギー弾の輝きが《Ｆ９７》のＩフィールドにはじかれて拡散する。

（強い！）

ぞくりと背筋に冷たいものが走った。

トライアングルのトップに位置し、初撃を回避すると同時に後続の二人が仕留める――セオリー通りの戦術をとり全力の回避行動をとったつもりだった。現に相手からの初撃のライフル光は回避され、宙域に虚しく一本の光軸を生んだだけだった。だが、同時に放たれた二射目が的確にゴルドの機体を捕えた。あたかもゴルドがそこに回避する事を見越していたかのように……。Ｉフィールドがなければ直撃だった――その事実は標的が自身の予測よりもはるかに上のレベルの力をもつ敵である事をゴルドに認識させる。

直撃されたというショックから一瞬で立ち直り、思考を切り替えたゴルドはすかさず標的の姿を追う。目指す敵機はジノとリリアの援護射撃をものともせず、彼らの攻撃を無駄のない動きで回避する。

だが、こちらのＩフィールドは想定外だったのだろう。

攻撃姿勢をかえないまま足止めへと戦術を変えているのが見て取れる。だからといって隙は見せられない。気を抜けば簡単に喰いつかれる――それだけの力を持つ敵を前にして、ゴルドは次の選択を迫られていた。再びジノとリリアの先頭に立ち、３機で敵の包囲を試みる。そんなゴルド達の意図を見透かしたかのごとく敵機は大きく距離をとる。有効射程距離の優位性を武器にして時折繰り出される反撃に、うかつに近づく事は出来なかった。

僅かに生まれた時間の空白を利用して３機の機体がレーザー通信によってデータをリンクし合う。《Ｆ９１》――識別された敵機の機種と速やかに画像処理されたその見覚えのある機影にゴルドは思わず歓声を上げた。

（当たりくじを引いた！）

――何という偶然と幸運なのか！

求めた相手が目の前にある。その事実は歓喜と共にゴルドの全身を駆け抜ける。そして、それを知った今、彼の選択肢は一つしかな

かった。
「お前達は俺の援護をしつつ、《ゲオルグ》に合流しろ！　そこから先は当初の予定通りの行動をとれ！」
目の前の敵を一人で引き受ける――ゴルドの選択にジノは驚きの声を上げる。
「大丈夫かよ、こいつは手ごわいぞ」
「誰に向かってモノを言っている、小僧」
強い口調の言葉とは裏腹にゴルドの声には、どこか喜びの色が感じられる。バイザーの向こうの表情がにやりと笑みを浮かべているように感じられた。
（いい年して、はしゃぎやがって……）
心の中で毒づきながらもジノはその決定を了承した。すでにゴルドの決定はジノ達にとって従うべきものとなっていた。
「ヘマすんじゃねえぞ、おっさん」
言葉と同時に回線を切る。
ここから先の戦いは自分達兄妹に任せられたのだ……ゴルドの意思とその信頼を感じ取り、速やかに命令通りの行動に移る。
通信終了と同時に、目標に向かい突撃を掛ける小さくなっていくスラスター光に向けて援護射撃を加えながら、ジノは先行きの見えない未来に飛び込んでいく自身を鼓舞するかの如く、中空に咆哮を放った。

思い通りの展開とならなかったファースト・アタックの結果に、全天周モニターに次々に映し出される様々な表示を全て無視したジュベールは小さく呟いた。
「面倒なやつらだ……」

相手の挙動を完全に読み切って、ヴェスバーをおとりにしたライフルの2撃目の予想外の結果は、コックピット内のジュベールに小さな動揺を与えた。Ｉフィールド――連邦軍ですら制式採用されていないその兵装を備えた敵の存在が眼前にある。

小型軽量化を極限まで進められた事により、《Ｆ９１》はビーム兵器を主要兵装とし、実弾装備は接近戦時での撹乱程度にしか使えない。尤も最強の威力を誇るヴェスバーの前に立ち塞がれる敵などいないというのは歴とした事実であり、それこそが連邦軍内、否、地球圏において《Ｆ９１》という機体が２０年近くにわたって最強の座に君臨し続けている事の証だった。

だが今、眼前に立ちふさがる敵は、ビーム兵器を攻撃手段の主体とする《Ｆ９１》にとってあまりにも相性の悪すぎる相手だった。その性能こそ不明であるもののライフルの直撃を阻んだという事実は戦術に大きな影響を与える。

遠距離戦での優位性は奪われたといってよいだろう。中距離もしくは近接戦闘戦においてヴェスバーの威力でどこまで相手の動きを乱せるか？　その辺りから突破口を見出すしかない。

Ｉフィールドとて万能ではない。

直撃を与えれば粒子と磁場の反発が機体に大きな衝撃を与え、相手の動きを大きく乱すことになる。だが、相手の性能の限界と弱点を探しながら戦うには眼前の3機の敵のチームワークは厄介だった。さらにその実力を裏付けるＭＳの性能は連邦軍で制式採用されているどのＭＳよりも上であると感じられた。下手をすれば《Ｆ９１》と同等か、それ以上とも考えられる。

画像処理された捕えた敵の機影はどこかで見覚えのあるものだった。だが、それがどういうものだったかという事はジュベールには思い出せない。ＭＳマニアを自他ともに認めるあの男ならば即座に答えられるのだろうが、生憎とそこまでＭＳという道具に執着はなかった。

《Ｆ９１》、否、ヴェスバーの攻撃力に思った以上に頼り切った戦術の思わぬ落とし穴に嵌ってしまった、という事実に唇を噛む。

すでにミノフスキー粒子による通信障害の影響が出始めており、戦闘状態に入っている今、《エナド》への応援要請は厳しい。

『任せる。やつらを堕とせ！』

そう言い残したジャクソンの言葉が耳奥に残る。その言葉に十分な結果を出せなければ、自分に存在意義はない。これまで何度も衝突してきた上官たちの顔が思い浮かぶ。結果が出せなければいかなる言い訳も通用せず、奴もおそらく同じような行動をとるのだろう。だからこそ、なんとかしなければならなかった。

だが、敵との距離を保ちつつ、後退しながら足止めを行い、いずれやってくるだろう味方との合流を待つという消極策をとる以外、効果的な手段を思いつけないジュベールに対して、動きを見せたのは敵の方だった。敵機の意外な行動にジュベールは目を見張った。

頼りとするはずの味方の援護を遠ざけ、単独で自身に挑む。ジュベールの知る軍人たちとは違う意図がそこに感じられる。

（一騎打ちを望むのか……）

こちらに向かって近づいてくるスラスターの光跡に迷いはない。むしろ、ファースト・アタックの時よりも伸び伸びと動いているように感じられる。チーム・プレーという枷から解き放たれて、実力の本領を発揮する――そういった類のパイロットである事が感じられた。

（面白い、望むところだ……）

たかが、テロリスト風情のくせに連邦軍のパイロットである自分と対等の戦いができるなどと思っているその傲慢な鼻をへし折ってやろう、とばかりにジュベールの０４号機のエンジンが咆哮を放つ。ライフルを腰部に戻し射撃管制にヴェスバーを選択するとジュベールの機体は標的を迎え撃つ。

今にも均衡が破れ、激しい戦闘の開始を想起させる漆黒の宇宙（そら）で２

つの光跡が激突する。それこそが開戦の狼煙であり、様々な交錯を生み出す運命の狼煙であった。

ジャクソンから最初の報告を受けた《エナド》艦長レイノルズ中佐の対応は早かった。

指揮権限を持つラー・カイラム級戦艦《マーセナス》ブリッジを呼び出し、艦隊司令官に事の顛末を報告し、指示を仰ぐ。同時にプルリヤシュ要塞側にも連絡を取り、特務戦隊所属艦艇の権限を利用してレンブラント中将への報告も怠らない。

だが、予想される混乱に対してレイノルズが能動的に対処できうる事はここまでだった。

システム上の混乱を何とか克服しながら最終局面に入りつつある演習において、多忙を極める要塞側の情報士官達が修復されたシステムによって裏付けの取れぬ報告を速やかに上に上げることをためらう事で事態が膠着しかけ、《エナド》側のオペレーターとの激しいやり取りがそれを如実に示していた。

同様に《マーセナス》側に座乗する艦隊司令官の腰も重かった。

部隊編成時、《エナド》一艦で当たるはずだった２０８特戦隊の任務が様々な思惑により現在の編成となる事で、本来指揮権を与えられるはずだったレイノルズと後から任命された艦隊司令官の間には、当初から小さな齟齬が生まれていた。有事に際して積極的に行動を起こそうとするレイノルズと受動的に対処しようと考える司令官との相性は悪く、この時も直接回線を通してやり取りされる議論の内容は、予想されうる事態への対応策よりも、予定外の行動をとることでの責任論に終始していた。

「了解しました。これより我々《エナド》は上層部より付与された

特殊任務戦隊の権限に基づき、独自の行動をとらせていただきます」
遅々として対応策の進まぬ現状に業を煮やしたレイノルズは、そう宣言すると強引に回線を切る。通信終了時に一瞬見せた『待て』と言おうとしたのであろう司令官のどこか唖然とした顔を目に焼きつかせながらも、レイノルズは次なる策に打って出る。
システムを再起動させたジャクソンの機体から送られてくるデータは事態に一刻の猶予もない事を示している。ＭＳ部隊の接近が現実のものである以上、速やかに対応せねば、《エナド》が自分をも含めた多数の乗組員たちにとっての鉄の棺桶となりうる事は免れないであろう。

現状の最大の問題は、システムを掌握する統合演習プログラムだった。
このプログラムが機能している以上、パープル・チームから送られてくるデータだけでは十分に実戦状況に対応できず、《エナド》は盲目状態で事態にあたらねばならない。
システムを再起動させることで仮想演習画面のデータ上から消える事は、演習においてＭＳと同様に撃沈された事を意味し、その不名誉を享受することで今後の２０８特戦隊の行動に対する上層部の風当たりが怪しいものとなりかねないというのが、艦隊司令官が積極的な対応策を鈍る根拠となっていた。
『そんな場合ではなかろうに……』という言葉を腹の中に呑み込みつつも、例え特殊任務戦隊の司令官であろうとも眼前の緊急事態に能動的に対処しきれないほどに平和ボケし、上からの命令を絶対とする軍人的思考パターンから逃れられないという現実に、これが連邦軍の現状なのだということを痛切に実感する。
「戦闘システムの再起動にかかる時間は？」
「戦闘システムのみを独自に再起動させるよりも、艦そのもののシステムを再起動させたほうが、予測不能の緊急事態に対応するには効率がいいと思われます」

「ブルー・チームはどうなっている」
「現在、推進剤の補給がちょうど終わったところで、これより全システムの再起動に入ります」
レイノルズの質問に得られた回答は予想より悪いものだった。
艦そのもののシステムを再起動させるとなるとＭＳの発艦システムは使用不可能となる。ＭＳ側のシステムの再起動を待ち発艦させた後に艦体側のシステムを再起動させるには時間のロスが大きすぎた。迷っている時間はない。レイノルズは即座に決定を下した。
「艦後退。慣性航行モードに切り替えると同時にシステム再起動。再起動と同時にブルー・チームは出撃、《エナド》を防衛しつつ次の指示を待て」
ギャンブルとも呼べるレイノルズの決断に、一呼吸の間をおいて復唱が行われ、《エナド》は宙域を後退する。どれだけの時間稼ぎになるかは分からないがやらないよりはましだった。わずかに戸惑いながらもレイノルズの決定を復唱する副艦長の後ろ姿にレイノルズは一人の男の後ろ姿を重ねた。優秀であったが故に組織から追い落とされたかつての部下――あの男がこの状況をみればどう思うのだろうか、そんな考えがふと脳裏をよぎる。
レイノルズの想いをよそに、彼の指示に従った《エナド》は後退を示すスラスター光の軌跡を前方に向けて小さく伸ばし、慣性のままに後方へと進路を変える。同時に全ての電源が落とされ、航宙灯の輝きすら消え去った《エナド》は僅かな眠りに入る。その眠りが一時のものであるのか、それとも永遠のものとなるのかは神のみぞ知る事象であった。

（２０１１／０１／２９　Ａｒｃａｄｉａにて初稿）

（２０１１／０９／１１　本サイトにて初稿）

08

射出したＭＳ群を追ってスモーク内から現れた不審艦隊群はほんのわずかな時間の戦闘速度への加速状態の後、その半数の艦船が一転して減速を開始する。そのうちの一隻である《ゲオルグ》のブリッジ内において、先行してゆく艦の小さくなっていくテールノズルを見送りながらヴォラスコフは、その輝きの向こうにある何者かの思惟を慮っていた。

すでに相手方艦隊の主砲の有効射程範囲に十分に侵入し、攻撃限界距離に達しようとしているにも関わらず、防衛側艦隊の動きに一向に変化は生じない。ごく一部の部隊のみがこの異変に気付いているようではあるが、現実感のないシステムに判断を依存し、命令遵守の組織体系が生み出す初動の遅さが災いし、気づいたときは後の祭りというおなじみのパターンに嵌り込みつつあるのは火を見るよりも明らかだった。

（相変わらず進歩のない組織だ）

かつて所属していた頃と少しも変わらない、絶対的覇者の力を後ろ盾に安穏とした組織の傲慢さに内心であきれ果てる。

同時に、この事態を仕組んだ者達の巧妙な手口に興味を覚えた。連邦というシステムを知り尽くし、その急所を狙って遅行性の毒薬を仕掛ける。本当の意味で効果が表れるのは事態が発生して尚、しばらく先の事となるだろう。

こちらの戦力は微々たるものであり、発生が予想される軍の損害も全体としては大した事にはならないはずだ。だが、演習中のテロ行為での混乱により軍の面目は確実に失墜する。そして、それ以上に大きな何かが、軍だけでなく連邦というシステム全体から失われ

ることとなる。彼らの真の狙いはおそらくそこにある。
「荒れるな……」
小さくぽつりと呟いた。心のどこかでそれを歓迎している自分がいる。システムから弾き出された者達の怨嗟の想いに自身の『私怨』を加えることで、彼は今この場所にいるのかもしれない。
ヴォラスコフがわずかな物思いに耽ろうとしていた矢先、《ゲオルグ》の艦体に僅かな衝撃が走り、２機の《Ｆ９７ＸＥ》が一時帰投した事をオペレーターが彼に告げる。つい、先ほど送り出したばかりのＭＳチームの予定外の早期帰投に彼は眉を顰めた。事情を聴き出すためにすかさずＭＳデッキに通信をつなぐ。
『おっさんは、今、一人で足止めに入っている』
いぶかしげなヴォラスコフの質問に対し、どこか誇らしげに事情を告げるジノの報告を聞いた彼はため息をつく。
（……ったく、パイロットという人種は……）
ミノフスキー粒子が生み出したＭＳに搭乗するパイロット達の行動に対する独立性は、旧世紀の航空機のパイロット達のあり方とは大きく異なる。
粒子の通信阻害及び電波撹乱により、常に本隊からの指示が得られるとは限らない状況に立たされることが当然である事を前提とされたが故に、その行動時には本隊からの独立性が重視されてきた。連邦軍の艦艇乗りならば多かれ少なかれそんな彼らの振る舞いに悩まされた経験はあるはずである。
ジノ達の力を信頼し、後を任せる――ヴォラスコフ自身がうまく彼らを使うだろうということを見越した上で足止めに残ったと解釈できぬこともない。だが、本音のところは違うのだろう。そこに残りたいから残った――パイロットとしての何かを満足させたいがためというのが、彼の行動の動機なのだろう。
「勝手な事を……」
そう呟いておいて直ぐにそれを否定する。
勝手でよいのだ。自分達はとっくに軍人ではない。何らかの思惑

を背負いながら金で雇われた人間であり、それに見合った仕事をするならば誰にも文句を言われる筋合いはない。ゴルドの向かうべきところと自分が向かうべきところは初めから異なっている。それがシステムから弾き出され、明日の保障など見えぬ者の生き方なのだ。

彼と再び相まみえることはもはやないのかもしれない。そして自分自身も同様の立場であるという事を思い出し、その事実を静かに腹に呑み込んだまま彼は、事態を混沌とさせるべく次なる指示を下した。

少々無茶な加速を掛けながら眼前のスラスターの輝きを追っていたジャクソンは、ようやくそれを射程に収めつつあった。その数５０近く。

いかに《Ｆ９１》の性能が高かろうとも自分達２機の力でどうにかできる数ではない。標的のさらに向こうに浮かぶ味方艦隊とそのＭＳ隊の動きから、迫りつつある危険に対応しようとする兆候は僅かに見えるものの、それでも９割以上の艦艇の動きに未だに何の変化もない。予想される損害を事前に食い止めるのではなくいかに減らすか？　その視点で事にあたらねばならない状況である。

すでに自分達の接近には気づいているはずであろうに、前方を行く標的達の動きに変化はない。魂のない無人の兵器――まるで対艦ミサイルの如く一直線に目標に向かって突進する様はどこか不気味さを感じさせる。だが、考えている時間はない。システムの切り替えの為に再起動状態に入る前の《エナド》より受けた攻撃命令に従い、最も近い標的をロックオンする。

遠距離狙撃モードのヴェスバーが一本の光軸を生み出し、標的に命中する。確かな手ごたえを感じたはずのジャクソンだったが次の

瞬間、意図せぬ結果に再び呆然とする。強力なメガ粒子の光弾が命中寸前に何かにはじかれたように拡散し、その反動で目標の軌道が僅かにそれただけだった。

（Ｉフィールド、だと……）

小型化による信頼性が未だに確立されず、実験段階である兵装を標的が備えている事に驚愕する。

強力なメインエンジンを備えたＦシリーズですら未だに実戦はおろか、試作装備の扱いすらないその兵装を備えていたのは、光学センサーによって画像処理されることで識別されたＲＧＭ－１０９《ヘビーガン》だった。大量の余剰電力を必要とするはずの装備を旧式化したその機体が備えている事などあり得ない。

（いや、違う……）

目標が背負っている異様な形状の巨大なバックパックに注目する。外付けの外部電源を利用して、Ｉフィールドを発生させているのだということに直ぐにジャクソンは気づいた。

味方艦隊に迫る５０機近いＭＳのうちのほとんどがすでに旧式化した退役機のようだった。一部には小型化以前に設計された旧世代機の姿もあり、《エナド》ＭＳ隊の初戦で戦った海賊たちを彷彿とさせる。

もともと設計段階で想定されていない兵装を無理に搭載しており、しかも、Ｉフィールドが生じさせる磁場はコックピット内のパイロットの身体にも大きな影響を与えるはずである。背部のフレームがむき出しの旧式機に対してそのような対策が十分に講じられているとはとても思えない。

しかも、機体の機動とその防御兵装にエネルギーの大部分を割り振っているために、攻撃兵装というものはほとんど装備されていない。僅かに携帯型グレネードなどの実弾兵器を数発搭載しているだけの裸同然の状態であった。となると……。

「特攻か！」

旧世紀の航空戦の時代から行われ、その単純さゆえに現代でも十分に通用する質量攻撃である。『人道』や『倫理』とは無縁のテロリスト達にとってこれほど都合のよい戦術はない。

「だったら弾き出すまでだ……」

高加速状態で磁場の反発を利用して急激にその軌道を変えてやれば、剛性を無視した軽量化が災いし、機体にダメージを与え、分解もしくは行動不能にすることも可能である。少なくともコックピット内の生身のパイロットはただでは済まない。時間稼ぎをしている間に状況を理解した味方側のＭＳパイロット達の応援も期待できる。

敵機がＩフィールドを備えている事に随伴するバッジョも気づいたようだった。適切な対策を仰ぐ彼に自身の考えを伝えると、分散した二人の機体は速やかに行動をおこす。味方艦隊群はすでに目前にあった。

未だに仮想画面上の表示に従って演習中の味方ＭＳ群を通り越し、緊急事態発生のサインを周辺に撒き散らしながら、宙域を疾駆する敵機に対して斜め後方に回り込んだジャクソンは強力な一撃を加える。磁場の反発のあおりを受けた標的は、ジャクソンの目論見通り機体を分解させながら、あらぬ方向へと消えてゆく。

同様に数度。

だが、高加速状態での狙撃の照準はブレ易く思った以上に成果は上がらない。さらに、数の多さは如何ともしがたい。

敵機の一つが前方に突出している艦艇の衝突コースに乗っていることに気づいたジャクソンは、即座に追撃をかける。機会は一度きり――ぎりぎりまで引き付けて一撃で仕留める――ただそれだけを念頭にペダルを踏み込み、強烈な加速Ｇを全身で受け止める。

《Ｆ９１》と敵機のスラスターが描く2本のラインが最も接近し、ヴェスバーが其の咆哮と共に強靭無比な一撃を目標に対して加えようとしたその瞬間だった。全天周モニターの全面が光に覆われ、コックピット内のジャクソンは視界を奪われる。同時にコンソールの

ほとんどが異常値を示し、システムが障害を発生させた。
突然、行動不能状態に陥った機体を必死の思いで立て直し、まだ生き残っているモニターで状況を確認しようとしたジャクソンの視界に、いくつもの火球が其の生み出す熱の牙で味方艦艇の艦体を食い破っていく姿が映し出された。
「こいつら……」
一見、無防備とも思われた敵機群は、強力なエネルギーを生み出す改良型反応炉の炉内と機体外の2重のＩフィールドで反応を安定させた上で融合炉を暴走させ、核爆発の熱球を生じさせていた。全ての機体がうまく核爆発にまで至らしめている訳でないが、それでも彼らの自爆攻撃は周辺の艦隊群に強力な打撃を与えつつある。
とぎれとぎれに入るノイズ混じりの無線には突然の予測不能の事態に混乱し、パニック状態に陥っている人々の叫びが生々しく捕えられた。
即座に機体ステータスをチェックする。かなり無茶な加速を掛けていた為に熱に焼かれたのは一瞬であったにもかかわらず、ジャクソンの機体の損傷の度合いは激しく、事実上の戦闘不能状態だった。
攻撃兵装は完全にダウンし、《Ｆ９１》の勇壮なシルエットは熱に焼かれて見る影もない。生き残った機能を何とか回復させ、母艦である《エナド》の姿を探す。損傷し、呆然と漂う艦隊群の向こうにシステムの再起動を待ちながら、闇の中にひっそりと浮かぶその姿を見つけ安堵する。
（帰れるのか？）
心もとない状態の愛機を騙し騙し操りながら、進路を母艦へと向ける。
自身の機体を前方にひっそりと浮かぶそのエナドの巨躯へ向けて、よれよれとしながらもどうにか軌道に乗せる事で、僅かに安堵の笑みを頬に浮かべる。宇宙に住む者にとって最も恐ろしい経験の一つである宇宙漂流の危険から免れることはできたらしい。
「機体をこんなにしちまって、メカニックの奴らにどやされるな」

担当機体の事になるといかなる正当な理由も受け付けない頑固者達にどう言い訳しようか、などという考えが脳裏をちらりとよぎった瞬間だった。

一筋の光跡が無機質な思惟と共にエナドに向かって伸びてゆく様が、ジャクソンの視界に飛び込んだ。その事実とそれから起こりうるべき未来の事象を予感した彼の背に悪寒が走る。

そこからの行動はＭＳパイロット、否、人としての本能だった。

「やらせるかよ！」

無慈悲に大量の不幸を撒き散らすべく《エナド》に襲いかかろうと不気味に伸びる一筋の光陰に向かって、ジャクソンの叫びに応えるかのように、ぼろぼろの機体が悲鳴をあげながら全力でスラスターを吹かす。奇跡的ともいうべき確立で作動するシステムとジャクソンの執念によって、《Ｆ９１》は《エナド》に迫りゆく敵機に対して進行方向を合わせた。

「間に合え！」

熱に強かに焼かれた機体には、迫りゆく敵を弾き出すだけの武装は何一つ持ち合わせていなかった。あるのはただ一つ……。そして自身の行為の先に訪れる結果を考慮する余裕などなかった。爆発前に衝突コースから叩きだしてやる――その一念のみでペダルを踏み込んだ。

――相手を滅ぼそうとする意思と仲間を守ろうとする意思が放つ二筋の光軸が激しく衝突する。

激突時の衝撃が頑強なコックピットを襲うと同時に、がりがりとすさまじい音を響かせ、ジャクソンの体はエアベルトを引きちぎりコンソールに叩きつけられる。飛びそうになる意識の中で自身の目論見がうまく成功した事を直観した。

「ザマァ見やがれ、テロリスト共！」

中指を立てようとしたがすでに右腕は動かなかった。同時に周囲

が閃光に包まれる。
　これまでの人生で出会ってきた様々な人々との思い出が脳裏をよぎる。そして最後に一人の女の姿が浮かび上がった。
「最後くらい……笑えよ……薄情だな……」
　小さな苦笑いと共に放たれたジャクソンの最後の呟きは、宙域で音もなく輝く無慈悲な爆発の光の中へと呑み込まれていった……。

　再起動を完了したコックピット内はシステムの作動音を僅かに響かせてはいるものの、大方は静寂に包まれている。
　モニターには暗闇に覆われたＭＳデッキ内の様子が映るだけで周囲に人の気配はない。どことなく孤独感を感じたカークは、気休めとばかりにセンサーを熱源感知モードに切り替えることで、スタッフルーム内で緊張したメカニック達が寄り添って息を潜めている様を確認した。
　厄介事の火種となり下がった統合演習プログラムを切り離すためのシステム再起動は、ＭＳ側ではとっくに完了したものの、《エナド》側はまだ実行中である。先に放り出してくれればよかったのにと思うカークだったが、上の決定である以上、仕方がない。今この瞬間にもテロリストの攻撃が行われるかもしれない。数年前の初陣の際の様々な記憶が脳裏をよぎった。
「長いわね……」
　緊張したシャーリーの表情がモニターの一区画に映し出されている。カークと同様に、待ちの姿勢が苦手な彼女もいら立ちを抑え難いのだろう。先ほどからリーダーのサカキを相手に押し寄せる不安と緊張を、何気ない会話で発散させようとしている。二人の会話に適度な相槌を打ちながらもカークはモニターのはるか向こう、様々

な思惑が交錯する漆黒の宙域に想いを馳せた。
パープル・チームの奴らはどうしているのだろうか？　《エナド》を通じて得られたパープル・チームからの戦況データはお世辞にも好転的とは言えない状況を明示している。無愛想でネクラで性悪なジュベール、陽気で女好きなジャクソン、生真面目だがどこか腹黒さを感じさせるバッジョ――3人の仲間達は孤立無援の状況で孤軍奮闘しているのだろうか。
「とっとと起きやがれ！　寝ぼすけめ」
腹立ち紛れにコンソールを蹴飛ばすものの、そんな言葉が再起動中の巨大な艦体に届く訳もなく、見当違いの八つ当たりの対象にされた愛機が抗議をするかの如く、じんわりと足に痛みを響かせる。
『ナニヤッテンノヨ』とばかりのシャーリーの冷たい視線を無視して、再び目を閉じ、はるか彼方へと意識を飛ばそうとしたその瞬間だった。

――小さな輝きがカークの脳裏をきらめき、何かが彼の中を駆け抜けて行った。

それは知っているものの輝きだった。そして、突然の別れを彼に告げた事を彼は本能的に理解した。
だが、自身が感じた直観に従って理不尽な事実をありのままに認識できるほど彼は幼くなかった。そんな事あるはずがない、錯覚だ――否定の言葉を重ねることで己の日常を守ろうとするのは大人になった者の狡さであるといえるのだろうか？
「どうしたの？」
何かを振り切るかのようにしきりに首を振って落ち着かぬ様子のカークに、不審に思ったシャーリーが声をかける。
「なんでもねえよ」
いら立ちまぎれに返答する。
自身の口調が思ったよりも強かった事に気づかぬまま、カークは

さらに言葉を重ねた。
「厳しい戦いになりそうだ。ハラくくっとけよ」
突然の彼の言葉に戸惑いの色が隠せないサカキとシャーリーが、モニターの向こうで微妙な表情を浮かべている事を知る由もないまま、カークははるか彼方に広がる漆黒の宇宙（そら）に意識を広げていた。

暗闇に包まれた戦闘ブリッジ内で僅かに輝いているのは、先ほどからしきりに再起動中のシステム状態を表示させているモニターと少々下品さを想わせる非常灯の輝きだけだった。
己の呼吸の音が周囲のものにまで聞こえるのではないのだろうか……。ブリッジ内に広がる不気味な静寂を一身に受け止めながら、レイノルズは己の決断によって訪れた現状を自身の席上で静かに耐えていた。
破砕したデブリが艦体を叩き、衝突音が不気味にこだまする。次の瞬間には宇宙（そら）に放り出されるかもしれない――想像力のたくましい者には不安でたまらないだろう。
「か、神様……」
ブリッジのどこかから抑えるように小さな呟きが漏れる。「臆病者め」などと、平時なら嘲りの種になりうるその呟きも、今はブリッジ内の全ての者達の心情を代弁した言葉となっていた。
システムに頼り切った者が突然にその全てを奪われて暗闇の中に放り出される――人類が宇宙で生活する事が当たり前の時代になっても尚、この虚無が広がる空間はどこまでも人という存在を拒絶する場所である事を再認識する。
演習中であった事が幸いし艦内の者達は皆ノーマル・スーツを着用している。だからといって突然爆発に巻き込まれ宇宙放り出され

れば、身の安全は保障できない。
物々しい様子で艦長席に座るレイノルズは無言で腕を組み、中空を睨みつけている。いかなる異変が起ころうともその場所から動いてはならない――それがこの艦の責任者である彼の役割だった。
彼とてこの事態を恐ろしいと思わぬ訳ではない。クロスボーンの反乱、木星戦役といった修羅場を何度くぐってもそれは変わらない。いかなる努力にも価値はなく、ただ運任せで状況を切り抜ければならない時、『もしかしたら今度こそ……』という不安はぬぐいきれぬものだ。
だが、そんな不安を決して見せる事はなく、常に堂々とした振る舞いを心がけることが、ブリッジメンバーのひいては艦全体の乗組員の命を救う事になるという事を十分に理解している。
『もしも船に魂が宿るというのならば、一刻も早く目覚めて、どうか我々を守ってほしい』
そんな願いを胸に黙して語らぬレイノルズの想いが届いたのだろうか？　再起動を終えたシステムが完全に立ちあがり、艦内の全ての機能が復旧し始める。
閉じていた蕾が夜明けの光と共に一気に開花していくかの如く、再起動した艦内の全システムが立ちあがり、照明が輝きを取り戻す。各部署からの報告が次々にブリッジにもたらされ、ほっとした空気がブリッジ内に伝染していく。
だが、その空気を覆すかのような悪い知らせが艦外周辺状況を記載したデータと共に次々に舞い込んだ。
『《ブッシュ》撃沈』
『《マーセナス》大破、救援要請のサインを受諾しました』
絶望的な２０８特戦隊の寮艦２隻の損害にブリッジ内のメンバーは、皆呆然とする。周辺状況は最悪だった。連邦艦艇だけでなく同じ宙域にいたコロニー守備隊や民間軍事企業より抽出された艦船までが被害を受け、事態の収拾に混乱をきたしていた。
混乱する無線の中から『自爆テロ』や『核攻撃』などといった言

葉が立て続けに飛び込み、演習の真っ最中であった為、『演習中の事故である』という認識を未だに疑う事のない者達まで様々であった。

そんな最中、さらなる凶報が《エナド》ブリッジ内に舞い込むこととなる。

「パ、Ｐ０５（パープル）、ジャクソン機……。つ、通信及び信号途絶……」

震えを伴いながら読み上げる管制オペレーターのミリー・アーガスの声が、錯綜する情報に混乱するブリッジ内の空気を完全に凍結させた。

（２０１１／０１／２９　Ａｒｃａｄｉａにて初稿）
（２０１１／０９／１８　本サイトにて初稿）

09

宇宙（そら）――それはあらゆる振動を伝達させる媒介が存在しない広大な虚無の空間。

生命の存在を頑なに拒否し続けるその世界に、叡智を以て飛び出した人類によって生み出されたＭＳという名の強大な兵器が、漆黒に包まれる無音の空間で交錯する。

己の利益の為にのみ醜く殺し合うのは人間という生き物だけだ、とある者は言う。そんな者達からみればこの行為はあまりにも愚かしく見えるのだろう。

だが、そのような聖人君子の戯言に耳を貸す必要はない。戦いという人の本能による行動において勝利した時の高揚感を知る者ならば、更なるそれを求めてより強い敵との戦いを望むだろう。その果てにあるものが敗北という名の破滅であったとしても……。

――交錯する、複雑な軌跡を生み出すスラスターの輝きと大出力エンジンの咆哮が……。

――交錯する、必殺を狙って放たれる互いの攻撃兵装が……。

――交錯する、眼前の敵にただ勝利することのみを念頭に置いた２つの意思が……。

先手を取っているのはジュベールの《Ｆ９１》だった。

長い時間をかけて熟成されたシステムによって生み出されるなめらかな操縦応答性と曲線的な軌道で敵機を追い、強力無比なヴェスバーで的確に砲撃を加える。敵機が備えているＩフィールドによって致命傷を与えられぬものの、命中すれば軌道を乱すことのできる

その威力を以て常に中、遠距離戦での間合いを保ち続け、標的の隙を窺う。

後手に回っているもののゴルドの《Ｆ９７》は、アクティブ・バインダーの複雑な組み合わせが生み出す力技とも呼べる鋭角的な機動を武器に、神業的な動きで敵機を追随する。盾となるＩフィールドにより少々の事では致命傷を与えられる事はないと認識してからは、逆にその特性を利用し、敵の攻撃をわざと受けながらこちらの実弾兵装を相手に叩きこむという荒技で強引に戦いのペースをもぎ取ろうと試みる。はるか前方で行われている血生臭い人間の争いとは別次元の世界で、二人は互いを堕とすべき標的と見定め一進一退の攻防を繰り返していた。

（テロリストの分際でやるじゃないか……）

めまぐるしく変動する表示と共に迫りくるモニターの向こうの敵に対し、小さく笑みを浮かべながらジュベールは呟いた。

先手をとって攻撃と回避を繰り返し、相対距離を自在に操り、懐に近づける事を許さない。ビーム兵器に比べて弾速は劣るものの、ショットランサーの破壊力は決して侮れない。暴力的なまでの加速力で間合いを潰され、その一撃をまともにくらえば大破は免れない。システムの限界値を超えた驚異的な洞察力を以て相手の突撃の出鼻をくじき、砲撃を叩きこむ。敵機のＩフィールドによって粒子がはじかれるたびに軌道がそれるものの、そんなことなど眼中にないかの如く標的はジュベールただ一機のみに狙いを定める。この戦いに勝利した後の事など考えてはいない、そんな敵パイロットの思惟が透けて見える。

先の事など考えていては眼前の修羅場に生き残れない――戦慣れした敵を相手にするにはこちらも同等の思考を以て挑まねばたちまち喰い殺されるのは目に見ている。

技量よりも胆力が要求される――そんな人間ならではの戦いにどっぷりと引きずり込まれ、ジュベールはその緊張感に背筋を震わせる。

眼前の敵との一騎打ちに背筋を震わせているのはゴルドも同じだった。

連邦軍という組織の中でぬくぬくとエリートコースを歩み、能力に見合った超高性能機を与えられ、『たかが、テロリスト風情が』と高みから見下ろしている事は分かっている。だが、それは些細な事でしかない。

欲しいのは絶対的な強者。勝つ必要などない。自身の全力を叩きつけパイロットとしての限界を知らしめてくれる相手。

それがゴルドの望むものである。

眼前の敵にはその資格がある。数多の敵と戦ってきたゴルドの勘はそう告げていた。

こちらの突撃を完璧に封じる砲撃でそれまで全く隙を見せる事のなかった敵の《Ｆ９１》が、突然その動きを一瞬だけ止める。

（今だ！）

相手の見せたほんの僅かな隙をつきゴルドの《Ｆ９７》は標的の懐に飛び込むべく加速する。近接戦闘領域に飛び込む直前、人体の耐えうる限界値ぎりぎりの制動を掛けると同時にＡＢＣマントを排除する。慣性にのったまま強制排除された勢いでマントが大きく広がり、《Ｆ９１》の視界を大きく覆う。驚異的な反応でそれを察知した《Ｆ９１》は左マニュピレータにセットされたビーム・サーベルで遮蔽物を切り捨てた。

だが、それこそがゴルドの狙いだった。左腰部にセットされたアンカーが勢いよく射出され、サーベルを持った《Ｆ９１》の左腕に絡みつく。

「もう、逃げられんぞ」

左マニュビレータでアンカーの鎖を強引に引き寄せながら最後のショットランサーの照準をコックピットに合わせる。

（所詮、この程度だったか）

軽い失望と共に最後の一撃を放つ。だが、敵の動きはゴルドの予

測を超えた。
　とっさに右腕のビーム・ライフルを捨て、捕えられた左腕を軸に側転するかの要領でショットランサーを回避すると同時に、右マニュビレータに持ち替えたビーム・サーベルによりアンカーごと自機の左腕をひじ下から切断する。
（今のをかわした、だと！）
　放出したアンカーを強制排除しつつ、ゴルドは驚きを隠せない。驚きによって生まれたゴルドの側の隙に乗じて、ジュベールの《Ｆ９１》はゴルドの《Ｆ９７》の右後背部――死角を位置取っていた。本能的に回避行動を取ろうとしたが、もはや間に合わない事を瞬時に認識する。

――ヴェスバーの一撃か。
――サーベルの一閃か。

　どちらにしてもこの距離での攻撃を受ければ、例えＩフィールドに守られているとしてもただでは済まない。撃墜を免れたとしても致命的な損傷は避けられないだろう。
（これまでか……）
　機体を襲うであろう衝撃にゴルドは身を固くする。
　敗北の予感――それこそがＭＳパイロットとして、否、戦士としての己が望んだものだったはず。
　だが、予想された衝撃が《Ｆ９７》のコックピットを襲う事はなかった。ゴルドの回避行動と同時に《Ｆ９１》が後退をかけ、両機の間に再び距離が生まれる。
「何のつもりだ！」
　予想外の敵パイロットの行動にゴルドの混乱が怒りとなってバイザーを震わせた。それはあまりにも不可解な行動だった。

自身の全力を尽くしての強敵との対決――互いの魂と魂がぶつかり合い、その生と死によってのみ決着がつく――そんな戦いに水を差したのは、戦闘中のジュベールに突如訪れた奇妙な感覚だった。平時なら気にも留めないが、極限まで研ぎ澄まされた感覚の中にいたからこそ、それを察知してしまったのかもしれない。

知覚すると同時に自身の中の何かが急激に喪失していく。それが身近なものの死である事をジュベールは直感的に理解した。

（邪魔だ！）

自身が知覚したその事実を無理やり意識の向こうへと追いやる。だが、喪失感はますます大きくなり、少しずつ戦いに対する集中力を阻害していく。条件反射的に回避行動をとり、勝負を決すべく相手の死角に潜り込んだ瞬間、私闘とも思えるそれまでの己の行為に躊躇いが感じられた。戦いの熱に浮かされたかのようなそれまでの充実感が一息に覚めていく。

敵に対してのとどめの一撃を放てず、気づいた時には後退を掛けていた。ジュベールの心に動揺が広がる。

このような事は初めてだった。

演習であれ、実戦であれ、いかなる敵に対しても冷徹に容赦なく最後のトリガーを引く――それが彼の信条だった。だが今、その信条とは相反する己の行為にジュベールは戸惑った。

その迷いはさらに彼の戦いへの意識を削ぎ落していく。

集中力が途切れる事で防戦一方になりつつあるコックピットの中で、ジュベールの混乱は収まる事はなかった。

減速する事で2つに分かれた部隊のうち、前方を行く艦艇群のテ

ールノズル光が混乱の最中にある防衛側艦隊が位置する宙域に侵入しつつある。後方艦艇群のさらに最後方の位置よりその様子を見て取った《ゲオルグ》艦長ヴォラスコフは、自身の右斜め前の席に座る砲術長に発砲の許可を与える。

「エンジンへの直撃は避けろ」

超望遠カメラによる光学照準での精密砲撃、重力の影響が小さく大気のない宇宙だからこそできる芸当である。極限までオートメーション化されたシステムによって補正された主砲の一撃が、漆黒の闇を切り裂く輝きと共に前方を行く味方艦艇の艦橋部を誤差なしで打ち抜いた。《ゲオルグ》の周辺にいる味方艦艇も同様に砲撃を行い、損傷を与えていく。

と同時に周辺宙域に向けて通信を送り、迅速に事態に対応しようとする有能な部隊の出鼻をくじいた。

『我々はテロリスト部隊を追撃中である。事態の打開の為、周辺部隊には速やかな協力を乞う』

通信と同時に、後発艦艇のうちの幾隻かが僅かに加速を掛ける。

未だに統合戦術プログラムに支配されている防衛側艦隊内に侵入しブラフを流す事で、時を稼ぐ。いち早くプログラムを切り替えて事態に対応しようとするＭＳ群が本隊への確認と指示を待つ間に、混乱する防衛側艦隊群に合流し、隙を見て逃走を図る。

だが、事態は更なる意外な展開を見せた。

前方を浮遊する損傷させただけの艦艇が前触れもなく次々に火の玉となって消滅する。不審艦艇群に不用意に近づいたＭＳ隊や航行不能となって救援を待つ数隻の防衛側艦艇と共に、再度加速を掛けて混乱する宙域に侵入した味方後方艦艇群の一部までもが爆発に巻き込まれる。

（やはりな……）

艦体を叩く破砕したデブリの衝突音を耳にしながら、ヴォラスコフは己の予想通りの事態に発展した事を確認する。

先に宙域に侵入した味方艦艇群は全てリモートコントロールされ

た無人艦だった。それらを航行不能にさせる事で事態を混乱させ、戦力を分散させることにより時を稼ぐ――それが《ゲオルグ》を始めとする、遅れて宙域に侵入した有人艦隊に与えられた作戦内容である。

だが、所詮、彼らも捨て駒である。

無人艦の自爆に巻き込む事で口封じを図る――その意図を読めなかった愚かな艦長に指揮された艦の無残な結末を横目にジノとリリアに出撃命令を出す。極力交戦を避けながらいち早く脱出ポイントに近い場所に位置取り、更なる事態の展開を待つ。システム内で隔離された稼働中の演習プログラムが送る情報を目にしながらヴォラスコフは静かに事態の推移を見守っていた。

「俺はバッジョと合流する。お前達は二機で《エナド》を守れ！」

発艦前のサカキの指示に従い、カークはシャーリーと共に再び混乱する戦闘宙域へと侵入する《エナド》の護衛を引き受ける。

「あの野郎、こんなときに何やってやがる」

戦域のはるか彼方で交戦し、未だに音沙汰ないジュベールに毒づいた。

すでに発艦前にリンクされた《エナド》からのデータから、ジャクソン機の信号途絶が知らされている。その事には決して触れないようにしながらカーク達ブルー・チームの3人は現在可能な選択肢を模索していた。

まだ彼が確実に死亡と決まった訳ではない。

機体から脱出しどこかの艦艇に拾われている可能性もありうるのだ――そんなサカキ達の僅かな希望を消さぬよう、否、それはカークにとってもそうであるかのごとく、彼は己の感じ取った事実を胸

の中にしまい込んで戦いに臨んでいた。
　混乱中の戦域内には未だに演習プログラムの支配下にある味方側防衛艦隊の艦影にまぎれて、いくつかの不審艦が存在しており、そのうちの一隻が《エナド》の前方をあらぬ方向へと向かって横切ろうとしている。ブリッジ内のコーナーからの指示によりカークとシャーリーは接近する不審艦の検閲に入った。
「前方の所属不明艦、停船し、船籍を明らかにせよ」
カークの送った通信文に対して、目標は沈黙を保っている。変わって返答をよこしたのは当該不審艦艇ではなく、あらぬ方向から必殺の念を込められて放たれたプラズマを伴った砲弾の一撃であった。回避行動と共に即座に臨戦態勢に入るカークに向かって、さらに一機の機体が不審艦の影から現れ襲いかかる。カークに驚きを与えたのはその攻撃ではなく、攻撃してきた機体の意外なシルエットだった。
（ちょっと待て、《Ｆ９７》……だと）
　彼の眼前に立ちふさがったのは、製造元によってその存在を完全に否定され表向きいかなるメディアにも露出してはいないが、ネットの広大な海の中ではＭＳマニアなら知らぬ者などいない様々な伝説と共にその活躍が語り継がれたシリーズだった。
　額部を初めとして細部の意匠が彼の記憶とは弱冠異なっているものの、そのシルエットは間違いなく伝説の系譜に連なるものだった。
　外見だけでなく、その爆発的な加速能力と運動性能は、制式量産機である《ジャベリン》程度など足元に及ぶ事はなく、カークの搭乗する《Ｆ９１》をも凌ぐほどである。さらにその肩部に装着されているであろうＩフィールド・システムは、ビーム兵器を主体とする《Ｆ９１》の攻撃能力を封じこみ、パイロット間の実力差を縮めることに一役買っている。
　極めつけは眼前の敵機の向こうからバックアップをするもう一機の存在だった。正確無比な射撃に加えて掛けられる強烈なプレッシャーが、カークの意識が眼前の敵機に集中する事を阻害させる。カ

ークの背後からシャーリーが援護射撃を行っているものの、その効果は今一つのようである。
「一体、何なんだ……、こいつら」
おそらくは自分と同等の世界を見ている人間の仕業――たった二機ではありながら決して油断ならぬコンビネーションと遠距離からの正確無比の射撃に、カークは慄然とする。
そんな二組のＭＳが激突する戦域の側を彼らの母艦と思われる不審艦艇が悠々と進行していく。混乱する周辺の味方艦艇の存在をあざ笑うかのように堂々と進行する様は余りにも大胆不敵だった。

右マニュピレータにセットされたショットランサーを二発放っただけで早々に放り出したジノは、攻撃兵装をビーム・ライフルに切り替えた。
「ダメだ、全然、当たる気がしねえ」
眼前のパイロットの規格外の実力に、自分のそれがはるかに及ばないという事実を本能的に理解する。《Ｆ９７ＸＥ》に乗って以来、このような敗北感を味わうのは初めての事である。ＭＳの性能差など言い訳になるはずもない。
最近はそれほどでもないが、当初は自分を全くの子供扱いしたゴルドとやり合った時もこのように感じる事はなかった。自身の歩く道程のはるか先を歩いてはいるものの、いつかは必ず追いつき、追い越す事が出来る――その確信と共にジノはゴルドの全てを吸収すべく訓練に没頭してきた。
だが、眼前の敵は自身の歩む道とは全く異なる道、否、ジノが道を歩いているとしたならば、相手は空を飛んでいるのではないか、と思わせるほどの違いをジノにまざまざと見せつける。Ｉフィールドによって攻撃能力の大半を封じられているにもかかわらず、敵機から発せられるプレッシャーはジノを深い虚空の闇に引きずり込ん

でしまいそうな感覚を与える。
「世の中、こんな奴がいるのか……」
ゴルドに比べればはるかに浅いものの、戦いの世界に身を投じて以来それなりに経験を積んできたつもりだった。つい二月前に戦った《Ｆ９１》のパイロットの力など及ぶべくもない眼前の敵の実力は自身の底の浅さを思い知らせる。戦況をなんとか五分で保っていられるのは《Ｆ９７ＸＥ》の性能とバックアップのリリアの力によるところが大きい。
『相手の力が上だと感じたら勝とうとするな、絶対に死なない戦い方をしろ！』
訓練中のゴルドの言葉が拳骨の痛みと共に甦る。
眼前の敵に何がなんでも勝つことに意味があるんだ、と執着するジノに、ゴルドは『そんなこだわりは平和ボケした世界で非日常に憧れ、退屈を持て余した奴らの妄想だ』と一蹴した。
理不尽なまでに圧倒的な実力差をもった敵を前にして初めてその意味を理解する。戦いというルール無用の世界に身を置き、確実に人命を奪い去る兵器を振り回す以上、死はすぐ側にある。生死の差に比べれば勝敗の差など些細な事でしかない。
だからと言って、安直に守りに入る訳ではない。
そんな事をすればあっという間に自身の肉体は機体もろとも宇宙のチリと化すだろう。
柔軟な発想と思い切りの良さこそ自身の持ち味である事を理解しているジノは、Ｉフィールド装置の一時停止というリスクを背負いながらも弾速の早いビーム・ライフルで敵機の攻撃の隙を突く。
しかし、それはあくまでも陽動。回避行動をとり反撃の機会を窺う《Ｆ９１》に対し、ジノの機体の後方から再びプラズマの閃光が伸びる。それを回避した敵機に対し、ジノはビーム・ライフルで撹乱しながら距離を詰め、腰部からアンカーを射出する。
その攻撃を眼前の《Ｆ９１》は鮮やかに回避し、刹那の隙をついてライフルでの反撃を試みる。だが、それすらもジノの陽動だった。

「当たらねえのは、始めから分かってんだ！」
敵機の射軸線を回避しながら、ジノの《Ｆ９７ＸＥ》は射出されたチェーンを握ると強引に振り回す。さすがにこれは察知できなかったのだろう。振り回したアンカーパーツが左腕のシールド発生装置に叩きつけられ、《Ｆ９１》のビーム・シールドを破壊する。すかさず入る後方からのリリアの砲撃に、たまらず《Ｆ９１》は後退を掛ける。
（これでも、堕ちねえのかよ……）
非常識とも思える敵パイロットの回避能力にジノは半ば呆れながら呟いた。だが同時にそんな敵と存分に渡り合っているこの戦闘を、死と隣り合わせの緊張感にぞくぞくしながらも楽しんでいる。『戦いに魅入られる』とはこういう事をいうのだろうか？
『思い上がるな！　お前程度の腕の奴など世の中にはごまんといる！』
ゴルドの叱責がジノの脳裏に浮かび上がる。
「よーく、分かってるさ……おっさん」
自身の荒い呼吸音だけがやたらと耳につくコックピット内でジノは不敵に微笑んだ。

最大威力に設定されたヴェスバーの一撃が虚空へと消えていく。手ごたえはない。僅かなスラスター光の輝きと同時に反撃の砲弾がプラズマの輝きに包まれながら自身の機体の直ぐ側を通過する。直撃すれば確実に撃墜される――その恐怖を怒りに変え、シャーリーは光学センサーに僅かに捕えられる映像を元にまるで陽炎のような敵影に向かい反撃を試みる。
（こんなものを、よくもバカスカ当てられるわね！）
いまいち、なじみの悪いヴェスバーの射撃管制への不満を口にしながら、シャーリーはそれを自在に操り敵を葬っていくカークやジ

ュベールの姿を思い浮かべ、八つ当たりする。
大規模戦闘が想定される演習では攻撃力よりも機動力を優先したチーム戦術をとるべきである――その見地からシャーリーとバッジョの《Ｆ９１》はヴェスバーを装備したノーマル仕様で今回の演習に臨んでいた。
さすがに装備の換装時間までひねり出す事が出来なかった為、彼女は演習時のままの装備で引き続き実戦に臨むこととなった。
運動性能は上がったものの、高性能の独立センサーを備えた使い慣れたメガランチャーとは違い、ヴェスバーの使い勝手は良いものではない。腰だめに構えて打つそのスタイル故に、標的が遠方に行けばいくほど砲撃時の小さなブレが大きく影響する。カークと敵機のはるか向こうの宙域から無造作に打ち込まれる正確無比な砲撃に対して、自身の援護はせいぜい撹乱かけん制程度にしか役に立っておらず、全くバックアップの役割を果たせていないという事実に唇を噛む。ランチャーさえあればという言葉を呑み込んで、彼女ははるか彼方の陽炎のような敵影に向けて、ひたすらに砲撃と回避を繰り返す。
客観的に見れば決して彼女の腕が悪いわけではない。バックアップとしては及第点のレベルに十分に達しているはずの彼女の攻撃がかすんで見えてしまうほど相手のバックアップの正確無比な攻撃は、戦域を着実に脅かし、寮機に実力以上の力を引き出させていた。
（もっとあたしに腕があれば……）
相手のトリッキーな攻撃に損傷し、体制を立て直すため後退を掛けるカークの機体の援護に入りながら、シャーリーはテロリストになされるがまま押されているという事実に、その整った顔立ちを屈辱感で赤く染めていた。

錯綜する情報と融通の利かないシステムに翻弄され続けるプルリヤシュ要塞発令所は混乱と喧騒に包まれていた。

――テロリストの出現。

――核兵器による自爆攻撃。

――攻撃側艦隊による実砲の誤射。

――数隻の演習参加艦艇および要塞内における不自然な爆発事故。

――事態に混乱した部隊による命令無視の反撃行為。

裏付けがとれないまま錯綜する断片的な情報による事態の混乱という火種に油を注いでいるのは、いまいましい統合戦術プログラムの存在だった。

さらに性質（たち）の悪い事に混乱している部隊は演習参加艦艇全体の規模からみればほんのごくわずかな事であり、このまま最後まで演習を強行し、仮想演習画面の映像で見学している大統領を始めとしたプルリヤシュ要塞内の来賓達の目を十分に欺くことすら可能だった。

混乱に目をつぶり、軍組織特有の秘密主義のベールの向こうにこの失態を押しやって、何食わぬ顔で高らかに演習の終了を宣言する――多くの将兵達の上層部への怨嗟と引き換えに手に入れることのできる成功、という甘い誘惑にレンブラントの心は揺れる。

「演習の中止を進言いたします」

事態の収束のため、最も合理的な思考によって導き出されたはずの単純明快な結論は、組織内の力学と様々な人間模様により、即座に決断される事はない。結論への道のりには程遠い無意味な議論が交錯し、正確な事態の把握のために手を尽くす情報士官達の努力を記した紙片が、発令所内の将官達の手の中で虚しく踊る。

最終局面に入りつつある仮想演習画面は予定通りのスケジュールを刻み続け、いつまでも適切な指示が下されず、混乱のるつぼに突き落とされた現場将兵達の不信と不満と不安の三重奏が織りなす狂

想曲が発令所内にこだまする。
迷うレンブラントの眼前で、一刻も早い中止の決断を望む現場上がりの将官と、軍の面子と大局的な実を取らんと続行を望む保身的な将官が、掴みかからんばかりの勢いで衝突した。
さほど有益とも思えぬ議論に優勢の色を見せる将官達に従い、演習の続行を厳命しようと口を開きかけた時だった。さらなる一報がレンブラントの下に届いた。
「攻撃側艦隊が後退を開始。艦隊司令官ルオ大将より降伏宣言が行われました」
その知らせにレンブラントは唇を噛む。先手を打たれた――その思いが怒りとなってこぶしを震わせる。
未だに演習続行の指示が行われているデータと実在艦艇の動きの齟齬は限度を超えれば再び大きなシステム上のエラーを生み出しかねない。ルオの一方的な決断にレンブラントは従わざるを得ない立場に立たされていた。
「已むを得ん。統合演習プログラムの速やかな停止とともに演習を終了し、防衛側艦隊の勝利宣言を発令しろ」
その言葉に数人の将官達がわずかに不満気な表情をみせたものの、彼らに有効な策があるわけではない。勝利宣言と予定外のタイミングでの演習終了に対するつじつま合わせを行うため、各艦隊へマニュアルを一部変更した指示を送るべくしぶしぶと己の仕事に従事し始める。
中断ともいえる強引な演習終了にともなう統合演習プログラムの切断――このタイミングを密かに待っていたのは、混乱に巻き込まれ事態の速やかな打開を望む現場将兵達だけではなかった。

（２０１１／０２／１２　Ａｒｃａｄｉａにて初稿）
（２０１１／０９／１９　本サイトにて初稿）

10

弾丸を使い切ったショットランサーを投棄し、兵装をビーム・ライフルに変更するとゴルドは距離を取るべく《Ｆ９１》に向かって砲撃を行う。Ｉフィールド・システムの一時停止など気にする必要もなかった。

戦闘開始時に突き刺さるように放たれていた敵機からのプレッシャーもすっかり鳴りをひそめ、今やどこにでもいる腕のいいパイロットどまりの実力しか感じられない。砲撃も散漫なもので殺意とは程遠い温さで繰り返される。乗っている人間が変わったのではないかと思えるほどの相手の変質にゴルドは落胆する。

「脆いな……」

眼前のパイロットのあり方をそう評価する。彼に何があったかなどという事は知りえない。

倒すべき敵を目の前にして、ためらいを生じさせる――ＭＳパイロットとしては致命的だった。ゴルドすら寄せ付ける事のない最強とも呼べる力を持ちながら、内心の動揺と迷いを相手に悟らせる、その脆さはあまりにも滑稽だった。

（孤独なのだ……）

信じるべきもの、頼るべきものをどこにも見出せない――虚像の己が何かの拍子に崩れた時、露骨なまでに脆さが露わになる。他者よりも優れた能力を持つゆえにそのギャップは大きい。自身の限界を知らず、中途半端な内面のまま中途半端に組織にぶら下がる事で、結局肝心なところで自分と周囲を裏切る事になる者の典型であろう。

先ほどまで気にもとまらなかった自身の荒い呼吸音がやたらと耳につく。ゴルド自身がこの戦闘に興味を失いつつある証拠だった。

「哀れだな……」
それは眼前の相手にだけなく、自身に対して向けられた言葉だった。そんな相手に対し、つい先ほどまで全てをかけるに足ると錯覚した自身が無性に愚かしかった。
攻防らしきものを繰り返しているものの、もはや眼前の敵に興味はなかった。モニターのはるか彼方の艦隊群からは爆発の輝きが薄れ、あたふたとさまようＭＳや小型艇のスラスター光から混乱する様が見て取れる。僅かに響く鈍い胸の痛みをこらえながらゴルドは決断を下す。
「後退するか」
未練がましく追いすがろうとする《Ｆ９１》に数度の威嚇射撃を加えるとゴルドの《Ｆ９７》はその場を全速で離脱する。あっさりと逃走を始めた敵機の動きに一瞬あっけにとられながらも、ジュベールの《Ｆ９１》がそれに続く。背後からの魂のこもらぬ攻撃をＩフィールド任せに防ぎながら、ゴルドの《Ｆ９７》は当初の予定通りの逃走ポイントへと向かっていた。

「プルリヤシュ要塞及び防衛側艦隊司令官より発令。演習終了および防衛側艦隊の勝利宣言が行われました」
ブリッジオペレーターの報告に《ゲオルグ》艦長ヴォラスコフは小さく笑みを浮かべる。
「了解した。タイミングを間違えるなよ」
航行システムの領域を区分けして作られた仮想領域内で稼働中の統合演習プログラムの表示を確認する。プルリヤシュ要塞から送られてくるデータにはご丁寧にシステム切断までのカウントダウンが行われている。

ここまでは予想以上に順調といってよいだろう。

本隊の命令に忠実な艦船は未だに演習システムの支配下にあり、いち早く事態に対応しようとした部隊の多くは、演習領域に紛れ込んだ不審艦の捜索よりも損傷もしくは大破した機体や艦船群の救助活動に追われている。《ゲオルグ》に取りつこうとしたＭＳ隊に対してはジノとリリアが応戦しており、数度の戦闘の後、最後に当たった部隊がかなり厄介な連中であるという事を除けば、出来すぎの感が強い。

救助要請の無線が錯綜し混乱する宙域を堂々と進行する《ゲオルグ》の後を追うように張りついてくる一隻のラー・カイラム改級戦艦。場馴れしている艦長により指揮されていると見えて不用意な攻撃は行ってこない。こちらがミノフスキー粒子を振りまいていないことから自爆や周辺艦船への誘爆の可能性も考慮に入れているのだろう。このまま安全宙域まで押し出してから砲撃で仕留める。それが常套策と言うところだろうか。

すでに《ゲオルグ》は脱出予定ポイントに侵入しつつある。

唯一の問題は敵ＭＳ隊と交戦中のジノとリリアの事だった。だが、こちらのほうもなんとかなるはずだ。

艦を僅かずつ減速させながら、統合演習プログラム切断のカウントダウンタイマーの数値を横目にヴォラスコフはタイミングを待つ。数値が一ケタに変わると同時に艦内に緊急サイレンが鳴り響く。タイマーが残り五秒を示した時点でヴォラスコフは最初の命令を下す。

「スモークガス、散布」

命令と同時に白色ガス弾が放出され、ゲオルグとその周辺空域を覆う。さらに演習システムが切断されたタイミングで次なる指示が下される。

「艦、急速反転。ミノフスキー粒子散布と同時に識別信号切り替え、照明弾を射出後、最大船速」

強力な横殴りのＧで艦体を軋ませつつ反転した《ゲオルグ》が照

明弾を放ちながらスモークガスの中から現れる。照明弾が周囲を明るく照らし、撤退の知らせを受けたジノとリリアの機体が追尾する2機の《Ｆ９１》に砲撃を加えながら《ゲオルグ》に向かって後退する。二人の機体を回収しながらも《ゲオルグ》はそれまでの進行方向とは逆の宙域に最大船速で離脱する。その進行方向には《ゲオルグ》を追尾していたラー・カイラム改級戦艦《エナド》の姿があった。

あまりにも単純と思える目くらましの中から突如現れた目標艦艇の姿に、《エナド》艦長レイノルズは目を見張った。

測ったように少しずつ船速を落とし始めた時点で何かを狙っている事は分かっていたが、敵艦の行動はレイノルズの予想のさらに上を行く大胆さだった。

「衝突コースです！」

悲鳴混じりのその報告にレイノルズはすかさず回避行動を命じる。ビーム・シールドを展開しながら《エナド》の進路に強引に侵入してくる敵艦に対し、こちらもビーム・シールドを展開しつつ回避行動に入る。

あわや衝突かと思われた2隻の艦はビーム・シールドを接触させながらも、その反動を利用して強引に進路を変え、すれすれの距離をすれ違う。艦体間に発生するプラズマが互いの艦体表面を焼き、衝撃が艦内を揺らす。与えられたダメージは受けに回った《エナド》のほうが大きく、耐ショック姿勢を取れなかった乗組員に多数のけが人が発生した事がブリッジにもたらされる。即座に立て直しができないと見てとったレイノルズは速やかに指示を出す。

「不審艦のデータを周辺艦艇に送れ」

「それが、その……」

「どうした？」

「ミノフスキー粒子の影響ではっきりしないのですが、敵不審艦はどうも識別信号を切り替えたようで、追跡時と接触前のデータに齟齬が生じている模様で……」
「ならば可能な限り一致しているデータのみを送り、ブルー・チームに追跡を続行させろ」
悠然と離れていく敵艦のテールノズルを見送りながら、レイノルズはどこか覚えのあるその大胆な操艦と鮮やかな手際に一抹の不安を感じていた。

損傷したシールド発生装置を予備パーツに換装したものの、基部そのものが損傷しているのか出力が上がらない。実質、シールドは使えないと考えたほうがよいだろう。
「少し、ナメてたか……」
赤いエラー表示を幾度か起こしながらも走り続ける左マニュピレータ修正プログラムの状態を窺いながら、カークはぽつりと呟いた。油断していたつもりはなかった。ジャクソンの一件から厳しい戦いになる――そう予見できていたはずである。
追い詰められたネズミすら猫に噛みつくという。ましてや相手は知恵を持った人間である。何を仕掛けてくるかわからない死に物狂いの相手ほど恐ろしい――その事もよく知っていたはずである。
だが、特務部隊に選抜され高性能の機体を与えられ、知らず知らずのうちに慢心が生まれていた、その結果が左腕の損傷という事実に繋がっている事を認めざるを得なかった。
（もう同じ轍は踏まねえ！）
前方を逃げる不審艦の艦影を追いながら己に言い聞かせるものの、事態は思った以上に好転的なものではない。

運動性こそ皆無と言ってよい艦船もいざ一目散に逃走を図るとなるとその船脚は馬鹿にできない。さらに、最大船速で宙域を逃げる不審艦からのランダムな威嚇砲撃の中に数発、明らかにこちらの撃墜を狙った正確無比な砲撃が混じっている。結局全ての砲撃に対して回避行動をとりながらの追撃とならざるを得ず、２機の《Ｆ９１》と不審艦との距離はますます開く一方だった。

逃走する不審艦の予想進路を割り出したカークは眉をひそめる。どうやら目標はデブリ群――プルリヤシュ要塞近辺の中で最大規模のものの中に飛び込むつもりのようだった。

「無茶しやがる」

相対速度を上手く合わせれば確かに巡洋艦クラスの艦船でも侵入は可能である。しかし、一度その中に侵入してからの脱出は容易なものではない。ましてやデブリ群は大小様々なもので構成されており艦体の損傷は免れないだろう。自分から袋のネズミになりかねない選択はあまりにも愚かに見える。

だが、先ほどの鮮やかなエナドとの交錯を目の当たりにしていた身としては、この選択にもなんらかの思惑があるように思われる。何をやってくるかわからない、そんな不気味さを漂わせた空気が標的の周囲を渦巻いているようにカークには感じられた。

不運はさらに重なる。

一刻も早く追いつかねばならない、そんな焦りに少しずつ蝕まれながらもじわじわと離され、遠のいていくスラスターの輝きを忸怩たる思いで追尾する２機の無線にとぎれとぎれの救援メッセージが入った。

『助けてくれ、もう酸素がないんだ』

『こんなところで死にたくねえよ、回収を頼む』

自身の死を眼前にして、あらゆる仮面を脱ぎ棄てたなりふりかまぬ人間の叫びが、コックピット内の二人の心を打つ。統合演習プログラムの支配から解放されようやく事態が把握できるようになったものの、速やかな救援の手がそれを必要とする全ての者たちに行き

渡るなどという事は、所詮、夢物語である。

損傷、撃墜されたＭＳや艦艇に閉じ込められ、あるいはそこから放り出され暗い宇宙（そら）を漂流する恐怖はそれを経験した者でなければ分からない。救難信号を発し、酸素の消費を抑えるために安静にしておくことが最善であるという事が頭では理解できていても、いざ自身の死を眼前にすれば何が何でも助かりたい、と声を上げて叫ぶのが人間というものである。

そんな友軍の悲痛な叫びに堪らず、カーク達は追跡を中断し、周辺宙域を索敵する。逃走艦艇によって振りまかれたミノフスキー粒子により、弱冠おぼつかないレーダーに映る宙域の各所には、近づきつつある死の恐怖に怯える人々の姿がある。

その姿に初陣で漂流することとなったかつて自身の姿を重ねる。

命令が出ている以上、いかなる事からも優先して任務を続行するのが軍人としての務めである。だが、自身を組織の駒と割り切るには、回線から聞こえてくる『生きたい』という人々の叫びは余りにも悲痛だった。

一度救助活動を始めれば、あとはなし崩し的に続けざるを得なくなるだろう。本隊からの命令によって正規の救助隊が到着する頃には敵艦の姿は漆黒の闇の中へと消え、２度と捕らえる事は出来ない。ジャクソンの死に対する報復も行えないまま、むざむざとテロリストを取り逃がす――軍人として無能である以前の問題だった。

彼の過去を知り、又このような修羅場を経験したことのないシャーリーも現状にどう対応してよいのか分からないのだろう。論理で導かれた正解と倫理で導かれた正解が異なる時、いかに聡明であっても、人間は困惑する。

しかし、チーム・リーダーのサカキがいない今、カークは決断を下さねばならなかった。まだ、衝突からの立て直しができていないのか後続にいるはずの《エナド》の姿はなく、テロリストたちの置き土産ともいうべきミノフスキー粒子によって通信状況も悪い。

しばしの苦悩の後、敵部隊の追跡を諦め、宙域で遭難する人々を

救助活動への参加を決断しようとしたときだった。
「馬鹿野郎！　お前ら、何やってやがる！」
罵声と共にカーク達の機体に接近してきたのは２０８特戦隊に所属する《ジャベリン》の小隊だった。怒気を孕んだ表情でモニターに映ったのは《ブッシュ》ＭＳ隊ランサーズ小隊長レスリー・スナイプス中尉の姿だった。
「お前らの仕事は敵不審艦の追跡だろうが！　こんなところで、何、油売ってやがる！」
「しかし、このあたりにはまだ救助隊の手が回っていません！」
シャーリーの言葉にスナイプスの表情がさらに歪んだ。
「そんなことなら俺達でもできる。お前らは一刻も早く、こんなふざけたマネしやがった奴らにきっちり落とし前をつけるのが仕事だろう。それが出来なくて何の為の《Ｆ９１（高性能機）》だ！」
彼らの所属していたクラップ級巡洋艦《ブッシュ》は、先刻のテロですでに宇宙のチリと化している。多くの仲間の死に腸（はらわた）を煮えたぎらせながらも上からの指示に従い、救助活動に従事していたのだろう。
平時の演習において事あるごとに《エナド》ＭＳ隊の噛ませ犬として扱われる状況を皮肉交じりにカーク達にぶつける彼の言葉は、この瞬間、何よりも正しかった。
「了解した。状況を貴官らに一任する。我々は引き続き、敵部隊の追跡任務を続行する」
敬礼と共に述べたカークの言葉にスナイプスも又、敬礼で以て答える。
「貴官らに幸運を。そして……、俺達の仲間をやりやがった奴らを必ずぶっ殺してくれ！」
建て前と本音。
組織人として、一個人として、ＭＳパイロットとして、様々な想いが籠められたスナイプスの言葉を腹の中に呑み込んでカーク達は

任務を再開する。鮮やかな加速を掛けて宙域を離脱する2機のスラスター光を見送ったスナイプスは、混乱と恐怖におびえる周囲の人々を救助すべく部下達に任務の続行を命じた。

追撃を振り切った《ゲオルグ》が暗礁宙域に侵入しようとしていた頃、ゴルドも又、同じ場所へと逃げ込もうとしていた。

（まだ、追ってくるのか……）

もはや戦う気などないだろうに、未練がましく追跡するその行為は、考えるという事を放棄し、命令されるがままの行動しか取れないロボットを連想させる。戦うという選択肢しか持つ事のない軍人は、一皮むけば皆そのようなものだろう。

若干の鬱陶しさを感じたゴルドは、携帯式のスモーク弾で追跡者に目くらましを掛けると同時に、デブリ群のうち最も大きな流れのものに相対速度を合わせ、突入する。いくつかの細かな破片が機体に衝突する音を聞き取りながらもデブリ帯の奥深くへと強引に侵入する。これでちょっとやそっとでは近付いてはこられないだろう。

ＭＳを軽く隠してしまう程度の手ごろなデブリを背にしてようやく息をつく。

後は、追跡者を適度にあしらいながら《ゲオルグ》と合流し、次の脱出作戦に備えればいい。ジノ達と合流できれば敵機も後退するほかないだろう。

レーダーに機影はなく熱感知センサーにも反応はない。モニターに映るのは果てしない虚空を永遠に流れ続ける雑多なデブリの山だった。

全身に広がる倦怠感を吐きだすかのように大きく息を吐く。そして、己の不運さを顧みる。

最高の敵と出会い己の全力を出し切って戦い、死んでいく――ただそれだけが望みだった。だからこそ、先の事など考える必要のないこの無謀とも思える作戦に参加する事にも躊躇いはなかった。

そしてそれは実現するはずだった。だが、現実は違った。戦いの女神に見放されたかのようにゴルドの強敵は突然に消えてしまった。

人生とは思い通りにいかないものだ。ふと、感傷的になっている自身に気づき思わず首をふる。

まだ、終わってはいない、せめて戦って死んでいくくらいの事ならば、この次の戦場でも可能であるはずだ。そう考え、《ゲオルグ》に合流すべく再度エンジン出力を上げようとしたときだった。

――激しい痛みがゴルドの胸を貫いた。

これまで耐えてきた中で最大級の痛みに意識が一瞬途切れそうになる。胸の奥が万力で締め付けられ、同時に内臓が爆発するかのような激しい痛み。あわてて、腰のピルケースに手を伸ばそうとするが、それを邪魔するかのごとく熱い物がのどをこみあげる。

激痛と不快感をこらえきれずゴルドは吐血した。バイザーが赤く染まり、血と胃液の匂いがヘルメット内に充満する。

（まだだ、まだ、死ねん……。俺は……まだ何一つ満足して……など……いない）

とっさに心に湧きあがったのは、余りにも俗っぽい願いだった。自身の吐きだした血液に溺れそうになりながら、とっさにバイザーを開く。開いたバイザーから吐きだした血液が水泡となってコックピット内へと広がっていく。宙に浮かびながら拡散していく紅の水泡の中に、彼を苦しめてきた病魔が招いた死神の姿を目のあたりにしながら、再度襲った激痛と共にゴルドの意識は深い闇の中へと堕ちていった。

スモークの中に消えた標的を追ってしばらくの後。
ジュベールの《Ｆ９１》は消えた標的を追って未だにデブリ宙域内をさまよっていた。
「俺は何をやってるんだ……」
たかが一機の敵に振り回され、翻弄される体たらく。目か耳を突然塞がれたかのように自身の感覚の一部が欠落し、何よりも、らしくない行動をとり続ける自分自身の事が信じられなくなっていた。
岩石だけでなく様々な金属片や宇宙ゴミが浮遊する雑多なデブリ宙域。一度見失ってから時間がたってしまった標的は、よほどの事がない限り再び捕まえることなどできないだろう。速やかな《エナド》への帰投――それが当然の事だった。
だが、そんな当然のことすら頭に浮かばないまま、ジュベールの機体はその場所を彷徨っていた。その姿はまるで彼自身の心を映しているかのようである。たとえ、もう一度遭遇したとしても、今の自分が満足に戦うことなどできないことは分かっていた。それほどに彼の心の中からは闘争本能が消え去っていた。
それでも彼は標的を追い求めていた。
そこに何かの答えがあるかのように……。自身の中から欠落した何かを補うものがそこにあるかのように……。
そんな彼の願いが通じたのだろうか。彼は暗い闇の中に潜む一筋の光の如きその姿を見出した。
なにかに引き寄せられるように彼の機体は標的に近づいていく。
先刻、混乱するジュベールをあざ笑うかのように消えていったその機体は、自身をすっぽりと覆い隠すほどの大きさのデブリを背にして、ただ静かにそこに在る。
だが、その姿は大きな違和感を彼の中に生じさせた。
（誘っているのか？）
生じた違和感に眉を顰める。

宙域にデブリと共に浮遊するその姿はあまりにも無防備だった。
出力を低レベルに落としたヴェスバーで機体の周辺を威嚇射撃する。放たれたエネルギー弾はＩフィールドによって阻まれ、周辺のデブリを弾き飛ばす。システムが稼働中であることを確認しながらも、やはり全くと言っていいほどパイロットの反応がない事にジュベールは戸惑いを隠せない。
意を決した彼は、意識の死角になりやすい機体の天頂面から素早く接近し、右腕のビーム・サーベルを押し当て両肩の基部と胸部のガトリングの射出口を焼き切った。センサーが磁場の消滅を確認すると、標的をデブリに押し付け、片腕のみとなっている自身の機体のマニュピレータで拘束する。
護身用のショックガンと携帯バーニアを腰に装着すると天面にあるコックピット・ハッチを開け、外に出る。漆黒と静寂の暗闇の中、生命の気配は当然ない。
（似ているな……）
自身の機体と見比べる。
黒を基調としたロービジ塗装にダークイエローのポイント、色こそ違えど、その特徴的なツインアイとブレードアンテナは《Ｆ９１》と同様に連邦軍初のＭＳの意匠に肖った物であるという事が一目でわかる。
そこでようやくこのＭＳの曰くがどういうものであったかという事を思い出す。
《Ｆ９７》――サナリィがその存在を否定した幻のシリーズであると、以前整備兵たちが暇つぶしの雑談に語っていた事が脳裏をよぎる。そんなものがテロリストの道具として、引き渡され使用される――そんな人の世の混沌と複雑さに想いを馳せるよりも、眼前の機体が放つある種の神々しさにジュベールは目を奪われた。
（いい機体だ……）
それが《Ｆ９７》を間近で見た第一印象だった。自身の乗機である紫紺色に染まった《Ｆ９１》も決して悪い機体ではない。いや、

それまでに乗ったどんな機体よりも優れていたと言っていいだろう。だが、どこか彼の感性とは合わない部分があった事は認めざるを得なかった。

こんなものに乗って自分と戦っていたのは一体どんな人間なのか、その疑問が彼を《Ｆ９７》のコックピット・ハッチに近づけた。

解除キーをツールでハッキングし、ハッチを強制解放する。吐き出されるかのように噴出するコックピット内のエアに混じって、見覚えのある紅の水泡が飛び出すのを目にして僅かに動揺を覚えた。

腰のショックガンを引き抜くと注意深く中を窺いながら、狭いハッチ口から勢いよく中へと侵入する。ハッチの閉鎖と共にコックピット内にエアが充てんされていく。パイロットシートには意識を失っているように見える男の姿がある。バイザーの向こうの表情は読めない。

エアの充てんの完了と同時にジュベールはショックガンを放り出し、男のヘルメットのバイザーを開ける。ヘルメット内に付着していた微量の血液が中空に舞う。その様子に顔をしかめながらもジュベールは男の様子を窺う。

がっしりとした体格。年齢は３０台半ば、あるいはもう少しといったところか。ベテランパイロットの空気を纏いながらもその姿に生者の力強さはない。

「死んでいるのか……」

幾度かの呼びかけの後で、呼吸と脈拍がない事を確認したジュベールはぽつりと呟いた。

即座にシートとパイロットスーツのアタッチメントがしっかりと噛みあっている事を確認すると、シート側のコンソールを操作し蘇生処置を行う。

ヘルメット内に密度の濃いエアが投入され、２度、３度と電気ショックがエアベルトに固定されたその頑強な肉体を跳ね上げ、スーツが伸縮し全身を刺激する。その様子を見ながら再びぽつりと呟いた。

「俺は何をやってるんだ……」
話をしたい訳でもなく、再戦したい訳でもない。
こんな事をしても何の意味もない事など分かっている。まるで何かに操られるかのような自身の行動に、解答など決して得られることのない疑問を浮かべながら、ジュベールは蘇生処置が行われる男の姿を見つめた。
「う……」
数度の処置の後、男が息を吹き返す。朦朧とする意識の中で男のバイザーを開いたジュベールに彼は訪ねた。
「ここは……」
だが、その質問にどう答えればよいか分からなかった。
なぜ、自分がここにいるのか？　なぜ、彼を助けたのか？　余りにもらしくない自身の行為に戸惑っているのはジュベールのほうだった。男の意識が完全に覚醒する前にこの場を離れよう――そう考えたジュベールはバイザーを閉じると男に背を向ける。自身が放り出したショックガンの存在を、この時彼は、すっかり忘れ去っていた。

強烈な息苦しさと共に覚醒していく意識の中、ゴルドは自身の眼前に何者かの姿がある事に気付いた。見慣れぬパイロットスーツ姿。それが連邦軍のものであると認識された時、敵という言葉と共に闘争本能のみが理性より先に活動を開始する。
無意識に伸ばした手の先に、中空に放り出されたショックガンの姿があった。それを掴んだ彼は、自身に背を向けたパイロットスーツ姿に向かって引き金を引く。弾き出された電極が眼前のパイロットスーツに打ち込まれ、流された高圧電流によって失神した事を見届けると、彼はショックガンを放り出した。泳ぐようにコンソールに手を伸ばし、救難信号が発信された事を確認したゴルドの意識は、

再び闇の中へと堕ちていった。

ジュベールの機体が侵入したデブリ宙域内に、彼の機体を捜索するパープル・チーム、ジェラルド・バッジョの０６号機の姿もあった。

小さなデブリ片が装甲を叩く音に神経を尖らせながらも、注意深く宙域を進む。金属片や隕石片にまぎれて、時折浮遊する決して回収される事のないミイラの姿に肝を冷やしながらも、彼は捜索を続けていた。

ジャクソンと別れた後、彼はテロリストの撃墜に全力を尽くしていた。

だが、彼の健闘もむなしく、眼前で起こり続ける悲劇を食い止める事は出来ず、ジャクソンとの連絡も取れなくなって修羅場と化した戦場で、彼はただやみくもに敵の姿を探し続けていた。

サカキと合流し、彼の機体から受け取ったデータによってジャクソンの撃墜を知ったバッジョは大きく動揺した。そしてその動揺はいつまでたっても戦場に現れないジュベールに対する無意識の反感へと育ちつつあった。

同じチームであるにもかかわらず、信頼されていない、必要とされていない、いや、もしかしたら眼中にすら入っていないのかもしれない――そんな負の思考のスパイラルを取り払うべく、彼はサカキの制止を振り切ってジュベールの捜索に向かった。

信号を頼りにようやく彼の機体の存在を確認したその先で、彼は意外な光景を目のあたりにすることとなった。ジュベールの《Ｆ９１》の周辺には見慣れぬ３つの機影が確認された。

「何やってやがる……」

怒りの叫びと共に敵機に襲いかかろうとしたその瞬間、プラズマの

鮮やかな輝きが放たれ、同時に自身の機体を激しい衝撃が襲った。
損傷を示す警告メッセージがモニターを鮮やかに彩る。
　周辺のデブリにぶつかりながらも損傷した機体をなんとか立て直したバッジョが再び目にしたのは、３つの見慣れぬシルエットの敵に拘留されていくジュベールの《Ｆ９１》の姿だった。
　損傷したバッジョの機体に威嚇射撃を加えながら、４つの機影は闇の中へと消えていく。満足に追跡する事の出来ない機体のコックピットの中で、自身の知る最強のＭＳパイロットであるジュベールがテロリストに敗北した、という事実を受け止める事が出来なかったバッジョは、自身の中で何かが音を立てて崩れつつあることに、まだ気付く事はなかった。

Ｃｈａｐｔｅｒ－？－了

（２０１１／０２／１２　Ａｒｃａｄｉａにて初稿）
（２０１１／０９／２３　本サイトにて初稿）

01

ラグランジュ・ポイント――月と地球の質量によって生み出される重力安定点の事である。宇宙居住者が暮らすコロニーはこの場所に建設され、人々の第二の故郷として、地球圏の繁栄を支えている。

だが、このポイントに存在するのはコロニー群だけではない。重力が安定する故に無数のスペース・デブリも又、この空域に集まり、安定軌道を周回している。宇宙世紀開闢以前の旧世紀の時代から、それは未知の世界に可能性と希望を胸に飛び出そうとする人々の障害となって立ちふさがり、宇宙で生活する事が当たり前のこの時代になっても尚、スペースノイド達に様々な苦悩を与え続けてきた。

スペースノイドの歴史とはデブリとの戦いの歴史である、といっても過言ではない。

その苦闘のドラマを綴ったドキュメンタリーから、ラブストーリーやＳＦ物のシネマの題材に至るまで、『デブリ』という言葉で映像ライブラリに検索を掛ければ、おびただしいほどの作品がその名を連ねることとなる。

同様にデブリと格闘する過程で生まれた様々なプロジェクトやシステムも膨大な数に上り、連邦政府公認の大規模プロジェクトから怪しげな通販面白グッズに至るまで、月やコロニーに暮らすスペースノイドの生活に密接に関わっている。輸送船やコロニーに大きな被害を与えかねないデブリの存在は、彼らにとって決して看過することのできない現実の問題なのである。

かつて、流星群のように次々に現れては消えていく笑い話のネタになりかねないデブリ対策の一つに、『デブリをデブリで防ぐ』というコンセプトのもとに生まれた一つのプロジェクトがあった。

旧大戦時に生まれたコロニーの破片や資源とはなりえない巨大な岩塊をデブリ空域内にわざと放置し、宙域内の小さな破片を衝突させる事で宙域内のデブリ数を減少させるというこの案は、数多の実現不可能なアイデアが乱立するデブリ対策としては比較的まともな部類に入るものだろう。

巨大な破片にハリネズミの如く突き刺さったものの中には再利用可能な資源やコンピュータ・チップ、あるいは戦争で失われた希少価値の高いお宝も存在するに違いない――このプロジェクトは金の鉱脈や現代の錬金術などともてはやされ、無責任なメディアの煽りも受けて、投機の対象ともなった。連邦政府の後ろ盾もあり、一攫千金の夢を見た投資家やへそくりの額を増やそうとした主婦達に至るまで、到るところからかき集められた資金が投入され、多くのスペースノイド達の夢と希望を載せた巨大デブリが宙域を浮かぶこととなった。

だが、残念なことに現実は厳しいものである――。

当初の目論見どおりに、デブリ宙域内の小破片の浮遊率は確かに減少したものの、巨大デブリの回収時のコストが馬鹿にならない上、回収されたデブリの換金率は予想よりもはるかに低かった。その結果に不審を抱いた一部の者たちによって、プロジェクトの試験段階での数値操作が明るみに出されることで、このプロジェクトが連邦政府高官をも巻き込んだ詐欺集団による詐害行為であることを多くの者達が知る事となった。

――ゴミの山にあったのは結局ゴミだった

とある高官の言葉がその年の迷言に選ばれると同時に多くの投資家達が破産へと追いやられ、さんざん煽り行為を行った大手メディアに意図的に無視され、手玉にとられることとなったヒステリー気

味の主婦達の抗議がネットを駆け巡ったのは記憶に新しい。
うまい話にはウラがある――はるか旧世紀の時代から語り継がれる人生の真理というものは身を以て経験する事でしか理解できない、というのは人という生き物の哀しいサガではなかろうか？

人々の夢と希望と落胆を載せながらも回収されることなく放置された大質量デブリが今この時も浮遊したままのこの場所で、闇に紛れて怪しげな作業を行う一機のＭＳの姿があった。
並みの量産機よりもはるかに高コストの特殊合金装甲と抜群の耐弾性をほこるＡＢＣマント（アンチ・ビーム・コーティング）によって、小デブリの衝突などものともせず、黙々と地道な作業をこなしていく。腰部のハードポイントに装着された作業用のサブアームを駆使して、大質量デブリに取り付けられた緊急移動用のバーニア・コントロールシステムをハッキングし、起動タイマーを設置する。
一つの作業を終えると直ぐに次のデブリへと移り、再び同様の作業を繰り返す。
ビーム兵器が乱舞する戦場を圧倒的な運動性を以て制圧する兵器としての顔を持つ一方で、このような空間作業に従事する姿こそが、忘れられがちなＭＳという道具のもう一つの顔である。

慣れぬ無重量空間の中で、エアと推進剤の残量に怯えながら、宙域に漂う値の張る獲物を物色し、仲間たちと競争と協力を繰り返していた日々を思い出す。まださほど時間がたっていないにも拘らず、そんな日々が懐かしく思い出されるのは、ここ１、２年の間に身を置くこととなった非日常の世界の体験があまりにも鮮烈だからだろう。
時折、浮遊するデブリの中に見え隠れする大戦時に使用されたＭＳの残骸の姿を舌打ちしながら見送っていく。

回収して出すところに出せばちょっとした金額になるその機会をみすみす棒に振りつつ、脱出準備の為の作業に没頭する。後生大事にお宝を抱えたところで、周辺空域に展開する追撃部隊をどうにかしなければ元も子もない。

予定時間内に作業を終えた彼――ジノ・ヴァレンタインは最後のタイマーの動作確認を終えると、双翼のエンブレムを胸部に描いた愛機《Ｆ９７ＸＥ》のコックピット内でようやく一息ついた。

わずかに温くなった栄養剤入りのドリンクパックを飲み干すと、空になったそれを中空に放り出す。かなり長い間、細かい作業を強いられたストレスを、デブリを的にビーム・ライフルを乱射する事で晴らしたかったのだが、さすがに今は状況がそれを許さなかった。

彼らの母艦アレキサンドリア級《ゲオルグ》は今周辺に浮かぶデブリの物影で静かにその身を潜めている。追撃を振り切りながらの無茶ともいえる強引なデブリ域侵入は、艦の装甲板にダメージを与えたものの、航行に支障を与えるほどの致命的な損傷はない。そのままデブリ宙域からの脱出に備え、《ゲオルグ》は着々と準備を行っている。

一連のトラブルの収拾を終えたジノとリリアの《Ｆ９７ＸＥ》は息つく間もなく、脱出準備のための作業に駆り出されることとなり、つい先ほどようやくそれを終える事が出来たのだった。

別の場所で作業中のリリアとの合流を待って《ゲオルグ》に帰投する――それまでのほんのひと時の休息の時間である。もっと人出があればとは思うものの、所詮は無い物ねだりである。

つい半日前までデッキに満載されていたＭＳ群が再び戻ってくる事はなく、今《ゲオルグ》のデッキ内にあるのは、医務室で緊急処置を受けているゴルドの《Ｆ９７》と、気絶したまま船内の一室に監禁されている連邦士官の乗っていた損傷した2機のみである。特にゴルドの機体の損傷はひどく、直ぐに次の戦闘での運用は不可能

に思えた。もっとも乗り手の生命の状態の方が危ぶまれる様子であったが……。

モニタに映る宙域の映像を眺めながら僅か数時間前の出来事に想いを馳せる。

ゴルドからの緊急信号を受信したジノが「下手打ちやがって……」などと悪態をつきながら駆けつけたその先にあったのは、デブリにまぎれて力なく漂う2機のＭＳの姿だった。

通信にまったく応じようとしないゴルドの異変に、ようやく事の重大さに気付いたジノがコックピットハッチを開くと、中から見知らぬノーマルスーツ姿が気絶したままの様子で現れる。想定外の事態に動揺を隠せぬまま、男と彼の機体の回収をリリアに任せ、ゴルドの状態を確認する。ジノの呼びかけに再び目を開いたゴルドだったが、どこか焦点の合わぬ彼の言動にうすら寒いものが感じられた。

兎にも角にも追撃を振り切りって成行きのまま損傷した2機を回収して《ゲオルグ》に帰投したものの、機体から降りたゴルドの様子はいつもの彼のものとは全く異なっていた。今すぐにでも出撃するかの如く、メカニック達に機体の修理を行うように鬼の形相で怒鳴りつけていたが、その眼には誰も映っていないように感じられた。どこかちぐはぐさを感じさせる彼の激しい言動に周囲が圧倒される中、突然ゴルドはゼンマイの切れた人形のように意識を失い、その身体がデッキ内に浮かんだ。

予期せぬ事態に呆然としていた周囲はやがて蜂の巣をつついたかのような大騒ぎとなり、意識を失ったゴルドの身体は医務室へと運ばれる。かなり青ざめながらも冷静に事態に対処するネーナと船医の姿が印象的だった。

しばらくの後、宙域作業に駆り出される事となったジノ達に、ネーナからゴルドの状態が伝えられた。どこか疲れた様子の彼女が告げたのは、彼が危篤状態であり、今後戦力としては期待できないと

いう事実だった。
その事を心のどこかで予期しながらも比較的冷静に受け止められたのは、誰よりも冷静に事に対処しようとするネーナの姿とゴルドの予期せぬ乱調に大きな動揺を隠せぬメカニック達の姿の差異を目の当たりにしたからだろう。
就航以来、ＭＳ関連部門だけでなく、《ゲオルグ》の精神的支柱となってきた彼の存在感は大きく、まだ予断の許さぬ事態の渦中での彼の不在という事実は残された乗組員たちに重くのしかかった。
ジノ自身、ゴルドが不在となる事で大きな不安と動揺が生じつつある事を自覚し、『こんな時こそオレがやらねば』などとカラ元気を振り回して宙域作業へと向かったものの、どちらかといえば陰鬱な空気に呑まれつつある艦内から逃げ出したかったというのが本音だった。
「何、ビビってやがる」
眼前をふわふわと浮かぶ飲料パックに向かって悪態をつく。知った人間が死にかけた姿を目の当たりにする事など珍しい事ではない。そんな自分がゴルドのその姿に大きく動揺することなどあろうはずもない。家を出て以来、誰にも頼ることなくこれまでなんとかやってきた彼が、いつの間にかゴルドの存在を頼りにしていたなどとは決して認めるわけにはいかない。
「おっさんが居ようが居まいが、やる事は変わんねぇ！」
自身で発したどこか重さを感じられぬその言葉に苛立ちを覚え、眼前を浮遊する飲料パックを拳で叩きとばす。
叩きつけられた衝撃でペタリとつぶれたパックはモニタに衝突すると慣性に従ってふらふらとジノの眼前に戻ってくる。舌打ちをしながらそれを受け止めたジノは力任せにパックを握り潰した。ストローから飛び出した僅かに残った中身が、水泡となって頼りなげにふわふわと浮かぶ。
潰れたパックをシート下に放り込もうとしたその瞬間、高精度のセンサーが接近する機体の反応を捕えた。自身の予想と異なるモニ

タ上のその表示に眉を顰める。
　自機が潜む大質量のデブリの周辺に接近しつつあったのはジノと共に宙域作業を行っていたリリアの機体ではなく索敵行動中の追手の機体だった。
　デブリの浮遊する宙域を慣れた様子で航行していたのは2機の《Gキャノン》だった。
　支援攻撃機であるその2機はすぐ近辺のデブリの影に潜むジノの機体の存在になど全く気づかぬ様子で宙域を航行する。このままいけばうまくやり過ごす事ができるだろう。万が一の事態に備え、右腕のマニュピレータにビーム・ライフルをセットしたジノは状況の推移を静かに見守る。
「とっとと行っちまえよ……」
　他人任せの彼らしからぬ成行きに小さな不満の呟きがぽつりと漏れる。
　心の中にくすぶる苛立ちをぶつけるにはちょうど良い相手だった。普段の彼なら迷わず交戦という選択肢をとっていたはずである。その結果、無駄な戦闘を行い、自分と周囲をより困難な状況に追い込みながらも、その事に気づく事もない――いつのまにかブレーキ役となっていたゴルドの存在に甘えてしまっていた。
だが今、彼の不在が図らずもジノに冷静な判断を下させることとなっていた。
「悪いが、てめえらの相手してる場合じゃねえ。さっさと失せろ！」
　届くはずもないジノの呟きなど聞こえる訳もなく、宙域を行く2機の《Gキャノン》に進路を変える様子はない。このまま現状を維持すべく、じっと我慢の子を演じ続ければ、何事もなく危難はすぎさることとなるだろう。
　だが、そんなジノの期待を裏切る形で予想外の事態が彼の背後に迫りつつあった。

接近しつつある2機の哨戒機をやり過ごそうとするジノの機体の背後でさらに一機の《ジャベリン》がライフルを構え、攻撃態勢に入ろうとしていた。哨戒任務中に偶然発見した、怪しげな作業を行っている所属不明機を堕として戦果とすべく、2機の寮機を囮に標的の注意を引くと同時に背後から仕留めるために、相手に警戒されぬようミノフスキー粒子を散布せず、ダミーバルーンを利用してデブリ内を慣性航行しながら接近する。

狡猾な狩人の如きその振る舞いに獲物は全く気づかぬ様子で囮の動向に注意を奪われている。ポジションにつくと同時にその無防備な姿に狙いを定めた。僅かに呼吸を整えると同時にトリガーを引く。

――瞬間、漆黒の暗闇の中に一筋のプラズマの光軸が生まれ、今まさに標的を堕とさんとする機体を鮮やかに貫いた。

不意打ちとも呼べる砲撃を頭上からまともに受けた《ジャベリン》は砲撃の衝撃で上下に押し潰されるように機体を変形させると同時に爆散した。背後で起きたその爆発を合図に、爆光を背にしたジノの《F97XE》は不用意に接近する2機の《Gキャノン》に向かってライフルで威嚇しながら加速する。想定外の事態にあわてた2機の《Gキャノン》は回避行動を取ろうとしたものの、生憎とそこは大小さまざまなデブリが浮遊する宙域である。デブリとの衝突を回避し損ねた一機の《Gキャノン》が激突して行動不能になるのを尻目に、ジノは残りの一方に向かって飛びかかり、ビーム・サーベルをコックピットに突き刺した。操り人形の糸が切れるかの如く、一瞬のうちに物言わぬ鉄の塊と化したのを確認すると、ジノは行動不能に陥っているもう一方の機体に向かう。

2度のデブリとの激突の衝撃で肩口から右腕がはじけ飛び、両肩にマウントされた1対のマシンキャノンは見る影もない。半ばつぶれかけた頭部からむき出しになったメカニックにグロテスクさを感

じながら、ジノはとどめを刺すべくそのコックピットに狙いを定めた。

「先に仕掛けてきたのはお前らだからな……」

相手に武器を向けその命を奪わんとした以上、自身の命を奪われても文句は言えない。それが戦いの場に立つ者の掟である。せめて恐怖が長く続かぬよう一瞬で楽にしてやることこそ、戦いの場に立った相手への礼儀というものだろう。

ゴルドに叩きこまれた戦いの掟に従おうとしたジノに対し、損傷した《Gキャノン》のパイロットは意外な行動に出た。

「た、助けてくれ！　俺の負けだ！　い、命だけはとらないでくれ、頼む……」

国際チャンネルで発せられた途切れがちな無線の向こうで、悲痛ともいえる叫びが捉えられた。

その声がジノの怒りに火をつける。

只ですら行動不能の相手の命を奪うという行為に寝覚めが悪いものを感じるというのに、相手はさらに命乞いまでする始末である。冷静さを失ったジノは、思わず怒鳴り返していた。

「ふざけるな、仲間を殺した相手に命乞いするなんて、てめえ、それでも軍人か！　潔くあの世に行きやがれ！」

言葉と同時にライフルで再び狙いを定める。だが、さらに無線の向こうの声は続く。

「助けてくれ、オレはただ、命令されただけなんだ！　あんたに武器を向けてなんかねえ。頼む、見逃してくれ！」

命令される側にいるだけの組織の駒である自分に罪はない、とでも言いたげなその身勝手な言葉にジノの怒りは頂点に達する。

「クソッたれが！」

怒りの咆哮と同時にライフルの一撃を放つ。先端から生み出される光弾が、《Gキャノン》の背後のデブリに命中した。ばらばらに飛び散る複数のデブリ片が行動不能のまま浮遊する《Gキャノン》の機体に叩きつけられる。自身の機体を突如襲った衝撃に盲目状態

のコックピットの中のパイロットの恐怖は頂点に達する。
「いやだ、死にたくねえ、頼む、助けてくれ！」
涙まじりに、汚くわめき散らすその醜態に、激怒していたジノの心の中から何かが削がれていく。
不快な音声を発し続ける無線を切断するとジノの機体は《Ｇキャノン》に近づき、左腕にセットされたビーム・サーベルで敵機の残された左腕と両脚部を切断し、その機体を蹴り飛ばした。
原形を失ったＭＳの姿は玉突きの要領でデブリに衝突しながら慣性に従って宙域の外へと流れていく。運が良ければ望み通りに命を拾う事になるだろう。
「甘いな……」
ぽつりと小さく呟いた。
ゴルドがここにいたならばおそらくこのジノの行為を拳一つで済ますようなことは決してないだろう。躊躇なく相手の命を絶ったはずだ。ジノとて頭の中では分かっている。この行為が自身と妹を、そして《ゲオルグ》そのものを窮地に落としかねないということに……。
追撃を掛ければ間に合わぬ事はない。だが、それでも泣き叫ぶ相手を躊躇いなく撃ち落とすだけの非情さは持ち合わせていなかった。
世の中は理不尽だ――そんな言葉が思い浮かぶ。
自身の半生が決して立派なものであるとはいえるものではない。しかし、戦いの場に立つ者として彼なりに覚悟を決めて戦場に立ってきたつもりだった。戦士としての技も心も俺の方が上だ――少なくともジノはそう思っていた。
「戦う覚悟もない奴がただ軍人ってだけで、でかい顔をする世の中が、間違ってんだよ！」
聞く者などあろうはずもない狭いコックピットの中で、大声をあげて叫ぶ。
ふと、先日の戦闘で対峙した《Ｆ９１》の動きを思い出した。

自身とはまるで別世界にいるかのような挙動を鮮やかに眼前で行っていたのは、先ほどのパイロットと同じ連邦軍の軍人だった。同じＭＳ乗りとしてその技量に感嘆の念を禁じえない。他者の長所を素直に認める事などめったにないジノに、そのような想いを抱かせるほどのものを身につけるのに、いったいどれだけのものを費やしたのだろうか？

そんな人間と先ほどのパイロットが同じ連邦軍の軍人であるという事に、ジノ自身が納得できるはずもない。

「クソッたれが！」

この頃口癖になりつつある悪態をつきながら、ジノは蹴り飛ばした機体が消えていった宙域を睨みつけた。慣性のままに宙域を流れていったその姿はもはや闇にまぎれ、見えるはずもない。代わりに何気なくのぞいたレーダーに、別の機体の反応が現れた。

それはジノの機体の背後を狙っていた《ジャベリン》を狙撃したリリアの《Ｆ９７ＸＥ》だった。おそらく一部始終を見ていたはずであるが、ジノの行為に対して近づいてきた彼女は何も言おうとしなかった。

「大丈夫？」と只一言尋ねる彼女に、ジノは「ああ」と返答する。

それで充分だった。

デブリ宙域内に戦闘光が生じた以上、近くに他の部隊が展開していれば気付かれることになる。ましてや彼は敵を見逃している。回収され味方に報告されることになれば、より一層ゲオルグを取り巻く事情は悪化する。互いの作業の終了を確認したジノは、この後味悪い場所から一刻も早く離れたかった。

「《ゲオルグ》に戻るぞ……」

「うん、そうだね。帰ろう、兄さん」

リリアの返答に小さな違和感を覚えつつも、ジノは宙域から離脱すべく機体のスラスターを輝かせた。次いでリリアの機体がその輝きに追従する。

再び無人となったデブリ宙域内には、新たなデブリの仲間入りを

果たす事となったＭＳの残骸のみが残された。闇の中に浮遊する大質量デブリには、移動用バーニアに取り付けられたジノ達の残したタイマーの小さな輝きが、不気味に点滅を繰り返していた。

（２０１１／０３／２６　Ａｒｃａｄｉａにて初稿）
（２０１１／１０／２３　本サイトにて初稿）

02

ジオン独立戦争――開戦後僅か数日で実に４０億近い人命を奪うこととなったこの戦いにおいて、スペースノイドの不満の凶刃が最初に向けられたのは、エリートと目されたアースノイド達に対してではなく同じ宇宙に住む同胞に対してだった。

この決定的な矛盾にも関わらず、一年戦争終結後、二十年近くも続いたジオン戦役が大多数のスペースノイドの意思として支持されていたのは、それほどに宇宙に暮らす人々の生活環境が劣悪であり、彼らの中の潜在的社会不安が自分達を追いだして地球でのうのうと暮らす連邦政府のエリートたちやアースノイド達に向けられていたからであろう。

連邦政府の主導による強制的な宇宙移民という負の歴史に虐げられ続けてきたスペースノイド達にとっては、ダイクン親子の妄想もザビ家の専制も所詮きっかけにすぎず、８０年近くの年月を経て積み重ねられた不満の代償は連邦政府にとって計り知れぬ痛手となった事は、多くの者たちが知る事実である。

科学技術の粋を尽くして建造されたスペースコロニーという箱の中で、厳密な計算の上に成り立つ社会で暮らすスペースノイドの生活には高度な知識が要求される。そんな環境下で暮らす彼らは、本来ならばテクノクラートと呼ばれるべきエリート達のはずである。

だが、現実には明日の生活にも事欠く在り様の彼らの不平と不満が、宇宙に進出した人類の歴史に大きな傷跡を残す事となった。

皮肉なことに、そんな戦争の中から生まれたＭＳの存在とそれを支えるテクノロジーの爆発的な進化が、宇宙と地球の産業と経済構

造を逆転させることとなり、スペースノイド達は自分達が望んだ物とは全く異なる形で、困窮を極める日常を打開する解答を得ることとなった。

以来十数年、時折ゲリラやテロ行為が散発するものの、大多数の一般市民にとってそれは所詮、ニュースの世界の話であった。スペースノイドの独立自治の夢はジオン共和国の自治権放棄と共に終焉を迎え、世界はようやく平和な時代に至り、彼らはさして変わり映えのない日常の中でただひたすらに日々の生活に追われていた。

かつて多くの若者達の心をとらえて離す事のなかった高邁な理想や崇高な志も時間と共に風化していき、生活インフラを大きく破壊される事のない平和な時代を動かすのは、自由な人間性とは無縁のカネと数字が動かすシステムに支配されつつある味気ない社会だった。

その一方で、地球圏の覇者である連邦政府と一部の巨大企業体によって指導される際限のない発展とシステム化された利権の裏側で、腐敗と汚職が蔓延する。多くの血を流しながら長い時間をかけて人類が勝ち得てきた自由や平等といった概念は、いつしか建て前となり果て、富と権力の偏在が様々な社会の矛盾を生み出し、強者の側に立つ者達によってその真実は闇へと封じられていった。

そんな社会の在り方に疑問を抱いた賢明な者達による新たな社会秩序の構築と、定められた未来に不満を持つ若者たちのエネルギーが生み出したものの一つが、コスモ貴族主義とクロスボーン・バンガードだった。

世の不正を正し、自分達の力が未来を変えるのだという彼らの情熱は、クロスボーンに軍事的な力を持たせるに至ったものの、結局はいかなる時代にも存在する、閉塞しつつある社会で若さとエネルギーを持て余した未熟な若者たちの欲求不満の捌け口とみなされた。

少年期から青年期に至る過程で誰もがかかる麻疹のようなもの―

―社会システムの上層から彼らを見下ろし統治者の側に立つ老人たちは、若者たちの未熟さと愚かさが生み出すエネルギーを利用し、日和見がちな大衆に自らが作り上げてきた統治システムが盤石であることを広く知らしめた。

長く地球圏を統治し、人の世の理に長けた為政者達からみれば、子供だましの世直しに興じる若者たちの群れなど赤子の手をひねるも同じだった。

明日の食べ物にも事欠く環境の中から生まれた人々の叫びに支持される革命に比べれば、インテリが頭の中で夢想した社会変革など所詮は絵空事であり、それを証明するかのように理想国家コスモバビロニアは、世直しという祭典に飽きて日常の生活に戻っていく大衆に見放され、崩壊した。

浅薄で無力さのみが際立ってしまった組織の崩壊と共に、野心あふれる只の一ＭＳパイロットに過ぎなかった『彼』も又、多くの者達に混じって現実を直視させられることとなった。

食い、眠り、交わるという生存本能を満たさんが為に行われる生活という行為の前に、脆くも崩れ去っていく理想国家の終焉の中で、理想と目的を見失った彼の中に残ったのは戦いの高揚感だけだった。

失ったものの代償と日々の糧を求めて、闘う事にしか生きる術を見出そうとしなかった彼は地球圏に存在する様々な戦場を渡り歩くこととなった。

平和な時代とはいえ、人が存在する以上、そこには必ず争いが存在する。戦場の主役となったＭＳの登場は、争いの場において大きな力を発揮し、それを自由に操るＭＳパイロットの技能は重宝された。

だが、一見無秩序に見える戦いの世界にも厳然としたルールが存在する。

技術の発展によって恐竜的進化を遂げたＭＳの巨大な力は時とし

て、人の暮らす環境を破壊し、守るべきものを傷つけることとなる。守るべきものがなければ戦いに意味など無い。

またそのような戦場を支える彼と同等の立場である傭兵達も所詮は人間である。彼らとて命は惜しく、それなりの暮らしをしたいという欲望もある。

そんな人々の要求と打算の上に成り立つ戦場は、華々しく交わる砲火や残酷な殺し合いとは異なるものだった。

戦いの場を求め転々とさすらう彼らが、戦場で幾度か顔を合わせるうちに自ずと繋がりが生まれ、例え立場が違えど、彼らは独自の規律に従って行動する。

時には彼の様に、あるいは彼以上に戦いの世界に取りつかれ、病的なまでに戦場の興奮を味わんがために、己の命をドブにさらす戦争中毒者に出くわすこともある。だが、人間が己の身の丈以上の破壊の力を平然と振り回すこの時代の戦場において、そのような者達は死亡者リストの最初の欄に名を連ねることが当然となっていた。

馬鹿や無謀といった言葉を文字通りに体現しようとする生き方を望む者達は必然的に淘汰され、徒党を組み、より賢しらに上手く立ち回る者達が跋扈するようになっていく。

結果として戦火を交えることなく、雇い主の要求に応じながらも互いに傷つけあう事のない、奇妙な戦場が徐々に生まれる事となる。

そんな世界において戦いの高揚感に魅入られ、満たされぬ何かを埋めようと激しいものを追い求める彼の在り方は、傭兵達の業界では異端であり、彼の力を求めるのは、既存の利権を奪い取る為に荒事を求める雇用主であり、必然的にその仕事は汚いものだった。

権力の後ろ盾がなく、打算と欲望のみによって動く世界が要求するものは、軍という組織の中でただ上に命令されるがまま、戦っていればいい軍人達に要求されるものとは大きく異なる。眼前の利益の為ならば、風向き次第でいかようにもその方針を変えてしまう臨機応変さは、激しい戦いの中に何かを見出そうとした彼の在り方を

度々大きく阻む事となった。

目的を果たした雇用主の方針が既得権益の破壊と略奪から自身の利権の確保へと変わることで、彼はお払い箱となり、再び戦いの場を探して転々とすることとなる。

一見平和な世界において利権争いに基づく醜い戦いの場は決してなくならないものの、己をも滅ぼしかねない彼の在り方は、時に雇用主や同業者達の恨みを買うこととなり、時を経るごとにより安定を求める世界において、彼を必要とする場所は無くなっていた。

つまるところ、彼の求めるものは戦場という場所には無かったのである。

――生き方を変えねばならない。

若さという言葉と引き換えに様々な経験を積み重ねながらも熟練の戦士となりつつあった彼に、漠然とした不安が日々重くのしかかりつつある頃、彼はその在り方が問われる決定的な事態に直面することとなった。

宇宙線や放射線の脅威にさらされる宇宙（そら）や長い時間をかけて汚染され尽くした地上において、危険な兵器が飛び交う戦場で戦いの経験と共に得たのは自身の命を脅かす事となる病だった。

医療技術が未熟だった時代には不治の病であったそれも、現代の技術をもってすれば克服は決して不可能なことではない。

だが、彼の肉体を蝕む病の完治には多くの時間が必要とされた。

それは戦士として彼に残された貴重な時間を全て奪いとってしまうことに他ならない。

――戦士として生き、人として死ぬのか。それとも、人として生き、戦士として死ぬのか？

生き方を変えるには良いタイミングであるのかもしれない。いや、まともな人間ならそう考えるであろう。しかし、彼の中の何かがその選択に待ったをかけた。

――俺はまだ燃え尽きていない。

心の中にくすぶり続ける何かが、彼の人としての当然の選択を阻んでいた。

自身の命を軽視しているとも言われかねない、そんな生き方を積み重ねてきた彼にとって、平凡な日常の中で満たされぬものに目をつぶりながら徒に時を重ねて怠惰に生きる人生など考えられなかった。明日もその先も約束された未来の中で漫然と時を重ねる事よりも、ほんの一瞬であっても激しく輝いていたい、魂を激しく輝かせる戦いの中で自身の中の欠落した何かを満たしたい――心を捕えて離さないその願いは、いつしか狂気となって彼を支配しつつあった。

だが、そんな彼を都合よく必要とする場所はどこにもなかった――。

連邦政府という絶対的な覇者の下でより大きな力に縋って生きようとする賢しらな人々が求めるのは、全てを奪い破壊し尽くす戦場ではなく、明日の富を生み出さんがための打算と欲望が交わる市場であった。自らは傷突く事なく、分不相応により多くの富と数字に踊る人々の姿は、彼にとって嫌悪の対象であり、そんな彼らと交わって生きる事は苦痛だった。とはいえ、彼の戦士としての力を申し訳程度にしか必要としない戦いの場でお茶を濁せば、得られるのは後悔と中途半端な結末だけであろう。

それまでの人生において危険を代償に得た多くの蓄えを切り崩し、技術の粋をつくしたリゾートコロニーにある作り物の娯楽の世界で

時を過ごす。平凡な日常を送り、大量に量産された物資に囲まれ、どこにでもありふれた紛い物に彩られた個性に身を包んで妥協し、求める物は永遠に得られないのだ、と己に言い聞かせる。

無為に過ごす時間はもはや残されていない。自身の身体を蝕む病は確実に進行していく。

今日の自分よりも明日の自分は確実に弱くなっていく、そんな錯覚に苛まれながらも、現実に妥協し、人として生きる事を選択しようとした時だった。

望むものを諦めかけていた『彼』の元にとある運命が舞い込むこととなったのは――。

どっぷりと深い闇の底だった。肌寒さだけが感じられる果てしなく暗い闇の底で、とりとめもない疑問だけが己の内に浮かぶ。

――己とは何者であったのだろうか？

――その望みはどんなものだったのだろうか？

――その人生は生きているといえたのだろうか？

次々に浮かんでは消える疑問だけが暗い混沌の闇の中で己の存在の核となり、世界と己との間に境界線を作り上げていく。

だが、所詮、それは儚い幻のようなものである。境を生み出す努力を怠ればたちまちそれは崩壊し、周囲の闇の中へと呑みこまれ忘れ去られる事となる。

徐々に凍てついていくような寒さに全身を包まれ、際限のない眠りの世界へと引き込まれていく。

その先にあるのは永遠の安住。

もはや何者も己を束縛しない代わりに、世界と己の境をその魂で表すこともできないだろう。

――そんな事はまっぴらだ！

まだ、その魂は十分に満足な輝きを放ってはいなかった。自己の内からあふれ出る言葉にならぬ激しい叫びが深い闇の世界を照らす。膨大に広がる闇の世界と対峙するにはあまりにもささやかな輝きを頼りに『己』は一個の『彼』という形を得る。『彼』という形を持ったそれは、決して届かぬその輝きに向けて手を伸ばし、それを掴まんと全身で足掻く。果てしない闇の中、やみくもにもがき続けるうちに徐々に近づいていくような気はするものの、足掻く事を止めればとたんにその輝きは遥か彼方へと離れてゆく。

――所詮は無駄な努力だ……。

――流れに身を任せておけばいい……。

――人間など所詮みな同じもの、特別な何かなど永遠の錯覚でしかない……。

己のうちから湧きあがる諦めの言葉が『彼』の身体を重い鎖で縛りつける。自己を縛りつける途方もない重い鎖の枷を外す鍵など『彼』が持ちうるはずもない。そんな『彼』にできる事はただ一つ――ただやみくもに大声で叫ぶ事だけだった。

「黙れ！　邪魔をするな！　俺は俺で在り続けたいだけなんだ！」

その叫びが周囲を、世界を輝かせる。眼前に生まれた輝きに、『彼』は『彼』で在り続けるべく、自身の身を投じたのだった。

無人の室内には軍艦の医療施設としては弱冠充実しすぎているで

あろうと思われる様々な医療装置がしっかりと床に固定されている。
メーカー名の記載されぬその装置群の中には試作段階のものも数多く含まれている。記録されたその運用データが開発メーカーによって回収され、新たな製品の開発へとつながっていくのは、この艦のＭＳデッキにならぶ機体群と同じ事情である。
その一角の貯水槽――応急処置槽の液体の中に一人の男の身体が浮かんでいた。呼吸の為のマスクを顔に装着され、鍛え上げられた肉体にはバイタルデータをとるための電極がいくつも張りつけられ、いくつかの特殊な放射線を照射されながら、冷ややかな色をした処置槽の液体の中にその身を静かに浮かべている。
傍らのモニタ上に表れるその数値は安定しているものの、通常時の値よりもかなり低く、その生命がかなり危険な状態であることを示していた。
にもかかわらず、周囲に全く人の気配がないのは、この艦が慢性的な人手不足に陥っており、一人の人間の生死にのんびりと時間を割いていられるような状態ではないためである。尤もそんな忙しい人々を補う優秀な性能を誇るシステムによって、彼に何かの異常があれば直ぐに船医が駆け付けられるようになっていたのだが……。

ふと、モニタ上の数値に乱れが生じる。
低いレベルで安定していた数値が徐々に乱れ始め、徐々に高い数値を弾き出す。同時に液体内にその身を静かに浮かべていた男の身体が小さく動き始めた。その意識が覚醒に近づきつつある証拠だった。装置内の想定外の異常事態にシステムは警告音を発し始める。
折からの病と激しいＭＳの高機動によって内臓に与えられた絶望的なダメージをどうにか緩和すべく施された緊急オペの後、生死の境を彷徨うその肉体と生命を維持すべく、一種の冷凍睡眠状態に置かれていた彼の意識が自発的に覚醒することなどありえなかった。
だが、患者のバイタルを指し示すその数値は徐々に上がり始め、想定外の異常事態にプログラムされた己の責任を果たすべくシステ

ムは悲鳴にも似た警告音をあたりかまわず響かせる。

やがて、耳障りなその音が盛大に室内に木霊し続ける中――、ひやりとした液体に満たされた応急処置槽の中で、『彼』――ゴルド・ガーラントは目覚めるはずのないその意識を、完全に覚醒させた。

（２０１１／０３／２６　Ａｒｃａｄｉａにて初稿）
（２０１１／１０／３０　本サイトにて初稿）

03

激しく鳴り響くコール音に慌てて駆けつけた船医は、処置槽の中のゴルドの異常に気付くとすぐに治療の中断の操作を施した。即座に処置槽内の液体が排出され、空っぽになった槽内に残されたゴルドの身体は、無重量状態の処置槽内にふわふわと浮いている。やがて、呼吸用のマスクを取り外されたゴルドは小さくうめき声をあげて目を覚ました。

「気がついたようですね。私が誰だか分かりますか？」

「……。目覚めて一番見たくない面があるってことは……、俺はまだ生きてるらしいな」

「それだけ減らず口が利けるならば、意識に問題はないようですね」

開口一番の毒舌に容赦ないカウンターを返す船医にゴルドは尋ねた。

「俺はいったいどうなった？　《ゲオルグ》はどういう状況だ？」

病人が気にすべき事ではないにも拘らず、事態を把握しようとするゴルドに船医はため息をつく。ここ暫くの付き合いで彼の行動パターンなど簡単に予測はつく。望む答えが得られねば彼はどんな無茶をしてもその答えを別の形で得ようとするだろう。

「艦は現在、デブリ宙域内で次の作戦に向けての準備中です。貴方はＭＳデッキに帰投した後、機体から降りてしばらくしてそのまま意識を失ったんです。そして、つい今しがたまで危篤状態に陥っていました」

「デッキで倒れた？」

記憶が繋がらない。

自身の最後の記憶はデブリ宙域内で追手を振り切ろうとしたコッ

クピット内で途切れている。どうやら相当危ない状態にあったという事だけは確かなようだ。
まだどこか危うげな様子のゴルドに事実を裏付けるべく、傍らのモニタで彼のバイタルデータを指し示しながら船医は説明を続けた。
「分かったらおとなしく治療に戻ってください。後の事はジノ君達がしっかりとやっています。貴方がすべきことはそのボロボロの身体を速やかに回復させる事です……って、ど、どこに行くつもりですか？」
自身の身体に張りつけられた電極をはぎ取って、装置から無理やり外にでようとするゴルドを、船医は慌てて押しとどめようとする。
「ＭＳデッキだ！」
ゴルドのその言葉に船医の顔色が変わった。
「いったい、何を考えているんですか、貴方は！　一度は死んでいたんですよ！　今のあなたの身体は絶対安静なんて言葉では足りない状態なんです。それでも動く事ができるのは、ここが無重量状態の空間である故。もしもここがコロニーや地上といった重力下の環境ならば貴方は起き上がることすらできないはずです。ＭＳに乗るなんて論外だという事がどうして分からないんですか！」
「だったら、その幸運を喜ぶ事にするさ」
「幸運だと思うのなら、別の方向に生かして下さいよ！　重病の身であんな身体に負担を掛ける機体に乗っている事自体、非常識すぎるんです。いつ意識を……、いえ、そのまま死んでしまってもおかしくない状態なんですよ！　今のあなたに戦闘行為は不可能です！」
「自分の身体だ。自分が一番分かっているさ」
「バカな患者が一番吐きたがるセリフでごまかしたって無駄です。治療に戻りなさい！　これは担当医としての命令です！」
だが、ゴルドを押しとめようとする彼の言葉を聞き流し、治療装置から強引に外に出たゴルドは自身の着衣を探す。直ぐ側にあるロッカー内にそれを見出した彼は、背後で怒りの表情を浮かべている船医に静かに告げた。

「ドクター、すまんがいつもの薬を頼む」
「あんなもの、もう気休めにもなりません」
「だったら、もっときつい奴があるだろう」
身体の中から生じる鈍い痛みに耐えながら、僅かに震える手でどうにか服を着る事の出来たゴルドの視線の先にあるものに気付いた船医は、その言葉に息を呑んだ。
ゴルドの視線の先――鍵付きのロッカーの中にあるそれは、《ゲオルグ》出航前にゴルドのたっての希望で船内に持ち込まれ、医務室で船医の厳しい監視の元、厳重に保管されていた物である。強力な鎮痛作用と興奮作用を得る事と引き換えに、効果が途切れれば神経系に計りしれぬダメージを与え、服用すれば確実に廃人に至るという代物である。劇薬よりも猛毒といって差し支えないそれは、かつてジオン独立戦争において総力戦となった終戦間近の際、連邦・ジオン双方の軍において傷ついた将兵たちに処方されたという噂もある、曰くつきの代物だった。
医師としての良心から、それを船内に持ち込むことに頑なに反対の立場をとり続ける彼を無理やり納得させる為、ネーナの力を利用してゴルドはそれを医務室で強引に保管させていた。
「冗談ではありません、あんな物！　私は医者です。救える命を救うのが仕事なんですよ！　そんな私に貴方の命を奪う手伝いをしろというんですか！」
「いつも悪いな、ドクター。これで最後になるだろうから、勘弁してくれ……」
激しい船医の叫びに対し、どこか力ないそのゴルドの言葉はその怒りの火にさらに油を注ぐ事となる。
「安楽死ってのはね、僅かな生存の可能性を求めて十分に手を尽くして、それでもどうしようもない、そんな人とそれを支える周囲の人たちの最後の苦しみを取り除く為にあるんですよ！　生きる可能性を自ら放棄するあなたのやろうとしている事は、そんな彼らの苦悩を冒涜する行為だと、再々に渡って言ってきたはずです！」

艦内でネーナ以外に彼の身体の状態を正確に把握する只一人の人間である船医の正論に、ゴルドは何の反論もできない。
《ゲオルグ》に乗艦して彼と顔を合わせて以来、ゴルドの誤りとも思える選択肢に対して真正面からそれを否定してきたのが彼だった。病状を抑えるための薬を受け取りに行く度に繰り返される船医の説教に、時に怒鳴りつけて反論した事すらある。
だが、ゴルドとは違った形で生死の境に身を置き、自身の信念と経験から発せられる彼の言葉は、戦場で命のやり取りをしてきたゴルドの心を深く強く抉った。

ネーナの力を利用すれば彼を黙らせる事は可能であったかもしれない。
だが、あえてそれをせずに彼の説教につきあい続けてきたのは、ゴルド自身がその選択にまだ迷いがあったからに他ならない。
ゴルドにとって、目をそらし、耳を閉じた現実に向き合わせようとしてくれる船医の言葉は鋭利な刃物のようなものである。その刃の鋭さで時に彼を傷つける事があれども、その刃身の放つ輝きは彼の心を確かにとらえた。
そんな言葉に己の信念と生き方を以て反論する事で、ゴルドは自身の選択の正当性を度々確認してきた。歯に衣着せぬ彼の言動に、時に殺意が湧くことすらあったものの、自身が疎まれることすら全く気にも留めず、己の良心に従った言葉を突き付けてくる船医に、ゴルドは心のどこかで感謝していた。
自身の命を軽視する患者に言われるがままに処置（ごまかし）を行い、報酬分の仕事をすればよいにも拘わらず、己の良心に従って自身が恨まれる事も構わずに一人の人間として患者と真正面から向き合おうとする彼の不器用さに好感を持っていた。
だが、そんな彼だからこそ、この《ゲオルグ》という艦に乗る羽目になったのだろう。どんなに医療技術が進歩しても人は『死』という運命からは逃れられない。

身内の理不尽な死の運命を受け止めきれない弱い家族の八つ当たりの人身御供にされて、自分は道を踏み外したのだ――何かの拍子にそう、ぽつりと呟いた船医の言葉をゴルドは忘れる事はない。

だが、それでも決して譲れぬものがあった。

たとえどんなにそれが正論であったとしても、自身の人生の中でそれを感じ取れなければそれは己にとっての真実とはなりえない。ゴルドにとっての真実とは、残された命を己の最も良しとする生き方の為に燃やし尽くす事である。

「あんたの仕事が人の命を救うことであるように、俺の仕事はＭＳに乗って戦い、相手の命を奪う事だ。俺にとって生きている瞬間というのは戦闘に勝利し、生き残る事に他ならない。病との闘いなどという言葉で自身をごまかし、ただ長く生き続けるだけの人生など俺にとっては死んでいるに等しい！」

「そんな生き方は……」

その言葉が最後まで口に出される事はなかった。

そんな生き方は認められない――自身の信念とは真逆のゴルドの生き方を認める事などできようはずもない。だが、ものさしとなる自身の医師としての信念が普遍的な正しさを持つものではない、という事も船医には分かっていた。

社会とは様々な価値観を持つ人々によって構成され、彼らが意識的にあるいは無意識的に己の役割を果たすことによって成立するものである。

例え、生き方のベクトルが根本的に異なっていたとしても、それを悪と断ずる事は絶対神と呼ばれる存在でもない限り不可能である。正義も幸せも人の数だけ存在する。その事に気づく事が遅かったからこそ、彼は《ゲオルグ（この場所）》に流れつくこととなった。

ため息を一つ吐いた船医は、自身の首から下げた鍵を取り出し、ゴルドの視線の先のロッカーから小さな小箱を取り出す。

「これ以上、何も云わないで下さい。処方の仕方はそのメモに書い

てあります。そいつを持って、とっとと私の目の前から消えてください」

ゴルドに手の中のものを押し付けるように引き渡すと船医は背を向けた。振り返る瞬間の彼の表情は決して忘れることはできないだろう。彼の為を思う人間にそんな表情を浮かべさせてしまう己の業の深さに想いを馳せる。

「世話になったな、感謝する、ドクター」

その言葉に返事はない。

ただ背を向けた彼の肩が小刻みにふるえるだけだった。決して返ってくる事はないだろう彼の答えを待つこともなく、そのまま医務室を後にする。

閉じられたドアの向こうで何かを叩きつけるような音が響く。自身の信念を以てしても曲げる事の出来なかったゴルドの選択に対する敗北感が彼の心を苦しめるのだろうか？

それを己の背で受け止めたゴルドはリフトグリップにつかまりながら、船医に渡されたメモに目を通す。几帳面な手書きの文字で詳細にその使用法が書きこまれた文面の最後の一文に目がとまった。

――願わくば、貴方がこれを使わぬ道を選ぶ事を祈って……。

その一文を小さく読み返したゴルドは、丁寧にメモを折りたたむと己の懐へとしまい込んだ。

照明の落された暗い室内の天井は味気ない表情で憮然と広がっている。

気の利いたホログラフの一つも映せないのかよ、というセンチな

呟きに、同僚の女性パイロットに冷ややかな視線と共に呆れられた事を思い出す。レストルーム横の仮眠室の簡易ベッドでエアベルトに身体を固定したまま、カークは寝付く事が出来ず、ごそごそと寝返りを打ち続けていた。

呼び出しがかかれば直ぐにデッキ内の愛機のコックピットに直行すべく心づもりは出来ているが、さほど切迫している状態でないことから、ＭＳパイロットしての今の彼の仕事は僅かでも仮眠をとり、心身を休め次の戦闘に備える事である。

僅か数時間前に起きた異変にまつわる様々な出来事が次々に脳裏をよぎり、戦闘で疲労していたにも関わらず、彼の精神はとても眠りに陥れる状態ではなかった。待機中であることもあって薬物を使う訳にもいかず、結果として簡易ベッドの上で悶々と時を過ごすこととなっていた。

現在、《エナド》はデブリ宙域に逃げ込んだ不審船を拿捕すべく、応援を待ちつつ周辺宙域で警戒態勢をとっている。

演習中の異変で多くの負傷者を抱えた状態で、小回りの利かない巨大な船体をやみくもにデブリ宙域内に侵入させるリスクは侵せないという判断からであろう。

２機のＭＳとパイロットを失った《エナド》ＭＳチームにとってもこの判断は適切なものであり、僅か数時間の間に起きた余りにも突発的な異常事態の中で、残されたパイロット達が動揺したメンタルをおちつかせる時間を得る事が出来たのは幸いであった。

損傷したバッジョの機体を回収したサカキと合流し、一時帰投したカーク達の元に、予期せぬ知らせが次々にもたらされた。

通信、及び信号が途絶したままのジャクソンの行方は分からず、どこかの部隊に拾われたという報告も入ってはこなかった。

彼の信号が最後に確認された地点は防衛側艦隊のすぐそばであったにもかかわらず、演習プログラム上から切り離されていた事が災

いし、その行動を詳細にトレースするには、周辺宙域で行動していた他の艦船やＭＳに記録された全データを洗い直す必要があり、膨大な時間を必要とした。演習中の異変で未だに混乱している状態の参謀本部がそのような末端の些事に進んで介入する事などあろうはずもなく、彼の身に起こった事実を知るには、相当な忍耐が必要とされることとなった。

さらに演習中に起きたテロリストによる自爆攻撃という前代未聞の事態に空いた口も塞がらぬまま情報が錯綜する中、ジュベールに至ってはテロリストに機体を鹵獲された上、当の本人は生死不明の状態であることが、バッジョの機体のカメラの映像とその事態を目の当たりにした彼自身によって報告された。

彼の戦闘時の行動の記録に不審な点が多々見受けられ、ＡＷＯＬ（無断離脱）の疑いすら掛かっている事がほのめかされた事は、残された《エナド》ＭＳチームの面々に決定的な動揺を与えることとなった。

同じチームの二人の上官が立て続けにＭＩＡ（作戦行動中行方不明）判定された事実に、バッジョは放心状態となり、ドジを踏んで間抜けな嫌疑をかけられたジュベールを捜索すべく、すぐにでもデブリ宙域に飛び出そうとするカークを押しとどめたコーナーは混乱する彼らに待機命令を下した。

捜索範囲の限定できぬ広大な宙域を僅か数機のＭＳでやみくもに探しても、徒労に終わることが確実であり、コーナーの命令は当然の事だった。そして命令違反の常習者であるカークが、其の命令にしぶしぶ従わざるを得ぬ事に不貞腐れた事も当然の成り行きだった。

戦闘時に受けたダメージの修復と機体の調整をメカニック達に任せ、自身のやるべき事をその場に見出せなくなったカークは、不貞寝を決め込むべく仮眠室へと飛び込んでいた。

一向に寝付く気配すらなく苛立ちばかりが募りつつあるカークは、何者かが暗い室内に静かに入ってくる気配を感じ取る。背中越しではあるものの、その人物がシャーリーである事には気づいている。

「眠れないの？」

機体調整を行うためにデッキに残っていた彼女を置いて、先に休んでいたはずのカークがまだ眠りに至っていない事を察して、小声で尋ねた。「ああ」という彼の答えにため息を一つつくと部屋の隅の販売機から二人分の飲料パックを取り出した。

手渡されたパックのよく冷えた中身がのどを潤すことで、頭と身体のほてりを覚ましていくように感じられた。

「応援部隊の手はずは整ったのか？」

「まだよ。演習の影響で本部はあいかわらず混乱状態みたい。艦隊内にまぎれて逃走中の不審艦のせいで、敵味方の判断すらつかない状態のようだって少佐がぼやいていたわ」

その言葉に小さく舌打ちする。

日頃は階級や役職を盾に大きな顔をしているくせに、いざという時には何の役にもたたない、そんなステレオタイプな上層部への悪し様なイメージがカークの心に不満を増大させる。そんな彼の様子を気に留める事もなくシャーリーは会話を続けた。

「意外だったわ、あんたが中尉を探しに行くと言い出した時は……」

「当然だろ、どんなに嫌な奴でもあいつは俺達の仲間なんだぜ」

「そうだったわね……」

突然降って沸いた様々な出来事に放心から覚めたバッジョの心ない言葉によって、かなり激しい言い争いになった事を思い出す。帰投後の興奮状態のまま、日頃から何かと衝突しがちなジュベールの事での心ない中傷に、カーク自身が過剰に反応した為である。

ジャクソンはもう戻らない――その事を心の中で理解しているカークだったからこそ、まだ生死不明ではあっても生きている可能性のあるジュベールを捜索しようとするのは当然の事だった。例えそれが彼にとって天敵といってよい存在だったとしても……。

彼と言い争いをしたバッジョは今、自室で待機している。ＭＳデッキのコックピット内で待機中のサカキも含めて、《エナド》ＭＳチームのパイロット達はそれぞれの場所で、思い思いに様々な現在（いま）を過ごしていた。

「生きていると思う？」

「当たり前だろ、これ以上、仲間に死なれてたまるか！」

何気ないシャーリーの言葉にカークは強い調子で返答する。だが、その答えにシャーリーが小さく息を呑む。彼女の思い描く『彼』とカークが思い描く『彼』が異なる事にその時のカークは気づかなかった。

しばらくの沈黙の後、カークの対面の簡易ベッドに横になると、シャーリーは小さく呟いた。

「少し眠るわ。寝顔が可愛いからって襲わないでよ……」

その手の冗談の嫌いな彼女らしからぬ言葉に、自身が気を使われている事に気づかぬほど、その時のカークの心中は冷静さとは程遠い状態であるといえた。再び沈黙の訪れた室内には、ＭＳデッキ内で機体の整備に励むメカニック達の作業音が小さく聞こえるだけだった。

（２０１１／０４／０２　Ａｒｃａｄｉａにて初稿）
（２０１１／１１／０３　本サイトにて初稿）

04

ゴツンという衝撃と同時に目から火花が飛び散る。
どうやら無重量状態の通路にふわふわと浮かんだままの状態で頭から壁に激突したようだった。涙目になってあたりを見回すものの、周囲には自分以外誰一人いない。単なる己の間抜けなミスであることに弁解のしようもなく、しぶしぶとぶつけた箇所を左手でさする。
右腕に抱えたひやりとした小銃の感覚と嗅ぎなれぬグリスの匂いに鼻をしかめながら、安全装置がしっかりとかかっている事をおっかなびっくりの様子で確認する。戦闘用のＭＳに乗って以来、ボタン一つで他者の命を奪ったことはあっても、このような道具を使って生身の人間同士で殺し合いをした事がないのは幸いなことなのだろう。そういう場面に出くわす事は願い下げではあるが、因果な稼業に身を置く以上、こればかりは運任せである。

空間作業を終えて帰投した《ゲオルグ》のＭＳデッキ内で『パイロットなら部屋で寝てろ！』と怒鳴りつけられ、殺気立ったメカニック達にリリア共々追い出されてしまったジノは、しぶしぶ自室に戻ることにした。だが、高ぶった神経は寝付く事を許さず、結局、捕虜の監視任務を引き受ける事にした。折からの人手不足で監視装置任せになっており、そんな仕事など始めから必要なかったのだが、何かしなければ落ち着かないジノは銃器庫から突撃銃を持ち出し、自分から歩哨の任に就いていた。

狭いコックピットから解放され、人の気配が全くない通路で一人きりになってようやく気が緩んでしまったのだろう。演習開始以来

およそ丸一日、宙域作業に追われて一睡もしなかったつけがようやく回ってきたらしい。

眼前の捕虜の監禁場所となっている貴賓室からは僅かに人の気配がする。

宙域からゴルドと共に気絶したまま拾ってきたパイロットが連邦軍士官であった事から、その扱いを巡ってブリッジ内ですったもんだした挙句の措置らしい。事情を知るであろうゴルドが早々に危篤状態に陥ってしまったために、その扱いを持て余すこととなったようで、貴賓室に手錠をつけて監禁するという訳のわからぬ捕虜の扱いが、その時のブリッジ内の混乱ぶりを雄弁に物語っていた。

（これからどうなるんだ？）

多分艦内の誰もがジノと同じ不安に駆られているのだろう。彼らがパニックに陥らないのは、公表された宙域脱出のプランとそのための様々な準備作業に追われ、立ち止まって考えている時間などない為である。

襲いかかる睡魔にうつらうつらとしては目を覚ます事を繰り返すうちに、一旦自室に戻ろうか、と考え始める。だが、自分から言い出した歩哨の任を途中で放棄するのはどうにも格好が悪い。

仕方なく、ここで仮眠をとりながら見張りの続行を決めたジノは、貴賓室の電子錠の設定をしっかりと確認する。異常がない事を確かめると、冷ややかな感触を伝える突撃銃を小脇に抱え、そのまま睡魔の甘い囁きに呑みこまれ始める。

かくん、と意識が落ちかけたその瞬間、ハンドグリップの僅かな作動音と共に何者かの気配を感じとる。慌てて目を開き、自身が役割を実直に務め上げている事を証すべく、口もとのよだれの後を拭って体裁を整えようとした。

通路の向こうのハンドグリップの作動音は徐々に大きくなり始め、やがて曲がり角から一人の男が姿を現した。その姿にジノは唖然とする。

それは、医務室で危篤状態に陥いり、ここに決して現れる事などないはずの男の姿だった。

目覚めた場所は見知らぬ室内だった。

さほどの広さはないものの、それでも母艦である《エナド》内の自室の広さに比べれば段違いである。床に敷かれた絨毯もそれなりに上質な物が使われており、察するところ貴賓室といったところであろうか。宇宙船の室内にありがちな一切無駄なものが置かれておらず、調度品といえば、壁にはめ込まれたガラスの向こうの安物のような絵画くらいであろう。

一見それなりの待遇を受けているようであるが、自身の両腕を拘束する無粋な手錠がそのすべてを無駄にする。

おそらくは監禁されているということになるのだろう。

まだ身体に僅かに残るしびれに身を震わせながら、途切れた記憶をつなぎ合わせていく。

見知らぬＭＳのコックピット内でパイロットらしき男に蘇生処置を行い、そこから離れようとしたところで記憶がぷっつりと途切れている。身体に残るしびれから自分が持ち込み、その存在をすっかり忘れてしまったショックガンによって引き起こされたということは容易に想像がつく。

だが、それをやったのは誰なのか？

状況から推測して、おそらくは彼が助けたはずの男なのだろう。

恩を仇で返した男が悪いのか、あるいは男の回復に気がつかなかった自分が悪いのか？　兎にも角にも自身の間抜けな行動から現在の状況に陥ったという事は疑いようのない事実である。

身体のしびれが徐々に薄らぐにつれ、考える頭も回り始めたらしい。

ようやく見慣れた室内の風景の中で、しっかりと床に固定されたテーブルの上の空になった食事トレイがふと目に入る。《エナド》艦内での食事パックと同じ味付けであるところをみると、間抜けな上層部が演習参加艦艇に配給したもののうちの一つだろう。

それを室内に運び入れた一人の男の顔が思い浮かんだ。

その男がそれを持って彼の前に現れたのは僅か1時間前だった。顔を隠すこともなく、どうせ偽名ですからと前置きして堂々と名を名乗る。クウォ・クウェッソンと名乗ったその男は、警戒するジュベールの様子を気にする風もなく、手にした食事トレイをテーブルの上に置き、暇つぶしとばかりに世間話を始めた。

武器など何一つ持たず、無警戒のその自然体がなぜか恐ろしく感じられる。修羅場とは無縁のように、にこにこと笑うこの眼前の男の得体の知れなさの中に、自身がかつて身を置きかけた闇の世界の住人の匂いを感じ取る。

どうやら、彼はこの所属不明艦の正規のクルーではなく、人手不足で右往左往する艦内の様子を見かねて食事や洗濯を手伝っているらしい。ジュベールに一切詰問する事もなく、頼まれもしないのに現在の状況をぺらぺらと話す気やすさはとてもテロリストの一味とは思えない。

「いやあ、周りが忙しい時は自分も忙しくしていないと落ち着かない根っからの貧乏性でして……」

からからと笑いながら、通りすがりのパートタイマーです、などと自称するその男の言動に、ジュベールはどう対応してよいか分からず困惑する。確か自身はテロリストに監禁され、下手をすれば拷問を受ける可能性もあったはずだ。そんな状況も想定して、警戒していたというのに、これではまるでそんな自分が馬鹿のようである。

「それではごゆっくりどうぞ。あ、トレイは後で気づいたときにで

も回収しますんで。とにかく人手不足で何かと忙しいんですよ、私も……」

などと言いつつ、一流ホテルの給仕よろしく丁寧なお辞儀と共に扉の向こうに消えていく頃には、ジュベールは自身の置かれた立場も忘れて呆然としていた。毒気を抜かれ、再び一人きりになった部屋の中で空腹を感じる。人はどんな状況に置かれても腹を減らすものらしい。

薬物や毒物の類を警戒したものの、わざわざ手間をかけて命を拾った捕虜を今更殺す必要もないだろうと考え直し、半ばやけっぱち気味に眼前の食事トレイに手を伸ばしたのだった。

状況に変化が起きたのは、食事を終えてからしばらくたっての事だった。

扉の向こうで、慌てたように何事かを叫ぶ若い男の声と、それを一括して黙らせた低い男の声の短いやり取りが終わると、解除キーの作動音が小さく響く。

入ってきたのは二人の男、そのうちの一人にどこか見覚えがあった。直ぐにそれが、自身が命を助けようとした敵パイロットである事に気づく。

その表情にはどこか生気が感じられず、まなじりにクマのういた目が妙にぎらぎらと輝いている。今にも消えそうな命の灯が最後の力で輝いている、そんな様子を連想させる。この男はもう長くない、直観的にジュベールはそう理解した。

「御気分はどうかな、中尉殿」

知性を感じさせる低い声が耳朶を打つ。自身より年長のこの男の気迫に呑まれぬよう、尊大な態度で返答する。

「名前くらい名乗ったらどうだ、テロリストが……」

その答えに男の隣で小銃を構えている若い男が気色ばむ。ジュベ

ールの挑発になど全く乗らぬ様子で男は返答をよこす。
「戦場で死に損ねた間抜けな男と、テロリストに機体ごと拘束された間抜けな男……お互いにそれ以上、知る必要があるのか？」
強烈なカウンターパンチにジュベールは言葉を失う。小銃を持った若い男はその答えに唖然としていた。
「俺をどうするつもりだ？」
しばらくの沈黙の後に再び発せられたジュベールの問いに、男はしばらく考えた後で返答した。
「どうにもならんさ。当面、この艦は現宙域からの脱出準備に追われ、お前ごときにかまっている暇はない。味方の軍に撃たれて沈まぬよう、祈ってるんだな」
「無理やり拘束しておいてずいぶんと無責任な話だな」
「生憎とお前を拾ったのは俺じゃない、こいつだ」
突然、話題を振られた事に傍らの若い男は戸惑っている。放り出すわけにもいかんだろうが、と呟くその姿に『どこか、ズレてるんですよねえ、この艦（ふね）の人達』という先ほど何気なく放たれたクウェッソンの言葉が重なった。
「わざわざ蘇生処置までして命を助けた相手に対してこんな扱いとは、恩知らずにも程があるな」
ジュベールが何気なく言葉を放った瞬間、男の目がギラリと光る。それまでのどこか和やかだった空気が瞬時に消え、殺意とも呼べる鋭い空気が彼の周囲を覆った。
「寸前まで命のやり取りをしていた相手を助けようとした訳か……。連邦軍の士官様ってのは、ずいぶんと大層な御身分だな！」
鋭いとげを含んだ男の言葉にジュベールは内心戸惑った。自身の言葉の何が彼の琴線を刺激したのか？　同じＭＳ乗りでありながらも何かが決定的に違う、眼前の男の纏う空気にどこか戸惑いを感じる。
そんなジュベールの姿に男は軽蔑しきった眼差しを向ける。
「所詮、命令されるがままの軍人か……。戦場に立ち、自身の行為

の重さも意味も考えず、与えられた任務をルーチンワークのようにこなすだけ……。戦いの場に立つ者の誇りすら持たない、単なる組織の駒という訳か……」

その言葉に怒りが生じる。己の内に生じた怒りのまま、言葉の刃を眼前の男へとぶつけた。

「いい年をしてガキの戯言のようなことを喚くな、テロリスト風情が！　俺たち軍人は他人の命を簡単に奪い取る力を与えられるがゆえに、重い責任で縛られている！　三文小説のありきたりなイメージで重責を担う人間を容易く批判するんじゃねえ！　それに……」

僅かに言葉を切る。そして絞り出すように呟いた。

「それに、俺は組織の駒に成り下がった覚えはない！」

自身の過去に思いを馳せ、その言葉に憎しみがこもる。だが、眼前の男はそんなジュベールを嘲笑する。

「言葉に重さが足りないんだよ、小僧！」

心底蔑んだ目で男はジュベールを見下ろした。

「重い責任、だと？　それはどこから借りてきた誰の言葉だ？」

嘲りを籠めた笑みを浮かべて男は言葉を続けた。

「組織の内側にいれば様々な物に縛られ、己の意のままになる事などほとんど在りえない、そして課せられたその重責を果たすべく、己を殺し、駒として役割を果たそうと歯を食いしばり続けるそんな人間もいる――それは認めよう。

だがな、お前はそうじゃない。大上段に建て前を振りかざしても、『組織の駒に成り下がった覚えはない』などと言う只の中途半端野郎だ」

「あんたに何が分かる」

「分かるさ、お前とは命のやり取りをしたんだからな。戦いの最中に別の事に気を取られ、眼前の敵との決着を放棄したどうしようもない中途半端野郎だ」

「……」

「挙句の果てにはそんな相手の命まで助けようとする、お前は戦い

の場に立つ者の顔に泥を塗り、その誇りを穢した！　それでも納得がいかないというのなら考えろ！　お前はどうしてここにいる？」

「どういう意味だ！」

「お前もチームの一員なんだろう。だったらなぜそいつらと合流しようとしなかった。俺を追跡し拿捕したいのなら、周囲と協力し合えばこんな間抜けな事態に陥る事などなかったはずだ！」

男の言葉に呆然とする。そんなジュベールの顔を眺めながら、今度は憐れむように言葉を続ける。

「まるで考えつきもしなかった……そんな顔をしているな。それがお前という人間だ。『責任』という言葉は知っていてもその意味を実感として捕えられない。愛する者も信じる者もなく、自身を守る薄っぺらい建前の鎧をはぎ取ってしまえば、中身は何もない空っぽの人間だ」

そんなものいくらでも――自身の周囲を、そして恋人の顔を思い浮かべようとする。だが、その顔がなぜか浮かび上がらぬ事に愕然とする。

男はさらに語り続けた。

「たしかにお前はＭＳ乗りとして類い稀な才能を持っているのかもしれない。この俺が嫉妬しかねないほどに。

だが、それだけだ。才能という手段は持ち得ても目的がない。だから軍人にも戦士にもなりえず半端者のままだ。顔と気心の知れた相手との模擬戦や圧倒的な実力差のある相手との戦いならそれでも十分だろう。先ほどの言葉をそっくり返してやる。お前はＭＳの操縦が上手いだけの半端なガキでしかない。だから、負けてここにいるんだ」

「あんたに負けた覚えはない！」

「お前は負けたんだよ。俺にではなく己自身にな。

そして、この艦に捕えられた。ここは俺達の艦だ。お前の命の生殺与奪の権限は俺の手の内にある。これはどうしようもない事実だ。たとえＭＳ戦で決着をつける事が出来なくても、現実には勝者は俺

であり、お前は敗者だ。
　一つ、訂正しておこう。お前は単なる半端者ではない、半端者の負け犬だ。己が負けたという現実から目をそらし続けるだけのな……」
　男の言葉が鋭く突き刺さる。その痛みにこらえきれずジュベールは力なき反論を放つ。
「俺があんたの言う負け犬だったとして、それがあんたに何の関係がある？」
「大いにあるさ。
　俺は戦いの中で自身の限界を知った上で、死ぬ事が目的だった。そして、最強のパイロットたりうるお前に出会い、期待した。お前なら望みを果たすに足る相手となるだろう、とな。
　だが、お前はそんな俺の期待を見事に裏切った」
　その言葉に傍らの若い男が動揺の色を見せる。眼前の男の勝手な言い草にジュベールは再び怒りを覚えた。
「あんたの勝手な期待だろう！」
「そうだ、だが、お前はそれに応える義務があった。それが戦いの場に立った者の作法だ！」
「単なる言いがかりだ。大体あんたは正気じゃねえ。頭のいかれた只のロートルだな」
「だから、お前は中身が空っぽの人間なのさ」
　心の中にあるのは怒りだけだった。眼前の男への怒りは殺意とも呼ぶべき炎となってジュベールの理性を焦がす。
　だが、ジュベールは気づいていなかった。男の言葉が全て的を射ており、彼の怒りは、自身が目をそらし続けてきた事実を指摘されて生じたものであるという事に……。
　怒りの表情を浮かべるジュベールの姿に動ずることもなく、男は淡々と言葉を続けた。
「敗者は勝者に従ってもらう」
「罰ゲームでもしろってか？　それとも人手不足の艦内で、大掃除

でもさせられるのか？」
　半ばやけっぱち気味のジュベールの返答に薄く笑みを浮かべた男は、はっきりと言い放った。それは意外という言葉では言い表せぬ一言だった。
「《Ｆ９７》に乗れ！」
　沈黙が生まれる。
　何をいっているのか分からない。それがジュベールの感想だった。
「ちょっと待て、おっさん！　あんた、何考えてんだ！　こいつは連邦軍人、俺達の敵なんだぞ。一体どうしちまったんだよ！」
「黙ってろ、ジノ！」
　ジノと呼ばれた若い男の叫びを眼前の男は一喝して黙らせる。そして、再びジュベールに向かって語りかける。
「難しい事ではないはずだ。ＭＳに乗ることはお前の得意分野だろう。それをやれ、と言っているだけだ」
　互いの視線がぶつかり、沈黙が周囲を支配する。
　男の視線を真っ向から受け止めたジュベールはその顔を睨みつけ、やがて――破顔した。室内にその笑い声だけが大きく響き渡る。だが、それを遮るかのように、ゴルドは笑い続けるジュベールに静かに言葉をかけた。
「そんなに面白いか？」
「ああ、すまない、今のは本当に面白かった」
　ようやく笑いを収めたジュベールは真顔に戻る。そして男を嘲るかのような視線で見つめると勝ち誇ったように言い放った。
「他人の心にずかずかと土足で踏み込んでずいぶんと御大層な口を叩くから、何を言い出すかと思えば……。
　どうやら俺は戦場で頭のいかれた奴の言葉を真に受けていたらしいな。さっきのあんたじゃないが、期待させられて見事に裏切られたよ、それともこれは俺への当てつけか？　どこの世界に捕虜になったからと言って、テロリストの片棒を担ぐ軍人がいる？
　この艦の奴らはどいつもこいつもやっぱりズレてやがる」

相手を馬鹿にしきったジュベールの言葉と態度にジノと呼ばれた傍らの若い男が怒りの色を示す。だが、眼前の男は顔色一つ変えず淡々と話を続ける。

「お前、《Ｆ９７（あれ）》を見たんだろう？　何も感じなかったのか？」

その言葉にふとその瞬間の事をなにげなく思い出す。

漆黒の闇の中に浮かぶ勇壮なシルエット。自身の乗機に勝るとも劣らないポテンシャルを感じさせる外観は、ＭＳというものに対してさほど思い入れを持たぬ自分にすら何かを感じさせた。その時の感覚を思い出して……、首を振って打ち消した。

「馬鹿馬鹿しい……」

何気なくつぶやかれたその言葉を男は意味ありげな笑みで受け止める。そして構わずに話を続けた。

「《Ｆ９７》――あれは製造元にすら秘匿された幻の機体でありながら、それなりの知名度があるってことくらい、知ってるだろう。ここにあるのは間違いなくその系譜に連なるものだ。そんなものを作り上げちまう力を持つ奴らの事などわざわざ言わずとも察しはつくだろう」

「おい、待てよ、おっさん。そんな事、ぺらぺらしゃべっちまっていいのかよ」

眼前の男の言動に、先ほどから動揺し続ける小銃を小脇に抱えた若い男が、あせった様子で制止しようとする。だが、男は気にすることなく静かに言葉を続ける。

「《Ｆ９７ＸＥ》――俺達がそう呼んでいるあの機体群こそ、Ｆシリーズのもう一つの到達点といえる。もともとサナリィで量産化を目的として開発されたものを、内部システムを今の技術によってさらにアップグレードしたものだ。コストを度外視すれば、兵器システムとしてはほぼ完成されている、と言ってもいい。

だが、俺の乗っていたモノは違う。あれは兵器なんていう代物じゃない。」

僅かに息をつく。少し乱れ気味な呼吸にもかかわらず男は言葉を続ける。

「《Ｆ９７》そう呼ばれている俺の乗機は、外見こそ似ているが中身は別物だ」

男の話にジュベールはいつしか引き込まれ、黙って聞き入っている。

「もともとあのシリーズは木星の過酷な高重力化で運用されることを前提に開発されたものだ。

故にプロトタイプと呼ばれる機体群には地球圏で運用するには無駄な機能が多く搭載されていた。その無駄を省いて改良されたはずの機体をさらに強化したものがあの機体だ。どうせ、表に出すことなどできないのだからと、開発に携わった技術者たちの暴走が生み出したものだといっても差し支えはない。

定められた枠の中でＭＳとしてどこまでの高性能を搭載できるのか？　乗り手の都合なんて二の次にされて、ひたすらにスペックの追求を行うなどと馬鹿な話さ。　無人機という概念をとことん否定するミノフスキー粒子下の戦闘において、ＭＳという兵器システムの重要な構成要素であるパイロットの都合を無視してしまったんだからな。トータルバランスこそ重視される汎用兵器の理念に真っ向から刃向かった究極の自己満足だな。だから、乗り手となる者はなかなか見つからなかった。かく言う俺も、でたらめな高荷重のおかげでこの様だ」

死相と言ってもよい表情を浮かべる男の身体は、彼の言葉通り、ボロボロである様子が察せられる。僅かに息をついた後で、「少し遠回りの話になるが……」、そんな前置きをして男はさらに語り続けた。

（２０１１／０４／０２　Ａｒｃａｄｉａにて初稿）
（２０１１／１１／０６　本サイトにて初稿）

05

「『戦争』という行為がある。

単純に言えば国と国がその生産力、文化力、技術力などを直接ぶつけあいその覇権を争うゲームだ。『闘争』という感情的な行為と異なり、組織と組織の衝突である以上、大局的な見地からのその行為は恐ろしくロジカルで冷酷なものだ。勿論、平和で静かな暮らしを望む一般市民の目から見ればとんでもない迷惑以外の何物でもないがな。

その大部分を占める『戦闘』行為において重要な要素である『兵器』とは究極の『暴力』であるといってもいいだろう。『武力』なんて言葉は所詮、力ある側、支配する側の詭弁だ。

だからこそ『兵器』というものはある程度の訓練を受ければ誰もが同程度の性能を発揮でき、それゆえに戦力というものが算出できる。互いの戦力にある程度の目安が立つからこそ、世界は『戦争』と『平和』をその時々に応じて選択できる。そして目安が成り立つが故に、人々はそんな世の中で生活を営む事が出来る。

言いかえれば、使い手を選び、戦力として確かな算出が出来ないものなど『兵器』とはとても呼ぶ事などできん。そして、その不確定要素の存在は世に混乱を生み出す以外の何物でもない」

男が紡ぎ出す言葉の中の何かが、自身を刺激する。

「だが、その不確定部分故に人はその魅力に取りつかれる。強力すぎる性能ゆえに人に何かを期待させ感情を揺さぶってしまう機械（マシン）を前にこう考える――もっと違う可能性があるのではないか……とな。しかし、どんなに期待をされ、いかに強大な力を誇ろうとも、この広大な世界において、『存在してはならぬもの』と呼ぶにはあまり

にもちっぽけな存在でしかない。
それが《Ｆ９７（あれ）》の真実だ」
その言葉を最後に男は僅かに黙り込む。どうやら話は終わったらしい。「だから何を言いたいのだ」、とでも言いたげな顔を見せるジュベールに対して男は静かに告げる。
「似ていると思わんか？　お前の在り方に……」
その言葉が鋭く突き刺さる。あの瞬間、感じた奇妙な感覚は『共感』だったのだと理解し、直ぐに否定する。
冗談ではない――その一言で己を偽った。
この男の言葉に呑まれる訳にはいかない。真実を感じてしまえば虚像だらけの自身は脆くも崩れ去り、その先の己の姿など想像もつかない。
「いいだろう、乗ってやろう、と言えばすぐさまあれに乗せてくれるのか？」
「嘘とあきらかに分かるような言葉で平然と相手を偽るほど、おまえはまだスレてないだろう？」
「俺が《Ｆ９７（あれ）》に乗ってあんたの言うところの最強の力を手に入れたとしてそれが何になる。あんた自身がさっき言ったじゃないか、所詮ちっぽけな存在だと。
たった一機の機体で大艦隊を相手にドンパチやれとでも？　例え俺が奇跡的にそんな真似ができたとしても限界は来る。推進剤や弾薬、エネルギー、生命維持に必要なあれこれなど物理的な部分において、必ず、な」
その言葉に男は静かに笑った。
「おまえの頭の中も、戦う事しかないようだな」
その言葉に押し黙る。男の前では、何か得体の知れない枷にとらわれたちっぽけな存在であるかのように感じられる。そんなジュベールに男は静かに続ける。
「考えてみた事はないか？　ＭＳはなぜ人型で在り続けるのか、と。無重量状態の宇宙空間において、ミノフスキー粒子下における有

視界戦闘の中でＡＭＢＡＣ（能動的質量移動による自動姿勢制御）の効率性を考えるならば、もっと違う形があってもいい。開発されて半世紀以上が経ち、様々な研究がなされてきた今の時代ならＭＳが人型であることのナンセンスさに多くの者達が気づいているはずだ。

　にもかかわらず、ＭＳは人型をとり続け、緩やかにではあるが進化し続けている。この矛盾をお前はどう考える？」

「……」

「俺はこう考えた。

　かつて、神は己の形を模して人を作ったという。その在り方と未来に願いをこめて……。

　ならば、人が己の形を模してＭＳを作ったのはそこに何かを願ったからではないか？

　宇宙空間という過酷な環境において生きていくには絶望的に貧弱な自身を補い、新たな可能性を見出すために……。大地を離れ、上も下もない未知の空間に放り出されても尚、自分達は大地を踏みしめる足を持った人間であるというその誇りと変えてはならぬ己の姿を忘れまいとする人の本能が、ＭＳを人型であり続けさせるのではないか、とな」

　ジュベールを見つめる男の目に映っているのは彼の姿ではなく、もっと遠い場所にある何かであるように感じられる。

「そして、変わるまいと思い続ける一方で、人は新しい可能性を宇宙に見出した。その場所で生きるに必要不可欠なＭＳという道具にも、兵器というだけではない、もっと違う可能性があってもいい、そう考える事はできないか？」

「……」

「限界は来る、さっきお前はそういったが、実際にその限界に踏み込んでみた事はあるのか？　なりふり構わぬまま限界領域に踏み込んだお前の姿を周囲はただ否定するだけだと思うのか？　わずかな失敗ばかり気にして何もしないまま、ただ分かったつもりになって

諦めている、お前の姿は俺にはそう見える。それは『生きている』とはとても言えないと思うがな」

僅かに言葉を切り、大きく息を吐き出した。遠い目をしたまま、男はさらに語る。

「俺自身の一つの過ちを認めよう。

俺は戦いの中で自身の限界を知った上で、死ぬ事が目的だった――さっきそう言ったはずだ。そしてお前という存在に出会い、俺は心のどこかで満足してしまった。これで望みは叶ったのだと錯覚した。

にもかかわらず戦いを放棄してしまったお前に、俺は憤慨し、失望し、自分は不運だと、浸ってしまった。

理不尽ばかりがまかり通り妥協する事が当たり前の人の一生の中で、自分の望み通りの結末を迎える――こんな思い上がった願いがそんなに容易くかなう訳がない。自分の限界など自分で決められるものではない。無謀とも思える目的に向かってなりふり構わずがむしゃらに食らいつき、後でその過程を振り返って初めて気付くものだ。

今思えば、あの時、戦う気力を失ったお前を躊躇なく堕とし、物足りなさに怒りをぶつけながらそのまま艦隊へと特攻を掛けたなら、俺は自身が望む物に近い物を手に入れる事ができたはずだった。こうして、お前と話をすることなどなかったろうがな……。

俺は知らず知らずのうちに自分の可能性を放棄してしまった。

だから、そんな俺は《Ｆ９７（あれ）》に見限られた……。必要な時に必要な物がそこにない、というのはそういう事だ。

結局のところ弱い人間なのさ、俺は……。自分以外の存在に自分以上に価値を見出すことができない――だからぎりぎりのところで誤った選択をすることになる。そして、それは……お前にも言える事だ。

だが、そんな人間だからこそ、手に入れる事のできるものってのがあるはずだ。普通の感性の人間には決して手の届く事のないもの

――そんなものを手に入れようと足掻く事はつまらない事だと言い切れるのか？」

――互いの視線がぶつかりあう。

淡々と言葉を重ねる男に対しジュベールは終始無言だった。男の述懐に偽りはなくその言葉の多くが真実をついていた。だが、眼前の男は単なるテロリストである。その在り方までを認める事などできない。

言葉に呑みこまれつつあった己を戒めるべく、ジュベールは己の心ごと全てを否定する。

「なかなか面白い話だった。

しかし、所詮は現実から目をそらした人間の空想だ。どんなに夢を語っても、俺達は生きていく上で様々なシステムに従い、そのルールから逃れる事はできない」

「たしかにお前の言うとおりだ。認めよう。だが、お前はまだ、それをどこか人ごとのように感じている。ならば、お前に別の現実という奴を与えてやろう」

ぎろり、とジュベールを一瞥すると、男は静かに言い放つ。

「これから俺はこの艦を宙域から脱出させるべく戦闘に出なければならない。だが、残念なことに今の俺には戦うための武器がない。お前が壊してしまったんだからな」

意味ありげな笑みを浮かべた男の顔に悪い予感を感じる。男はその予感通りの言葉を続けた。

「だから、お前のＭＳを使わせてもらう」

「何っ！」

「お前のＭＳを使って、俺はこれから多くの連邦軍人の命を奪う事になるだろう。

そんな事態に心ならずも加担する事となったお前が無事に生還したところで、例えどんなに優秀なパイロットであったとしても、果

たして連邦軍と言う組織はお前を必要とし、受け入れてくれると思うのか？　散っていった奴らの命をうけとめ、組織のルールに従い、その駒として己の不始末故の最悪の結末を甘んじて受け入れる覚悟がお前にあるのか？」

「おい、ちょっと待て……」

「重い責任に縛られ己を殺し……などと言えば聞こえはいいが、大半の人間は集団の意向に従順に従っているだけだ。その方が楽だからな。

　多数の中に身を置き、出すぎた者や己と違いすぎる者の足を引っぱり人身御供にすることで連帯感を得る。そんな奴らをひとくくりにして『仲間と称するもの』の為にお前は命を張る覚悟があるのか？」

「……」

「これは、戦う相手の命を救うというお前自身の行為によって引き起こされた結果であり、残念なことにお前の言うところの現実というやつだ」

「ふざけるな！　そんな真似、させるかよ！」

　手錠で拘束されたまま、眼前の男に飛びかかる。だが間に入った若い男に銃把で強かに頬を殴りつけられ、そのままはじけ飛ぶ。安全装置の解除音と共に自身に銃口が向けられる事でジュベールは己の敗北を知る。

「それでもおまえにとって連邦軍という組織はしがみつくだけの価値があるのかどうか、よく考えるんだな」

　弾き飛ばされ、敗北を認めざるをえないジュベールの姿を見下ろすと、男は傍らの若い男と共に部屋の扉へと向かう。

「かつてとある理想主義者（ロマンチスト）はこう言った。『宇宙（そら）に出た人類は誤解なく互いを分かり合える存在になる……』と。

　あるいはそんな奴らは本当に存在するのかもしれない。俺のような凡俗にはとてもそんな境地など理解できんがな……。自身の事すら理解できるかどうかというところだろう。

だが、人の生き方は様々だ。
たとえ愚かと笑われ、人生のほんの一瞬の間だけしか輝けなくとも、己が納得できるものを手に入れられるのなら、そんな生き様があってもいい、と俺は思う。
お前とはおそらくもう、会う事はないだろう。お前が善き選択と共に生きる事を祈っている」
背中越しのその言葉を最後に、男の姿は扉の向こうに消えた。
「待て、勝手なことばかり言いやがって……」
ジュベールの心のこもらぬ制止の叫びは、一人きりになった室内に虚しく響くだけだった。

背中の後ろで部屋の扉が閉じて電子ロックの施錠音が鳴り響くと同時に、全身から力が抜けていくような感覚を覚える。『急がなければ』というその一念のみがゴルドを次の行動へと駆り立てていく。
「おっさん」
先を急ごうとするゴルドの前を遮るかのようにジノが立ちふさがった。
「医務室に戻ろうぜ。やっぱりおかしいぞ。今のあんたは……」
捕虜との会話の中で今まで見せたことのないゴルドの姿とその言葉にジノは混乱していた。
「そこをどけ、ジノ、もう俺は長くない。この身体は、今この瞬間、命の火種が燃え尽きてもおかしくない状態だ」
「だったら、なおさら……だろうが。おとなしく、医務室で眠ってろ。あんたが寝てる間に脱出作戦は俺とリリアの二人でなんとかするからよ……」
瞬間、ゴルドの右拳がジノの頬に飛んだ。

床を蹴った勢いのままゴルドの体重の乗った一撃に、ジノの身体は堪らず無重量状態の通路内をゆっくりと浮遊し、対面の壁に激突する。

予期せぬ一撃をまともに受け、唖然としながらもジノはゴルドを睨みつけた。

「なにすんだよ！」

「たかが、一度、自分達の力で修羅場をくぐりぬけたというだけで、ずいぶんと思い上がった口を叩くようになったじゃないか、小僧！　ロートルは後ろでのんびり見物でもしてろ、って訳か」

「そんな事、言ってんじゃねえよ！　俺はただ……」

そう言うと口ごもり、下を向く。ジノの本音など聞くまでもない。おそらくその言葉は眼前のボロボロの自分の身を案じての事であろう。あるいは初めて知ったゴルドの本心に、それまで向き合ってきた彼の姿との隔たりが大きすぎて戸惑っているのか。

口下手で見栄張りなジノが己の本音を率直に言葉にできる訳もなく、結果として彼なりのひねくれた言い回しでしか己の心中を表現できないであろう事は、容易に想像がつく。

だが、ここで慣れ合う訳にはいかない。ここから先の彼らの旅路に、ゴルドは存在しないのである。

壁を軽く蹴って通路内を浮遊しジノに近づいたゴルドは、その胸倉をつかみ上げ、真正面から目を合わせると、はっきりと告げた。

「お前には何が何でも守りたいもの、守らねばならぬものがあるんだろう？」

「それは……」

「だったら……、俺を利用して、きっちり使い潰せ！　死にゆく俺の頭を踏みつけて、必ずそれを死守しろ！　そうやって生きる事がお前に出来るただ一つの事だ！」

「そんな真似、できる訳ねえだろう」

「甘えるな！　俺はお前の父親になった覚えはない！」

互いの視線がぶつかりあう。やがてゴルドの視線に耐えきれなく

なったジノはその眼をそらした。そんなジノを放り出すとゴルドは傍らのグリップを握り、そのまま通路の向こうへと消えていく。

「バカヤロウ！」

その背にジノの叫びが追いすがる。彼の叫びにいかなる意味が込められているかという事は、二人の間の問題だった。

エレベータを降り間違えた階層で苦笑いを浮かべたゴルドは、ようやくのことでたどり着いた自室の扉の前で、傍らの解除キーを震える指先で丁寧に押す。

僅かなエアの音と共に開いた扉の向こうのぽっかりと開いた自室の暗い空間に、放り込むように身を投げ出す。船医から預かった薬の入った小箱を放り出し、息をつく。扉が閉じると同時に強烈な倦怠感が身体を襲う。過ごした時間が短いとはいえ、この場所はいつの間にか自身にとって心安らげる数少ない場所となっていたのだろう。

もともと根なし草の生活が長いせいか、私物と呼べるものを極力持たないようにしており、さらに《ゲオルグ》への乗艦が決まって以来、その数少ないそれらのあらかたを処分してしまった事で、がらんとした室内にはとりたてて何もなく、味気ない様子が広がっている。ロッカーやテーブルの引き出しの中に日常生活に必要な物が僅かに残っている――そんなところだった。

若さの赴くままに軍に入隊し、非日常の世界が自身の日常と化してからは、もともと隔たりのあった価値観がさらに異なってしまったせいか、肉親と呼べる者達とも疎遠になっていた。

節電の為に疑似重力発生装置が切られている室内を見回したゴルドは、ふと何気なく開いたテーブルの引き出しの中に小さな包みを見つけた。バビロニア・コロニーで物売りの少女から衝動買いしたカンザシの包みだった。

購入後、結局どこにも行く宛てのなかったそれは、無造作にその場所に放り込まれ、すっかり忘れ去られてしまっていた。取り出したその包みに中身が存在するのを確かめるかのように軽く振る。カンザシの僅かな重さが自己の存在を主張した。

熟練の職人の技術によって生み出された誇り高き品も、日の当たる場所でふさわしき持ち主に使われ輝かなければ、存在しないに等しい。

「運がなかったんだな……」

小さく呟くと売り主の少女の笑顔の思い出と共に再び引き出しの中に仕舞いこむ。いずれは持ち主が不在となった他の日用品共々処分される事となるのだろう。

感傷に浸りつつあった自身を戒めようとしたゴルドの背後で、予告もなく開いた扉の向こうに一人の女の姿が現れた。

――ネーナだった。

開いたドアの向こうで、いつもは無造作に一纏めにしてあるブロンドの長髪がふわりと中空に広がり、青ざめた美貌を引き立てる。演習開始前からの艦内の混乱や、素人には生きた心地がしなかったであろう戦闘行為のストレスで、相当に消耗している様子が見受けられる。船医からの報告を聞き彼の行方を捜していたのだろうか。僅かに呼吸の乱れたその顔にはいつもの優雅な頬笑みは浮かんではいなかった。

だが、憔悴した表情が逆に彼女の艶やかさを引き立てていた。

（綺麗だな……）

文句のつけようのないその造作美に、閨の中での激しい艶姿が重

なり、ぞくりと背筋を震わせる。
彼の傍らに浮かんだ見慣れぬ小さな小箱に一瞬厳しい視線を向けると、彼女は一つ大きく息を吸い込んで室内へと入ってくる。床を蹴ったネーナの身体がふわりと宙を浮遊しながら無言で流れ、ゴルドの腕の中に収まるかと思われたその瞬間……室内に乾いた音が一つ大きく響いた。
打たれた頬の表面に強烈な熱さを感じながらも、飛び込んだ勢いのままのネーナの身体を受け止める。だが、病に衰えた身体は彼女を支え切る事が出来ず、二人の身体はそのまま壁面へと流れてぶつかり、ようやく中空に静止した。
とっさに彼女の両の二の腕を掴んでいたゴルドと、彼の胸に両手を当てて勢いを止めようとしたネーナは、互いを支え合う。その甘い香水の香りが周囲を優しく覆った。
視線は合わさない。
沈黙の時間だけが静かに二人の間を流れていく。
頬の痛みは徐々に薄らぎ、やがて小さなぬくもりとなり消えていった。
「らしくないな……」
「そうね……」
ぽつりと漏れるゴルドの囁きにネーナの呟きが小さく重なった。
そのやり取りを機に、離れようとする彼女の気配を察したゴルドは、掴んでいた両の二の腕から手を離す。両手を添えられた胸に僅かな荷重を感じさせて離れていった彼女は、そのまま背を向けた。決して何者にもすがろうとしない気丈さを見せる背中は、どこか小さく弱々しく見えた。
「行かないで……と言っても、立ち止まってはくれないのよね……」
放たれる小さな呟きにゴルドは目を見張る。僅かに呼吸を置いて小さく返答する。
「俺が行かなければ《ゲオルグ》に未来はない。あの二人だけでは荷が重すぎるのは……分かってるだろう?」

「……」

その言葉に返事はない。向けられたその背中はあまりにも小さく感じられた。

ふと思いつき、引き出しの中に残されたカンザシの包みを取り出した。背を向ける彼女の眼前にそれを浮かべ、小さく囁いた。

「私物だ……。処分を頼む……」

言葉と同時に背を向ける。入り口近くにふわふわと浮遊していた薬の小箱を手に取ると、室内に甘く香る彼女の香水の匂いを振り切るようにして己の部屋を後にする。

「……、最低よ……、貴方は……」

一人残されたその場所で、あてどなく浮遊する包みをしっかりと握りしめたネーナの呟きが、小さく頼り無げに室内の空気を揺らした。

（２０１１／０４／１１　Ａｒｃａｄｉａにて初稿）
（２０１１／１１／１３　本サイトにて初稿）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3559q/

機動戦士ガンダムUC0138　F91 VS F97

2011年11月13日20時53分発行